三国志「望蜀の巻」(吉川英治)

降うさん 参んぶね

「この大機会を逸してどうしましょうぞ」

「まず、甘寧を呼べ」と令し、営中の参謀部は、俄然、活気を呈 という魯粛の諫めに励まされて、周瑜もにわかにふるい起ち、

「甘寧にござりますが」

した。

おお、来たか」

「いよいよ敵へお蒐りになりますか」

「然り。——汝に命ずる」

周瑜は厳かに、軍令をさずけた。

こと。……その辺はぬかりなく心得ておろうな」 蔡和のふたりを 囮 とし、これを逆用して、敵の大勢をくつがえす 「かねての計画に従って、まず、味方の内へまぎれこんでいる蔡仲、

一心得ておりまする」

の手の。旺なるを見たら、同時に敵営へ迫って、側面から彼の陣地 曹操が兵糧を貯えおく粮倉へ迫って、縦横無尽に火をつけろ。火 船を敵の北岸へ寄せて、烏林へ上陸れ。そして蔡仲の旗をかざし、 「汝はまず、その一名の蔡仲を案内者として、曹操に降参すと称え、

> 「蔡和は、べつに使いみちがあるから残して行くがよい」 「承知しました。して残る一名の蔡和はいかがいたしますか」

甘寧が退がって行くと、周瑜はつづいて、太史慈を呼び、

る曹軍の勢に一撃を加え、まっしぐらに敵の本陣へかかり、火を放 って焼き討ちせよ。――そして、紅の旗を見るときは、わが主呉 「貴下は、三千余騎をひっさげて、黄州の堺に進出し、合淝にあ

侯の旗下勢と知れかし」

第三番目に、呂蒙を呼んだ。

呂蒙に向っては、

ろ

と命じ、第四の凌統へは、

「兵三千をひいて、烏林へ渡り、甘寧と一手になって、力戦を扶け

かれ

「夷陵の境にあって、烏林に火のかかるのを見たら、すぐ喚きか

方面に行動させ、また潘一璋へも同様三千人を与えて、漢川方面へと、それへも兵三千をあずけ、さらに、董一襲へは、漢陽から漢川 の突撃を命じた。

り出して、兵船に満載し、いつぞやお約束のごとく、貴軍へ降参に 黄蓋は、早速、曹操の方へ、人を派して、 ねてこの一挙に反間の計をほどこさんものと手に唾して待っていた た。――水軍の船手も、それぞれ活溌なうごきを見せていたが、か 「いよいよ時節到来。今夜の二更に、呉の兵糧軍需品を能うかぎり奪 こうして、先鋒六隊は、白旗を目じるしとして、早くも打ち立っ

ば、これ呉を脱走して、お味方の内へすべり込む降参船なりと知り 参ります。依って、船、檣に青龍の牙旗をひるがえした船を見給わ

と、云い送った。

せを運びながら、黄蓋は着々とその夜の準備をすすめていた。まず、 二十艘の火船を先頭にたて、そのあとに、四隻の兵船を繋けた。つ ひそやかに、誠しやかに、こう曹操の方へは、諸事、しめし合わ

く周泰、第三の備えに蒋一欽、第四には陳武と――約三百余艘の大

づいて、第一船隊には、領兵軍官韓当がひかえ、第二船隊には同じ

小船が、舳をならべて、夜を待ちかまえた。

の東南風は、昼をとおして、なおもさかんに吹いている。 すでに宵闇は迫り、江上の風波はしきりと暴れていた。今暁から

しと、黄蓋は、『纜』を解いて、一斉に発動を命令した。そのためか、江上一帯には、水蒸気が立ちこめていた。幸先よ 何となく生温かい。そして気だるいほど、陽気はずれな晩だった。

三百余艘の艨艟は、淙々と、白波を切って、北岸へすすんで行

躯も、颯々、満帆をはためかせながら動いてゆく。 った。——そのあとについて、周瑜、程普の乗りこんだ旗艦の大

らしかった。 後陣として続いてゆく一船列は、右備え丁奉、左備え徐盛の隊

た。 魯粛と龐統は、この夜、あとに残って、留守の本陣を守ってい

前進していた。 呉主孫権の本軍は、旗下の勢とともに、すでに黄州の境をこえて、

ませんか」

兵符をうけて、その発向を知った周瑜は、すぐ一軍を派して、

南 屏 山のいただきに大旗をさしあげ、まず先手の大将陸遜を迎え、紫んぴょうぎん

続いて孫権の許へも

風しきりに北へ吹いて、飛雲団々、天地は不気味な形相を呈してい 「いまはただ夜を待つばかりにて候う」と、報じた。 かくて、刻々と、暮色は濃くなり、長江の波音もただならず、暖

わかに、趙雲子龍をやって、 待ちわびていたところ、きのうから季節はずれな東南風が吹き出 したので、かねて孔明が云いのこして行ったことばを思い出し、に ここに夏口の玄徳は、以来、孔明の帰るのを、一日千秋の思いで

「孔明を迎えて来い」

と、ゆうべその船を立たせ、今朝も望楼にあがって、今か今かと

江を眺めていた。

近づいて見ると、孔明にはあらで、江夏の劉琦である。すると、一艘の小舟が、鱖魚のごとくさかのぼって来た。 楼上に迎えて、

ござります。皇叔のお手もとにはまだ何らの情報も集まってまいり めき立ち、この風のやまぬうちに、必ず一会戦あらんということで は、呉の兵船、陸兵など、東南の風が吹くとともに、物々しく色 「昨夜来、物見の者どもが、下流から続々帰って来て告げることに 「何の触れもなく、どうして急に参られたか」と、問うと、劉琦

へ参っている軍師諸 葛 亮の帰らぬうちは……」と、語り合ってい 「いや、夜来頻々、急を告げる報はきているが、いかんせん、呉

る折へ、番将の一人が、馳け上がってきて、

る様子。 舳 にひるがえるは、趙 子 龍の小旗らしく見えまする」「ただ今、樊口のほうから、一艘の小舟が、帆を張ってこれへ参 「ただ今、樊口のほうから、

と、大声で告げた。

「さては、帰りつるか」

ちかまえていた。 と、玄徳は劉琦と共に、急いで楼を降り、卓桟にたたずんで待

果たして、孔明を乗せた趙雲の舟であった。

玄徳のよろこび方はいうまでもない。互いに無事を祝し、 袂を

つらねて、夏口城の一閣に登った。

そして、呉魏両軍の模様を質すと、孔明は、

しあげているいとまもありません。君には、味方の者の用意万端。 「事すでに急です。一別以来のおはなしも、いまはつまびらかに申

抜かりなく調えておいでになられますか」

軍勢を揃えて、軍師の帰りを待つこと久しいのじゃ」 「もとより、出動とあらば、いつでも打ち立てるように、水陸の諸

りません。君にご異議がなければ、孔明はそれから先に済ましたい 「然らば、直ちに、部署をさだめ、要地へ向け、指令を下さねばな

「僭越、おゆるし下さい」と、孔明は、壇に起って、まず趙雲を「指揮すべて、軍師の権と 謀 を以て、即刻にするがいい」

と思います」

え、残らず討ちとめんとしてはならん。また、逃げるは追うな。頃 はやりすごし、その半ばを中断して、存分に討ち取れ。——さは云 かくれ、こよい四更の頃、曹操が逃げ走ってきたなら、前駆の人数 「御身は、手勢二千をひきつれ、江を渡って、烏林の小路に深く

あいを計って、火を放ち、あくまで敵の中核に粉砕を下せ」

と、命じた。

趙雲は、畏まって、退がりかけたが、また 踵 をかえして、こう

質問した。

荊州へ岐れている。曹操は、そのいずれへ走るでしょうか」 「烏林には、二すじの道があります。一条は南郡に通じ、

つもりでおれば間違いはない」 「かならず、荊州へ向い、転じて許都へ帰ろうとするだろう。その

孔明はまるで掌の上をさすように云った。そして、次には張飛を

呼んだ。

Ξ

張飛に向っては、

がれよ」と、孔明は命じた。 「ご辺は、三千騎をひきつれ、江を渡って、夷陵の道を切りふさ

そして、なお、

後、曹操の敗軍、この辺りにて、腰兵糧を炊ぎ用いん。その炊煙を のぞんで一度に喚きかかり給え」と、つぶさに教えた。 の道を避けて、北夷陵をさして逃げくるであろう。明日、雨晴れて 「そこの葫蘆谷に、兵を伏せて相待たば、曹操はかならず南夷陵

次に、糜竺、糜芳、劉・封の三名を呼び、「畏まった」と、心得て、直ちにその方面へ馳せ向う。 張飛は、孔明のあまりな予言を怪しみながらも

陥ちたと見たら、軍需兵糧の品々を、悉皆、船に移して奪いきた 「ご辺三人は、船をあつめて、江岸をめぐって、魏軍営、潰乱に

れ。また諸所の道にかかる落一人どもの馬具、物具なども余すなく

鹵獲せよ」と、いいつける。

また、劉琦に向っては、

「武昌は、緊要の地、君かならず守りを離れたもうなかれ。ただ江

辺を固め、逃げくる敵あらば、捕虜として味方に加えられい」

最後に、玄徳を誘って、

と促すと、 なすところの大江上戦を見物申さん。――はや、お支度遊ばされよ」 「いで、君と臣とは、樊口の高地へのぼって、こよい周瑜が指揮

「かくまでに、戦機は迫っていたか。儂もこうしてはおられまい」 と、玄徳も取急いで、甲 冑をまとい、孔明と共に、樊口の望台

へ移ろうとした。 すると、それまで、なお何事も命ぜられずに、悄然と、一方に佇立

したひとりの大将がある。 「あいや、軍師」と、初めて、この時、ことばを発した。

見れば、そこにただ一人取残されていたのは、関羽であった。

知ってか、知らずか、孔明は、

「おう、羽将軍、何事か」と、振返って、しかも平然たる顔であっ

関羽は、やや不満のいろを、眉宇にあらわして、

きは、何か、 いたためしもないのに、この大戦に限って、関羽ひとりをお用いな か。不肖、家兄に従うて、数十度の軍に会し、いまだ先駈けを欠 それがしに対して、一片のご示命もなきは、いかなるわけでござる 「先程から、いまに重命もあらんかと、これに控えていたが、なお おふくみのあることか」と、 眦 に涙をたたえて詰

孔明は、冷やかに、

案じらるるまま、わざと御身には留守をたのんだ」 「さなり。御身を用いたいにも、何分ひとつの障りがある。 それが

曇りがあるといわるるか」 「何。障りあると。――明らかに理由を仰せられい。関羽の節義に

おありであろうが――今、曹操は烏林に敗れ、その退路を華容道おありであろうが――今、曹操は烏林に敗れ、その退路を華容道 誼にほだされて、他日かならずこの重恩に報ぜんと、誓ったことが え。その以前、御身は曹操に篤う遇せられて、都を去る折、彼の情 にとって、かならず奔亡して来るであろう。ゆえに、ご辺をもっ 「否。ご辺の忠魂は、いささか疑う者はない。けれど、思い出し給

ある。ご辺の性情として、かならず、旧恩に動かされ、彼の窮地に 同情して、放し発すにちがいない」 取るようなものだが、ただ孔明の危ぶむところは、今いうた一点に て、道に待たしめ、曹操の首を挙げることは、まことに、嚢の物を

見のがすべきや、ぜひ、関羽をお向け下さい。万一、私心に動かさ れたりなどしたらいさぎよく軍法に服しましょう」 て、すでに曹操には報じてある。かつて彼の陣を借り、顔良、文、醜 ―その報恩としてやったものでござる。なんで、今日ふたたび彼を などを斬り白馬の重囲を蹴ちらして彼の頽勢を盛り返したなど― 「何の! それは軍師の余りな思い過ぎである。以前の恩は恩とし

匹

毒に思ったか、孔明に向って、 関羽の切なることばを傍らで聞いていた玄徳は、彼の立場を気の

「いや、軍師の案じられるのも理由なきことではないが、この大戦

世上へも部内へも面目が立つまい。どうか、一手の軍勢をさずけ、 に当って、関羽ともある者が、留守を命じられていたと聞えては、

関羽にも一戦場を与えられたい」と、取りなした。 孔明は、是非ない顔して、

「然らば、万一にも、軍命を怠ることあらば、 いかなる罪にも伏す

べしという誓紙を差出されい」と、いった。

関羽は、即座に、誓文を認めて軍師の手許へさし出したが、な

お心外にたえない面持を眉に残して、

身は、何と召されるか」と、言質を求めた。 と違い、曹操が華容道へ逃げてこなかったら、その場合、軍師ご自 「仰せのまま、それがしはかく認めましたが、もし軍師のおことば

孔明は、微笑して、

必ず罪をこうむるであろう」 「曹操がもし華容道へ落ちずに、べつな道へ遁れたときは、自分も

と、約した。

そして、なお、

死命を制し得んこと必定であろう」と、命じた。 焼かせ、わざと煙をあげて、曹操の退路に伏せておられよ。曹操が 「足下は、華容山の裡にひそみ、峠のほうには、火をつけ、柴を

「おことばですが」と、関羽は、その言をさえぎって、

敵あることを覚り、ほかへ方角を変えて逃げ失せはいたすまいか」

「峠に火煙をあげなば、せっかく、落ちのびて来た曹操も、道に

孔明は、わらって、

彼、行くての山道に煙のあがるを見なば、これ、敵が人あるごとき 「兵法に、表裏と虚実あり、曹操は元来、虚実の論にくわしき者。

> このこと。あやしむなかれ。羽将軍、疾くゆき給え」 敵を謀るにはよろしく敵の智能の度を測るをもって先とす― 態を見せかくるの偽計なりと観破し、あえて、冒し来るに相違ない。

一なるほど」

はり軍師のお考え通り、留守を命じておいたほうが無事だったかも で、曹操を助けるような処置に出ないとは限らない。……ああ、や な性質であるからは、ああはいって差向けたものの、その期に臨ん って、手勢五百余騎をひきい、まっしぐらに華容道へ馳せ向った。 「いったい、関羽という人間は、情けに篤く義に富むこと、人一倍 そのあとで玄徳は、かえって、孔明よりも、心配顔していた。 関羽は、嘆服して、退くと、養子の関平、腹心の周倉などを伴

孔明は、その言を否定して、

うが、自然にかなっておりましょう」と、いった。 「あながち、それが良策ともいえません。むしろ関羽を差向けたほ 玄徳が、不審顔をすると、理を説いて、こうつけ加えた。

せてやるもよいではありませんか」 大戦に、曹操の隆運とその軍力の滅散するは必定でありますが、な はなお天寿がある。――ゆえに、関羽の心根に、むかし受けた曹操 おまだ、曹操個人の命数はここで絶息するとは思われません。彼に の恩に対して、今もまだ報じたい情があるなら、その人情を尽くさ 「なぜならば――です。私が天文を観じ人命を相するに、この度の

したのですか」 「先生。……いや軍師。あなたはそこまで洞察して、関羽をつかわ

所に適材を配することはできません」 「およそ、それくらいなことが分らなければ、兵を用いて、その要

のも間近であろうと、玄徳を促して、樊口の山頂へ登って行った。云い終ると、孔明は、やがて下流のほうに、火焔が天を焦がす

 $\overline{\mathcal{H}}$

東南風は吹く。東南風は吹く。

生温い異様な風だ。

きのうからの現象である。――さてこの前後、曹操の起居は如何

に。魏の陣営は、どう動いていたろうか。

こういっていたのは、程昱であった。曹操に向ってである。「これは不吉な天変だ。味方にとって歓ぶべきことではない」

「丞相よろしく賢察し給え」と、あえて智を誇らなかった。

すると曹操はいった。

万物枯れて陰極まり、一陽生じて来復の時ではないか。この時、「何でこの風が味方に不吉なものか。思え。時はいま冬至である。

東南の風競う。 何の怪しむことがあろうぞ」

来ることも飛ぶが如くであった。南からこの北岸へと猛烈に吹きつけているので、その小舟の寄って、んな所へ、江南の方から一舟が翔けて来た。波も風もすべて、

「黄蓋の使いです」と、小舟は一封の密書をとどけて去った。

た。

「なに、黄蓋から?」

とみも何か忙しない。(一つでは手でから封を切った。読み下すひ)(持ちかねていたらしい。曹操は手ずから封を切った。読み下すひ))

書中の文にいう。

ひたすら好機を相待つうち、時節到来、先頃より鄱陽湖に貯かねての一儀、周瑜が軍令きびしきため、軽率にうごき難く、

献の牙旗を立つ。ねがわくは丞相の配下をして、誤認なからしれがねご諜報いたしおきたる通り、今夜二更の頃、それがし、この冥護、絶好の機逸すべからず。万計すでに備われり。かこの冥護、絶好の機逸すべからず。万計すでに備われり。からのことあり、すなわち、某を以てその奉行となす。天なる哉、送のことあり、すなわち、某を以てその奉行となす。天なる哉、送のことあり、すなわち、某を以てその奉行となす。天なる哉、送のことを。

建安十三年冬十一月二十一日

れた。
「いかがいたしたかと案じていたが、さすが老巧な遺蓋である。「いかがいたしたかと案していたが、さずが表していた。」と、曹操は大いに歓んで、各部の大将に旨を伝え、自身もまた多と、曹操は大いに歓んで、各部の大将に旨を伝え、自身もまた多よい機会をつかんだ。折ふしこの風向き、呉陣を脱して来るのも易れた。

さるほどに、宵は迫り、呉の陣営にも、ただならないものがあっ

ひとり残っていた。
すでに、黄蓋や甘寧も、陣地を立ち、あとの留守には、蔡和が

突然、一隊の兵が来て、

「周都督のお召しである。すぐ来い」

有無をいわせず、彼を囲んで、捕縛してしまった。

蔡和は、仰天して、

「それがしに何の罪やある!」と叫んだが、

「仔細は知らん。云い開きは、都督の前でいたせ」と、兵は仮借ぐ

なく引っ立てた。

周瑜は、待っていた。

彼を見るやいな、

には、ちょうどよい首と、今日まで汝の胴に持たせておいたが、も 「汝は、曹操の間諜であろう。出陣の血まつりに、軍「神へ供える」

蔡和は、哀号して、甘寧や闞沢も自分と同腹なのに、自分だけう好かろう。いざ祭らん」と、剣を抜き払った。

を斬るのはひどいと喚いたが、周瑜は笑って、 「それはみな、自分がさせた謀 略である」

と、耳もかさず、一閃の下に屠った。

赤壁の大襲撃

時すでに初更に近かった。

後、周瑜は、紫和の首を供えて水神火神に祷り、血をそそいで軍旗を祭った。

「それ、征け」と、最後の水軍に出航を下知した。 このときもう先発の第一船隊、第二船隊、第三船隊などは、舳艫

をそろえて、江上へすすんでいた。

化はない。そして依然、大波天にみなぎり、乱雲のあいだからほの り、悽愴の気、刻々とみちていた。 かな月光さえさして、一瞬は晃々と冴え、一瞬は青白い晦冥とな し、その余の大船小艇にも、すべて青龍の牙旗を立てさせていた。 黄蓋の乗った旗艦には、特に「黄」の字を印した大旗をひるがえ フー 宵深まるにつれて、烈風は小凪になったが、東南の風向きに変

万条の銀蛇、躍るが如し三江の水天、夜いよいよ深く

戦鼓鳴を止めて、舷々歌う

魏の北岸の陣中で、誰か吟詠している者があった。旗艦に坐乗 幾万の夢魂、水寨にむすぶ

していた曹操はふと耳にとめて、

「誰だ、歌っているのは」とかたわらの程昱にたずねた。

「艦尾に番している哨兵です。丞相が詩人でいらっしゃるので、お

のずから部下の端にいたるまで、詩情を抱くものとみえます」 「ははは。詩はまずいが、その心根はやさしい。その哨兵をこれへ

旗下の一人が、すぐ席を起って、艦尾へ走りかけたが、それとほ

呼んでこい。一杯の酒を褒美にくれてやろう」

とんど同時に、

って来る!」 ー―やっ? 船が見える。たくさんな船隊が、南のほうからのぼ

と、檣一楼の上からどなった。

て、鉛、櫓へ登るもあり、、舳、へ向って駈け出して行くものもあっ 「なに、船隊が見える?」と、諸大将、旗本たちは、総立ちとなっ

たちまち、雲は月をおおうと、黒白もつかぬ闇としてしまう。望まれる。月光はそれを照らして、鮮やかにするかと思えば、 ――見れば、荒天の下、怒濤の中を続々と連なって来る船の帆が

「旗は見えんか。――青龍の牙旗を立ててはいないか」 下からいう曹操の声だった。

「見えます、龍舌旗が」船楼の上から、諸大将が、口をそろえて答えた。

゙すべての船の帆檣に!」

青旗のようですっ。 青龍の牙旗。まちがいはありません」

曹操は、喜色満面に、

゙そうかっ。よしっ」

しかけた。 と、うなずいて、自身、舳のほうへ向って、希望的な大歩を移

するとまた、そこにいた番の大将が、

た大旗が翩翻と立ててあるように見えまする」と、告げた。 「遠く、後方から来る一船団のうちの大船には、『黄』の字を印し

曹操は、膝を打って、

約束をたがえず、今これへ味方に来るは、まさしく、わが魏軍を天 が助けるしるしである」と、いい、さらに自分の周囲へむらがって 「それそれ。それこそ、黄蓋の乗っている親船だ。彼、果たして

来た幕僚の諸将に向って、

「よろこべ一同。すでに呉は敗れたり。わが掌は、もはや呉を握り奪 ったも同様であるぞ」と、語った。

驚くほど迅かった。すでに団々たる艨艟は眼のまえにあった。 ―と、ふいに異様な声を出したのは程昱で、 東南風をうけて来るので、彼方の機船隊が近づいて来る速度はたっみかぜ

めた。 「や、や? ……いぶかしいぞ。油断はならん」と、味方の人々を・戒し

曹操は、聞き咎めて、むしろ不快そうに、

「程昱。何がいぶかしいというのか?」と、その姿を振向いた。

程昱は、曹操の問に対して、言下にこう答えた。

ければならないのに、いま眼の前に来る船はすべて水深軽く、さ して重量を積んでいるとは見えません。 「兵糧武具を満載した船ならば、かならず船脚が深く沈んでいな ――これ。詐りの証拠では

のとみえる。 聞くと、さすがは、曹操であった。一言を聞いて万事を覚ったも ありませんか」

風、この急場、もし敵に火計のあるならば、防ぐ手だてはない。誰と研いでいたが、くわっと口を開くやいな、「しまった!この大「ううむ!いかにも」と、大きく唸って、その眼を、風の中に、爛々

後の策は、後の事として、取りあえずそう命令した。か行って、あの船隊を、水寨の内へ入れぬよう防いでおれ_

「おうっ」と答えて、

波間を驀進し、たちまち彼方なる大船団の進路へ漕ぎよせ、文聘は、近くの兵船七、八隻、快速の小艇十余艘をひきつれて、と、旗艦から小艇へと、乗り移って行ったのは、文聘であった。「それがしが防ぎとめている間に、早々、大策をめぐらし給え」

と、舳に立って大音に呼ばわった―

「待ち給え。待たれよ」

をおろし、舵を止め、帆綱をゆるめられい!」「曹丞相の命令である。来るところの諸船は、のこらず水寨の外に、碇が

にあたった。
来た先頭の一船から、びゅんと、一本の矢が飛んできて文聘の左の臂来た先頭の一船から、びゅんと、一本の矢が飛んできて文聘の左の臂すると、答えもないばかりか、依然、波がしらを噛んで疾走して

わっと、文聘は船底へころがった。同時に、

「すわや。降参とは「詐りだぞ」

と、船列と船列とのあいだには、まるで驟雨のような矢と矢が

射交わされた。

水煙の中を進んで来て、はや水寨の内へ突入していた。 このとき、呉の奇襲艦隊の真中にあった黄蓋の船は、颯々と、

を抜いて、味方の一船列をさしまねき、黄蓋は、船楼にのぼって、指揮に声をからしていたが、腰なる刀

「今ぞっ、今ぞっ、今ぞっ。曹操が自慢の巨艦大船は眼のまえに展

は悪しった。 、 牧力 、にすことも知らぬ有様。 ――それっ、突込め!(突込んで、縦横無尽列して、こよいの襲撃を待っている。あれ見よ、敵は混乱狼狽、な

に暴れちらせ!」と、激励した。

のに、見りには思い、こうからである。い隠してきた快速艇や兵船は――いちどに巨大な火焔を盛って、ど煙 硝、油、柴などの危険物を腹いっぱい積んで油幕をもっておお かねて、巧みに偽装して、先頭に立てて来た一団の爆火船隊――

っと、魏の大艦巨船へぶつかって行った。

のが、瞬間、三江の水陸をつつんだ。(わうっと、焔の音とも、濤の音とも、風の声ともつかないも

しても、離れなかった。後で分ったことであるが、それらの小艇の・紬・火の鳥の如く水を翔けて、 敵船の巨体へ喰いついた小艇は、 どう

んだと見ると、呉兵はすぐ木の葉のような小舟を降ろして逃げ散っには、槍のような釘が植えならべてあり、敵船の横腹へ深く突きこ

たのであった。

もっと困難を極めたのは、例の連環の計によって、大船と大船、まに、山のような、紅蓮と化して、大波の底に沈没した。なんで堪ろう。いかに巨きくとても木造船や皮革船である。見る

烏林湾の水面はさながら発狂したように、炎々と真赤に逆巻く渦、んど、交戦態勢を作るいとまもなく、焼けては没し、燃えては沈み、ために、一艦炎上すればまた一艦、一船燃え沈めばまた一船、ほと大艦と大艦は、ほとんどみな連鎖交縛していたことである。その

_

渦、渦をえがいていた。

なにが炸裂するのか、爆煙の噴きあがるたび、花火のような焔

うにグルグル廻って、やがて数丈の水煙をかぶっては江底に影を没 が宙天へ走った。次々と傾きかけた巨船は、まるで火焔の車輪のよ

らず、陸の陣地へも燃え移っていた。 しかも、この猛炎の津波と火の粉の暴風は、江上一面にとどま

して行く。

から、糧倉、柵門、馬小屋にいたるまで、眼に映るかぎりは焔々た 烏林、赤壁の両岸とも、岩も焼け、林も焼け、陣所陣所の建物ゥゥム、サッタイッ

「火攻めの計は首尾よく成ったぞ。この機をはずさず、北軍を撃滅

る火の輪をつないでいた。

せよ」

曹操の坐乗していた北軍の旗艦とその前後に集結していた中軍船隊 有利と見るや、さらに、陸地へ迫って、水陸の両軍を励ましていた。 と、大船列を作って、烏林、赤壁のあいだへ進んできたが、味方の 呉の水軍都督周瑜は、この夜、放火艇の突入する後から、堂々 優勢なる彼の位置に反して、ここに無残な混乱の中にあったのは、

「小舟を降ろせ。右舷へ小舟をっ――」

曹操を囲んで、炎の中から逃げようとする幕将にはちがいないが、 と、黒煙の中で叫んでいたのは程昱か、張一遼か徐晃か。

焼こうとする。 たる大波は沸え立ち、真っ赤な熱風はその舟も人も、またたく間に 「迅くッ。迅く!」と、舷へ寄せた一小艇は、焔の下から絶叫する。揺々 その何人なるやさえも定かでなかった。

「おうっ」

「おうっ。いざ丞相も」

ばらばらと、幕将連はそれへ跳びおりた。曹操も躍り込んだ。各

かりだった。

ゝ、身ひとつを移したのがやっとであった。 けれど、それを見つけた呉の走舸や兵船は、

「のがすな、敵の大将を」 「生捕れっ、曹操を!」

と、四方から波がしらと共に追ってくる。

まざまな物が漂っていた。曹操の一艇は、その中を、波にかくれ、飛沫 波の上には焦げた人馬の死体や、焼打ちされた船艇の木材や、さ

につつまれ、無二無三、逃げまわっていた。

将、呉の黄蓋が、曹操を討ちとる時は今なり、是が非でも、彼の首 を挙げんものと、自身、快速なそれへ乗り移って、曹操を追いかけ すると一艘の蒙 衝 (皮革艇) に乗って、こよいの奇襲船隊の闘

曹操、待てっ」 「逃ぐるは 醜 し、魏の大丞相曹操たるものの名折れではないかっ。

てきた。

と、熊手を抱えて、舳に立ち、味方の数隻と共に、漕ぎよせて

来た。 「推参な!」

は波間へ落ちた。 一矢を放った。矢は、黄蓋の肩に立ち、あッという声と共に、黄蓋と、曹操の側から、張遼が突っ立って、手にせる鉄弓からぶんと

どこを見ても、面も向けられない熱風であった。 操は、烏林の岸へ逃げあがった。しかし、そことて、一面の火焔、 あわてた呉兵が、黄蓋の姿を水中に求めているまに、からくも曹

火にふたたび凄まじい威力をふるい出し、石も飛び、水も裂けるば 一時は、小歇みかと思われた風速も、この広い地域にわたる猛

̄――夢じゃないか?」

とは、あまりな相違である。 顧みて曹操は、茫然とつぶやいた。さもあろう。一瞬の前の天地

影ばかりである。そして、彼の擁していた大艦巨船小艇 対岸の赤壁、北岸の烏林、西方の夏水ことごとく火の魔か敵の

「夢ではない! ああっ……」

て影を没し、或いは今なお、猛烈に焼けただれている。

曹操は、一嘆、大きく空へさけんで、落ち行く馬の背へ飛び乗っ

現今の揚子江流域の湖北省嘉魚県の南岸北岸にわたる水陸入り組 この夜、曹操が味わった大苦杯そのものをいう。そしてその戦場は、 んでいる複雑な地域である。 青史にのこる赤壁の会戦、長く世に謳われた三江の大殲滅とは、せいし、せきくき

八十余万と称えていた曹操の軍勢は、この一敗戦で、一夜に、三

分の一以下になったという。

も、馬に踏まれ、槍に追われ、 溺死した者、焼け死んだ者、矢にあたって斃れた者、また陸上で 何しろ、山をなすばかりな死傷をお

いて三江の要塞から潰乱した。

けれど、犠牲者は当然呉のほうにも多かった。

呉将の韓当が、熊手で引上げてみると、こよいの大殊勲者、黄蓋 「救えっ。救うてくれっ」と、まだ乱戦中、波間に声がするので、

だった。

肩に矢をうけている。

韓当は、鏃を掘り出し、旗を裂いて瘡口をつつみ、早速、後方

に送った。

十数ヵ所に火を放っていた。 甘寧、呂蒙、太史慈などは、疾くに、要塞の中心部へ突入して、

このほか、呉の凌統、董襲、潘璋なども、縦横無尽に威力

をふるい廻った。 誰か、その中の一人は、蔡仲を斬りころし、その首を槍のさきに

刺して駈けあるいていた。 こんな有様なので、魏軍はその一隊として、戦いらしい戦いを示

かれて樹の上まで逃げあがっている兵もある。それが見るみるうちさなかった。逃げる兵の上を踏みつけて逃げまろんだ。敵に追いつ

「丞相、丞相。戦袍のお袖に火がついていますぞ」に、バリバリと、樹林もろともに焼き払われてしまう。

後から駈けてくる張。遼が馬の上から注意した。先へ鞭打って

駈けても駈けても焔の林だ。山も焼け水も煮え立っている。そ落ちて行く曹操は、あわてて自分の袖をはたいた。

れに絶えず灰が雨の如く降ってくるので、悍馬はなおさら暴れ狂

「おうーいっ。張遼ではないか。おおういッ」

った。さきに深傷を負った文聘がその中に扶けられて来る。後から追いついて来た十騎ばかりの将士がある。味方の毛玠だ

一ここはどの辺だ」

息をあえぎながら曹操は振向く。

張遼がそれに答えた。

「この辺もまだ烏林です」

「まだ烏林か」

「林のつづく限り平地です。さしずめ敵勢も迅速に追いついて来ま

総勢わずか二十数騎、曹操はかえりみて、暗澹とならずにいらしょう。休んでいる間はありません」

れなかった。

すると、林道の一方から、火光の中に旗を打振り、たのむは、馬の健脚だった。さらに鞭打って、後も見ずに飛ぶ。

「曹賊っ。逃げるなかれ」

「あとは、それがしが殿軍します。ただ急いで落ち給え」と、張と呼ばわる者がある。呉の呂蒙が兵とこそ見えた。

遼が踏みとどまる。

「呉の凌、統これにあり。曹賊、馬を下りて降参せよ」と、いう声しかしまた、一里も行くと、一簇の軍勢が奔突して、

曹操は、胆を冷やして、横ざまに林の中へ駈けこんだ。

がした。

ったと叫びながら、あわてて馬をかえそうとすると、ところが、そこにも、一手の兵馬が潜んでいたので、彼は、しま

徐晃これにお待ちしていました」と、さけぶ。「丞相丞相。もう恐れ給うことはありません。ご麾下の徐晃です。

「おうっ、徐晃か」

曹操は、大息をついて、ほっとした顔をしたが、

「張遼が苦戦であろう。扶けて来い」と、いった。

凌に統の兵を蹴ちらして、重囲の中から張遼を助け出して帰ってきった。徐晃は、一隊をひいて、駈け戻って行ったが、間もなく、敵の呂蒙、

٥.

_

そこで曹操主従はまた一団になって、東北へ東北へとさして落ち

すると、一彪の軍馬が、山に拠って控えていた。のびた。

ると、それはもと、袁《紹の部下で、後、曹操に降り、久しく北国「敵か」と、徐晃、張遼などが、ふたたび苦戦を覚悟して物見させ

の一地方に屈踞していた馬延と張顗のふたりだった。

ふたりは、早速、曹操に会いにきた。そしていうには、

「実は、われわれ両名にて、北国の兵千余を集め、烏林のご陣へお

の火光に、行軍を止め、これに差し控えて万一に備えていたわけで手伝いに参らんものと、これまで来たところ、昨夜来の猛風と満天

曹操は大いに力を得て、馬延、張顗に道を開かせ、そのうち五百

す

延は、自分に較べて、それも多分味方ではないかと思い、さがり、ひとりの大将が、駒を乗り出して何かいっている。-

「何者か」と、先へ近づいて訊いた。

すると、彼方の者は、大音をあげて、

が刃をうけよ」 「われこそは呉に彼ありともいわれた甘寧である。こころよく我「われこそは呉に彼ありともいわれた甘寧である。こころよく我

云いも終らぬうち、馬躍らせて近寄りざま、馬延を一刀のもとに

後ろにいた張顗は、驚いて、

斬り落した。

甘寧の敵ではなかった。 「さては呉の大将か」と、槍をひねって、突きかかったが、それも

て逃げ走った。がって、さしかかって来た南夷陵の道を避け、急に、西へ曲がっまの前で、張顗、馬延の討死を見た曹操は、甘寧の勇にふるえあ

幸いに、彼を探している残軍に出会ったので、

よと、駈けつづけた。「あとから来る敵を防げ」と、馬も止めずに命じながら、鞭も折れ

れて来る部下を待ちながら、もようやく遠く薄れている。曹操はややほっとした面持で、駈け遅んはすでに、五更の頃おいであった。振りかえると、赤壁の火光

もと荊州の士だった一将が答えていう。「ここは、何処か」と、左右へたずねた。

「正ろうとこと。 ううこうこうほうです」「――烏林の西。 宜都の北のほうです」

た。山川峨々として樹林深く、道はひどくけわしかった。と曹操は、馬上から、しきりに附近の山容や地形を見まわしてい「宜都の北とな。ああそんな方角へ来ていたか」

「あはははは。あははは_

奇異な顔を見合わせて彼にたずねた。――突然、曹操が声を放って笑い出したので、前後の大将たちは

「丞相。何をお笑いになるのですか」――と。

曹操は、答えていう。

おくようでは、まだまだ周瑜も孔明も成っておらぬ」の一戦は、彼らの怪我勝ちというもので、こんな地の利を遊ばせてたのだ。もしこの曹操が周瑜か孔明だったら、まずこの地形に伏兵ったのだ。もしこの曹操が周瑜か孔明だったら、まずこの地形に伏兵ったのだ。へつだんな事でもない。今このあたりの地相を見て、ひと「いや、べつだんな事でもない。今このあたりの地相を見て、ひと

落ちそうになった。という声が聞えたので、曹操は驚きのあまり、危うく馬から転げ「常山の子龍趙'雲これに待てりっ。曹操っ、待て」

れ、ただ張遼、徐晃などの善戦によって、彼はからくも、虎口をま敗走、また敗走、ここでも曹操の残軍は、さんざんに痛めつけら

「おう! 降ってきた」

ぬがれた。

無情な天ではある。雨までが、敗軍の将士を・苛んで降りかかる。

それも、車軸を流すばかりな大雨だった。

の疲労困憊は、その極に達した。
でえらいながら、道はぬかり、夜はまだ明けず、曹操を始め幕下の者さではあるし、道はぬかり、夜はまだ明けず、曹操を始め幕下の者雨は、甲や具足をとおして、肌にしみ入る。時しも十一月の寒

「――部落があるぞ」

ていた。 ようやく、夜が白みかけた頃、一同は貧しげな山村にたどりつい

浅ましや、丞相曹操からして、ここへ来るとすぐいった。

「火はないか。何ぞ、食 物はないか」

った。なぜなら部落のうしろの山から火の手があがり、けれど、火を焚いて、それらの食物を胃ぶくろへ入れる間もなか

た。何ぞ知らん、味方の大将の李典、許褚そのほか将士百人ばか「敵ではないっ。敵ではないっ」と、その敵はやがて追いかけて来「すわ。敵だっ」と、またまた、逃げるに急となったからである。

「やあ、許褚も無事か。李典もおったか」

山越えで逃げてきたものだった。

「さればです」と、幕将のひとりがいう。

「――一方は、南夷陵の大道。一方は北夷陵の山路です」

「いずれへ出たほうが、許都へ向うに近いのか」

「南夷陵です。途中、葫蘆谷をこえてゆくと、非常に距離がみじ

かくなります」

自身も心身混沌たるものを覚える。た。馬も兵も飢えつかれて如何とも動けなくなってきた。――曹操た。馬も兵も飢えつかれて如何とも動けなくなってきた。――曹操「すぎた頃、すでに同勢は葫蘆谷へかかった。肉体を酷使してい「さらば、南夷陵へ」と、すぐその道をとって急いだ。

「やすめっ。――休もう」

い。 の鉢や銅鑼を鍋に利用して穀類を炊いだり鶏を焼いたりし始め、 の鉢や銅鑼を鍋に利用して穀類を炊いだり鶏を焼いたりし始め、 して来た食糧を一ヵ所に集め、柴を積んで焚火とし、士卒たちは、下知をくだすや否、彼は馬を降りた。そして、先に部落から掠奪

って後、林の下へ行って坐っていた。からの濡れ鼠な肌着や戦袍を火に乾している。曹操もまた暖を取「ああ、やっとこれで、すこし人心地がついた」と、将士はゆうべ

「ははは。うははは「無然たる面持で、彼は、天を凝視していたが、何を感じたか、

「ははは。あははは」

と、独りで笑いだした。

諸将は、何か、ぎょッとしたように、彼へ向って云った。

そうお笑いになるのですか」 ありますまいが、趙雲子龍の追手を引き出しました。今また、何を 「さきにも丞相は、大いにお笑いになって、まさか、そのためでも

曹操は、なお、笑っていう。

以テ労ヲ待ツ――の計をほどこすであろうに、さてさて抜かったり」 は嘲うのだ。もし曹操が敵ならば、ここに一手の勢を伏せ― にこだまし、あたりの樹林みな兵馬と化したかの如く、四方八面に 「孔明、周瑜、共に大将の才はあるが、まだ智謀の足らぬのを予 そのことばが、まだ終らぬうちに、たちまち、金鼓喊声、四山 一逸ヲ

敵のすがたが見えてきた。 中に、声あって、

が、流星のごとく此方へ飛んできた。 あなやと思うまに、丈八の蛇矛、黒鹿毛の逸足、燦々たる甲盔「曹操、よくぞ来た。燕人張飛これに待ったり。そこを去るな」

兀

「張飛だっ」

や下着を火に乾していたところなので、周章狼狽、赤裸のままで散 名を聞いただけでも、諸将は胆を冷やした。士卒たちは皆、甲

許褚のごときも、

乱するもある。

めていた。 猛然、駈け寄ってきた張飛の前に立って戦い、ややしばし、喰い止 「丞相の危機。近づけては」と、あわてて、鞍もない馬へ飛び乗り、

その間に、

曹操を先へ逃がしておいてから、馬を並べて、張飛へかかって行っ 「すわこそ」と、張遼、徐晃など、からくも鎧を取って身にかぶり、

防ぎ支えているのがやっとであった。 い。その敵を討つというよりは、彼の猛烈な突進を、 とはいえ、張飛のふりまわす一丈八尺の蛇矛には、 少しの間でも 当るべくもな

て追いついて来たが、どれを見ても、傷を負っていない者はない有 くただ逃げ走った。やがてちりぢりに味方の将士も彼のあとを慕っ 曹操は、耳をふさぎ、眼をつぶって、数里の間は生ける心地もな

「また岐れ路へ出た。この二条の道は、どっちへ向ったがよいか」

様だった。

曹操の質問に、

「いずれも南郡へ通じていますが、道幅の広い大道のほうは五十

里以上も遠道になります」

と、地理にくわしい者が答えた。

曹操は聞くと、うなずいて、 山の上へ部下を走らせた。部下は立

ち帰ってきてから復命した。

ほのかに、人煙がたち昇っております。必定、敵の伏兵がおるに違 いございません」 「山路のほうをうかがってみますと、彼方の峠や谷間の諸所から、

「しからば、山路を経て行こう。者ども、山越えしてすすめ」と、 「そうか」と、曹操は、眉根をきっと落着けて、

先手の兵へ下知した。

れた兵と御身をひっさげて、山越えなさんとは、如何なるご意志に 「山路の嶮を擁して、みすみす伏兵が待つを知りながら、この疲 諸大将は驚きかつ怪しんで、

よるものですか」と、駒を抑えて質した。

「我れ聞く。この華容道とは、近辺に隠れなき難所だということ曹操は、苦笑を示して、

を。――それ故に、わざと、山越えを選ぶのだ」 一致れ聞く。この華容道とは、近辺に隠れなき難所だということ

あまりな物好きではありませんか」「敵の火の手をご覧ありながら、しかもその嶮へ向われようとは、

見て、ちつ更りにには、真り最高はみなぎりていない。かれがかえって、そこに伏兵をおいて我を討止めんとするものに相違ない。しげな兵気を見せかけ、この曹操の選ぶ道を、大路の条へ誘いこみ、ら、思うに、峠や谷間へ、少しの兵をおいて煙をあげ、わざと物々トシ、実ナル則ハ虚トス、と。孔明は至って計の深いものであるか「そうでない。汝らも覚えておけ。兵書にいう。――虚ナル則ハ実

生きるを得ぬことは必定である。あやうい哉あやうい哉、いざ疾を歩まば、たちまち、以前にもまさる四面の敵につつまれ、一人も詐謀たること明瞭だ。それを避けて、人気なしなどと考えて大路――見よ、あの煙の下には、真の殺気はみなぎっていない。かれが

「さすがは丞相のご深慮」と、感服しないものはなかった。く、山道へかかれ」と、いって駒をすすめたので、諸人みな、

の主従一団となったので、こうしている間にも、後から後から、残兵は追いつき、今は敗軍

かなろう」
「はやく荊州へ行き着きたいものだ。荊州までたどり着けば、何と

と、あえぎあえぎ華容山麓から峰越えの道へ入った。

まった。――折から山中の雲気は霏々として白い雪をさえまじえ道をあえぐうち、もう先陣の歩みは、まったく遅々として停ってし捨てては行けず、一里登っては休み、二里登っては憩い、十里の山けれど気はいくらあせっても、馬は疲れぬいているし、負傷者も

_

るばかりなので、曹操は焦だって、馬上から叱った。難路へかかったため、全軍、まったく進退を失い、雪は吹き積も

「どうしたのだ、先鋒の隊は」

前隊の将士は、泣かんばかりな顔を揃えて、雪風の中から答え

ません」ところ渓川が生じてしまったものですから、馬も渡すことができところ渓川が生じてしまったものですから、馬も渡すことができ「ゆうべの大雨に、諸所、崖はくずれ、道は消え失せ、それに至る

曹操は、癇癪を起して、

つである。それに対って、戦い難いなどと、泣き面をする士卒があ「山に会うては道を拓き、水に遭うては橋を架す。それも戦の一

るかっ」

屈強な壮士ばかりを前に出して、附近の山林を伐って橋を架け、柴をして、彼自身、下知にかかった。傷兵老兵はみな後陣へ引かせ、

「寒気に怯むな。寒かったら汗の出るまで働け。生命が惜しくば怠や草を刈って、道を拓き、また泥濘を埋めて行った。

るな。怠ける者は、斬るぞ」

材と組み合いながら、まるで田圃の水牛みたいになって働く軍卒剣を抜いて、彼は、土工を督した。泥と戦い、渓流と格闘し、木

あったか知れない程であった。の中には、このとき飢餓と烈寒のため、斃れ死んだ者がどれほど

のを」と、天を恨み、また曹操の苛烈な命令に喚く声が、全軍に聞「あわれ、矢石の中で、死ぬものならば、まだ死にがいがあるも

「死生自ら命ありだ。なんの怨むことやある。ふたたび哭く者は立えたが、曹操は耳にもかけず、かえって怒り猛って、

ちどころに斬るぞ」と、いった。

デュラジュニー そうこう IS く第一の難所は越えたが、残った士卒をかぞえてみるとわずか三百 こうして、凄まじい努力とそれを励ます叱咤で、からくもようや

騎足らずとなり終っていた。

ていた。まるで土中から発掘された泥人形の武者や木偶の馬みたいになっまるで土中から発掘された泥人形の武者や木偶の馬みたいになっことに、その武器と得物なども今は、携えている者すらなく、

「もうわずかだ。目的の荊州までは、難所もない」

曹操は、鞭を指して、将士のつかれた心を彼方へ向けさせ、

「あとは、ただ一息だ。はやく荊州へ行き着いて、大いに身を休め

と、励ました。よう。頑張れ、もう一息」

そして、峠を越え、約五、六里ばかり急いで来ると、曹操はまた、

諸将は、曹操に向って、鞍を叩いて独り哄笑していた。

「丞相。何をお笑いなさいますか」と、訊ねた。

曹操は、天を仰いで、なお、大笑しながら、

するに弓下手にもまぐれあたりのあるのと同じだ。――もしこのも、赤壁の一戦に、我を破って、勢い大いにふるうといえども、要「周瑜の愚、孔明の鈍、いまこの所へ来てさとった。彼、偶然に「ロッラッッ゚

「これがおかしくなくてどうするか。あははは、わははは」と、肩で児ども騙しの浅い計といっていい」と、気焔を吐き、さらに、して平坦な大道のほうに誘い、この山越えを避けしめんなど、まるの辺りには必ず埋兵潜陣の計を設けて、一挙に敵のことごとくを曹操をして、赤壁より一気に、敗走の将を追撃せしめるならば、こ

がって来る美髯将軍――関羽であった。まぎれもなし、青龍の偃月刀をひっさげ、駿足赤兎馬に踏みまたか人馬かと見紛うばかりな鉄甲陣。そのまっ先に進んでくるのはにとどろいた。たちまちに見る前面、後方、ふた手に分れて来る雪ところが、その笑い声のやまないうちに、一発の鉄砲が彼方の林

_

「最期だっ。もういかん!」

一言、絶叫すると、曹操はもう観念してしまったように、茫然戦

意も失っていた。

彼ですらそうだから、従う将士もみな、

い。――が、ひとり程昱は、殲滅されるばかりと、生きた空もない顔を揃えていたのは無理もな「関羽だ。関羽が襲せて来る――」とばかりおののき震えて、今は

彼の心を見て、およそその人がらを知っている。彼は、仁侠の気にみるべきでしょう。――それがし、関羽が許都にありし頃、朝夕に、ろうと、最後の一瞬でも、一縷の望みをつないで、必死を賭して「いや何も、そう死を急ぐにはあたりません。どんな絶望の底にあ

い、終始恩。寵をおかけ遊ばされたことは、人もみな知り、関羽自まっていた当時、丞相には、敵人ながら深く関羽の為。人を愛で給定評がある。――かつて玄徳の二夫人に侍して、久しく許都にとど身を捨て、ふかく恩を忘れず、その節義の士たることすでに天下に富み、傲る者には強く、弱き下の人々にはよく憐れむ。義のために

身も忘れてはおりますまい」

を揺すぶりぬいた。

その眼に映った。に雪中の喊声は四囲に迫り、真先に躍って来る関羽の姿が大きくい…と思い当ったように、その眸をくわっと見ひらいた時――すで曹操は、ふと瞑目した。追憶はよみがえってくる。そうだ!

「おうっ……羽将軍か」

そして、われから馬をすすめ、関羽の前へ寄るや否、ふいに、曹操は、自身のほうからこう大きく呼びかけた。

いった。「やれ、久しや、懐かしや。将軍、別れて以来、つつがなきか」と、

「おう、丞相か」と、馬上に慇懃、礼をして、うだったが、はッと、偃月刀を後ろに引いて、駒の手綱を締めると、それまでの関羽は、さながら天魔の眷族を率いる阿修羅王のよ

たまえ」と、改めていった。天地も哭くと。――いざ、いざ、いさぎよくそれがしにお首を授けを待ちうけたる関羽は、私の関羽にあらず。――聞く、英雄の死は情も叙ぶべきなれど、主君玄徳の命をうけて、今日、これにて丞相「――まことに、思いがけない所で会うものかな。本来、久 闊の「――まことに、思いがけない所で会うものかな。本来、久 闊の

「やよ、関羽。――英雄も時に悲敗を喫すれば惨たる姿じゃ。いま、曹操は、歯を噛み合わせて、複雑な微笑をたたえながら云った。

業、なおこれに思い止るは無念至極。――もしご辺にして記憶あら率いて、まったく進退ここにきわまる。一死は惜しまねど、英雄のわれ戦いに敗れて、この山嶮、この雪中に、わずかな負傷のみを

ば、むかしの一言を思い起し、予の危難を見のがしてくれよ」

う。今日はさる私情にとらわれて、私に赦すことは相成らぬ」戦いに、いささか献身の報恩をなし、丞相の危急を救うてそれに酬りし日、丞相のご恩を厚くこうむりはしたものの、従って、白馬の「あいや、おことば、ご卑怯に存ずる。いかにも、むかし許都に在

「いや、いや。過去の事のみ語るようだが、将軍がその主玄徳の行いや、いや。過去の事のみ語るようだが、将軍がその主玄徳の行いや、いや。過去の事のみ語るようだが、将軍がその主玄徳の行いや、いや。過去の事のみ語るようだが、将軍がその主玄徳の行いや、いや。過去の事のみ語るようだが、将軍がその主玄徳の行る姿だった。

Ξ

伏し拝んでいた。 下が、みな馬を降り、大地にひざまずき、涙を流して関羽のほうを下が、みな馬を降り、大地にひざまずき、涙を流して関羽のほうを――ふと見れば、曹操のうしろには、敗残の姿も傷ましい彼の部

「あわれや、主従の情。……どうしてこの者どもを討つに忍びよう」

ついに、関羽は情に負けた。

- にこうこう いこう 無言のまま、駒を取って返し、わざと味方の中へまじって、何か

曹操は、はっと我にかえって、声高に命令していた。

「さては、この間に逃げよとのことか」

「それ、道を塞ぎ取れ」と、ことさら遠い谷間から廻り道して追っすでに曹操らの主従が、麓のほうへ逃げ去った頃になって関羽は、と、士卒と共に、あわただしくここの峠から駈け降って行った。

て行った。

見しば、『帰りらいないのでは、まずりまり、休でしすると、途中、一軍のみじめなる軍隊に行き会った。

持たず馬も少なく、負傷していない兵はまれだった。見れば、曹操のあとを慕って行く張一遼の一隊である。武器も

すべてを見遁して通した。「ああ惨たるかな」と、関羽は、敵のために涙を催し、長、嘆一声、

この死線を駈け抜けて行ったろうと思われる。―おそらく張遼もそれを知って、心のなかで関羽を伏し拝みながらこの悲境の友人を、捕捉して殺すには忍びなかったのである。――張遼と関羽とは、旧くからの朋友である。実に、情の人関羽は、

持たなかったので、体したが、両軍合わせても五百に足らず、しかも一条の軍旗すら体したが、両軍合わせても五百に足らず、しかも一条の軍旗すらこうして虎口の難をのがれた張遼は、やがて曹操に追いついて合

ばし凋。然としてしまった。 「ああ。かくも、悲惨な敗北を見ようとは……」と、相顧みて、し

(湖北省・江陵)の城に留守していた曹一族の曹仁が、迎えに来のとぶつかったが、これは死地を設けていた伏勢ではなく、南郡この日、夕暮に至って、また行く手の方に、猛気旺な一軍の来る

たものであった。

喜として、今はかえって怨むことも知らなかった。 いました」と、曹操が生きて帰ってくれたことだけでも、無上の歓 の城を空けては、後の守りも不安なので、ただご安泰のみを祈って 「赤壁の敗戦を聞き、すぐにも駈けつけんかと思いましたが、南郡 曹仁は、曹操の無事な姿を見ると、うれし泣きに泣いて、

来、三日三夜の疲れをいやし、ようやく、生ける身心地をとり戻し ないかと思った」と、語りながら、共に南郡の城へ入って、赤壁以 曹操もまた、「今度ばかりは、二度とこの世でそちに会うことも

操は忽然、天を仰いで、 戦塵の垢を洗い、暖かい食物をとり、大睡一快をむさぼると曹

「……ああ。ああ」と、嗚咽せんばかり、涙を垂れて哭いた。 付添う人々は、怪しんで、彼に問うた。

敗なされても、この南郡に入るからには、 るし、いつか再挙の日もありましょうに」 「丞相、どうして、そんなにお哭きになるんです。たとえ赤壁に大 人馬も武器も備わってい

すると曹操は、かぶりを振りながら、

たかと思うと、それも悲しい。諸将よ、笑ってくれ」 今日生きていたらと思い出したのだ。予も愚痴をいう年齢になっ 「夢に故人を見たのだ。――遼 東の遠征に陣没した郭嘉が、もし

「哀しいかな郭嘉。痛ましい哉、奉考……ああ去って再びかえら

と、胸を打って、

-予に生命のある限り、赤壁の恨みは必ず、敵国に報いずにはお それから、曹仁を近く呼んで、

> らず守るを旨とし、城を出て戦ってはならんぞ」と、諭した。 汝はよく南郡を守っていてくれよ。やがて敵の襲撃に会ってもかな かん、今は、しばらく都へ帰って、他日の再軍備にかかるしかない。

匹

にとって、今は、重要なる国防の外郭線とはなった。 この荊州の南郡から襄陽、合淝の二城をつらねた地方は、曹操

また、襄陽城の守備としては、夏侯惇をあとに留め、合淝地方言となし、すべて巻中の策に従って籠城いたすがよい」 しこの城の守りがいよいよ危急に迫った時は、これを開いて、わが 「この一巻のうちに、こまごまと、計 策を書いておいたから、も で、曹操は、都に帰るに際して、ふたたび曹仁へこう云い残した。

さらに楽進、李典の二名を副将としてそれに添えた。 は、ことに、重要な地とあって、それへは、張遼を守りに入れた。 ユウー

右の大将も士卒もあらかた後の防ぎに残して行ったので、その時、 こう万全な手配りをすまして、曹操はやがてここを去ったが、左

曹操に従って都へかえった数は、わずか七百騎ほどに過ぎなかった

という。 その頃

夏口城の城楼には、戦を見まうの凱歌が沸いていた。

級や鹵獲品を展じて、軍功帳に登録され、その勲功を競っていた。 いたが、折ふしここへ、関羽もその手勢と共に戻って来て、悄、然 閣の庁上では、玄徳を中心に、孔明も立って、戦勝の賀をうけて 張飛、趙雲、そのほかの士卒は、みな戦場から立帰って、敵の首

さげて来たものはおそらくあなたであろう」「おお、羽将軍か。君にも待ちかねておわしたぞ。曹操の首を引っ

るか。いざ、功を述べて、勲功帳に記録を仰ぎたまえ」「将軍。どうして、そのように不興気な顔をしてうつ向いておらる

「いや、……べつに何も……」

に低かった。 関羽は益〻、うな垂れているのみで、そのことばさえ、女のよう

孔明は、眉をひそめながら、

「どうなされたのか。べつに何も……とは?」

「実は。……それがしのこれに来たのは、功を述べるためではなく、

「はて。……では、曹操はついに華容の道へは逃げ落ちて来なか罪を請うためでござる。よろしく軍法に照らして罰せられたい」

ったといわるるか」

れがしの無能なるため、討ち洩らしてござる」「軍師のご先見にたがわず、華容道へかかっては来ましたが、そ

ありながら、なお羽将軍の強馬精兵をも近づけぬほど、曹操はよく「なに、討ち損じたと……あの赤壁から潰走した敗残困憊の兵で

戦ったと申さるるか」

「然らば、曹操は討たずとも、その手下の大将や士卒は、どれほど「……でも、ござらぬが。……つい、取り逃がしました」

討ち取られたか」

「ひとりも生捕りません」

「挙げたる首級は」

「一箇もなし――でごさる」

゙゚ヮ゙ーム。……そうか」

ながめているだけだった。 孔明は、口をつぐんで、あとはただその澄んだ眸をもって、彼を

|関羽どの」

はい

操の危難を見のがされたな」「さてはご辺には、むかし曹操よりうけた恩を思うて、故意に、曹

「今さら、何のことばもござりませぬ。ただご推量を仰ぐのほかは

「だまれっ」

孔明は、その白皙な面に紅を呈して、一喝、叱るやいな、座後

の武士を顧みて、命じた。

はゆるされん。諸君っ!(斬り捨ていッ、この柔(弱)漢を!」(王法は、国家の典形。私情をもって、軍令を無視した関羽の罪)

五

ろしい気がするものである。いわんや軍師の座にあって、謹厳おのろしい気がするものである。いわんや軍師の座にあって、謹厳おのめったに怒らない優しい人が怒ったのは、ふつうの者の間でも恐てであった。

孔明がこれほど心から怒ったらしい容子を見たのは、玄徳も初め

「軍师―――」と、急こ皮のまえこ白って、黍を由げないばかりこと、くみ立って、どうなることかと思っていた。明が、断乎、斬れ! と命じたのであるから、人々みな慄然とすれを持していやしくもせず、日頃はあまり大きな声すら出さない孔

「わしと、関羽とは、むかし桃園に義を結んで、生死を倶にせんとれみを仰いだのは、当の関羽ではなくて、玄徳であった。「軍師――」と、急に彼のまえに迫って、膝を曲げないばかりに愍

挙げさせるから。……軍師、大法を歪。曲するのではなく、仮にしをしばし預けてくれい。後日、かならずこの罪を償うほどの大功を しがたいものに違いないが、わしに免じて――いやわしにその罪科誓ってある。いわば関羽の死はわしの死を意味する。きょうの罪は赦婦

身、主君たる位置にありながら、玄徳は、臣下の一命のために、

ばらくその法断を待って欲しいのじゃ。たのむ」

臣下に対して、ひれ伏さないばかりであった。

むけて、 何でそれまでを、孔明とて一 蹴できよう。彼はわずかに面をそ

し召のまま暫時、 「赦すことはできません。軍紀はあくまで厳然たる軍紀ですが、思 処断は猶予しましょう。関羽の罪は、おあずけし

ておきます」

と遂にいった。

数万人の捕虜は、赤壁から呉へ運ばれて行った。

強して、江北へ押し渡って来た。 呉軍は、そのすべてを包有して、 一躍大軍となり、また整備を増

献じ、戦勝のお祝いを述べるためにと――玄徳の使いで」 「玄徳から賀使が見えました。家臣の孫乾という者が、贈り物を 中軍にある周瑜のところへ、或る日、こういう取次があった。

すめ、五ヵ所の寨を粉砕して、いまやそこの南郡城に肉迫して陣 ざるものがある。 し、士卒の端にいたるまで、無敵呉軍の誇りに燃えて、当るべから 赤壁の大戦捷に、周瑜ばかりでなく、呉軍全体は、破竹の勢いを示 ――この図に乗せてと、周瑜は、南郡へ攻略をす

「ほう、玄徳からとな? ……そうか、すぐ通せ」

を取った日であった。

周瑜のことばに、使者孫乾は、直ちに案内されて来た。

「ご主君の玄徳や孔明は、目下どこにおられるか」

「されば、油江口におられます」

「えっ、油江口に?」

何か、驚いたらしい顔である。それからは、話もはずまなかった

が、宴の終る頃、

「いずれ、それがし自身、ご返礼に出向くであろう。よろしく申し

伝えてくれ」

と、追い帰すように、孫乾を帰した。

あくる日。

「ムム。玄徳が油江口におることでか。それは聞き捨てならんでは 「都督、きのうは、何であんな意外なお顔をなすったのですか」

「なぜです」

を消費して、赤壁に勝っても、まだその戦果はつかんでおらぬ。 取ろうという野心があるからだ。われわれ呉軍が、莫大な軍馬銭粮 「彼が油江口へ陣を移したとすれば、それは明らかに、南郡を攻め

―それを玄徳に先んじられては何のために戦ったか、意味をなさぬ

ことになる」

「さっそく、玄徳の陣を訪問したうえ、 「その儀は、疾くから私も、油断がならんと思っていました」 -供の兵馬や贈り物の準備をしてくれい」 一本釘を打っておこう。

「承知しました。私も共に参りましょう」

一方、孫乾は油江口にある味方の陣に帰ると、すぐ玄徳に、帰

「いずれ周瑜が自身で答礼に参るといっておりました」と、話した。

玄徳は、孔明と顔見合わせて、

「これほどな儀礼に、周瑜が自身で答礼に来るというのはおかしい。

何のために来るのであろう」

「もちろん、南郡の城が気にかかるので、こちらの動静を見に来る

のでしょう」

「もし兵を率いて来たらどうしようか」

「ご心配はありません。まずこんどは探りだけのことでしょう。ご

対談のときには、かようにお答え遊ばされい」

孔明は、何事かささやいた。

整々と立てて、周瑜の着くのを待っていた。 先触れのあった日、油江口の岸には、兵船をならべ、軍馬兵旗を

見るに、陸上にも江辺にも、兵馬や大船が整然と旗幟をそろえて 周瑜は、随員と守護の兵三千騎を連れて、船から上陸した。——

「案外、馬鹿にはならぬ兵力を持っておるな」

いるので、

といわんばかりな流し目をくばりながら、趙雲の一隊に迎えられ

て、陣の轅門へ入って行った。

もちろん、玄徳、孔明、そのほかの部将は、篤く出迎え、大賓の

礼をとって、会宴の上座へすすめた。

酒、数巡。

玄徳は杯をあげて、 しきりに、赤壁の大勝を激賞しながら、

周都督のほうで、南郡をお取りになるご意志がなければ、玄徳の手 けを申さんと、急遽、この油江口まで陣を進めて来ましたが、もし 「ときに、引続いて、江北へご進撃と承り、いささか戦いのお手助

をもって、攻め取りますが」と、軽くいった。

すると、周瑜も、気軽に笑って、戯れた。

んでいたことは実に久しいものです。いま、南郡はすでに、呉の掌 「どう致しまして――。とんでもない。呉が荊 州を併呑せんと望

にあるものを、決して、ご心配下さるに及ばん」

万夫不当。おそらく周都督のお手にはやすやすと落ちないのでは―ということもあります。曹操が残して行った曹仁は北国の 「けれど、世の。諺。にも、掌中ノモノ必ズシモ掌中ノ物ナラズ― ユタ・

ないかと案じられますが」

な嘲笑にそれを代えて、 周瑜は、眉のあいだに、憤然と憤炎をあらわしたが、すぐ皮肉

かろう」 「もし、それがしの手に奪れなかったら、あなたの手で奪ったらよ

明という生き証人もいること、都督の今のおことばをよく聞いてお 「ほ。そうですか。それはかたじけない。――ここには、魯粛、孔

いてもらいたい」

「あとでご後悔はありますまいな」

「大丈夫の一言、何の、証人などが要ろう」

゙ばかな]

周瑜は、一杯を干して、また一笑した。

「さすがに、周都督の一言は、呉の大国たる貫禄を示すに余りある そのそばから孔明はこういって、既に、周瑜の言を賞めあげた。

劉皇叔が試みにそれを攻め取ってみられるがよいでしょう」がほんとです。そして万が一にも、呉の手にあまったときは、 公論というものです。荊州の地は、当然まず呉軍からお攻めあるの

周瑜らが帰った後である。

玄徳は、嘆かわしい顔して、孔明を責めた。

自身、周瑜に向って、南郡を取れといわんばかり励まして帰したの 徳に教えたので、予はその通りに応対していた。それなのに、先生 -――周瑜と対談の時は、ああ云え、こう答えよと、先生がこの玄

のに、君にはさらに耳へお入れがなかった」 「その以前、私が荊州をお取りなさいと、あんなにおすすめ申した は一体どういうつもりか」

むかしを問うてくれるな。事情も変っている」 「わが一族、わが味方、拠るに地もなく、ほとんど今は孤窮の境界。

に必ず君を南郡城に入れてご覧にいれまする」 「ご心配には及びません。べつに孔明に一計があります。近いうち

を起すべく、指令を出していた。 周瑜は、自軍の陣へ帰ると、すぐに南郡城へ向って、猛烈な行動

魯粛がその間に云った。

「玄徳とお会いなされた折、なぜ彼に対してもし呉軍の手にあまる

ときは、そっちで南郡を攻め取るも随意だ――などといわれたので

すか」

ものだ。すでに赤壁においてすらあの大、捷を博した我軍のまえに、「それは君、ことばの上だけのものさ。人情の余韻を残すという 南郡の城のごときは鎧。袖一触、あんなものを取るのは手を反す

よりやさしいことじゃないか」

れにつづき、周瑜の中軍も前進して、堂々城へ迫った。

このときまで、城中の曹仁は、曹操の残して行った。誠めを鉄則

として

「出るな。守れ」

牛 金はしきりに勧めた。 の一方でただ要害をきびしくするに汲々としていたが、部下の

-24-

城を出てこれを撃つという変もなければ、城中の士気は、 なるばかりで、所詮、長く持てるものではありません」 い城というものはない。いますでに呉軍が城下に迫っているのに、 「要害の守りというものは或る期間だけのものです。古来、陥ちな

「それも一理ある」

曹仁は、牛金の乞いを容れて、兵五百をさずけ、機を計って奇襲

丁奉は、牛金を目がけて、一騎打ちを挑んだが、たちまち後ろを見 牛金は、城門から突出して、敵の先鋒、丁奉の軍を蹴散らした。

せて逃げ出した。

し、追い疲れた牛金軍五百を袋の中の鼠としてしまった。 にわかに、さっとかえした丁奉軍は、鼓を鳴らして、味方を糾 合 牛金の五百騎は、逃げる丁奉を追いまくって、つい深入りした。

を見て、自身手勢を率いて、救いに出ようとした。「戦況いかに?」と、城中の櫓から眺めていた曹仁は、牛金の危急

すると、長史陳矯が、

「丞相がこの城を託して都へ帰らるる時、何と宣 われましたか」

と、口を極めて、軽率な戦いを諫めた。

だが、曹仁は、

りだ。それを見殺しにするは、この城の自殺にひとしい」とばかり、「牛金は大事な大将だし、部下五百は、城中で重きをなす精鋭ばか

たので、陳矯もやむなく櫓へ駈けのぼり、太鼓を打って勢いを添え耳もかさず、馬に打乗り、屈強な兵千余を率いて、城外へ渦まき出

蹴破り、牛金と合流して、首尾よく彼を救い出した。 かくて、曹仁は、呉軍の真只中へ馳け入って、まず徐盛の一角をた。

を知ると、 けれどまだ、あと五、六十騎の者が、重囲の中に残されているの

「よしっ、もう一度行って来る」

ってきた。 と、ふたたび馳け入り、あとの者をも一人もあまさず救出して帰

四角八面に奮戦し、また牛金もそれを助け、城中からも曹仁の弟のめようと試みた。けれど曹仁の勇は、それらの阻害を物ともせず、すると、呉の先鋒の大将蒋欽が、道をさえぎって、曹仁を討ち止

曹純が加勢に出て、むらがる敵へ当ったので、ついに、その日は首

尾よく、目的を達して、

の重きを敵へ知らしめた。

|曹仁ここにあり|

で、城中では、その夜、

「まず、合戦の幸先はいいぞ」

と、大いに勝ち戦を賀して、杯をあげていたが、それに反して、

序戦に敗れた呉軍の営内では、

を衝かれるとは何たる醜態だ」
「敵に数倍する勢を擁しながら、しかも城中から出てきた兵に不意

問われ、さんざん痛罵されていた。と、蒋欽、徐盛のともがらは、都督周瑜の面前で、その責めをと、蒋欽、徐盛のともがらは、都督周瑜の面前で、その責めを

=

「この上は、自身、南郡の城を一もみに踏みつぶしてみせる」

周瑜は、怒った後で、こう豪語した。

「ご自身、軽々しい戦いはまずなさらぬほうがよいでしょう」敗も、彼にはひどくケチがついたような気がしたものとみえる。ここ連戦連勝の勢いに誇っていたところなので、蒋欽の些細な一

諫めたのは、甘寧である。

して、側面を衝いてくるかもしれません」すから、うかつに南郡だけを目がけていると、いつ如何なる変を起います。そしてそこには、曹仁と呼応して、曹洪がたて籠っていま「南郡と掎角の形勢を作って、一方、夷陵の城も戦備をかためて甘寧は、説いた。

「――では、どうしたがいいか」

「よし。そのまに、南郡の城は、わが手に片づける」「それがしが三千騎を拝借して、夷陵の城を攻め破りましょう」

手配はなった。

甘寧は、江を渡って、夷陵城へ攻めかかった。

-25

南郡の城の櫓から、それを眺めた曹仁は驚いた。

「これはいかん。寄手の一部が夷陵へ迫った。夷陵の曹洪は困るだ

と、陳、矯に、急場の処置を諮ったところ、ろう。何しろまだ防備が完全でないから」

になったらよいでしょう。夷陵の城が陥ちたら、この南郡城も瀕死 「ご舎弟の曹純どのに、牛金を副将とし、直ちに急援をおつかわし

になります」と、彼もあわてだした。

外部から城内の曹洪と聯絡をとって、 そこで曹純と牛金は、にわかに夷陵の救いに馳せつけた。曹純は

「力によらず、謀略を主として、敵を 欺 こうではないか」と、一

計を約束した。

甘寧は、それとも知らず、前進また前進をつづけ、敗走する城兵

「意外にもろいぞ」

を追い込んで、

と、一挙、占領にかかった。

曹洪も出て奮戦したが、実は、策なので、たちまち支え難しと見

せかけて、城を捨てて逃げた。

をあげて、誇っていたが、なんぞ測らん、曹純、牛金の後詰が、 日暮れに迫って、甘寧の軍勢は、残らず城内へなだれ入り、凱歌

純はまったく位置をかえて、孤城の中に封じこまれてしまった。 糧道まで、すべて外部から遮断してしまったので、寄手の甘寧と曹 諸門を包囲し、また曹洪も引っ返してきて、勝手を知った間道から この報らせが、呉軍に聞えたので、周瑜は重ね重ね眉をしかめ、

「甘寧は、呉の忠臣、見殺しはできません。然りといえど、今、兵

「程普。何か策はないか」と、評議に集まった面々を見まわした。

力を分けて、夷陵へかかれば、敵は南郡の城を出て、わが軍を挟撃

して来ましょう」

呂蒙がそれにつづいて、こう意見を吐いた。

やはり甘寧を救うのが焦眉の急です。てまえに先鋒をお命じあって、 「ここの抑えは、凌、統に命じて行けば、充分に頑張りましょう。

都督がお続きくださるなら、必ず十日以内に、目的は達せられるか

と思われるが……」

「凌統。大丈夫か」と、念を押した。

周瑜はうなずいて、さらに、

凌統は、ひきうけたが、

入れますが、それ以上日数がかかると、それがしはここで討死のほ 「――ただし、十日間がせいぜいです。十日は必ず頑張ってご覧に

かなきに至るかもしれません」と、いった。

「そんなに日のかかるほどな敵でもあるまい」

とごとく夷陵方面へうごかした。 と、周瑜は、兵一万に凌統をあとに残して、そのほかの主力をこ

匹

途中で、呂蒙が献策した。

ば、きっと後でものをいうと思いますが」 附近の谷へ五百ほどの兵を伏せ、柴 薪を積んで道をさえぎり置け 「これから攻めに参る夷陵の南には、狭くけわしい道があります。

周瑜は、容れて

へ近づいた。

「その計もよからん」と、手筈をいいつけ、さらに、前進して夷陵

彼は、陣中第一の駿足を選んでそれにまたがり、一鞭を加えて、「それがしが参らん」と、周、泰がすすんでこの難役を買って出た。入って、城中の甘寧と聯絡をとる勇士はないか――と周瑜がいうと、夷陵の城は桶の如く敵勢に囲まれている。誰かその鉄桶の中へ

はまさか敵とも思えなかった。ただ近づくや否、ただ一騎、弾丸のように駈けてきた人間を、曹洪、曹純の部下

敵の包囲圏へ駈けこんで行った。

「何者だっ

「待てっ待てっ」と、さえぎった。

疾走して行った。の知ったことじゃないっ。近づいて蹴殺されるな」と、喚き喚き、「遠く都から来た急使だ。曹丞相の命を帯ぶる早馬なり、貴様たち、周泰は、刀を抜いて剣舞するようにこれを馬上でまわしながら、

城下へ来て、 その勢いで、二段三段と敵陣を駈け抜けてしまい、遂に、夷陵の

「甘寧、城門を開けてくれ」と、どなった。

て作戦はこう……」 「もう大丈夫。安心しろ。周都督がご自身で救いに来られた。そし

な、から俄然城兵の士気があがっているのを眺めて、寄手の曹洪、から俄然城兵の士気があがっているのを眺めて、寄手の曹洪、きのう、おかしな男が、ただ一騎、城中へ入ったというし、と、一切をしめし合い、ここに完全な聯絡をとった。

「これはいかん」と、顔見あわせた。

|周瑜の援軍が近づいた証拠だ。ぐずぐずしておれば挟撃を喰う。

へ どうしよう?|

ったな、こうなってみると」いこんで袋叩きにするという策は、名案に似て、実は下の下策だいこんで袋叩きにするという策は、名案に似て、実は下の下策だ「どうしようといっても急には城も陥ちまい。甘寧をわざと城へ誘

出してあるから、兄の曹仁から加勢に来るのを待つとするか」「今さらそんな繰言をいってみても仕方はない。南郡へも使いが

「ともかくも一両日、頑張ってみよう」

崩してたちまち敗走の醜態を見せてしまう。どあわてふためいて戦ったものの、もとより敵ではなかった。陣を次の日にはもう周瑜の大軍がここへ殺到した。曹洪、曹純、牛金な何ぞ無策なると心ある者なら歯がゆく思ったにちがいない。すぐ

やらで、さんざんな態になってしまった。 馬から谷へ落ちる者や、自ら馬をすてて逃げ出すところを討たれる 27のけわしい細道までかかると、道に積んである柴や薪に足をとられ、のみならず、 周瑜の急追をよけて、 山越えに出たはいいが、途中

だった。 だ城門を閉じて守備第一にしておればよかった」という及ばぬ愚痴「やはり丞相のおことばを守って、絶対に城を出ずに、最初からた

「そうだ! 忘れていた」

は曹操が都へ帰る時、いよいよの危急となったら封を開いてみよ、曹仁は、その愚痴からふと思い出したように、膝を打った。それ

たためてあるかの希望であった。 といってのこして行った一巻の中である。その中にどんな秘策がし

五

倍して、南郡の城を取り囲んだ。 ある。夷陵を占領し、無事に甘寧を救い出し、さらに、勢いを数 ここ、周瑜の得意は思うべしであった。まさに常勝将軍の概が

「……はてな? 敵の兵はみな逃げ支度だぞ。腰に兵糧をつけてお

望見していた周瑜は、こうつぶやきながらなお、眉に手をかざして 城外に高い井楼を組ませて、その上から城内の敵の防禦ぶりを

配であった。 士気のない紙旗や。幟。ばかり沢山に立っていて、実は人もいない気 く外矢倉や外門に出て、その本丸や主要の墻の陰には、すこぶる 見るに、城中の敵兵は大体三手にわかれている。そしてことごと

陣を程普に命じて、城中へ突撃した。 さもあらばただ一撃に」と、周瑜は、みずから先手の兵を率い、後 防戦を示し、心には早くも逃げ支度をしておると見える。――よし。 「さては、敵将の曹仁も、ここを守り難しとさとって、外に頑強に

すると一騎、むらがる城兵の中から躍り出て、

と、名乗りかけて来た。 「来れるは周瑜か。湖北の驍 勇曹洪とは我なり。いざ、出で会え」

周瑜は、一笑を与えたのみで、

「夷陵を落ちのびた逃げ上手の曹洪よな。さる恥知らずの敗将と矛

を交えるが如き周瑜ではない。誰か、 あの野良犬を撲殺せい」と、

鞭をもって部下をさしまねいた。

の韓当であった。 「心得て候う」と、陣線を越えて、彼方へ馬を向けて行ったのは呉

とばかり引きしりぞく。 人交ぜもせず、二人は戦った。交戟三十余合、 曹洪はかなわじ

するとすぐ、それに代って、曹仁が馬を駈け出し、大音をあげて、

った。 「気怯れたか周瑜、こころよく出て、一戦を交えよ」と、呼ばわ

ここに至って、城兵は全面的に崩れ立ち、呉軍は勢いに乗って、滔々 呉の周、泰がそれに向って、またまた曹仁を追い退けてしまった。

喊鼓、天をつつみ、奔煙、地を捲いて、

と殺到した。

「今なるぞ。この期をはずすな」

打って行った。 城門へも逃げ込み損ねた守兵は、みな城外の西北へ向って雪崩れ 息もつかせぬ呉兵の急追に、度を失ったか曹仁、曹洪をはじめ、 と、周瑜の猛声は、味方の潮を率いてまっ先に突き進んでゆく。

していたかを物語るように。 か城の四門はまるで開け放しだ。 すでに周瑜は城門の下まで来ていた。見まわすところ、ここのみ いかに敵が狼狽して内を虚に

自身も城門の中へ駈けこんだ。 ものと思いこんでいた周瑜は、 「それっ、城頭へ駈け上って、 呉の旗を立てろ」と、もう占領した うしろにいる旗手を叱咤しながら、

「ああ、まさにわが計略は図にあたった。 すると、門楼の上からその様子をうかがっていた長史陳、矯が、 曹丞相が書きのこさ

ながら、かたわらの狼煙筒へ火を落すと、轟音一声、門楼の宙天 れた巻中の秘計は神に通ずるものであった!」と、感嘆の声を放ち

周瑜を目がけて降りそそいで来た。周瑜は仰天して、駒を引っ返そ とたんに、あたりの墻 壁の上から弩弓、石鉄砲の雨がいちどに

に黄いろい煙の傘がひらいた。

うとしたが、あとから盲目的に突入してきた味方にもまれ、うろう

ろしているうちに、足下の大地が一丈も陥没した。 陥し穽であったのだ。上を下へとうごめく将士は、坑から這い。

上がるところを、殲滅的に打ち殺される。周瑜は、からくも馬を拾 って、飛び乗るや否、門外へ逃げ出したが、一閃の矢うなりが、彼

こうと駈けてくるのを、呉の丁奉、徐盛らが、馬の諸膝を薙ぎ払どうっと馬から転げ落ちる。そこを敵中の一将牛 金が、首を掻 を追うかと見るまに、グサと左の肩に立った。

って牛金を防ぎ落し、周瑜の体をひっかついで呉の陣中へ逃げ帰っ

同様な混乱におとされた呉軍の損害は、実におびただしい数にのぼ 壕におちいって死ぬ者、矢にあたって斃れる者など、城の四門で

「退鉦っ。退鉦をっ」と、程普はあわてて、総退却を命じていた。 そして、南郡の城から、思いきって遠く後退すると、早速、

「何よりは、都督のお生命こそ……」

と、軍医を呼んで、中軍の帳の内に横たえてある周瑜の矢瘡を

「ああ、これはご苦痛でしょう。 鏃 は左の肩の骨を割って中に喰

いこんでいます」

医者はむずかしそうな顔をしかめて、患部をながめていたが、傍

らの弟子に向って

「鑿と木槌をよこせ」と、いった。

程普が驚いて、

「こらこら、何をするのだ」と、怪しんで訊くと、医者は、患者の瘡口

を指さして、

りほか方法はありません」と、いった。 んか。こんなのが一番われわれ外科の苦手で、荒療治をいたすよ の根本から折れてしまって、鏃が骨の中に残っているではありませ 「ごらんなさい。素人が下手な矢の抜き方をしたものだから、矢

一ううむ、そうか」

かんかんと骨を鑿りはじめた。 と、ぜひなく唾をのんで見ていると、医者は鑿と槌をもって、

「痛い痛いっ。たまらん。やめてくれ」

周瑜は、泣かんばかり、悲鳴を発した。 医者は、弟子の男と、程

普に向って、

「こう、暴れられては、手術ができません。手脚を抑えていてくれ」 荒療治の結果はよかった。苦熱は数日のうちに癒え、周瑜はたち と、その間も、こんこん木槌を振っていた。

まち病床から出たがった。 が塗ってありますからな。なにかに怒って、気を激すと、かならず 「まだまだ、そう軽々しく思ってはいけません。何しろ鏃 には毒

医者の注意を守って、程普はかたく周瑜を止めて中軍から出さな

骨傷と肉のあいだから再び病熱が発しますよ」

門を閉ざして、相手に出るな」と、厳戒した。 かった。また諸軍に下知して、「いかに敵が挑んできても、固く陣

曹仁の部下牛金は、たびたびここへ襲せて来ては 城兵は以来ふたたび城中に戻って、いよいよ勢いを示し、中でも

「どうした呉の。輩。 この陣中に人はないのか。中軍は空家か。い

よく降伏するなり、然らずんば、旗を捲いて退散しろ」と、さんざ かに敗北したからとて、いつまで、ベソをかいているのだ。いさぎ

んに悪口を吐きちらした。

はまた日をあらためてやって来た。そして、前にもまさる悪口雑言 けれど、呉陣は、まるでお通夜のようにひッそりしていた。牛金

を浴びせたが、

とばかり怖れていた。 「静かに。静かに……」と、程普は、ただ周瑜の病気の再発するこ

程普はひとまず兵を収めて、呉の国元へ帰り、周瑜の瘡が完全に癒 ってから出直そうという意見を出したが、諸将の衆評はまだそれに 致を見なかった。 牛金の来訪は依然やまない。来ては、辱めること七回に及んだ。

しても周瑜の耳に聞えてくる。周瑜もさすがに武人、がばと病床に 仁自身が大軍をひきいて襲せてくるようになった。当然、いくら秘 かかる間に、城兵は、いよいよ足もとを見すかして、やがては曹

「あの喊の声はなんだ」と、訊ねた。

身を起き直して

程普が、答えて、

「味方の調練です」というと、なお耳をすましていた周瑜は、俄然、

起ち上がって、

「鎧を出せ。剣をよこせ」と、罵った。そして、「大丈夫たる者

が、国を出てきたからには屍を馬の革につつんで本国に帰るこそ 本望なのだ。これしきの負傷に、無用な気づかいはしてくれるな」

と、云い放ち、遂に帳外へ躍り出してしまった。

馬にとびのり、自身、数百騎をひきいて陣外へ出て行った。 まだ癒えきらない後ろ傷の身に鎧甲を着けて、周瑜は剛気にも

それを見た曹仁の兵は、

「やッ周瑜はまだ生きていたぞ」と、大いに怖れて動揺した。 曹仁も、手をかざして、戦場を眺めていたが、

るまい。およそ金瘡の病は、気を激するときは破傷して再発すると いう。一同して彼を罵り辱めよ」と、軍卒どもへ命令した。 「なるほど、たしかに周瑜にちがいないが、まだ金瘡は癒ってお

そこで、曹仁自身も先に立ち、

「周瑜孺子。さき頃の矢に閉口したか。気分は如何。矛は持てる」にいうのじょし

などと嘲弄した。

ちまち、怒面を朱泥のようにして、周瑜は、 彼の将士も、その尾について、さんざん悪口を吐きちらすと、た

「誰かある、曹仁匹夫の首を引き抜け」

「潘 璋これにあり。いでそれがしが」 と叫び、自身も馬首を奮い立てて進まんとした。

口をふさぎながら、どうと、馬の背から転げ落ちた。 周瑜は、くわっと口を開き、血でも吐いたか、矛を捨てて、

と、周瑜のうしろに控えていた一将が、駈け出そうとする途端に、

それと見て、敵の曹仁は、

「ざまを見よ。彼奴、血を吐いて死したり」と、一斉に斬り入っ

てきた。

逃げこんだ。この日の敗北もまた惨たるものであった。

子で、医者のすすめる薬湯など飲みながら、味方の諸将へ話しかけ憂色深き中に周瑜は取巻かれていた。だが、彼は案外、元気な容

せりと噂するがいい」と、いった。見せたのだ。さっそく陣々に喪旗を立て、弔歌を奏でて、周瑜死はない。曹仁が漫罵の計を逆用して、急に血を吐いた真似をして「きょう馬から落ちたのは、わざとしたので、金瘡が破れたので

次の日の夕方ごろ、曹仁の部下が城外で、呉兵の一将隊を捕虜に

して来た。訊問してみると彼らは、

ついて帰っても、雑兵は、いつまで雑兵で終るしかありませんから、ようですから、所詮、呉に勝ち目はありません。勝ち目のない軍に歿されました。で、呉軍は急に本国へ引揚げることに内々きまった「昨夜ついに、呉の大都督周瑜は、金瘡の再発から大熱を起して陣

た。その結果、深更に及んで、呉の陣へ、大襲を決行した。 曹仁、曹洪、曹純、陳嬉、牛金などは、鳩首して密議にかかっ所へ押襲せれば、残る呉軍を殲滅し得ることは疑いもありませぬ」ら、今夜、呉陣へ案内いたします。喪に服して意気銷 沈している一同談合して降参に来たわけです。もしわれわれをお用い下さるな一同談合して降参に来たわけです。もしわれわれをお用い下さるな

「さては早、ここを払って、引揚げたか?」として、捨て 篝 が所々に燃え残っている。ところが、陣中は、旗ばかり立っていて、人影もなかった。寥々

下の兵は、度を失い、さわぎ立って、蜂の巣のごとく叩かれたあげ一度に取籠めて猛撃して来たため、空陣の袋に入っていた曹仁以などという呉将の名だたる手勢手勢が、喊を作り、銅鑼をたたき、泰、潘 璋。南の門からは徐盛、丁奉。北の柵門からも陳武、呂蒙泰、松 です。南の門からは徐盛、丁奉。北の柵門からも陳武、呂蒙を疑っていると、たちまち、東門から韓当、蒋 欽、西門から周

ず、遂に、襄、陽方面へ遁走するのほかなかった。中、呉の甘寧が道をさえぎっていたので、城内へ入ることもでき中、呉の甘寧が道をさえぎっていたので、城内へ入ることもでき曹仁、曹純、曹洪など、みな自分らの南郡へ向って逃げたが、途

く、士卒の大半を討たれて、八方へ潰乱した。

・ 急気すこぶる Et こ、呈音をつて、礼軍の中を従黄し、ハでこの死せる周瑜は生きていた。この夜、周瑜は十分に勝ちぬいて、

でくると、こは弾いかに、城壁の上には、見馴れない旗や幟が、夜上は南郡の城に、呉の征旗を高々と掲げんものと、壕の辺まで進ん意気すこぶる。旺に、程普をつれて、乱軍の中を縦横し、いでこの

そしてそこの高。櫓の上には、ひとりの武将が突っ立って、厳に明けの空に、翩翻と立ちならんでいる。

_

城下を見下していた。

,

「城頭に立つは、何者か」と、壕ぎわから大音にいうと、先も大音

に

と、城の上から答えた。り。――遅かりし周瑜都督、お気の毒ではあるが、引っ返し給え」り。――遅かりし周瑜都督、お気の毒ではあるが、引っ返し給え」「常山の趙。雲子龍、孔明の下知をうけて、すでにこの城を占領せ

周瑜は仰天して、空しく駒を返したが、すぐ甘寧をよんで荊州の

-31

城へ馳せ向け、また凌統をよんで、

「即刻、襄陽を奪い取れ」と、命じた。

――われ、孔明に出しぬかれたり!

り返そうと肚をきめたものだった。時を移さず、荊州、襄陽の二城を取って、その後に南郡の城を取局瑜の心中は、すこぶる穏やかでなかったのである。この上は、

ところが、たちまち、早馬が来て、

「荊州の城にもすでに張飛の手勢が入っている」と、告げた。

「げッ、何として?」と疑っているところへ、またまた、襄陽から

も早馬が飛んで来て、

城頭高く、玄徳の旗をひるがえしている」と、報らせてきた。「時すでに遅しです。襄陽城中には、関羽の軍がいっぱいに入って、

るや否や、すぐ曹仁の兵符(印章)を持たせて人を荊州に派し、(南周瑜が、その仔細を聞くと、こうであった。孔明は南郡の城を取

郡あやうし、すぐ救え)と云い送った。

測っていた孔明は、すぐ張飛を向けてそこを占領し、同時にまた、荊州城の守将は、兵符を信じて、すぐ救援に駈け出した。留守を

(われ今あやうし。呉の兵を外より破れ)と、いう檄である。

同様な手段で、襄陽へも人をやった。

いとまもなく、直ちに城を出で、荊州へ走った。 襄陽を守っていた夏侯惇も、曹仁の兵符を見ては、疑っている

た。かくて南郡、襄陽、荊州の三城は、血もみずに、孔明の一握にかねて孔明の命をうけていた関羽は、すぐ後を乗っ取ってしまっ

周瑜の驚きかたは、ひと通りや二通りではない。失神せんばかり

帰してしまったものである。

面色を変えて、

程普が、首を垂れていった。か」と、叫んだ。

りません。兵符は常に、陳矯が帯びていたものです」に旗の揚がるよりも先に、孔明に生擒られてしまったにちがいあ「孔明、すでに荊州を取る。荊州の城にいた魏の長史陳・矯は、城

聞くや否、周瑜は、

「――あっ」と床に仆れた。

※はこれ。ほう…は身が、にっつぎつ。 怒気を発したため、金瘡の口が破れたのだった。こんどは、計でいる。

ではない。ほんとに再発したものである。

周瑜はなお牙を噛んで、だが、人々の看護によって、ようやく蘇生の色をとりもどすと、

に!」と、罵った。 し孔明を殺さずんば、いつの日かこの心は安んずべき。見よ、今 32-

「だから、だからおれは疾くから、孔明を危険視していたのだ。

「いかがです。ご気分は」と、見舞った。そしてひたすら南郡の奪回を策していると、一日、魯粛が来て、

魯粛は、はいちど呉へ帰って少し養生しようと思う」と、語った。すると、「近々のうち、玄徳、孔明と一戦を決し、かの南郡を手に入れた上

周瑜はもう寝てなどいなかった。意気軒昂を示して、

「無用です、無用無用」と、首を振った。

九

魯粛はいう。

呉君孫権には、先頃からまた、合肥方面を攻めておらるる由。 のものは仆しておりません。成敗の分れ目はこれからです。一面に、 「いま、曹操と戦って赤壁に大 捷を得たといっても、まだ曹操そ

れは曹操にとって、もっとも乗ずべき機会となりましょう」 ―そんな態勢をもって、ここでまたも、玄徳と戦端を開いたら、こ

周瑜にも、その不利は、当然分っていたが、彼のやみ難い感情が、

頑として、いうのであった。 「わが大軍が、赤壁に魏を打破るためには、いかに莫大なる兵力と

軍費の犠牲を払ったか知れない。然るに、その戦果たる荊州地方を 何もせぬ玄徳に横奪りされて黙止しておられるか」

「ごもっともです。それがしが玄徳に対面して、驚と、道理を説い

てみましょう」 魯粛はすぐ南郡城へ使いした。その姿を見るや、城頭のいただき

から、守将趙雲が声をかけた。 「呉の粛 公。 何しに見えられたか」

「備公にお目にかからんがために_ 一皇 叔には、荊州の城においで遊ばされる。

ぜひなく、彼はその足で、荊州へ急いだ。

玄徳色にいろどられている。――ああと、魯粛は嘆ぜさるを得なか 荊州の城を訪うてみると、旌旗も軍隊も街の声も、今はすべて

「やあ、お久しゅうございました」

つやすぐ、魯粛は彼を責めた。 迎えたのは、孔明である。礼儀はきわめて篤い。賓主の座をわか

のご主君備公であったろうと思う。それをわが呉の国が莫大な銭粮 「曹軍百万の南征で、第一に擒人となるものは、おそらくあなた

を費やし、兵馬大船を動員して、必死に当ったればこそ、彼を撃破 に属していいものと考えられるが、ご辺はどう思われるか」 し、お互いに難なきを得ました。その戦果として、荊州は当然、呉

孔明は、笑って、

「これは異なおことば。荊州は荊州の主権のもので、

もなし、呉に属さねばならぬ理由もない国です」

「とは、なぜか」

もとこれ同宗の家系、叔父甥のあいだがら、それを扶けて、この その嫡子はなおわが劉皇叔のもとに養われている。皇叔と劉琦とは、 「荊州の主、劉善表は死なれた。しかし遺孤の劉琦」

国を復興するに、何の不道理がありましょうや」 魯粛は、ぎぐとした。

ここまでの深謀が孔明にあったとは、さすがの彼も気づかなかっ

よも、この荊州の主 としてはおられまい」 「いや。……その劉琦は、たしか江夏の城にいると聞いておる。

孔明は、左右の従者に向って、

「――賓客には、お疑いとみえる。埼君をこれへ」と、小声で命

琦である。

に取られて、数歩前に歩いて客に立礼した。見ると、まぎれなき劉

やがて後ろの屏風が開くと、弱々しい貴公子が、左右の手を侍臣

「ご病中なれば、失礼遊ばされよ」

は、黙然と首をたれてしまう。孔明はなおいった。 孔明のことばに、琦君は、すぐ屏をふさいで奥へかくれた。魯粛

「琦君、一日あれば、一日荊州の主です。あのご病弱ゆえ、もし夭折。

されるようなご不幸があれば、また別ですが」

還し給え」 「では、もし劉琦が世を辞し給う日となったら、この荊州は、呉へ

「公論、明論。それなら誰も異論を立てるものはありますまい」 それから大いに馳走を出して歓待したが、魯粛は心もそぞろに、

帰りを急ぎ、すぐ周癒に会って仔細を話した。 「――長いことはありません。劉琦の血色をみるに、近々、危篤に

おちいりましょう。ここしばらく」

総軍みな荊州を捨てて柴桑まで引揚げろ、という軍令であった。 と、なだめているところへ、折も折、呉主孫権から早馬が来て、

国から持てる国へと、その面目を一新しかけてきた機運を迎えて、 荊 州、襄 陽、南郡三ヵ所の城を一挙に収めて、けいしゅう じょうよう

玄徳は

「ここでよい気になってはならぬ――」と、大いに自分を慎んだ。

「売先生」

「何ですか」

長久の策を思わねばならんと考えるが」 先生の計一つで、余りにやすやすとわが手に落ちたが、それだけに 「労せずして取った物は、また去ることも易しとか。三ヵ所の城は、

-34-

「ごもっとものお言葉には似ておりますが、決して然らずです。三

生れたもので、やすやすと転げこんで来たのではありません」 「でも、一戦も交えず、一兵も損せずに、この中央にわが所を得た

ヵ所の城が一挙にお手に入ったのも、実にわが君が多年の辛苦から

のは、余りに好運すぎる」

この孔明ひとりでも、今日、お味方の内にはいなかったでしょう」 のです。はやい話が、君にその積徳とご努力が過去になかったら、 「ご謙遜です。みな君の御徳と、積年の労苦がここに結集したも 「では先生、どうかさらに、玄徳が労苦をかさね、徳を積んでゆく

長久の計をさずけて欲しい」

にそれを要としましょう 「人です。すべては人にあります。領地を拡大されるごとに、さら

「襄」陽宜城の人で、馬良、 字 を季常という、この者の兄弟五人じょうようぎじょう はりょう あざな きじょう この者の兄弟五人「荊、襄の地に、なお遺賢がいるだろうか」

馬良はもっとも逸材で、その弟の馬謖も軍書を明らかに究め、万 は、みな才名高く、馬氏の五常と世間からいわれていますが、中で

夫不当の武人です」

「召したら来るだろうか」 | 幕賓の伊籍は親しいと聞いております。伊籍から迎えさせては

如何です」

一そうしよう」

早速、玄徳は、伊籍に諮って、迎えの使いをやった。

馬氏の五常、白眉を良しと、世間に評があった。 馬良はやがて城へ来た。雪を置いたように眉の白い人であった。

玄徳は、彼にたずねた。

て、ここに君臨したものだが、この先の計は、どうしたが最も良い 「御身はこの地方の国情には詳しかろう。わしは近頃、三城を占め

われます」 を根本に持って、あなたは南の四郡を伐り取ったがよろしいかと思 仁徳と公明なご処置に随喜して懐きます。――それを強味に、それ 君を荊州の刺史に封じておあげなさい。人心はみな、あなたのご の荊州の城に置かれて、旧臣をよび迎え、また都へ表を上せて、琦 「やはり劉琦君をお立てになることでしょう。ご病体ですからこ

「その四郡の現状は 武陵には太守金旋があり、長沙には韓玄、桂陽には趙 範、ジリュラ

> 零一陵には劉度などが、おのおの地盤を占めております。この地方 は総じて、魚米の運輸よろしく、地も中原に似て、肥沃です。も

って長久を計るに足りましょう」

「それへ攻め入るには」

思います。要するに、兵の進路は流れる水です。水の行くところ、 しょう。次に桂陽、武陵と取って、長沙へ進攻するのが自然かと 「湘、江の西、零。陵(湖南省・零陵)から手をつけるのが順序でいまうこう

自然の兵路といえるでしょう」

異論はなかった。 賢者の言は、みな一つだった。玄徳は自信を得た。味方の誰にも

建安十三年の冬、彼の部下一万五千は、南四郡の征途に上った。 趙雲は後陣につく。

もちろん玄徳、孔明はその中軍にあった。

この時も、関羽は留守をいいつかり、あとに残って、荊州の守り 35

を命ぜられた。

戦革の世紀にあっては、どこの一郡一国であろうと、この世紀のサピホヤン 外に安眠をむさぼっていることはできなかったのである。 玄徳の軍来る! ――の報は、たちまち零一陵を震駭せしめた。

零陵の太守劉度は、嫡子の劉延をよんで、

「いかに玄徳を防ぐか」を、相談した。 父の顔色には怯えが見えている。劉延は切歯して、

中にも、 「関羽、張飛などの名がものものしく鳴り響いていますが、 、邢道栄があるではありませんか」と、励ました。 わが家

「邢道栄ならそれに当り得るだろうか」

傑ですし、胸中の武芸もまた、いにしえの廉頗、李牧に優るともすまい。つねに重さ六十斤の大、鉞を自由に使うという無双な豪 劣るものではありません。日頃から豪勇の士を何のために養ってお 「彼ならば、関羽、張飛の首を取るのも、さしたる難事ではありま

て、城外三十里に陣取った。 劉延は、そういって父に一万騎を乞い、その邢道栄を先陣に立て

かれるのですか」

玄軍一万五千は、すでにこの辺まで殺到した。漠々の戦塵はこ

こに揚り、刻一刻、その領域は侵された。

「反国の賊、流離の暴軍、なにゆえ、わが境を侵すか」

の大鉞は、すでに鮮血に塗られていた。 乱軍の中へ馬を出し、邢道栄は大音に云って迫った。有名なる彼

物が、頭に綸巾をいただき、身には鶴、氅を着、手に白羽扇を持来た。見ればその上に、年まだ二十八、九としか思われぬ端麗な人 らしく、邢道栄が悍馬の脚を不意に止めると、車上の人は、手の って、悠然と乗っている。——何かしらぎょッとしたものを受けた すると、彼の前に、一輛の四輪車が、埃をあげて押し出されて

れ南陽の諸 葛 亮孔明である。聞きも及ばずや、さきに曹操が百万 「それへ来たのは、鉞をよく振るとかいう零陵の小人か。われはこ

白羽扇をあげてさしまねきながら

の軍勢も、この孔明が少しばかりの計を用うるや、たちまち生きて

するものぞ。すみやかに降参して、民の難を少なくし、身の生命帰る者はひとりもない有様であった。汝ら、湖南の草民ずれが、何 をひろえ」

「わははは。聞き及ぶ孔明とかいう小利巧者は貴様だったか。青二

力だ。小賢しいわれこそ顔、片腹いたい」力だ。小賢しいわれこそ顔、片腹いたいし 嘔吐が出る。赤壁で曹操を破ったものは、呉の周瑜の智とその兵へ

ど 才の分際で、戦場に四輪車を用うるなどという容態振りからして

躍らせてきた。 喚き返すやいな、大鉞を頭上にふりかぶり、悍馬の足を、ぱっと

を見せて、逃げだしたのである。進むにも退くにも、それは大勢の 孔明の四輪車は、たちまち、ぐわらぐわらッと一廻転した。後ろ

力者が押し、そして無数の刀槍でまわりを守り固めて行く。

邢道栄は、追いかけた。「待てッ」 車は渦巻く味方をかき分けて深く逃げこみ、やがて柵門の中へ駈

け入ってしまった。 「孔明孔明。首をおいて行け」

が、むくむくと此方へうごいてきた。その真先に馬を躍らしてきた いた。すると、山の腰に黄旗を群れ立てて、じっとしていた一部隊 し、いつか柵門もこえて、なお彼方此方、四輪車の行方をさがして 一人の大将は、偉大な矛を横たえて、 邢道栄はあきらめない。大波を割るように、鉞の下に、敵兵を睥睨

わが事。おのれは果報者だぞ、おれの手にかかるとは」 「劉皇叔のもとに、人ありと知られたる、燕人張飛とは、 と、雷のようにかかって来た。 すなわち

「何をっ。――この鉞が目に見えぬか」

尺の大矛と、六十斤の鉞では得物において互角だったが、力量にか けて邢道栄は張飛に及ばぬこと遠かった。 邢道栄は、自信満々、大きな表情をしてそれを迎えたが、一丈八

「かなわん」と、見きりをつけて、大鉞は逃げ出した。ところが、

「常山の趙 雲子龍とはそれがしなり。道栄っ、無用の鉞を地に捨その先へ迫って、また一名の強敵が、彼の道へ立ちふさがった。

=

てよ

趙雲はすぐ彼を縛りあげて、本陣へ引っ立てた。邢道栄は、馬を下りた。馬を下りることは、降参を意味する。

玄徳は、ひと目見て、

「どうだ、汝の手で、劉・延を生捕ってくれば、助命はもちろん、「斬れ」と、いったが、孔明はそれを止めて、邢道栄にこう告げた。

「いと易いこと。この縄目を解いて、それがしを放ち帰して下さる重く用いてつかわすが」

「しかし、どういう方法で、劉延を生捕るか」ならば――」

その父なる太守劉度も、ご陣門に降ってくるにきまっておる」応して、かならず劉延を擒人としてみせます。劉延が捕われれば、「夜を待って、こよい劉延の陣へ攻め入り給え。それがし内より内

は無用である。早く首を刎ねられよ」と、重ねていった。「詐言はおのずから色にあらわれる。軍師、こんな者を用いるの傍らで玄徳は聞いていたが、彼の口うらの軽々しいのを察して、

が、真の大将たるものの任です。よろしく彼の計にしたがい、今夜も観どころがある。有能はこれを惜しみ、努めてこれを生かすこと「いやいや、私が観るに、邢道栄の言に嘘はないようです。人物に孔明はなお、そのことばに反いて、顔を横に振りながら、

のことを決行しましょう」

命びろいをして、邗道栄は床方の陣へ兆げ帚り、すぐ別即座に、その縄を解いて、彼は邢道栄を放してやった。

命びろいをして、邢道栄は味方の陣へ逃げ帰り、すぐ劉延の前へ

出て、

ず、奇防策を採った。 戦で、玄徳軍の当るべからざる手並を見ているので、正防法によら「すわ、油断ならじ」と、劉延は防ぎにかかった。しかし昼間の合「今夜が決戦の分れ目に相成ろう」と、仔細を告げた。

に炬火をもち、喊声をあげ、近づくやいな陣屋陣屋などへ火をかた。そして夜も二更の頃になると果たして、一団の軍勢が、手に手陣中の柵内には、旗ばかり立てて、兵はみなほかに埋伏してい

「来たぞ。引っ包め」

包んでこれを殲滅にかかった。劉延、邢道栄の兵は、あらぬ方角から二手に分れて殺到し、押し

寄手の兵は、隊を崩して、どっと逃げ退く。

十里の余も駈けた。 巻り、追い捲りて、勝ちに乗って、劉延、邢道栄は、それを追い捲り、追い捲りて、

、。 ても、それだけの兵で、後続も側面もなく、いわゆる軍の厚みがな――だが、案外、逃げた兵数は薄いのに気がついた。いくら追っ

「深入りすな」

劉延は、邢道栄を呼びとめた。そして、

「陣屋の火も消さねばならん。これだけ勝てば、まず充分。この辺

で引揚げよう」

「道栄道栄。どこをまごついているのだ。張飛ならこれにおるぞ」と、取って返した。その帰り途である。

隊は、逃げた敵とは全然士気を異にして、破竹のごとく、劉延、邢と、道の一傍らから殺一出してきた人影がある。それへつづく一

道栄の軍を中断して、不意をついた。

「や、や。さては敵にも、何か計があったか」

の火はもうあらかた消されていたが、その余燼の内から、あわてふためいて、彼らは自陣へ逃げこもうとした。すると、そ

「趙雲子龍。これにて、汝らの帰るを待てり」

逃げ戻ろうとした邢道栄は、ついにここで趙雲子龍の槍にかけられ、と、思わぬ一軍が、自分たちの陣中から現れたのみか、狼狽して

無残な死をとげてしまった。劉延も、生捕られた。

夜の白々明けには、孔明の四輪車の前に、劉延の父劉度もまた、

降伏を誓いに出ていた。

匹

玄徳、孔明は、轡をならべて、零一陵へ入城した。

加えて、さらに、桂陽(湖南省・榔県)へ進んだ。 前の太守劉度は、そのまま郡守としてここに置き、子の延は軍に

桂陽へ攻め寄せる日。

「たれがまず先陣するか」と、玄徳が諸将を見わたした。

り出て、「それがしが!」と、一人が手を挙げたとたんにすぐ、張飛もおど

「願わくは此方を!」と、希望した。

先に手を挙げたのは趙子龍であった。孔明は、

「趙雲の答えが少し早かった。早いほうに命ぜられては」

孔明が、迷っている玄徳へそういった。ところが、張飛は貴かな

l,

「返事の早いか遅いかで決めるなど、前例がありません。何故、て

まえをお用いなされぬか」

一争うな

孔明は、仕方なく前のことばを撤回した。そして、

「さらば、鬮をひけ」と責任をのがれた。

趙雲が「先」という字の鬮に当った。張飛の引いたのは「後」で

ある。

「冥加、冥加

と趙雲はよろこび勇んだが、張飛は甚だよろこばない。なおまだ

くずぐず云っていたが、

「未練というものだぞ」と、玄徳に叱られて、ようやく陣列へすが

たを退いた。

趙雲は、手勢三千を申し受けた。孔明から、

「それで足りるか」

と念を押されて、

「もし敗戦したら軍罰をこうむりましょう」と、豪語した。

このことばを誓紙として、趙雲子龍は、一挙に桂陽城奪取に馳せ

向った。

わゆる力山を抜くの猛者だった。い、よく虎を手擒にするといわれ、もう一名は陳応と称して、いい、よく虎を手擒にするといわれ、もう一名は陳応と称して、い桂陽城には、世に聞えた二人の勇将がいた。ひとりは鮑 龍とい

安泰を縋ろうではないか」(兵を作る日のいとまもない。しかず、早く降参して、せめて旧領の「いま、玄徳の軍を見てからでは、もう防塁を築くことも、強馬精

太守の趙、範は、すこぶる弱気だった。それを叱咤して、

20

「かいなきことを。宣うな。藩中に人なきものならいざ知らず――」

強硬に突っ張っていたのは前に掲げた鮑龍、 陳応の二将であ

「敵の劉玄徳は、天子の皇叔なりなどと僭称していますが、事実は

った。

張飛、また不逞の暴勇のみ、何を恐れて、桂城の誇りを、自ら彼ら 辺土の小民、その生い立ちは履売りの子に過ぎません。 関羽、

の足もとへ放擲なさろうとしますか」 「でも、これへ向って来ると聞く趙雲子龍は、かつて当陽の長坂坡はです。これへ向って来ると聞く趙雲子龍は、かつて当陽の長坂坡は

で、曹軍百万の中を駈け破った勇者ではないか」

「その趙雲と、この陳応と、いずれが真の勇者であるか、とくと見

届けてから降参しても遅くはありますまい」

非常な自信である。

城外に陣を展き、 太守趙範も、やむなく抗戦ときめた。陳応は四千騎をひっさげて、

「破れるものなら破ってみよ」と、強烈な抗戦意志を示した。

寄手は近づいた。

両軍接戦となるや、 趙雲子龍は馬おどらせて、敵将陳応に呼び

かけ、

といった。 こに安民の兵馬をすすめ給う。矛を投げ、城門をひらいて迎えよ」 「劉皇叔。さきに世を去り給いし劉表の公子琦君をたすけて、こ

陳応はあざ笑って、

へ行って、丞相のお履でも揃えないか」と、からかった。 「われわれが主と仰ぐは、曹丞相よりほかはない。汝らはなぜ許都

> 鎌槍とでもいうような凄い打ち物である。 この陳応という者は、飛叉と称する武器を良く使う。二股の大

だが、趙雲に向っては、その大道具も児戯に見えた。

馬と馬を駈け合わせて戦うこと十数合。もう陳応は逃げ出してい

て、飛叉を投げつけた。趙雲は、それを片手に受けて、 「口ほどでもないやつ」と、追いかけると、陳応は、何をっと喚い

「返すぞ」と、とっさに投げ返した。

陳応の馬が、学立ちになった。趙雲は猿臂をのばして、 その襟

がみを引っつかみ、陣中へ持ち帰って訓戒を与えた。 「およそ喧嘩をするにも、相手を見てするがいい。汝らのたのむ兵

力と、劉皇叔の精鋭とは、ちょうど今日のおれと貴様との闘いみた く太守趙一範にも告げるがいい。何も求めて滅亡するにはあたるま いなものだ。今日のところは、放してやるから、城中へ戻って、よ

と陳応は野鼠のように城へ逃げ帰った。

太守の趙範は

へ追い出してしまった後、あらためて趙雲子龍へ、降参を申し入れ 「それ見たことか」と、初めに強がった陳応をかえって憎み、城外

趙雲は満足して、この従順な降将へ、上 賓の礼を与え、さらに

酒など出してもてなした。

趙範は、途方もなく喜悦して、

はきっと一家の者だったにちがいない。どうか長く一族の好誼を「将軍とてまえとは、同じ趙氏ですな。同姓であるからには、先祖

むすんで下さい」

と、兄弟の盃を乞い、なお生れ年をたずねたりした。

生れた年月を繰ってみると、趙雲のほうが四ヵ月ほど早く生れて

いる。趙範は額をたたいて、

「じゃあ、貴方が兄だ」

と、もう独りぎめに決めて、嬉しいずくめに包まれたような顔し

て帰った。

次の日、書簡が来た。

実に美辞麗句で埋っている。

そんな物をよこさなくても、趙雲は堂々入城する予定であったか

ら、部下五十余騎を引率して、城内へ向った。 許都、襄陽、呉市などから較べれば、比較にならないほど規模

をたいて辻に出迎え、商戸や邸門はすべて道を掃いていた。城に入 の小さい地方の一城市だが、それでもこの日は、郡中の百姓みな香

ると、趙雲はすぐ、

「四門に札を揚げい」と命じた。

四民に対して、政令を示すことだった。これは、一城市を占領す

ると、例外なく行われることである。

終ると、趙範は、自ら迎えて、彼を招宴の席に導いた。

趙子龍は大いに酔った。 そこで降参の城将が、この後の従順を誓う。

「席をかえましょう。興もあらたまりますから」

客である。下へもおかないもてなしとはこの事だった。 後堂へ請じて、また佳肴芳盞をならべた。後堂の客は、

だいぶ酩酊して、

「もう帰る」と、趙子龍が云い出した頃である。まあまあと引き止

めているところへ、ぷーんと異薫が流れて来た。

「おや?」と、趙子龍が振り向いてみると、雪のような素絹をま

とった美人が楚々と入ってきて、

「お呼び遊ばしましたか」と、趙範へいった。

趙範はうなずいて、

趙姓だ。おちかづきをねがって、何かとおもてなしするがいい」と、 「ああ。こちらは、子龍将軍でいらっしゃる。しかもわが家と同じ

席へ倚らせた。

趙子龍は改まって、

「こちらはどなたですか」

と、その美貌に、眼を醒ましたように、趙範をかえりみて訊ねた。

「私の嫂です」

と、趙範はにやにや紹介した。

すると、趙子龍は、容をあらためて、ことばも丁寧に、

「それは知らなかった。召使いと思うて、つい」と、失礼を詫びた。 趙範は、傍らからその美人へ向って、お酌をせいとか、そこの隣

無用」と、疫病神でも払うように手を振ってばかりいるので、せりへ坐れとか、しきりに世話を焼きだしたが、趙子龍が、「無用、 っかくの美人もつまらなそうに、立ち去ってしまった。

「何だって。嫂ともあるお方を、侍婢かなんぞのように、軽々し趙雲は、その後で、趙範に咎めた。

く、客席へ出されるのか」

「いや、――実はこうです。そのわけというのは、彼女はまだ若い

年になります。もうしかるべき聟をとったらどうだと、それがしは に高名を取り、二つには先夫と氏姓の同じな者、三つには文武の才 すすめていますが、嫂には、三つの希望があるのです。一つは、世 のですが、てまえの兄にあたる良人に死別れ、寡となってから三

一うーむ」

ある人という贅沢なのぞみなので」

趙雲は、失笑をもらした。 けれど趙範は熱心に、

「いかがでしょう。将軍_

なにがだ」

っています。ねがわくは妻として将軍の室に入れて下さらんか」 れへ見えられる日を待っていたように、将軍のご人格とぴったり合 「態めの日頃の希望は、さながら将軍の世にあるを予知して、こ 聞くと、趙雲は、眼をいからして、いきなり拳をふりあげ、

「不埓者っ」

ぐわんと、趙範の横顔を、なぐりつけた。

「何をするのだ。無態な」と、喚いた。

趙範は、顔をかかえて、わっと、転がりながら、

趙雲は起ち上がって、

「無態もくそもあるか。汝のような者を蛆虫というのだ」

と、もう一つ蹴とばした。

「蛆虫とな。け、けしからんことを。 -慇懃に、かくの如く、

礼を厚うしているそれがしに、蛆虫とは

は女衒にも劣る畜生根性。 ぜげん 席へ侍らすさえ、言語道断だ。それをなお、此方の妻にすすめると 席へ侍らすさえ、言語道断だ。それをなお、此方の妻にすすめると 「人倫の道を知らぬやつは蛆虫にちがいなかろう。嫂をもって、客 -貴様の背骨はよほど曲がっている

な」と、さらに、趙範をぎゅうぎゅう踏みつけて、ぷいと、そこを

出てしまった。 趙範は起き上がって、うろうろしていたが、やがて陳応、

「いまいましい趙子龍めが、何処へ行ったか」と、肩で息してみせ

を呼んで、

二人は口を揃えて、

ありますまい。われわれ両名は、、許って、これから子龍の陣へ行 げた。そしてまた、「こうなったら徹底的に勝敗で事を決めるしか 「ここを出るや、馬に飛び乗って城外へ馳けて行きました」と、告

して下さい。さすれば、われわれ両名が、陣の中から呼応して彼奴 き、彼をなだめておりますから、太守には夜陰を待って、急に襲撃 の首を掻き取ってみせます」

しめし合わせて、二人は城外へ出て行った。

一隊の兵に、美酒財宝を持たせ、やがて趙子龍の陣所へ訪れた。

そして地上に拝伏して、

詫び入った。 で申しあげたわけではないと云っておりますから」と、額を叩いて 「どうか、主人の無礼は、幾重にもおゆるし下さい。まったく悪気

をやわらげ、土産の酒壺を開かせて、「きょうは、せっかくの所を、 酔い損ねてしまった。大いに酔い直そう」といって、使いの二人に も、大杯をすすめた。 趙子龍は、彼らの詐術であることを看破していたが、わざと面

七

まったらしい。趙雲のもてなしに乗って泥のように酔ってしまった。 趙雲は、頃をはかって、至極簡単に二人の首を斬り落した。そし 鮑龍のふたりは、「わが事成る」と、すっかり油断してし

て彼の部下らにも酒を振舞い、引出物を与えなどしておいて、 「此方の手勢について働けばよし、さもなくば、陳応、鮑龍のよう

にするがどうだ」

と、首を示して説いた。

した。趙雲はその夜のうちに、この五百名を先頭に立たせ、後から 五百の部下は、降伏して、たちまち趙雲の手勢に加わることを約

千余騎の本軍をひきいて、桂陽の城へ押し襲せた。

り信じていた。門を開けて、 城主趙範は、使いにやった鮑。龍、陳応が帰って来たものとばか

「首尾はどうだった?」と、味方の五百人へ訊ねた。 すると、その後から、趙子龍以下、千余の軍勢がなだれこんで来

たに玄徳の旗をひるがえし、 趙子龍は何の苦もなく、趙範を生捕りとし、城旗を蹴落して、新

たので、仰天したが、もう間に合わなかった。

「桂陽の占領はなり終んぬ」と、事の次第を、遥かなる玄徳、孔明

のところへ早馬した。

ひかせて、階下に引きすえ、一応、その口述を聞いた。 日を経て、玄徳は入城した。孔明は直ちに、虜、将趙範を趙雲に

趙範は、哀訴して、

としていたのです。ところが、てまえの「嫂」を子龍将軍に献じよ「もともとてまえは本心から降参してご麾下に加わることを光栄 うと申したのが、なぜか将軍の怒りにふれて、再度城を攻撃され、

それがしまで、このような縄目にかけられた次第でして、何ゆえの

罪科をもってこんな目に遭うのか諒解に苦しみます」

孔明はまた趙子龍に向って、

「美人といえば、愛さぬ人はないのに、御身はなぜ怒ったのか」と、

訊いてみた。 趙子龍はそれに答えた。

は、遠い以前、故郷で一面識があるものです。今、それがしがその 人の妻をもって妻としたら、世の人に唾されましょう。また、その 「そうです。私も美人は嫌いではありません。けれど、趙範の兄と

以上の諸点を考えては、いくら好きな美人であろうとそれがしの意思 早く驕りを示し人民の範たることを打ち忘れ、政治を怠りなどしなられています。 らかではありません。しかるにその翼臣たるそれがし輩が、いち さらに考えさせられたことは、わが君が、この荊州を領せられても、 婦人がふたたび嫁ぐときは、その婦人は貞節の美徳を失います。次 ん。すくなくも、ここに民望をつなぎ得ることはできません。—— まだ日は浅いということでした。新占領治下の民心は決してまだ安 ていたら、せっかく、わが君の大業もここに挫折するやも知れませ にはそれを拙者にすすめた趙範の意中もただ真偽のほどは知れず、

をとらえるには足りません」 温顔に笑みを含んで聞いていた玄徳は、そのとき側から口を開い

てまた、子龍にいった。

立たないようなことがあってはならん――と、それのみを憎れとし それがしは、唯それがしの武名が、髪の毛ほどでも、天下に名分が たのだから、その美人を娶って、溺れない程度に、そちの妻として も誰も非難するものはないだろう。玄徳が媒人してとらせようか」 「いや、お断りします。天下の美人、豈、一人に限りましょうや。 「――しかし、今はもうこの城も、わが旗の下に、確乎と占領され

ましょう。何で妻子がないからといって、武人たるものが、憂愁を抱き

だって。たことであったが、その時はわざと一片の恩賞をもって賞したに止かった。趙子龍こそ真に典型的な武人であると、後には人にも語っ玄徳も孔明も、黙然とふかくうなずいたまま、後は多くもいわな

黄忠の生

身に飾って、玄徳や孔明のそばに立ち、お行儀のよい並び大名としこのところ髀肉の嘆にたえないのは張飛であった。常に錦甲を

ているには適しない彼であった。

れがしに、欠伸をさせておく法はありますまい」「趙雲すら桂陽城を奪って、すでに一功を立てたのに、先輩たるそ

と暗に望んだ。 と、変に孔明へからんで、次の武陵城攻略には、ぜひ自分を―

し月が、つざいちぶつが口い、忿と押しい、「しかし、もしご辺に、不覚があった場合は」

「軍法にかけて、この首を、今後の見せしめに献じよう」孔明が、わざと危ぶむが如く、念を押すと、

張飛は、憤然、誓紙を書いて示した。

こういって、太守金旋をいさめたのは、城将のひとり鞏志といた張飛は、天下の虎将。――その軍に向って抗戦は無意味でしょう」「大漢の皇叔玄徳の名と仁義は、もうこの辺まで聞えています。ま武陵へ馳せ向った。

金旋は怒って、鞏志の首を斬ろうとした。「裏切者。さては敵に内通の心を抱いているな」

う者だった。

座に戦備をととのえて、城外二十里の外に防禦の陣を布いた。 人々が止めるので、その一命だけは助けてやったが、彼自身は即

旋はそれに蹴ちらされて、さんざんに敗走した。 張飛の戦法はほとんど暴力一方の驀進だった。 しかも無策な金

そして城中へ逃げてきたところ、楼門の上から鞏志が弓に矢をつ

がえて、

「城内の民衆は、みな自分の説に同和して、すでに玄徳へ降参のこ

と、呶鳴りながら、びゅうんと弦を反らした。

矢は、金旋の面にあたった。鞏志は、首を奪って、城門をひらき、

張飛を迎え入れて、元来、玄徳を景慕していた由を訴えた。

て、桂陽にいる玄徳のもとへ、その報告にやった。 張飛は、軍令を掲げて、諸民を安んじ、また鞏志に書簡を持たせ

由を報らせて、歓びをわけてやった。 とまず完遂したので、荊州に留守をしている関羽のところへもその 玄徳は、鞏志を、武陵の太守に任じ、ここに三郡一括の軍事もひ

すると、関羽からすぐ、返書がきて、

(張飛も趙雲も、おのおの一かどの働きをして実にうらやましく思

います。せめて関羽にも、長沙を攻略せよとの恩命があらば、ど んなに武人として本望か知れませんが……)

玄徳はすぐ、張飛を荊州へ返して、関羽と交代させた。そしてわ などと、独り留守城にいる無聊を綿々と訴えてきた。

ずか五百騎の兵を貸して、

「これで長沙へ行け」と、関羽の希望にこたえた。

沙へ向うべく準備していると、孔明が、 関羽は、もとより人数の多寡など問うていなかった。即日、長

> ろう」と告げた。 らに、三千騎をわが君に仰いで、大兵を以て当らなければ無理であ えに決して軽々しくは戦えない。もしご辺がそれに向うなれば、さ だろう。しかし、戦場に立てば、よく大刀を使い、鉄弓を引き、万 りおる。その人はもう年六十に近く、髪も髯も真っ白になっている が、久しく彼を扶け、よく長沙を今日まで経営して来た良将がひと を知ることが肝要です。長沙の太守韓玄は取るにも足らん人物だ 夫不当の勇がある。すなわち湖南の領 袖、黄 忠という――。ゆ 「羽将軍には注意するまでもないと思うが、戦うにはまず敵の実質

加勢も仰がず、たった五百騎を連れてその夜のうちに立ってしまっ しかし、何と思ったか、関羽は孔明の忠告も、耳に聞いただけで、

が君自ら後詰して、ひそかに力を添えてやる必要がありましょう」 と黄忠のために討死するやも知れません。それに小勢すぎます。わ 「関羽の心裡には、まだ赤壁以来の感傷が残っています。悪くする 44 孔明は、その後で、玄徳へ対して、こう注意した。

長沙へ急いだ。 げにもと、玄徳はうなずいて、すぐ関羽のあとから一軍を率いて、

彼が、目的地に着いた頃、すでに長沙の城市には、煙が揚ってい

関羽の手勢は、短兵急に外門を破り、すでに城内で市街戦を起し

ていた。 楊齢というのは、長沙の太守韓玄の股肱の臣で、防戦の指揮官

撃に屠ってしまったので、長沙の兵は潰乱してたちまち城地の第 を自分から買って出た大将だったが、この日、関羽がその楊齢を一

すると、城中からひとりの老将が、奔馬にまたがり、大刀をひっ

二門へ逃げこんでしまった。

さげて出現して来た。

関羽は、ひと目見るとすぐ、

と感じたので、さっと、彼の前をさえぎって、呼びかけた。 (さては、孔明が自分にいった黄 忠というのは、この老将だな)

「来る者は、黄忠ではないか」

「そうじゃ。汝は、関羽よな」

「然り。——その白髪首を所望に参った」

「猪口才であろう。まだ汝らのような駈出しの小僧に首を持って

行かれるほど、長沙の黄忠は老いぼれてはおらぬ」

彼の偃月の青龍刀も、黄忠の大刀に逆らわれては、如何とも敵 なるほど――と関羽も戦いに入ってから舌を巻いた。

の体へ触れることができなかった。

らそれを眺めていた太守韓玄は秘蔵の一臣を、ここで討たれては れている。しかも、なお勝負のつく色も見えなかったが、城の上か とも、あまりの見事さに、固唾をのんで見とれてしまったといわ この決戦は、実に堂々たる一騎打ちの演出であったとみえ、両軍

して急速度に城中へ駈けこむ兵にまじって、彼の馬もその影を没し 「退き鉦を打て、黄忠を退かせろ」と、高矢倉から叫び出した。 たちまち耳を打つ退き鉦の音に黄忠は、ぱっと馬をかえした。そ

味方の大事と心配し出して、

待ち給え」

かけた。

もまた馬をめぐらして二、三十合斬りむすんだが、 関羽は、追撃して、執拗に敵へ喰い下がった。ぜひなく、黄忠 隙を見て、濠の

橋を渡り越えた。

蹄は、なお橋を踏み鳴らして、しかも今度は、 「卑怯なり。名ある武将のする業か」と 辱 めながら、関羽の馬 前よりも近く、黄忠

の姿を、偃月刀の下に見おろしたのであった。

頭に下さなかった。 けれど、関羽は、折角、振りかぶった大青龍刀を、なぜか、敵の

そして、

といった。 「あら無残。早々、馬を乗り代えて、「快」く勝負を決せられよ」

危うくも、城壁の内へ駈けこんだ。この間にも、追えば追いつける ものを、関羽は彼方へ引っ返してしまった。 いて彼の乗馬が前脚を挫き折ってしまったためだった。 しかし、乗り代える馬もないので黄忠は味方の歩兵にまじって、 黄忠は、馬と一緒に、地上に転んでいたのである。何かにつまず

ぐいった。 太守韓玄は、冷や汗をながしていたらしく、

明日は、関羽を橋のあたりまでおびき寄せ、手練の矢をもって、彼奴 「きょうの不覚は、馬の不覚。汝の弓は、百度放って、百度あたる。

を射止めて見せてくれ」 と励まし、自分の乗馬の蘆毛を与えた。

夜が明けると、関羽はまた、手勢わずか五百ばかりだが、

城下へ迫って来た。

やがて昨日のように逃げ出した。そして橋の辺まで来ると、振りか 黄忠は、きょうも陣頭に姿をあらわし、関羽と激闘を交えたが、

かった。 えって弓の弦をぶんと鳴らした。関羽は身をすぼめたが、矢はこな

弦は空鳴りしただけだった。 橋を越えると、黄忠はまた、弓を引きしぼった。しかし今度も、

と、見事に射止めていた。 本の矢が飛んできた。そしてその矢は、関羽の 盛 の纓を、ぷつん ところが、三度目には、ひょうッと矢うなりがして、まさしく一

Ξ

を退げてしまった。 をへだてて柳の葉を射たという――それにも勝るものだと思った。 「さては、きのうのわが情けを、今日の矢で返したものか」 そうさとったので、関羽は、なおさら舌をふるって、その日は兵 関羽も胆を寒うした。黄忠の弓術は、いにしえの養由が、百歩

っ立てられていた。 一方の黄忠は、城中へもどるとすぐ、太守韓玄の前へ理不尽に引

関羽を射止め得たのに、汝は、弓の弦ばかり鳴らして、射たと見せ 「城主たるわしに眼がないと思っているのか。三日の間、わしは高櫓。 から合戦を見ていたのだぞ。然るに、きょうの戦は何事だ。射れば 韓玄はもってのほかの立腹だ。声を励まして、黄忠を罵り辱めた。

って引こうとするのだろう」

内通しているにちがいない。恩知らずめ。その弓は、やがて主へ向 かけ、故意に助けたのではないか。言語道断。察するところ、敵と

「ああ、ご主君!」

黄忠は、涙をたれながら、なにか絶叫した――。早口に、その理

由を、云い開こうとしたのである。

とどなる。諸将が見かねて、哀訴嘆願をこころみたが、 だが、耳をかす韓玄ではなかった。即刻、刑場へ曳き出して斬れ

や吏員までがかなしんでいたが、たちまち、その執行直前に、周囲 「うるさいっ。やかましい。諫めるものは同罪だぞ」と、いう始末。 長沙の名将黄将軍も、今は刑場の鬼と化すかと、刑にあたる武士

の柵を蹴破って、躍りこんで来た壮士がある。

に似ていた。生れは義陽。魏延、「字」は文「長という。この人、面は丹で塗った。棗の如く、目は朗らかにして巨きな星

落の後、長沙に身を寄せていたものである。 もと荊州の劉表に仕え、一方の旗頭に推されていたが、 荊州没

ろ他国へ逐いやってしまいたいような扱いをしていたので、 しかし、日頃から韓玄は、彼の偉材を、かえって忌み嫌い、むし

引き具して、城中の奥へ駈け入り、太守韓玄の首を斬って、関羽の から脱してしまった。それからわずか半刻の後には、自分の部下を はひそかに、今日の機会を、待っていたものと思われる。 「あれよ」と、人々のさわぐまに、彼は、黄忠の身を攫って、刑場

陣門へ降っていた。 「さらば、疾く」

と、関羽は一挙に長沙の城へ入って、城頭に勝旗をかかげ、城下

一円に軍政の令を布いた。 「黄忠は、どうしているか」

その後ですぐ訊ねると、魏延は、

自分の邸へ駈けこんで行きました」 「戦は熄んだ。では、迎えをやろう」

「それがしが韓玄を斬るべく奥へ向った時、眼をふさぎ耳を抑えて、

と、再三、関羽から使いを出したが、黄忠は病に托して出てこな

かかるうちに玄徳は、関羽の早馬をうけて、

「さすがは」と、彼の功を賞しながら、孔明と馬をならべて、長沙

の市門へ急いでいた。

下がって啼くこと三度、北から南の空へ飛び去った。 その途中、先頭に立てていた青い軍旗の上に、一羽の 鴉 が舞い

「いや、吉兆です」と、孔明は、衣の下で何か指をくりながら、「ト「先生。何か凶兆ではないでしょうか」と、孔明に訊くと、

をたてて答えた。

果たせるかな、玄徳は、黄忠、魏延のことを、間もなく、出迎えをもたらして来たものです。かならず何かいい事がありましょう」「これは、長沙の陥落と共に、良将を獲たことを祝福して、鴉が天告

かならない。自分が行って迎えてこよう」「――病に托して門を出ないのは、黄忠の旧主にたいする忠誠にほの関羽から聞いた。

旧主韓玄の屍を乞うて、城の東へ手あつく葬った。の礼に感じて、ついに黄忠も、私邸の門をひらいて降参し、同時に、と、玄徳は、直ちに駕を命じて、黄忠の閉ざせる門を訪れた。そ

兀

玄徳は、即日、法三章を掲げて、広く新領土の民へ布告した。

一、不忠不孝の者斬る

一、盗む者斬る

一、姦する者斬る

た。

関羽がひとりの壮士を携えて出頭したのは、そうした繁忙の中で

「だれだ、その者は」あった。

玄徳がたずねると、関羽は、自分の傍らに拝跪礼をとっている

男へ向って、

「劉皇叔でいらせられる。ご挨拶を申し上げなさい」と、いっ!ッッッラニラーロッッ゚

た。

きく鼻秀で、容貌見るべきものがある。男は、叉手の礼をしたまま、黙然と面をあげた。朱面黒眉唇大男は、叉手の礼をしたまま、黙然と面をあげた。朱面黒眉唇大

魏延の功にも、ご一言なりと下し給わらば有難うぞんじまする」「これはかねて、お耳に入れておいた魏延です。善政の初めに、

関羽のことばに、玄徳は、おおと膝を打って、

階の上に請じようとすると、突如、

「不義士っ。階を汚すなかれ!」

勃然と叱った者がある。

あっと驚いて、その人を見ると、孔明だった。孔明はまた玄徳へ

向って直言した。

といえますが、天下の法を道に照らしては、免し難き不忠不義です。たちまち殺してご麾下に馳せ参ず。――これ味方にとっては大幸も、主君とたのみ、仰いでいた人です。それを、一朝の変に際し、の仇あるに非ず。かえって、一日でもその禄を食み、かりそめに「魏延に賞を賜うなど以てのほかです。彼、もとより韓玄とは、何

明がなければ、新領土の民も服しますまい」 君いまこの不仁の徒を見給い、これを斬って諸人に示すほどなご公

をさえぎって、
玄徳は、明らかに、その決断を欠いた。いやかえって、孔明の命、孔明は、武士を呼んで、即座に魏延を斬れと命じた。

「待て、待て」

すらしたのである。と、武士たちを制し、孔明をなだめて、魏延のために、命乞いを

「味方に功を寄せ、また降順をちかい、折角、わが麾下へひざまず 「味方に功を寄せ、また降順をちかい、折角、わが麾下へひざまず 「味方に功を寄せ、また降順をちかい、折角、わが麾下へひざまず

しておくことを忘れなかった。てしまったが、なおそれを免すにしても、こう彼自身の信念を注意玄徳の弁護は、まるで骨肉をかばうようだった。孔明は、沈黙し

をおかけ遊ばすものを、孔明とて、如何とも致し方はありません」よろしいかと存じたのでありますが、わが君がそれほどまで、ご不愍いま小功を挙げて、これを味方にするも、後々、かならず叛くに違隆起しています。これ謀叛人によくある相であります。ですから、「露骨にいいますと、今、私が魏延の相を観るに、後脳部に叛骨が「露骨にいいますと、今、私が魏延の相を観るに、後脳部に叛骨が

?……魏延、聞いたか。かならず今日のことを忘れずに、異心を慎

めよ

なわち長沙の太守として、少しも惜しむところがなかった。隠れていることを黄忠から耳にして、わざわざこれを捜し求め、す玄徳はまた、劉表の甥の劉 磐という者が、荊州滅亡の後、野に玄徳にやさしく諭されて、魏延はただ感泣に咽せていた。

ほどなく玄徳は、荊州へ引揚げた。

彼についてそこへ行かずに、身を転じて、玄徳の勢力に附属して魏の夏侯惇は、襄陽から追い落されて、樊城へ引籠った。の地盤はまだ狭小ながら初めて一礎石を据えたものといっていい。中漢九郡のうち、すでに四郡は彼の手に収められた。ここに玄徳

来る者も多かった。

賢士剣客の集まって来るもの日をおうて殖えていた。を慕って、たちまち、商賈や漁夫の家が市をなし、また四方からに軍需品や金銀を貯えて、北面魏をうかがい、南面呉にそなえた。風玄徳はまた北岸の要地油江口を公安と改めて、一城を築き、ここ

一方

ここの守りには魏の張善遼がたてこもっていた。さきに曹操がをもって、合淝の城(安徽省・肥)を攻めていた。呉侯孫権の直属として、赤壁の大勝後は、その余勢

う振わなかった。 赤壁に大焼した呉軍も、合淝を攻めにかかってからは、いっこが、焼いたででである。をいれた。

な猛将が城兵を督していたのである。寄手は連攻連襲をこころみたそれもそのはず張遼の副将にはなお李典、楽進という魏でも有名

くいらく、桑がらこ。「そのうちに食糧がなくなるだろう」と空だのみに恃んでいた。が、不落の合淝に当り疲れて城外五十里を遠巻きにし、

ところへ、魯粛が来た。

孫権が、馬を下りて、陣門に出迎えたので、

営中に入ると、孫権は、魯粛に向って、意識的にいった。「粛公は大へんな敬いをうけたものだ」と、諸兵みな驚いた。

「きょうは特に馬を下りて出迎えの礼をとった。この好遇は、

いさ

さか足下のなした赤壁の大功を 顕 すに足りたろうか」

魯粛は、首を振った。

「いうに足りません。その程度の表彰では」

孫権は、眼をみはって、

「では、どれ程に優遇したら、そちの功を 顕 すに足りるというの

か

「さればです」と、魯粛がいった。

え下されたら、魯粛の本望も初めて成れりというものでしょう」業を万代にし給い、そのとき安車蒲輪をもって、それがしをお迎「わが君が、一日も早く、九州のことごとくを統べ治めて、呉の帝

「そうか。いかにも!」

二人は手を打って、快笑した。

lin ういよければようよいっこ。 けれど魯粛はその後で、せっかく上機嫌な呉侯に、ちといやな報

それは、周瑜が金創の重態で仆れたことと、荊州、襄陽、告もしなければならなかった。

南郡

の三要地を、玄徳に取られたことの二つだった。

「いや、豪気な都督のことですから、間もなく、以前のお元気で恢「ふふむ……周瑜の容態は、再起もおぼつかない程か」

復されることとは思いますが……」

-49

人の大将が、うやうやしく、呉侯の前に書簡をおいて行った。ひら いてみると、張遼からの決戦状であった。 話しているところへ、今、合淝の城中から一書が来ましたと、一

呉の大軍は蠅か蛾か。 ているのであるか。 いったいこの城を取巻いて、何を求め

文辞は無礼を極め、甚だしく呉侯を 辱 めたものだった。孫権

赫怒して

「よしっ、その分ならば、わが真面目を見せてくれよう」

は、

と、翌早朝に陣門をひらいて、甲鎧燦爛と、自身先に立って旭

の下を打って出た。

となって押しよせて来た。 城からも、張遼をまん中に、 李典、楽進など主なる武者は、 総出

「呉侯、見参っ」

蹄に土を飛ばして、 と、張遼は一本槍に、 その巨物を目がけて行った。すると、馬

下司っ、ひかえろ」

であった。

と、一大喝しながら立ちふさがった者がある。呉の大将太史慈

せていない。 来仕えてきた譜代の大将であり、しかも武勇はまだ少しも老いを見 呉の太史慈といえばその名はかくれないものだった。呉祖孫堅以

て烈戦八十余合に及んだが、勝負は容易につかなかった。 魏の張遼とはけだし好敵手といってよかろう。双方、長鎗を交え

> 万人の仇を報ずるにも足るぞ。励めや、者ども」 まぎれもない。もしあの首一つ取れば、赤壁で討たれた味方八十三 「あれあれ、あれに黄金の 盔 をいただいたる者こそ、呉侯孫権に この間隙に、楽進、李典のふたりは、大音をあげて、

と下知して、自分たちもまっしぐらに喚きかかった。 孫権の身は、今や危うかった。電光一撃、李典の鎗が迫った時で

これなん呉の宋謙。 「さはさせじ!」と、敢然横合いからぶつかって行った者がある。

ある

それと見て、楽進が、

「邪魔なっ」

軍の崩れから、敵味方の怒濤に押され、ついにそのまま、引き分れ 宋謙が落ちる。とたんに、砂煙を後に、孫権は逃げ走っていた。 てしまった。 張 遼と太史慈とは、まだ火をちらして戦っていたが、この中 50-

と、間近から、鉄弓を射た。矢は宋謙の胸板を射抜く。どうっと、

孫権は逃げる途中、なお幾度か危機にさらされたが、 程普に救

われて、ようやく無事なるを得た。

ない。帰陣の後、涙をながして、 しかし、この日の敗戦が彼の心に大きな痛手を与えたことは争え

「宋謙を失ったか」と、痛哀してやまなかった。 長史張紘は、よい時と考えて、

ば、心を寒うしています。どうか匹夫の勇は抑えて、王覇の大計 にお心を用いて下さい」 ともすれば血気強暴にはやり給い、呉の諸君は、為にみな、 「こういう失敗は、良き教訓です。君はいま御年も壮なために、 しばし

と、諫めた。

孫権も、理に服して、

いらいいい事にいいた。「以後は慎む」と、打ちしおれていたが、翌日、太史慈が来てこう

いうことを耳に入れた。

と兄弟なのです。依って、密かに款を通じ、城中から火の手をあげ「それがしの部下に、戈定という者がいます。これが張遼の馬飼

て、張遼の首を取ってみせんといっております。で、それがしに今

宵五千騎をおかし下さい。宋謙が仇を取ってみせましょう」

孫権は、たちまち心をうごかして、

「その戈定はどこにいるのか」と、たずねた。

太史慈は答えて、

「もう城中にいるのです。昨日の合戦に、敵勢の中にまぎれて、難

なく城中に入りこんでいるわけで」

「では首尾はよいな」

「大丈夫です。こんどこそは」

太史慈は自信にみちていった。

孫権がこれを以て、昨日の敗辱をそそぐには好機おくべからざる

- 馬飼というのは、いわゆる馬廻り役の小者であろう。張遼の馬飼ものと乗り気になったことはいうまでもない。

き合っていた。と、太史慈の部下戈定とは、その晩、城中の人なき暗がりでささやと、太史慈の部下戈定とは、その晩、城中の人なき暗がりでささや

「ぬかるな。……丑の刻だぞ」

おめえは、謀叛人だ、裏切者だ、と呶鳴ってまわれ」「心得た。おれが、馬糧小屋をはじめ諸所へ火をつけて廻るから、

「火の手と共に、城外から太史慈様が攻めこむことになっている。「よしよし。おれも一緒になって火をつけながら、呶鳴りちらす」

「合点合点。忘れるものか。一代の出世の鍵は今夜にありだ」どさくさまぎれに、西門を内から開くことも忘れるなよ」

「……しっ。誰か来た」

ふたりは人の跫音に、あわてて左右にわかれてしまった。

いなかった。かかわらず、まだ部下に恩賞も頒たず、自分も甲の緒すら解いてかかわらず、まだ部下に恩賞も頒たず、自分も甲の緒すら解いて守将の張善遼は、きのうの城外戦で、大きな戦果をあげたにも

多少、不平の気を帯びた副将や部将たちは、暗に、彼の小心を嗤

った。

張遼は、答えた。将軍にはなぜいつまで、甲も解かず、兵に休息もさせないのですか」与「敵はきのうの大敗で、すでに遠く陣地を退げてしまったのに、遼

解かず、昼夜四交代の制をそのまま、かりそめにも防備の気をゆるではない。こよいはことに夜廻りをきびしくし、すべて、物具をん。およそ将たるものは、一勝一敗にいちいち喜憂したりするものともまだ勝っていない。いわんや全面的な勝敗はまだまだ先が知れ「勝ったのは、昨日のことで、今日はまだ勝っていない。明日のこ

ませぬように励まれよ」

「謀叛人があるぞっ」

「裏切者だ、裏切者だ」と、いう声が聞え出した。

張遼には、狼狽はなかった。すぐ寝所から出て城中を見廻った。

もうもうと何か煙っている。諸所にぼうと赤い火光も見える。

「おう、将軍ですか」

「城中に謀叛人が起ったようです。軽々しく外へお出にならんほう 楽進がそこへ駈けつけて来た。眼色を変えて、次にいった。

がよろしい」

「楽進か。何をあわてているのだ大丈夫、あわてるな」

「でも、あの喊声、あの火の手、由々しき騒動です」

だりに騒ぐ者は斬るぞと触れまわれ」 のほうがはるかに危険だ。――足下はすぐ城兵を取鎮めに行け。み するためにやった仕事だろう。それに乗せられて混乱する味方自身 た色ぐらいな声でしかない。おそらく、一両人の者が城中を攪乱 裏切者と呶鳴る声も、出火だ、謀叛人だと告げ廻っている声も、ふ 「いやいや、わしは最初から眼を醒ましていたからよく聞いていた。

飼の小者だった。 中攪乱を目論んでたちまち看破されてしまった張本人の戈定と馬 楽進が去ると間もなく、李典が二人の男を縛って連れてきた。城

「こやつか。斬れっ」

てその二人としめし合わせのあった寄手の一軍と、その首将太史慈二つの首は、無造作に斬って捨てられた。——とも知らず、かね

「しめた。火の手は上がった!」とばかり、城門へ殺到した。 「謀叛人があるぞ」 とっさに、この事あるをさとった張遼は、城兵を用いて、わざと、

から開かせた。 「裏切者だぞ」と、諸方で連呼させながら、西の一門を、故意に内

「――すわや」と、太史慈はよろこび勇んで、手勢の先頭に立って壕橋

が、轟然と四壁や石垣をゆるがしたと思うと、城の矢倉の陰や剣ヶ崎の陰や剣を駈け渡り、西門の中へどっと喚き込んだ。とたんに、一発の鉄砲

の上から、まるで滝のように矢が降りそそいで来た。

太史慈は、急に引返したが、一瞬のまに射立てられた矢は全身に

「あっ! しまった」

刺さってまるで針鼠のようになっていた。

の潤、州(江蘇省・鎮江市)あたりまで敗退するのやむなきに至ために、呉軍は大損害をこうむり、逆に、攻囲の陣を払って、南徐に ってしまった。 李典、楽進の輩は、この図にのって城中から大反撃に出た。

死に臨んで太史慈はこう叫んで逝ったという。 しかもまた、譜代の大将太史慈をも遂にこの陣で失ってしまった。

て、また会心なことがないでもなかった。ああ、しかしなかなか心 うばかりもない。しかし四十一年の生涯、呉祖以来三代の君に会う 52 「大丈夫たるもの、三尺の剣を帯びて、この中道に仆る。残念、

残りは多い」

玄徳の身辺に、一つの異変が生じた。それは、劉琦君

生来多病の劉琦は、ついに襄陽城中でまだ若いのに長逝した。 の死であった。 故劉 表の嫡子として、玄徳はあくまで琦君を立ててきたが、

孔明はその葬儀委員長の任を済まして、荊州へ帰ってくると、

「琦君の代りに、誰か、直ちに彼処の守りにおつかわし下さい」

「誰がよいか」

すぐ玄徳へ求めた。

「やはり関羽でしょうな」

孔明も心では、何といっても、関羽の人物を認めていた。

劉琦の死後、玄徳の胸には、一つの不安が醸されていた。呉の孫

権が待っていたとばかりに、荊州を返せといってくるにちがいない

州を返すと先に約束したことですから……が、ご心配には及びませ 「それはやがて必ずいってくることでしょうな。琦君が死んだら荊

給え」

「琦君の喪を弔うため、呉侯孫権のご名代に――」と称して、魯 孔明がそう慰めていると、それから二十日ばかり後、果たして、 ん。そのときは孔明がよろしきように応対します」

粛が使いに来た。

玄徳が設けの酒宴に迎えられて、四方山のはなしに時を移してい 魯粛は、城中の祭堂に、呉侯からの礼物を供え、悔みを述べた後、

たが、やがてこう切り出した。

「赤壁の大戦の後、わが呉侯から荊州の地を接収に参ったとき、

劉皇叔には、琦君の世にあるかぎりは荊州は故劉表の遺子のもので あると仰せられた。いまはその琦君も世を去ったことゆえ、もうこ

て、そのことも取りきめて参れと、主君から申しつけられて来たわ の荊州は、呉へお返しあるべきでしょう。――実は、弔慰をかね

けですが」

「いや、そのことは、いずれまたあらためて、談合しましょう」

「またとは、いつですか」

「まあ、ここは宴席ですから、国事は」

「後でもおよろしいが、かならず前約を違え給わぬように」

そう魯粛がしつこぐ念を押していると、突如、孔明がかたわらか 53

ら言葉に気概をこめて云った。

ぎるではないか。主君玄徳は、貴方を弔 問の賓客として、 懇 ろっていたら、今の仰せでは、あまりにも世の本義と事理に没常識す え、私が代って一応の道理を申しのべよう。心をしずめてよく聞き にもてなそうとしているのに、。露にいうを避けておいで遊ばすゆ 「粛公、あなただけは、呉の群臣の中でも、物の分ったお人かと思

れたのか、茫然、その顔を見まもっていた。 面色をあらためて孔明がそう云い出したので、 魯粛は、気をのま

祖、三尺の剣をひっさげて、義を宇内に唱え、仁を布き、四百余「天下は一人の天下にあらず、すなわち天下の人の天下である。高 年の基を建てられしも、末世現代にいたり、中央は逆臣の府、地

呉侯孫権の素姓をたずぬれば、もとこれ銭塘の小吏の子たるに過ぎ 故主劉表とは、血縁の間柄にて、わが君の義兄たり、いまその血の後裔におわし、現皇帝の皇叔にあたられる。いわんや、荊州の え、その義においては、救世の実を天地に誓う。すなわち中山靖王態にある。時に、わが君劉玄徳には、その血液に漢室の正脈をつた が孫権の安全な途というものである。——さらに、赤壁の大 捷が ず、なんら朝廷に功もなく、ただ呉祖の暴勇に依って、江東六郡八 統絶え、荊州に主なきにあたって、義弟とし義兄の業を承け継ぐ 誰の功によるか、という問題になれば、なお大いに議論があるが、 か。よろしく百歩の田地をわが君に乞うて、身を農夫と卑下るの の姓は劉、汝の主人の姓は孫、大漢は劉氏の天下たるを知らない 身のほど知らずも甚だしい。思え、君臣の統を論ずるなら、わが君 何の能もなきに、さらに、慾心を驕り、荊州をも呑まんとするは、 十一州を横奪し得たるにとどまる――。 今、 孫権その遺産をうけて、 に、何の不義、何の不可とする理由があろう。——ひるがえって、

それはいわぬことにする。敢て、ここではいわぬことにしておく」

その真理と雄弁のまえには、魯粛もさしうつ向いてしまうしかな 弁は水の流るる如く、理は炎の烈々たるに似ている。

「公論明白、そう仰っしゃられては、何の抗弁もありません。しか ---が、彼は恨むがごとく、孔明に答えた。

し、それでは先生も、あまりに利己主義だといわれても仕方があり

「なぜ、私が、利己主義か」

ますまい」

を一帆に乗せて呉の国へともない、切に、わが主孫権を説き、周瑜皇叔が曹操のため大敗をこうむって、当陽にやぶれ果てた後、先生 「思い給え」と、こんどは魯粛が攻勢になって――「その以前、

をうごかして、当時まだ保守的であった呉をして遂に全面的な出兵

を見るに至らしめたのはいったい誰でしたろうか」 「それは云うまでもなくあなただ」

す。先生には、私の立場には、何の同情もお持ちにならないとみえ は不信を問われ、おめおめ国へ帰ることもできぬ窮地におちていま 「その魯粛は、今日、ここに至って、主君には面目を失い、軍部に

る

りしているということにしよう。後日、どこか適当な領地を攻略し ばらく考えこんでいたが、やがて新たにこう提議した。 たら、その時、荊州は呉へ開け渡すということにして、証書を入れ 「では、あなたの面目をたてて、荊州はしばらくわが劉皇叔がお預 魯粛の温厚なる抗議には、孔明もやや気の毒を覚えたらしい。し

「どこの国を取って荊州をお返し下さるというのですか」 「中国はすでに、どこへ向っても、魏か呉かに接触する。ひそかに

たら、あなたも主君にお顔が立つであろう」

図るに、長江千里の流れ起るところ、西北の奥域、蜀の天地は、

まだ時代の外におかれているといっていい」

「では、蜀の国を取らんとお望みになっておられるので」 「然り。蜀を得たあかつきには、荊州をお返しするであろう」

孔明は、紙筆を取寄せて、玄徳にそれを進め促した。玄徳は黙々、

Ξ

呉侯への国際証書をしたためて、印章を加え、

「これでよいのか」と、孔明へ内示した。

の連帯では、公約にならないから、あなたもこれに名字をのせたが 孔明もまた筆をとって、保証人として連署した。だが、君臣一家

いいと求められて、魯粛も遂に妥協するほかなかった。 魯粛は、この一札を持って、呉へ帰った。途中、柴桑へ寄って、周瑜

の病状を見舞いがてら、逐一物語ると、

そのまま呉侯に復命されたら、たちどころに、貴公の首はあるまい。 孔明は狡猾の徒、玄徳は奸雄。こんな証文が何になろう。おそらく 「ああ、また貴公は、孔明に出し抜かれたのか、何たるお人好しだ。

いや、罪九族にも及ぶだろう」と、痛嘆した。

どうしようもない。途方に暮れるばかりだった。 もその点は甚だ心許なかったのである。——が、今となっては、 そういわれてみると、呉侯孫権の怒り方が眼に見えてくる。魯粛

ので、共に、腕をこまぬいて、 糧米三千石を借りて助けられたことがある。――それを思い出した 抱いた。それに彼は、むかし困窮していた頃、魯粛の田舎の家から 周瑜も、腹を立てたが、心では魯粛のお人好しに、充分、同情を

(どうしたらいいか?)と、懸命に思案した。

ふと、周瑜のあたまに浮んだのは、主君孫権の妹にあたる弓腰姫。

であった。――佳人年はまだ十六、七。

の粧いも凛々として、剣の、簪をむすび、腰にはつねに小弓を佩りながら、この呉妹は、生れつき剛毅で、武芸をこのみ、脂粉霓裳弓腰姫というのは、臣下がつけた綽名である。深窓の姫君であ とに一風変った女性であった。 き、その腰元たちもみな薙刀を持って室に侍しているというまこ

急に、周瑜は声を落して、魯粛に教えた。

「貴公は、呉侯のお妹君に、謁したことがありはしないか」

「一、二度、お目通りしましたが」

を 償 い、また荊州を取りかえすに、絶好な妙策であり、今がその 縁の媒人に、骨を折ってみられるがよい。――これは貴公の失敗 「あの姫を、玄徳へ、嫁がすように、ひとつここで貴公は、その婚

またなき機会だ」

「えっ。……呉侯の御妹君を玄徳へですって?」

鸚鵡がえしに呟きながら、魯粛は、唖然たる顔つきを示した。

周瑜は、笑って、

的に相談は運んで行けると思う」 んが、何もこれは決して、突飛な思いつきではない。きわめて合理 「いや、わしの云い方が唐突だから、貴公はびっくりしたかも知れ

-55-

入れることだってはばかられるではありませんか」 のお妹君を、彼の側室へなどと……第一そんな縁談を呉侯のお耳へ 「どうしてですか。玄徳には正室の甘夫人があるのに、まさか呉侯

葬儀も延ばしていたが、間者の報らせでは、荊州城には白い弔旗 人は、病に斃れてなくなっている。赤壁の戦やらその後の転戦で、 「いやいやそうではない。貴公はまだ知らんのだ。玄徳の正室甘夫

を掲げていたということだ」

「それは、劉琦の死を悼んでいたのではありませんか」

しいが、わしが聞いたのは、その以前だ。まだ劉琦も死なぬうちに、 「ちょうど、劉琦の死とつづいたので、そう思っている者もあるら

儀ではないだろう」 荊州の城外に新しい墳墓を築いていたというから、よもや劉琦の葬

立てて、同時に呉妹君との縁談を運ばせるにある」この際、呉国との友好を、より以上親密にせんという理由を表面にうてくれるのだ。すなわち、そういう斡旋に物馴れた人物をもって、に玄徳は孔明を用いて呉を謀ったから、こんどは此方から計を酬がきかん。もとよりこの婚儀は初めから謀略にきまっている。さきがきから。もとよりこの婚儀は初めから謀略にきまっている。さき「どうも貴公は、何事もすぐそのまま、真正直に考えるので融通

「さあ? どうでしょうか」

「何を不安な顔して喞たるるか」

いるお妹ですからな」「誰よりも、呉侯がご承知にならないでしょう。非常に可愛がって

機を計って、刺し殺してしまうのだから」
呉へ招いて、花嫁の顔を見せただけで済む。いずれ挙式の前後に、つれなさいというわけだ。玄徳に否やはあるまい。要するに、彼をばんさ。式典は呉で挙げればいい。婚儀の挙式がすんだら荊州へお「だから何も、婚儀は取りむすんでも、輿入れまでなさるには及

「もちろん、その目的もなく、何でこんな縁談が云い出せるものか」な」

しまずいと思いますが」 「それにしても、それがしから呉侯へおすすめ申すのは、どうも少一もちろん、その目的もなく、何でこんな縁談が云い出せるものか」

「いや、そう願えれば、非常に助かります」この周瑜から呉侯へ手紙を書くから」

ら預かって来た手紙も共に差出した。早速、呉侯孫権にまみえ、ありのままを復命し、また帰路、周瑜か早速、呉侯孫権にまみえ、ありのままを復命し、また帰路、周瑜か春粛は、彼の書簡を預かって、それを力に呉都へ帰った。そして

匹

「ウーム、なるほど、周瑜の考えは至極妙だ。これこそ天来の鬼謀-56周瑜からの書簡をひらいて一読し終ると、って、たちまち、魯粛の上へ大鉄槌でも下しそうだったが――次にはじめに、玄徳の証文を見たときは、案のじょう、孫権は苦りき

打って変って、と、しばらく、熟慮にふけり、やがて魯粛には、最初の気色とは

というものだろう」

と、ねぎらった。 「ご苦労だった。長途の旅、疲れたろう。きょうはまず休息せい」

表面は呉の修交使節としてであるが、目的は例の呉妹君の婚縁にその結果、呂範が、荊州へ使いに行くことにきまった。もちろん権を中心に、周瑜の献策が密々協議されたことはいうまでもない。数日の後、また召された。こんどは重臣呂範も同席だった。孫

してから、おもむろに縁談をもちかけた。 荊州に着いて、玄徳に会うと、呂範はまず両国友好の緊密を力説ある。

庭的には孤独ですが、さりとて、妻とわかれてから、肉まだ冷やか「ご親切は感謝します。仰せのとおり妻を、亡。うて、玄徳はいま家ため、ふたつの国家のため、若いご正室をおむかえになられては」していただきたいと思うてこれへ来たわけです。どうです、子孫ののご事情をうけたまわり、ちと差出がましいが、媒人の労をとら「実は、皇、叔の夫人甘氏には、疾く逝去られて、今ではお独りと

「それはそうでしょうが、家庭に妻のないのは、家屋に、梁」がなどんな労でも取りますから」 どんな労でも取りますから」 どんな労でも取りますから」 どんな労でも取りますから」 でに呉の国へお出で下さい。孫権は歓んでお迎えしましょうし、われます。もし皇叔にして、娶ってもいいというお心ならば、すみやかます。もし皇叔にして、娶ってもいいというお心ならば、すみやかは、一家の事を中道に塞して、人倫を廃さるるのです。――私がおいればそうでしょうが、家庭に妻のないのは、家屋に、梁」がなどんな労でも取りますから」

るか……」 おかにい出されたことですか。もしくはまた、呉侯のご内意でもあいら云い出されたことですか。もしくはまた、呉侯のご内意でもあ「そのことは、あなた一箇のお考えですか。それとも周瑜あたり玄徳はしばらく黙考していたが、やがてこう訊ねた。

ご意向をうかがってみるわけですが」けると、呉妹君のお名にもさわることですから、それで実はそっと、ような大事をおすすめできましょう。ただ素気ないお断りでもう「内々、呉侯の御命がなくて、どうして私一箇の思案などから、か

りませんか」
なお妙齢佳春の人という。私とは余りにふさわしくない配偶ではあく、鬢髪にはやや白いものを呈しておる。聞、説、呉侯のお妹は、徳も大丈夫を以て任じてはいるものの、年すでに五十、ご覧のごと「……いや、そうでしたか。希うてもない良縁ではありますが、玄

「いや、いや」

呂範は大きく手を振った。

気になれましょう。正直、まだ望んでもおりません」

というほどの月日も経っていないうちに、どうして後添えなど持つ

「年の近いとか少ないとか、そんな数合わせみたいな問題ではあり「年の近いとか少ないとか、そんな数合わせみたいな問題ではあり「年の近いとか少ないとか、そんな数合わせみたいな問題ではあり「年の近いとか少ないとか、そんな数合わせみたいな問題ではありませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませす。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、ぜひいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともあれ、世のいちど、呉の都へお遊びにお出まし下さいませず。ともないとかが、そんな数合わせみたいな問題ではあり

易占の算木が、吉か凶か、卦面の変爻を示していた。っと、主客のはなしを聞いていた。彼の「八の上には、いまたてたっと、主客のはなしを聞いていた。彼の「八の上には、いまたてたこの日、孔明は、そこに顔を見せず、次室の屏風の陰にいて、じ呂範はさすがこの使いに選ばれただけの才弁であった。

との可否、 呂範はひとまず客館へ退がり、玄徳の返辞を待つこととした。 その夜。玄徳は、孔明以下腹心の諸将をあつめて、呉妹を娶るこ また呉へ行くことの善悪などについて忌憚なき意見を

をたてて占ってみたところ、大吉の卦が出たというのである。 「それはぜひご承諾をお与えなさい。そして呉へお出でなさい」 率直にこう勧めたのは孔明であった。玄徳が呂範と対面中に、易

求めた。

ところでしょう。すみやかにご許容あって、呉の国に臨み、ご婚儀 「――のみならず、ここは彼の策に乗って、かえって我が策を成す

の典を挙げられるがよいかと思います」

「いや、これは周瑜の遠謀にちがいない」そういう孔明の説に対して、

「求めて虎口に入るようなものだ」

上、玄徳にも重視された問題は、折角いま克ち獲たところのこの荊 とか、それを危険なりとする議論ももとより百出したが、より以

どうしても呉との衝突を避けなければならないと考えられることだ 州地方の地盤を、次の躍進に入る段階まで無事に持ちこらえるには、

里を南下して呉へ向った。

随行の兵五百人を乗せて、荊州を離れ、長江の大河に入り、悠々千

な破滅に君を立ち到らせるような愚はしません」 「万事は、私の胸に、おまかせ下さい。決して、諸将が憂えるよう

孔明のことばに信頼して、諸臣も、

「では、異議なし」と、一致した。

使いをやってみることにした。呂範と共に、その意味で、呉に下っ 玄徳はなお危ぶんでいたが、孔明はそれを力づけて、まず答礼の

> て行った者は家中の孫乾であった。 月日を経て、その孫乾は、呉から帰ってきた。そしていうには、

大慶この上もないことだ。ぜひ、一日も早く参られるよう劉 皇 叔 を熱望しています。もし、この縁が結べれば、両国の平和のため、 していたらしいのです。それほどに、呉侯自身は、この縁談の成立 わが君が、すぐにでも呉へお出でになるものと、独り決めに、予期 にすすめて貰いたいと、ねんごろなご希望でした」 「呉侯は、それがしを見ると、落胆しました。理由は、呂範と共に、

とある。

胆を砕いた三ヵ条の。計は、この錦の嚢に秘めておいた。これを・86 は、着々と準備を運び、随員の大将をも、趙雲子龍に任命した。 くお供して参るがよいとくれぐれも諭した。 以て、孔明も共にわが君に随員しておるものと思い、惧るることな わまる時は、この嚢を開けて見るがいい。あらかじめ、自分が肝 建安十四年の冬の初め、華麗なる十艘の帆船は、玄徳、趙雲以下、 そして趙雲に、手ずから三つの錦嚢を授けた。呉へ行って事き けれどなお、玄徳には、迷っているふうがあった。しかし、孔明

い出し、その第一の嚢を開けてみた。すると中の一文には (まず、喬国 老を訪え)と、書いてあった。 呉の都門へ入るに先だって、趙雲は孔明から渡された錦の嚢を思

に、周瑜の夫人となっているので、今ではおのずからこの国の元 操までが想いを寄せていたといわれる姉妹の二美人――二喬の父で あるばかりでなく、その姉は、呉侯の先代孫策の室に入り、妹は現 喬家の老主といえば、隠れもない呉の名家である。かつては、曹

て正直律義なところから、なおさら上下の信望は篤く、老と目され、しかもそれに驕らず、彼自身の人がらは昔どおり至っ

喬国老、喬国老。

と、国宝的に一般から崇敬されている人だった。

――まずこの人を訪え。

せ、都街の人目をそばだたせながら、まず喬国老の家へいきなりせ、都街の人目をそばだたせながら、まず喬国老の家へいきなり船中の佳宝や物産を掲げ、また兵士をして、羊をひかせ、酒を担わという孔明が嚢。中の言にしたがって、玄徳と趙雲は、櫓諮詢って、

編えれます

香国老の邸では、この大賓をふいに迎えて、驚きと混雑に、ご

った返した。

初耳とみえて、喬国老は、桃のような血色を見せながら、眼をま「えっ。皇 叔と呉妹君との結婚の談があったのですって?」

「しかし、それは何にしても、大慶のいたりだ。この女(性なら皇ろくした。

城の宮中へは、今日ご着船の由を、お届け召されたかの」 叔の正室となされても、決して悔いはあるまい。……ところで、呉 59

玄徳が、上陸早々、ご訪問申したので、まだ呉城へは告げないと

いうと、

ちに命じては、玄徳の一行を心から歓待させて、「ともあれ、わし「それは、いかん、早速にも」と、すぐ家臣を走らせ、また家族た

殿中でも大奥でも、国老は出入自在である。呉侯の老母、呉夫人も一応、宮中へ伺ってくる」と白馬に乗って登城した。

に会って、すぐ慶びをのべた。

すると呉夫人は、けげんな顔をして、

「なんじゃと、あの玄徳が、権の妹を娶いにきたのですって。…

と、舌を鳴らした。…まああつかましい」

喬国老は、あわてて手を振りながら、

に望んだので、はるばる、玄徳も呉へやって来たわけじゃ」「ちがう、ちがう。呉侯のほうから呂範を婚姻の使いにやって、切

「嘘、嘘。国老はわらわをかついで笑おうと召さるの」

呉夫人は、まだ信じない顔で、家士の一名に、城下の見聞をい「ほんとです。嘘と思し召すならば、街へ人をやってごらんなさい」

いつけた。

その者は、街を見て帰ると、すぐ呉夫人の前へ来て語った。

劉皇叔には、この度、呉侯のお妹姫と婚礼を挙げるのじゃと、彼方ら、豚、酒、土産物の種々など、しきりに買物しながら、わが主の随員だの、五百の兵士は、物珍しげに、市中を見物して歩きなが「なるほど、大変に賑やかです。河口には十艘の美船が着き、玄徳

分で寄るとさわるとそのお噂ですよ」
此方で自慢半分にしゃべったものですから、ご城下ではもう慶祝気

呉夫人は、哭き出した。

ったまま走って行った。たちまち彼女は、わが子の呉侯孫権のいる閣へと、顔を袖でおお

「母公、どうなさいましたか」

「おお権か。いかに老いても、わらわは御身の母ですぞ」

「何を仰っしゃいます、今さら」

「それ程、親を親と思うなら、なぜわらわに無断で、女子の大事」(イタイ)」、リステン・マー」

な生涯を決めました」

「わけが分りません。なんのことですか、いったい」

よ、彼女はわらわの子。玄徳へ嫁がすことなどいつ許しましたか」「それその通り、わらわを「偽。こうとするではないか。汝の妹にせ

「あっ。誰が、そんなことをお耳へ入れましたので」

「国老に訊いてご覧なさい」

と、母公は眼できめつけた。

「そう御母子のお仲で争うことはないでしょう。もう国中の人民呉夫人のうしろへ来て立っていた 喬 国老は、

いいかであり、も知っていることですから。わしもそのため、お慶びを申しあげに

来たわけじゃ」

と、うららかに胸を伸ばして万歳の意を表した。

孫権は、難一渋した顔いろで、

ば、荊州は難なく呉のものとなる。それゆえに、呂範をやって……」ん。 偽って婚礼と号し、玄徳をわが国へ呼び入れて、これを殺せを取らんには、またぞろおびただしい軍費と兵力を消費せねばなら「いや、そのことなら、実はすべて周瑜の謀略なのだ。いま荊州

云いかける口をおさえて、

「聞く耳は持ちません!」

を誹った。と、呉夫人は前にも増して怒り出した。そして口を極めてその計と、呉夫人は前にも増して怒り出した。そして口を極めてその計

攻め取るぐらいなこともできず、わらわの最愛な息女を囮にして督として、八十一州の兵を閲、君の大禄をいただきながら、荊州を「憎や、周瑜ともある者が、匹夫にも劣る考え。おのれ、呉の大都

玄徳を誘い、騙し討ちに殺して事を成そうとは……ええ、なんた

に用いることは許しません」 る無能ぞ。わらわの生きている間は、決して彼女をそんな謀略の 囮

_

母公にとっては、孫権よりも、その妹のほうが、可愛くて可愛く

て、たまらないものらしいのである。

盲愛のほうが、遥かに遥かに大きかった。などという問題には興味もなかった。それよりは、ひとり息女のまた、なんといっても、このわがままな老女性には、敵国を謀る

なく、頭から老いの感傷と怒りをふるわせて、謀略と聞いては、それが呉国の為であるとかないとかなどは問題でだから、かりそめにも、その息女を生贄として遂げようとする

っておしまい!」
主家のむすめを売る憎い人間じゃ。わらわが命じる。すぐ周瑜を斬そんなことをもし周瑜がすすめたのなら、周瑜は自分の功のために、誤まらすようなことは、わらわの眼の黒いうちは断じてなりません。「なりません、なりません。誰がなんといおうと、むすめの一生を

という権
まぐであった。

(手がつけられない――)

と、痛嘆を嚥んでいるものの如く、孫権はただ老母の血相に黙然

としていた。

しかも喬国老までが母公と同意見で、

思うところを述べた。から、「いやしくも呉侯呉妹のご兄妹が、婚礼に事よせて、玄徳を殺したい天下を取ろうと、民心は服しまい。呉の国などと聞えては、たとい天下を取ろうと、民心は服しまい。呉の国「いやしくも呉侯呉妹のご兄妹が、婚礼に事よせて、玄徳を殺した

でまだ世の憂き風も知らぬあのむすめを、他国のそんな所へ、しか「聞けば、劉玄徳とやらは、年も五十路というではないか。なんところが、母公としては、それも気のすすまない顔で、

も後添えになどやれましょうぞ」

と、いってみたが、喬国老が、しきりに、

では明日、その玄徳を一目見て、もし自分の心にかなったら、むすすることは当りません」と、説いたので、やや心をうごかし、それ代の英雄、その気宇はまだ青春です。凡人なみに、年の数で彼を律あるし、年はとっても壮者をしのぐ若さの人もある。劉皇叔は、当「いやいや、よく考えてごらんあれ。年齢の少ない者にも老人が

場所は城一西の名刹甘露寺。――喬国老はいそいそ邸へ帰ると、国老とは、明日の対面の場所や時刻まできめてしまった。老母の意志には少しも逆らうことができない。その間に、母公と喬孫権はもとより孝心の篤い人なので、心のうちでは煩悶したが、

めの婿としてもいいが――と云い出した。

すぐ使いを出して、玄徳の客館へ旨を伝えにやった。

してよい機に」 客の輩を選りすぐって、三百人も隠しておけば大丈夫です。――そ 大将賈華へお命じなさい。甘露寺の回廊の陰に、屈強な力者や剣 「なにも、それならそれで、よろしいではありませんか。そっと、 「なにも、それならそれで、よろしいではありませんか。そっと、 事、志とちがってきたので、孫権は一夜煩悶したが、ひそかにこ -1-

「そんなことはないと思うが……もしそう見えたら……そうだな、「もし、母公のお心にかなったようなご容子のときは」すぐ殺ってくれ」玄徳と対面中に、母上が、彼の人物を見て心にそまぬようだったら、「む、む。絶好な場所だ。そうしよう。……だが呂範、もし母上と

時をおいて、母上のお気持が彼に対して変るまで待とう」「そんなことはないと思うが……もしそう見えたら……そうだな、

次の日――早朝

呂範は、媒人役として、当然、玄徳の客館へ、その日の迎えに

このは、日う、こうしこ、にきのたれ、こう出向いた。出向いた。

飾って、甘露寺へおもむいた。
玄徳は、細やかな鎧の上に、錦の、袍、を着、馬も鞍も華やかに

権をはじめ、母公、喬国老など、本堂から方丈に満ち満ちて待ちうの花聟として、一山の僧衆が数十人の大将と迎えに立ち、呉侯孫趙雲は、五百の兵をつれて、それに随行した。甘露寺では、国主

三

けていた。

った。「さすがは」と、一見して、呉侯孫権も、畏敬の念を、禁じ得なか

ひと目見て、孫権以上、彼に傾倒したのは母公であった。争えないものは、人間と人間との接触による相互の感情である。

うか」「どうです。人物でしょう。こんなよい婿が求めたってありましょ「どうです。人物でしょう。こんなよい婿が求めたってありましょその喜悦のいろをうかがうと、喬国老は、母公へささやいた。

て、

を圧しつぶして、玄徳に対して起る尊敬や畏れを強いて戒めていを圧しつぶして、玄徳に対して起る尊敬や畏れを強いて戒めている。孫権はわれとわが心母公はただもうほくほく。慶びぬいている。孫権はわれとわが心

ばかりじゃ、心おきなく杯をあげられい。喬老、そなたも、佳賓に「さあ、くつろぎましょう。婿君よ、威儀いかめしいものの、内輪

おすすめ申しあげて賜も」

と、玄徳のうしろに屹立している武将に眼をそそいで、「「なたる奏楽は満堂の酔をしてさらに色に誘った。母公はふ南国の芳、醇は紅酒、青酒、瑪瑙酒など七つの杯に七種つがれた。だった。やがて大宴となる。呉海呉山の珍味は玉碗銀盤に盛られ、母公のご機嫌は一通りでない。きのうの彼女とは人がちがうよう

「誰か」と、たずねた。

玄徳が、これはわが家臣、常山の趙 子 龍と答えると、母公はま

た、

誉の武将か」と、いった。「では、当陽の戦いに、長 坂で和子の阿斗を救ったというあの名

「ご油断はなりませんぞ。廻廊の陰に、大勢の伏兵が隠れている気 ら雲は拝謝して杯をいただきながら、玄徳の耳へ、そっとささやいた。「そうです」とうなずくと、母公は、彼に酒を賜えとすすめた。趙

配です」

:

玄徳はしばし素知らぬ顔をしていたが、母公の機嫌のいよいよ麗

母公は怪しんで、理を訊くと、玄徳は鳳眼にかなしみをたたえわしい頃を見て、急に杯をおいて、憂い沈んだ。

た。兵が隠れているようで、恐ろしくて杯も手に触れられません」お与え下さい。廻廊の外や、縁の下には、ひしひしと、殺気をもっ「もし私の生命をちぢめんと思し召すなら、どうか明らさまに剣を

母公は、愕然として、と、小声で訴えた。

「呉侯。あなたですか。そんな 企 みをいいつけたのは」

と、孫権を顧みて、 たちまちけんもほろろに叱った。

孫権は、狼狽して、

「いや、知りません。呂範でしょう」

呂範をこれへお呼び」

「はい」

しかし、呂範も、強情を張って知らないで通した。そして、

「賈華かもしれません」と、云いのがれた。

たが、また、自分の所為であるともいわなかった。ただ黙然と首を 賈華は、母公の前に立たせられた。彼は、知らないといわなかっ

垂れていた。母公の怒りは極度にたかぶった。

が佳婿がねの見ていらっしゃる前で」と、罵った。 「喬老。武士たちに命じて、賈華を斬りすてておしまいなさい。わ

兵が逃げ散って行った。 の者どもを叱りとばした。鼠のように頭をかかえてそこから大勢の めた。孫権は直ちに賈華を追い出した。喬国老は廻廊の外や縁の下 玄徳はあわてて命乞いをした。ここに血を見ては慶事の不吉と止

か、天に祈念をこらし、剣を抜いて振りかぶった。 ると、そこに巨きな岩がある。玄徳はじっと見ていたが、何思った かくて酒宴は夜に及び、玄徳は大酔して外へ出た。ふと庭前を見

孫権は木蔭から見ていた。

兀

みがあった。彼はふと、人なき庭園へ出て、酔を醒まさんとしなが 終日、歓宴の中に酔っても、玄徳の胸には、前途の茫々たる悩いはいます。

ら、発作的に、天を仰いでから祈念したのであった。

「わが覇業成らぬものなら、この岩は斬れじ、わが生涯の大望、成

るものならば、この岩斬れよ!」

発矢、振り下ろした剣は、火華をとばし、見事、その巨岩を両

断していた。

物蔭から人が歩いてきた。

「皇叔。何をされたのです?」

剣折れん――と天に念じて斬ったところ、この通り斬れました」 て、共に曹操を亡ぼし得るなら、この岩斬れよ。然らずんば、この 「おお、呉侯でおわすか。……実は、こうです。貴家の一門となっ

「ほ。……なるほど。では予も試みてみよう」

すると、剣石ともに響いた。 孫権も、剣を抜いた。同じように天へ祈念をこらして、大喝一声

「やっ……斬れた」

「オオ。斬れましたな」

この奇蹟は、後世の伝説となって、甘露寺の十字紋石とよばれ、

寺中の一名物になったという。

ませんか。長夜の宴です」 「どうです。皇叔、方丈へもどって、さらに杯を重ねようじゃあり 「いや、座にたえません。あまり大酔したものですから」

「では、ひと醒まししてからまた」

袖を連ねて、門外へ逍遥に出た。

月小さく、山大きく、加うるに長江の眺め絶佳なので、玄徳は思

「ああ、天下第一の江山」と嘆賞した。

後世、甘露寺の門に「天下第一江山」の額が掛けられたのは、彼

の感嘆から出たものと云い伝えられている。 玄徳はまた、月下の江上を上下してゆく快舸を見て、

·諺 にもありましたが、実に、呉人は水上を行くこと平地のよう 「なるほど、北人はよく馬に騎り南人はよく舟を走らすと世俗の

ですね」と、いった。

孫権は、どう勘ちがいしたか、

「なに、呉の国にも、良い馬もあり、上手な騎手もいます。ひと鞍鈴

当てましょうか」

まで駈けた。玄徳もよく走り、孫権もさすが鮮やかだった。そして、 たちまち、二頭の駿馬をひき、ふたり、轡をならべて、江岸の・坡ったり

呉の土民がここを後に「駐馬坡」と称んだわけは、この由緒に

相かえりみて、快笑した。

依るものだとか。

間、試されたり、脅かされたり、しかも日々夜々歓宴、儀礼、見 物、招待ずくめで、心身も疲れるばかりだった。 こんな事もあったりして、玄徳はつい逗留十数日を過した。その

日を卜して、劉玄徳と呉妹君との婚礼を挙げるところまで漕ぎつけ てしまった。 しばしば呉の宮中に通って母公をうごかし、孫権をなだめ、遂に吉 趙雲子龍も心配顔だし、喬国老も案じてくれた。国老はそのため

もしなかったし、入れてくれとも頼めなかった。 たる玄徳が入ることになると、さすがにそこから先の禁門には入れ 五百の随員――実は手勢の兵も呉城に入れることの許可を得、 なく玄徳の身を護っていたが、婚礼の夜いよいよ後堂の大奥へ花婿 華燭の典の当日まで、趙子龍は主君の側を離れず喬国老に頼んで

女宮の深殿に導かれた玄徳は、気も魂もおののいた。

から局々の女たちまで、みな槍薙刀をたずさえて、閃々眼もくら なぜなら閨室の廊欄には燈火をつらね、そこに立ちならぶ侍女

むばかりだったからである。

ん。呉妹君はおがき頃から、剣技をお好み遊ばし、騎馬弓矢の「ホ、ホ、ホ、ホ。貴人。何もそのように怖れ給うことはありませ 道がお好きなのです。決して貴人に危害を加えるためではありませ

房の内外を司る管家婆という役目の老女が、こういって、玄徳

の小心を笑った。

玄徳はほっとして、老女侍女など千余人の召使いに、莫大な金帛

朝^ぁさ の 月っき

まで、 七日にわたる婚儀の盛典やら祝賀の催しに、呉宮の内外から国中

「めでたい。めでたい」

「何たることだ」と、予想の逆転と、「計」の齟齬に、鬱憤のやりと、千載万歳を謳歌している中で、独りひそかに、

ばもなく、仮病をとなえて、一室のなかに耳をふさぎ眼を閉じてい

たのは呉侯孫権だった。

すると、柴桑の周瑜から、たちまち早馬をもって、一書を送っ

てきた。

うわさを聞いて、周瑜も仰天したらしい。

をしておるばかりですが、かくてやはあると、自ら心を励まし 金瘡の病患がまだ癒えぬため、参るにも参られず、ただ歯がみ 病中筆をとって書中に一策を献ず。 ねがわくは賢慮を垂れ給え

という書き出しに始まって、縷々と今後の方策がしたためてあ

また失敗に終ったら何もならぬが」 「周瑜からこういう謀を施せといってきたが、この計はどうだろう。

張昭に相談すると、張昭は、書簡の内容を検討してから、

の美女をあつめ、錦、繍の美衣、山海の滋味と佳酒、甘やかな音楽、た計の如く、彼に、ほしいままなる贅沢を与え、大厦玉楼に無数間の富貴栄耀の味は知りません。……ですから周瑜都督が示され 然、離反四散してしまうにちがいありません」 ある孔明、関羽、張飛らも、あいそをつかし、怨みをふくんで、自 みだらな香料など、あらゆる悪魔の歓びそうな物をもって、彼の英 早くより貧賤にそだち、その青年期には、各地を流浪し、まだ人 気を弱めにぶらせ、荊州へ帰ることを忘れさせれば、彼の国もとに 「さすがに都督の遠謀、感心しました。――元来、劉玄徳は、少年

と、案を打って賛同した。

孫権はよろこんで、

「では、玄徳の骨も腐るまで、贅沢の蜜漬にしてくれよう」

と、ひそかにその方針へかかり始めた。

とく大理石や孔雀石をもって張った。 の玻璃燈をかけつらね、朱欄には金銀をちりばめ、歩廊はことご し、園には花木を植え、池畔には宴遊船をつなぎ、廊、廂には数百 すなわち呉の東府に一楽園を造築した。楼宮の結構は言語に絶 65-

めに、こんなにまでして下さるなんて」 「兄君もやはり心では妹が可愛いんですね。わたくしたち二人のた

のはない。綺羅錦繍、乏しいものはない。 この若い新妻を擁して、玄徳はここに住んだ。金珠珍宝、無いも 呉妹――今では玄徳の妻たる新夫人は、そういって感謝した。

望とかいうものまでをいつか心身から喪失していた。 わすれた。――いや世の中の貧乏とか、艱苦とか、精進とか、希 むれば花鳥また嬋娟の美女、――玄徳はかくて過ぎてゆく月日を 食えば飽満の美味、飲めば強烈な薫酒、酔えば耳に猥歌甘楽、醒

「……ああ、困ったものだ」

それを見て、毎日、溜息ばかりついていたのは、彼の臣、趙 雲

子龍だった。

「そうだ……一難一難、思案にあまったら。嚢をひらけと軍師には

いわれた。あの錦の嚢の第二は今開くときだろう」

た。すると果たして孔明の秘策が今の心配によく当てはまっていた。孔明から餞別に送られたその内の一つを、趙雲は急に開けてみ

ではさっそく侍女を通じて、玄徳に目通りを求めた。

いきなり告げたので、玄徳も驚かされた。「たいへんです。こうしてはおられません」

「何事が起ったのか?」

「赤壁の怨みをそそぐなりと号して、曹操みずから五十万騎を率

い、荊州へ攻めこんで来たとあります」

「えっ、荊州へ……。た、たれが報らせてきた、そのようなことを」

州の危機、今に迫る。国もとへ君を迎えて、一刻もはやく対策を講「孔明が早舟を飛ばして、自身、呉の境まで注進に来たのです。荊

「それは、一大事」

ぜねば、

荊州の滅亡は避け難し――とあって」

「さ。すぐお帰り下さい」

_

て玄徳は、肚を決めたもののように面をあげ、趙雲へいった。「ううむ。そうか……」とのみで、しばらく沈思していたが、やが

「よし。帰ろう」

「では、直ちに?」

「いや少し待て。妻にもこのことを諮るから」

「それはいけません。ご夫人に相談遊ばせば、お引きとめあるは必

定です」

「そんなことはない。予にも考えがある」

玄徳は、奥へかくれた。

そして妻の室を訪うと、夫人は良人を迎えながらすぐ云った。

「どうしても今度は荊州へお帰りにならねばなりませんか?」

「えっ……。誰にそれを聞きましたか」

「ホホホ。あなたの妻ですのに、そのくらいなことが分らないでど

うしましょう」

荊州は滅亡の危うきに瀕している。そなたの愛に溺れて、国を失う「はや承知なれば、多くもいわぬ。玄徳はすぐ帰国せねばならん。

たとあっては、世の物笑い、末代までの廃れ者になろう」 「もとよりです。武門の御身として、この期に、未練がましいこと -66

あっては、生涯人中に面は出せません」

れん。そなたともまた再会は期し難い。長春数旬の和楽、それも短「よくいうてくれた。戦場に臨むからにはいつ討死を遂げるやもし

い一夢になった」

ける限りは――いえいえ九泉の下までも」に 儚 いものではありますまい。また短いものとも思いません。生「なぜそのような不吉を仰せ出されますか、夫婦の契りはそのよう

「わたしも共に参りまする」

「さは云え、別れねばならぬ身をどうしよう」

「えっ、荊州へ」

「当然ではございませんか」

「呉侯が許すまい。母公も決して許されまいが」

必ずお心を苦しめ給うには及びません」「兄に知れたら大変でしょう。けれど母には別に説く途があります。

「どうしてこの呉城の門を出るか」

その前に老母の許へ行って告げましょう。元日の朝、朝賀のため、「もう今年も暮れます。元日の晨までお待ち遊ばせ。わたくしは

江のほとりに出て、先祖をお祀りして参りますと――。母は信心家

ですからそういうことをするのは大変歓びます」

艱苦や、戦乱の他国へ行っても、後に呉を離れたことを悔いたり悲「なるほど、それは名案だが、そなたはなお、それから先の途上の

しんだりしないでいられるだろうか」

き甲斐があると信じます」しょう。良人の側にさえいるなら、炎の裡、水の中、どこにでも生「お別れして、ひとり呉に残っていたとて、なんの楽しみがありま

よんで、妻の真情を語り、また策をささやいて、玄徳は嬉しさに涙を催した。彼はまたひそかに趙雲を人なき所へ

「元日の朝、人目に立たぬよう、長江の岸へ出て待っておれ」と、

打合わせた。

趙雲は、念を押して、

「昔日の事をお忘れなく。必ずとも、孔明の計と齟齬遊ばさぬよ

うに」といって去った。

い。月を残していたが、東天の雲には早、旭日の光がさし昇りかけてい月を残していたが、東天の雲には早、旭日の光がさし昇りかけてい明くれば、建安十五年となる。その元旦は、まだ暁闇深く、朝の

れから日の出とともに、酒を賜わることになっている。は文武の百官がいならび、呉侯孫権に拝賀をなし、万歳を唱え、そ吉例通り、呉宮の正殿には、除夜の万燈がともされたまま、堂に

折もよし、人目は少ない。

「では、これから江の、畔へ行って、先祖の祀りをして参ります」玄徳は夫人呉氏とともに、母公の宮房をそっと訪うて、

と告げた。

を出してやった。の孝心を嘉し、それに従うのはまた、妻の道であると、機嫌よく夫婦の孝心を嘉し、それに従うのはまた、妻の道であると、機嫌よく夫婦玄徳の父母祖先の墳墓は、すべて涿郡にあるので、母公は、婿

_

宮門を出るには、女房車の備えがある。夫人はそれに乗った。玄

中門を出る。城楼門を出る。

徳は美しい鞍をおいた駒にまたがる。

誰も怪しまない。

番卒たちは、

「ほ、婿様と呉夫人が、おそろいで、どこへお出ましか」

と、羨望の眼を送るだけであった。

闇の空には、白い朝の月があった。 元旦の朝まだきである。人はみな酔っていた。まだ明けきらぬ暁

外城門まで出ると、玄徳は、車を押す者や、供の武士たちをかえ

りみ、

うは江の畔、先祖の祀りに行く。不浄は忌む」「あの森の中に新泉がある。そち達はみな垢を浄めて来い。きょ

と、いってそこへ追い払った。

支度していた。平常でも腰に小剣を離さない夫人である。小さい弓かねてしめし合わせていたことなので、彼女はすでに車の中で身

を軽装に吊るし、頭から半身は被衣のような布で隠していた。 車を降りると、彼女は、従者の置いて行った一頭の駒へ、ひらと

蝶のようにすがりついた。玄徳もすぐ鞭を当てる。

「うまく行きましたね」

「いや、これからだよ、運のわかれ目は

しかし玄徳はニコと笑った。

呉夫人も微笑んだ。朝の月を避けた被衣の陰でもその顔は梨の花

より白かった。

て揚子江の水はまばゆいばかり元朝の紅波を打っていた。 またたく間に、長江の埠頭まで来た。この頃、日はすでに登っ

「あっ、わが君、オオ、ご夫人にも」

「趙雲か。とうとう来た。ここまでは上首尾だったが、すぐ追手が

来ようぞ、急ごう」

せん」 「もとより覚悟のこと、趙雲がお供仕るからにはご心配には及びま

かねて五百の手勢は、趙雲と共にここに待ち受けていたので、玄

以上もひまがかかった。原因は、外城門まで、夫人の車を押して出 徳と夫人を警固し、まっしぐらに陸路をとって国外へ急いだ。 幸いにも、このことが、呉侯の耳に入るまでには、それから半日

辺を捜し廻ったり、後難をおそれていたずらに上訴の時を移してい 「どこまでお出でになったのか」と、かかる出来事とも知らず、江 た士卒や供の武士が、

たためである。

冲、天の怒気をなして、 日の宴に呉侯は大酔して眠っていたところであったが、聞くや否、 いよいよそれと真相が判明したのはすでに夕方に迫っていた。終

> るとは 「おのれ履売りめ、恩を仇で返すばかりか、わが妹を奪って逃げ

と、傍らの几にあった玉。硯をつかんで床に砕いたという。

精兵が、元日の夜というのに、剣槍閃々と駈けだしてゆく。それからのあわただしい評議。間もなく宵の城門を、五百余りの

の灯をおののかせていた。急を聞いて登城した程普が、おそるお 呉侯孫権の怒りはしずまらず、彼の罵る声が、夜になっても呉城

そる彼にたずねた。 「追手の将には、誰と誰をおつかわしになりましたか」

「陳武と潘 璋をやった」

「ご人数は」

五百

「ああ、それではだめです」

ばして、このご脱出とぞんじます。さすれば、女性ながら、日頃「すでに呉妹君には、一たん良人と契られた玄徳に深く同意あそ より尚武のご気質、あの男まさりな御剛気は、呉の将士とはいえ、

みな深く怖れているところです。いわんや陳武、潘璋のごときでは」 孫権はそう聞くと、いよいよ憤って、たちまち、蒋欽、周泰の

二将をよび立て、

また予の代りに、妹の首をも打って持ってこい。もし命に違うとき は、きっと、其方どもを罪に問うぞ」 「汝ら、この剣を持って、玄徳を追いかけ、必ず彼奴を両断し、

行けと急きたてた。 と、身に佩いたる剣を取りはずし、手ずから二将に授けて、早く

女性の身、騎馬の疲れは思いやうれた。づいて来る。玄徳はややほっとしたが、夫人呉氏は何といってもづいて来る。玄徳はややほっとしたが、夫人呉氏は何といっても 夜も日も馬に鞭打ちつづけた。さる程にようやく柴桑の地へ近

ちに移した。そしてなお道を急いで落ち延びた。 だが幸い、途中の一豪家で車を求めることができ、夫人は車のう

「やよ待て、玄徳の一行、呉侯のご命令なるぞ。縄をうけろ」 山の一方から大声がした。約五百の兵がふた手になって追ってき

たのだ。

趙雲は騒ぐことなく、

「あとは、それがしが支えます。君には、遮二無二お先へ」

と、玄徳と夫人を、なお奔らせた。

この日の難は、一応のがれたかに見えたが、次の日、また次の日

と、玄徳の道は、先へ行くほど、塞がれていた。

っていた。水路も陸路も、往来には木戸の一検がが厳重を極め、要 すなわち柴桑の周瑜と、呉の孫権の廻符はもう八方に行きわた

所には徐盛、丁奉の部下三千が遮断していた。

ったか」 「ああ、いけない。この先には呉兵が陣している。今は進退きわま

玄徳が痛嘆すると、

「いや、孔明軍師は、あらかじめかかる場合にも、、嚢の中から訓

えられています。こう遊ばせ」

害せねばならぬ。御身はない縁とあきらめて、ここより呉へもどら して、やがて夫人の車へ近づき、涙声をふるわせて彼女へ告げた。趙雲がそれを彼の耳へささやいた。玄徳はいくらか希望を取り戻 「妻よ、わが妻よ。ここまでは共に来たが、玄徳はついにここで自

夫人は、簾をあげて、おどろきと涙の面をあらわした。

れよ。九泉の下で後の再会を待つであろう」

「再び呉へ帰るくらいなら、ここまでも参りません。どうして急に

そんなことを仰っしゃるのですか」

りた。 夫人はあわてて玄徳を車のうしろに隠し、簾を払って地上へ跳び降 をかかないうちに、いさぎよく自害して果てたがましと思うからだ」 百方路をふさいでいる。所詮、捕われて曳かれるものなら、生き辱 「でも、呉侯の追手は前後に迫ってくるし、周瑜もそれを励まして、 ところへ早くも、徐盛と丁奉は、部下を率いてここへ殺到した。 👵

たちの首は、わたくしの母君が、半日だってそのままにしておきは 「それへ来たのは何者です。主君の妹に指でもさしてご覧、 おまえ

しませんから」

と、鈴音を振り鳴らすように声を張っていった。

「おお、呉妹君におわすか」

だの兄孫権だのを動かす勢力にはある懼れすら抱いていたのだっ や知っているだけでなく、その男まさりな凛々たる気性や、母公 この女性の凡の女性でないことは、呉の臣下はみな知っていた。い と、徐盛と丁奉とは、思わず地へひざまずいた。主筋ではあるし、

「丁奉に徐盛ではないか」

「はっ。さようでございます」

ることです。お退がりっ」 「弓 箭を帯し、兇兵を連れて、主人の車に迫るなど、謀叛人のす「噫・・うさん

Lゅうゆ 「でも、呉侯の御命。また周都督のおさしずでもあります」

いうのですか。兄の孫権とわたしのことならば、兄。妹の仲です。「周瑜が何ですか。周瑜のいいつけならおまえ方は謀叛もすると

家臣の差出るところではない」

柳眉を立て、「紅」の「眦」をあげて、夫人はその細腰に帯してい方匹夫ずれが、指でもさしたら承知しませぬぞ」たりは母公のおゆるしを賜い、天下の前で婚礼したのです。おまえ「おだまりっ。玄徳さまは大漢の皇叔、そして今はわが夫です。ふ「いや、あなた様に危害を加えるのではありませぬ。ただ玄徳を」

「しばらく。……しばらくお怒りをおしずめ下さい」

と、あわてて手を振った。

_

っていうのである。 ・夫人は耳もかさない。また怒りの色も収めなかった。いよいよ叱

っていうのである。

がおまえ方を命に従わぬ者として斬ったなら周瑜のごとき匹夫、立ち帰って、いま私がいった通りに、周瑜に伝えるがよい。もし周瑜「おまえ方は、ひとえに周瑜ばかり怖れているのであろう。早く立

徐盛も丁奉も、夫人の烈しいことばの下に、まったく慴伏してちどころに私がこの剣で成敗してみせる」

「それ、駈けよ。車を早めよ」と、たちまち道を急がせた。しまった。夫人はそれと見るや、車のうちへひらりと身を移して、

一行をやり過し、やがて二、三里ばかりすごすごと戻ってきた。さまじい眼をかがやかせて、道ばたに殿軍していたため、空しくめた。丁奉、徐盛はみすみす眼の前にそれを見たが、趙雲子龍がす玄徳も馬の背に伏して駈け通った。五百の兵もどかどかと足を早

「やあ、どうした?」

侯の命で後から大兵を率いてきた陳武と潘・璋であった。 彼方から来た馬上の二将軍は、ふたりを見かけて声をかけた。呉

の叱咤など何か怖れん。こちらは呉侯の直命をうけて来たのだ。否「何、何。取逃がしたとか。さりとは気弱な。さあ続いてこい。妹君頭から叱りつけられては、どうすることもできないので……」「実は、これこれです。如何せん先は主君の御妹、こちらは臣下。

やをいわばお首にしても!」

と、馬煙を立てて追いかけた。

んでしまった。が、またまた、呼び止める者があるので、騒然一団になって立ち淀が、またまた、呼び止める者があるので、騒然一団になって立ち淀先にゆく夫人の車と玄徳の一行は、長江の岸に沿って急いでいた

そして叉手の礼をとって起立していると、夫人は真白な指をきっ凛々たる夫人の一声を浴びて、四人は思わず馬から飛び降りた。「何ですっ、その無礼な態は。馬を降りなさい!」

と四人の胸にさして、

不作法な真似をするわけがない。主君の妹に対してする礼儀を知ら「おまえ方は、緑林の徒か、江上の舟賊か。呉侯の臣ならばそんな

-70

ないのか。お坐りっ。ひざまずいて拝礼をするものです!」

承不承、大地に膝をつき叉手を頭の上にあげて最大な敬礼をした。 ようやく、すこし面を和らげて、それから夫人が訊ねた。 四人の大将は、彼女の威と、絶倫な美と、その理に打たれて、不

「いったい、何しに、またこれへ来たんですか」

潘璋がいった。

「お迎えのためにです」

と、夫人は首を振った。

「呉へは帰りません」

「でも、呉侯の御命ですぞ」

たのでしょう| が、母の意に逆らうわけはない。おまえ方は何か聞きちがえて来 「わたし達は、母のゆるしによって城を出たのです。孝行な兄孫権

「いやいや。呉侯の仰せには、首にしてもとの厳命でした」

わたくしを、首に?」

゙゙首にしてもですって?」

「……いや、その、失言しました。玄徳のほうをです」

「おだまりなさい!」

は主筋に害意をさし挟む不敵は同じことですぞ。かりそめにも、そ 「この身に刃を擬すも、わが夫に刃を擬すも、夫婦であるからに

に居る趙雲がおまえ方をゆるしては帰しません。また無事に逃げ帰 ったところで、呉にいますわが母が、何でおまえ方をただおきまし んな真似をしてごらんなさい。たとえ夫婦はここに死すとも、ここ

「さ。お起ち。それが覚悟なら矛なり槍なり持って、わたくしの前

に起ってご覧」

玄徳は辺りに見えず、 らから離れずにいた。 四人の大将は、ひとりも起ち得なかった。それにいつのまにか、 例の趙雲だけが、眼をいからして、夫人の傍

たため、手出しはおろか、私語する隙間もなかったのである。 も趙雲は、一手の軍兵を持って、最後まで四人の前に殿軍してい 追手の大将四人は、空しく夫人の車を見送ってしまった。この時

一残念だな」

「だが、あの女丈夫には、なんともかなわん」

彪 の軍馬と、颯爽たる大将が、彼方からきて呼びかけた。 是非なく、四人は道をかえした。そして十数里も来た頃である。

「玄徳の行方は如何に」

「夫人はどこにおらるるか」 見れば、呉の蒋一欽。またもう一人は周一泰である。

面目なげに、陳武が云った。

「何がだめだ?」

「だめです……どうも」

しをうけて城を出たのだから、母公のおいいつけでなければ帰らぬ 「追いついて捕えんとしましたが、夫人がいうには、母公のおゆる

と仰せられます」

「何の。口巧者な。な、なぜいわん。こちらは呉侯の厳命であるぞ」

ましくいうぞとのみ、お耳にかけるふうもありません」「呉侯はわが兄。兄妹の間のことを、臣下の分際で、何を差出が

見よ。この通り、仮借すなとて、主君孫権には、お手ずから我らには、玄徳も、また主君の御妹たりとも、首にしてしまうまでのこと。「えい、そんなことで、どうして追手の任が果せるか。かくなる上

「やっ。御剣ですか」

剣をおあずけになった!」

う| で、その附近において彼奴らをことごとく網中の魚とするであろず柴桑の附近において彼奴らをことごとく網中の魚とするであろて江岸江上をふさがれい。われら四人は、陸路を追い詰め、かなら早々先へはせ廻って周瑜都督にこの由を告げ、水上より早舟を下しばせば、ふたたびまたたく間に追いつこう。徐盛、丁奉のふたりは、「知れたこと。――思うに玄徳の一行は大半が徒歩武者、馬を飛「知れたこと。――思うに玄徳の一行は大半が徒歩武者、馬を飛

は江に沿ってきた。そして劉郎浦とよぶ一漁村までたどりついた。いつか、柴桑の城市を横に見、その郊外を遠く迂回して、また道逃げ落ちられる所まではと、ただ一念一道をひた奔りに急いでいた。刻々と迫るこういう危険な情勢の中を、玄徳と夫人の車は、なお

|舟はないか|

玄徳も趙雲も、ここへ来てはたと、それに当惑した。「舟は? 舟は?」

ず、一方は渺゛々たる江水天に、漲り、前は自然の湾口をなして、漁村らしいのに、どうしたのか船は一つも見当らない。のみなら

れば、もうどっちへも進めない地形だった。深く彼方の遠い山裾まで続き、いずれへ渡るにも、舟便に依らなけ

一趙雲。趙雲

「はい。ご主君……」

「遂に虎口に落ちた。最後へ来たな」

りお案じなさいますな」
があるにちがいありません。まずまず、あま会セン……そんな文があらわれました。察するところ軍師孔明には、会セン……そんな文があらわれました。察するところ軍師孔明には、シバシ追ウモ 漂 イ晦ムナカレ、破車汗馬ココニ業ヲ終エテ一舟ニシバシ追ウモ 漂 イ晦ムナカレ、破車汗馬ココニ業ヲ終エテ一舟ニー劉郎浦頭蘆荻答エン、博浪激波を開いてみました。すると。――劉郎浦頭蘆荻答エン、博浪激波でいや、まだご失望は早過ぎます。今、例の錦の嚢の嚢の一つ

た追手の大軍だった。鼓の声や銅鑼が水に響いた。いうまでもなく、ここに包囲を計った。するとたちまち、山ぎわのあたりの夕雲が、むくむくと動き、て、車のうちの夫人にものもいえず、暗然とたたずんでいるだけだ 趙雲はなぐさめた。しかし玄徳は黙然と灰色の空や水を見まわし

「おお如何にせん」

玄徳は、身を揉んだ。

手勢は、すでに色を失って、四方へ逃げかけた。「すわ!」と、近づく喊の声、はや矢ばしりの響き。玄徳の少ない夫人も今はと覚悟して、簾のうちから飛び降りる。

を押出した二十余艘の快足舟がある。こなたの岸へ漕ぎ寄せるやにザザザザと戦ぎ立った。見れば、葭や蘆のあいだから帆を立て、櫓すると、たちまち、郎浦湾の汀、数里にわたる蘆荻が、いちど

「乗り給え。早く早く」

「皇叔。いざ疾く」

論巾、すなわち諸葛孔明だった。 て、共々呼んでいた道服の一人物があった。一目に知れる頭ので、共々呼んでいた道服の一人物があった。一目に知れる頭のと、手を打振って口々に呼ぶ。その中に、いま舟底から這い出し

华爱罗

_

櫓櫂をあやつり、帆を揚げて、入江の湾口を離れた。た。玄徳と夫人、また随員五百を各〻の舟に収容すると、たちまち、1明の従えてきた荊州の舟手の兵は、みな商 人に姿を変えていれ明の従えてきた荊州の舟手の兵は、みな商

「やあ、その舟返せ」

呉の追手は、遅ればせに来て、あとの岸にひしめき合っていた。

孔明は一舟の上からそれを指さして、

と、岸へ向って云った。ら、呉へ帰ったら周瑜へ告げよ。ふたたびかかる錯誤はするなと」ら、呉へ帰ったら周瑜へ告げよ。ふたたびかかる錯誤はするなと」いが、美人をもって人を釣るような下策は余りにも拙劣極まる。汝「すでにわが荊州は一国たり。一国が一国を謀るもよし攻めるもよ

多くの舟から、どっと嘲笑があがった。

に落ちて藁のように流されてしまった。それに答えて岸からは、雨のように矢が飛んできたが、みな江波

たかも鳳翼を開くように迫ってきた。黄蓋の旗じるしが見え、右には韓当の船が並び、その陣形は、あらかにそれには大都督周瑜が坐乗しているらしい。そして左にはった兵船が百艘ばかり見えた。中央に「帥」の字の旗をたてて、明しかし、江上を数里進んで、ふと下流を望むと、追風に満帆を張

「おおっ、呉の大船隊が_

ぐ隹烙を指軍し、 と、玄徳をはじめ人々がみな色を失うと、孔明は、舟手の者にす

く進路を指揮し

当然、呉の水軍も、船をすてて陸地へ駈け上がってきた。黄蓋、と、速やかに岸へ寄せ、そこからは陸地を取って逃げ奔った。「かねて予測されていたこと。お『きには及びません」

周瑜もその中にあって、

韓当、徐盛など、皆飛ぶが如く馬を早めて来る。

「ここはどの辺だ?」と、諸将にたずねていた。

「黄州の境にあたります」

「すわ。敵に何か、備えがあるらしいぞ」

急に、退きかけると、

「われこそ、黄忠」

「魏延を知らずや」

乱れ立った彼の虚を衝いていよいよ駈け散らした。 左の沢からも、右手なる峰からも、待ちかまえていた猛兵が、

一隊の兵を率いて、江岸に姿を現わし、大音にいった。移すと、その時、もう遠い先へ行っているはずの孔明が、忽然と、上陸したもとの所まで、馬に鞭打って逃げのび、あわてて船へ身を呉の将士は、存分な戦いもせずに、続々、討死を遂げた。周瑜は、

マタ、兵ヲ折ク夫人ヲ添エプッテ問郎ノ妙計ハ天下ニ高シ

「おのれ。その儀なれば、陸へ戻って、もう一戦せん。諸葛亮、郭ダで落って

そこをうごくな」

韓当などは、味方はあらまし討たれ、残る士卒も戦意をうしなってと、地だんだ踏みながら、船を岸へ寄せろと呶鳴ったが、黄蓋、

「ここが我慢のしどころです」と、もがく周瑜を抱き止めながら、

船手の者に、

いるのを見て

別念はころ、**だりに11更いには、、「帆を張りあげろ。早く船を中流へ出せ」と、命じた。

「無念。見こ無念。かかる心をうけ、かかる吉尺をらって、なし、野りので、一間、り「ジャカカン

周瑜はなお、 眦 に血涙をたたえて、

らかっと真っ赤な血を吐いて、朽木仆れに船底へ仆れてしまった。と、叫びながら、歯をギリギリ咬み鳴らしたと思うと、その口か目にかかれよう。――おれは恥を知っている!」大都督周瑜たるものが、再び呉国へ帰れよう。おめおめと呉侯にお「無念。実に無念。かかる恥をうけ、かかる結末をもって、なんで、

_

「お気をたしかに持って下さい」

「都督っ。周都督」

ら、呉の諸将は、周瑜の体を抱き起し、左右から悲痛な声をふり絞っ

しばらくして、周瑜はようやく、うす目をひらいた。

かすかな声でいった。「……船を。船を呉へ向けてくれ」

けれど、やがてこの始末を知った呉侯孫権の鬱憤はやりばもなく、周瑜は恨みをのみながら、ふたたび病牀に親しむのほかなかった。蒋欽と周泰は、病都督の身を守って、柴桑まで帰った。

「どうしてこの報復を」と、玄徳を憎んでいた。

日夜

――君。一日も早く、兵馬を強大にし、荊州を討ち懲らし給え。ところへまた、病中の周瑜から、長文な書簡がきた。

こ、ある。

とある

た孫権。忽ち、その気になって、軍議を会そうとした。 さらぬだに若い孫権、そう励まされなくても、鬱心勃々であっ

「急に、何のご軍議ですか」

彼は、最初からの平和論者――というよりも自重主義の文治派で重臣張昭は、それと聞くや、すぐ彼の前に出て諫めた。

あった。

来と、魏の全軍をあげて襲来しましょう」と、魏の全軍をあげて襲来しましょう。それを今もしは、力がないからではありません。また、呉を怖れているからでもことをお忘れですか。曹操がすぐにも大兵の再編成をして来ないの「いま、赤壁の恥をそそがんと、曹操が日夜再軍備にかかっている

「では、どうしたらいいか」

ない懸案があります」「それを如何にするかという問題より前に、しておかなければなら

「それは?」

「玄徳が曹操と和を結ばないように、処置を講じておくことです」

孫権はちょっと色を変えた。

-74-

「玄徳が――曹操と結ぶだろうか?」

を括っていればなおさら、その可能性は濃くなります」「当然、ありうることでしょう。ありえないこととこちらが多寡

「それは未然に警戒を要する」

ければなりません――この対策は」はもう使いを出して玄徳へ水を向けているかもしれません。早くなれておりましょう。曹操は機を知ること誰よりも敏ですから、或いが君が玄徳と面白からぬ感情にあることは、はや許都の曹操にも知この呉にも、曹操の隠密がかなり入りこんでいますから、すでにわ「ですから――何よりもそれが当面の急です。てまえが思うには、

るか| 重大な脅威になる。――それをどう防ぐかだが、なんぞ、良策があ「むむ。一朝、玄徳が魏と同盟するとなると、これは呉にとって、

守に封じるのが何よりと思いますが」「すぐにも都へ使いを上せ、朝廷へ表をささげて、玄徳を荊州の太

Ţ....J

孫権はおもしろくない顔をした。

張昭はたたみかけて、若い主君を喩した。

きた頃を計って荊州を奪り上げてしまえばよいのです」いて徐々に曹操と玄徳との抗争をさそい、玄徳のそれに疲弊している状態に一応現状を訂正しておいてから、呉としては、間諜を用せん。玄徳もまたそれに感じて呉を恨む念を忘れましょう。……かそれによって曹操は、呉と玄徳との間に破綻を見出すことができま論、お嫌でたまらないでしょうが、その効果は大きい。何となれば「すべて外交の計は苦節です隠忍です。玄徳に出世を与える。勿ら出しがある。

「敵地へ行って、そういう遠謀を巧みに植えつけるような間諜が、

さし当って、おるだろうか」

せられた男ですが、これを用いれば適役でしょう」「おります。平原の人で華欽、 字 を子魚という者。もと曹操に愛

「呼べ。早速」

孫権は、その気になった。

-75-

文武競を

ったが、秋去れば冬、冬去れば春、四季の風物だけは変らなかった。 冀北の強国、袁紹が亡びてから今年九年目、人文すべて革ま。 きょく

そして今し、建安十五年の春。

鄴 城(河北省)の銅 雀 台は、足かけ八年にわたる大工事の落ぎょうじょう

成を告げていた。

「祝おう。大いに」

曹操は、許都を発した。

られた。 武の百官も、祝賀の大宴に招かれて、鄴城の春は車駕金鞍に埋め同時に――造営の事も終りぬれば――とあって、諸州の大将、文

下から掘り出したことに由来する。 たのは、九年前、曹操が北征してここを占領した時、青銅の雀を地 そもそも、この漳河のながれに臨む楼台を「銅雀台」と名づけ

は目もくらむばかりであり、直 欄 横 檻の珠玉は日に映じて、万戸も、それぞれ後漢文化の精髄と芸術の粋をこらし、金壁銀砂 のような反り橋を架け、玉龍金鳳を一郭とし、それをめぐる千門 城から望んで左の閣を玉龍台といい、右の高楼を金鳳台という。 いずれも地上から十余丈の大厦である。そしてその空中には虹

> と疑わしめるほどだった。 「いささか予の心に適うものだ」

この日、曹操は、七宝の金冠をいただき、緑錦の袍を着、黄金 由来、英雄は土木の工を好むという。

の太刀を玉帯に佩いて、足には、一歩一歩燦爛と光を放つ珠履を

はいていた。

申し上げようもありません」 「規模の壮大、輪奐の華麗、結構とも見事とも、言語に絶して、

文武の大将は彼の台下に侍立した。そして万歳を唱し、全員杯を

挙げて祝賀した。

「何かな、この佳い日、興じ遊ぶことはないか」

赤地錦の戦袍を取寄せ、それを広苑の彼方なる高い柳の枝にかけ 曹操は考えているふうであったが、やがて左右に命じて、秘蔵の

させた。そして武臣の列に向い、

思わん者は出て射よ」と、いった。 射たものには、すなわちあの戦袍を褒美にとらすであろう。われと 「各ゝの弓を試みん。柳を距つこと百歩。あの戦袍の赤い心当を

列を作って、柳に対した。曹氏の一族はみな紅袍を着し、外様の 諸将はすべて緑。袍を着ていた。 「心得て候う」とばかり、自ら選手を希望して出た人々は、二行に

選手はみな馬に乗り、手に彫っ弓をたずさえて、合図を待つ。

曹操はふたたび告げた。

すぞ。自信のないものは、今のうちに列から退がれ。そしてこれへ 来て罰盃を飲め」 「もし、射損じたものは、罰として、漳河の水を腹いっぱい呑ま

誰も、退かなかった。

「ここは、この世か。人の住む建築か」と、たたずむ者をして恍惚

馬は勇み、 人々の意気は躍る。

ーよし!」

と曹操の言下に、合図の鉦。鼓が鳴り渡った。とたんに一人、馬

を出し、馬上に弓矢をつがえた。

う若武者。一鞭して広苑の芝生を奔らすこと三遭、柳を百歩へだ と放った。 たって駒足をひたと停め、心ゆくばかり弦をひきしぼってちょうッ 諸人これを見れば、すなわち曹操の甥で、曹休字は文烈とい

見事。矢は的を射た。

「ああ! 射たり、射たり」 と、感嘆の声は堂上堂下に湧いてしばし拍手は鳴りやまない。

の。袍をおろし、それを曹休に与えようとすると、 「待ち給え。丞相の賞は、丞相のご一族で取るなかれ。それがしに その間に、近侍のひとりは、柳の側へ走って、かけてある 紅ぐない

と呼ばわりながら、 はや馬をすすめて、馬馴らしに芝生を駈け廻

っている一将がある。

こそ与え給え」

誰かと見れば、すなわち荊州の人文聘、 字 は仲 業であった。

文聘は鐙に立った。弓手は眉を横に引きしぼる。

矢はひょうッと飛んだ。

「あたった、あたった。柳にかけたる、紅、の。袍、は、快くそれがとたんに、鉦、鼓は鳴り轟き、諸人の感称もわっとあがった。

大音あげて、文聘がいうと、

「何者ぞや、花盗人は。 袍 はすでに、先に小将軍が射られたり。

わが手並を見てから広言を払え」

と、また一騎、駈け出た。

曹操の従弟、曹洪であった。

握り太な彫。弓の満を引いて、びゅッと弦を切って放つ。その握り太な彫。弓の満を引いて、びゅッと弦を切って放つ。その

矢も見事、彼方の袍の心当を射抜いた。

陣々の銅鑼、陣々の鼓、打ち囃し、賞め囃し、観る者も、射る

者も、今や熱狂した。

すると、また一人、

らすこと雷光の如く、首を回して、後ろ矢を射た。しかもその矢は て見せた大将がある。諸人これを見れば夏侯淵であった。馬を走 「笑うべし、文聘の児戯」と、馬おどらせて、あたりに威風を払っ

三人が射立てた矢の真ん中をぴったり射あてた。

「この 袍 は有難く、それがしが拝領つかまつる」 夏侯淵は矢を追いかけて、柳の下へ駈け出した。そして、

と、馬上から袍へ、手を伸ばそうとすると、遠くから、

「待った! 歯者」と、大声に叱って、彼方から一矢、羽うなり

強く、射てきた者がある。 これなん徐晃の放った矢であった。

___あっ」

を射切っていたからである。 と、諸人は胆をつぶした。彼の矢は、あまりにも見事に、柳の枝 柳葉繽紛と散りしだき、紅錦の袍は、

ひらひらと地に落ちてきた。

背なかに打ちかけ、馬をとばして直ぐ馳せ戻り、楼の台上を仰いで、 同時に、徐晃は駈け寄りざま、馬がをすくい取って、自分の同時に、徐晃は駈け寄りざま、『きょひたたれ

「丞相の賜物、謹んで拝謝し奉る」

呶鳴った。

「ひどいやつだ」と、諸人みな、杲れ顔して騒然と囃していると、

晃の弓を握って、いきなり馬の上から彼を引きずり下ろした。 台下に立っていた群将の中から駈け出した許褚が、物もいわず徐

「やっ。狼藉な_

れに行くか、腕のうちにありだ」 「何の。まだ丞相のおゆるしはなし。その。袍、の受領者は、 いず

「無法無法」

「渡せ。いで渡せ」

まった。 んざん肉闘して、肝腎な錦の袍もために、ズタズタに引裂いてし とうとう、二人は引っ組んで、四つになり、諸仆れになり、さ

「分けろ、引分けろ」

曹操は台上から苦笑して命じた。

物々しく、退鉦打たせて、曹操はその二人をはじめ、弓に鍛え

をあらわした諸将を一列に招き呼んで、

どけたぞ。――なんで汝らの精励に対して、一裲の衣を惜しもうか」 「いや、いずれ劣らぬ紅や緑。日頃のたしなみ、武芸の励み、見と 「さあ、位階に従って席に着け。さらに 杯 の満を引こう」と、 と、大機嫌で、一人一人の者へ蜀、江の錦一匹ずつ頒け与え、

 \equiv

その時、 楽部の伶人たちは、一斉に音楽を奏し、天には雲を闢

き、地には漳河の水も答えるかと思われた。

の千杯万杯に、尽きることなき春を盛った。 水陸の珍味は、 列座のあいだに配され、酒はあふれて、台上台下

博学、文部の多識も、何か、佳章を賦して、きょうの盛会を記念せ 「武府の諸将は、みな弓を競って、日頃の能をあらわした。江湖の

ずばなるまい」

酒たけなわの頃、曹操がいった。 万雷のような拍手が轟く。王朗、字は景興、万雷のような拍手が轟く。 王朗、字は景興、 文官の一席から起

って、 「鈞命に従って、銅雀台の一詩を賦しました。つつしんで賀唱い

たします―― 銅雀台高ウシテ帝畿壮ナリ

三千ノ剣佩黄道ヲ趨リ 水明ラカニ山秀イデ光輝ヲ競ウ

百万ノ貔貅ハ紫微ニ現ズ

と朗々吟じた。

曹操は、大いに興じて、特に秘愛の杯に酒をつぎ、

「杯ぐるみ飲め」

と、王朗に与えた。

王朗は、酒を乾して、 杯は 袂 に入れて退がった。 文官と武官と

湧くごとく歓呼した。

侯侍中尚書、鍾繇、字は元常であった。 すると、また一人、雲箋に詩を記して立った者がある。

評がある。 すなわち七言八絶を賦って-この人は、当代に於て、隷書を書かせては、第一の名人という

銅雀台ハ高ウシテ上 天二接ス

願ワクハ昇平万々年ヲ楽シマン

と、高吟した。

「佳作、佳作」

して与えた。拍手、奏楽、礼讃の声、台上台下にみちあふれた。曹操は激賞しておかなかった。そして彼には、一面の 硯 を賞と

「ああ、人臣の富貴、いま極まる」

楽毅は地に拝伏し、その昔日、臣は燕王に仕えり、燕を去るも燕楽教之伝を読むに――趙王が兵を起して燕国を討とうとしたとき、のでないかなどという者があるかもしれぬが、われ少年の日、といえ、或いは疑いを抱いて、曹操も天下を纂奪する野心があるといえ、或いは疑いを抱いて、曹操も天下を纂なだっといある。幸いに、自分は袁紹、劉表を討平し、身は宰相の重きにあるまず、かの袁術の如く、帝王を僭称するものが幾人も輩出したろまず、かの袁術の如く、帝王を僭称するものが幾人も輩出したろまがった。のでないかなどという者があるかもした。

せて、

らない。――わが文武の諸将は、みなよく曹操の旨を諒せよ」入り、当然、漢朝の天下も亡びるに至ることを憂えたからにほかなみから救われず、秩序は乱れるばかりで、遂には無政府状態におち

面色大いに薫酔を発した。彼は、侍坐の重臣に、そう語り終ると、また数杯をかたむけて、

「筆と硯をこれへ」

吾レ高台ニ独歩シテ兮彼もまた、雲箋を展べて、即興の詩句を書いた。そしてそれへ、

俯シテ万里ノ山河ヲ観ル

何事かこれへ報らせに飛んできた。という二句まで書きかけたところへ、たちまち、一騎の早打ちが、

兀

大宴満酔の折も折、席も席であったが、

「時務は怠れない」と、曹操は、早打ちの者を、すぐ階下によびよ

「まず、相府の書を」と、使いは、官庁からのそれを曹操へ捧じて「何事やある?」と、許都からの報らせを訊いた。

から、あとを口上で告げた。

として嫁がせ、その婚姻の引出物に、荊州九郡の大半も、玄徳に属ずまた彼孫権は、どうしたのか旧怨を捨て、自分の妹を玄徳の夫人にを仰いでいます。それも、事後承諾のかたちです。――のみならた。それによると、呉の孫権は華欽というものを使者に立て、玄「湖北へお出ましの後、江南の情報が、しきりと変を伝えてきまし

ければ、四方の暴賊はみな私権を張り、人民はいつまで戦禍の苦し府にあっては宰相の権をにぎり、出ては兵馬を司るのも、こうしなこの曹操はそれを忘れることができない。自分が四隣の乱をしずめ、毅伝のあの一章は少年の日、頭にふかくしみこんで今日になっても、むしろ死すとも、不義の戦はすまじと哭いて云ったという。 ──楽王を思うこと、なお今日、あなたに仕える真心と少しも変りはない。

いものと――許都の府においても、みな心痛のまま、かくは早打ち は、当然、わが魏へ向って、何事か大きな影響を及ぼさずにはいな すものと成り終ったということです。要するに玄、孫、二者の結合

「なに。呉侯の妹が、玄徳へ嫁いだ……?」

をもって、お耳にまで達しに参りました」

曹操は思わず、手に持っていた筆を取落した。

脚を張って、茫然と、空の雲へ向けていた放心的な眼にも明らかで その愕。きが、いかに大きく、彼の心をうったかは、とたんに手

程昱が、筆を拾って、

に水を得ず、伸びんとして遂に伸び得ず、深く淵にいたものが、い 石に打たれても、なお顛倒されたことのない丞相が……?」 「丞相、どう遊ばしました。敵軍の重囲におち給うて、矢にあたり 「程昱、これが驚かずにいられるか。玄徳は人中の龍だ。彼、平生

の……豈、驚かずにいられよう」 ま荊州を獲たとあっては、これ龍が水に会うて大海へ出たようなも

「まことに、晴天一朶の雲です。けれど、彼の計を、さらに計るの

策はありませぬか」

せる手段が、絶無とはいえません」 からでしょう。――ゆえに、水龍相搏たせ、二者をして、争い闘わ ろ孫権としては、玄徳を憎むこと強く、これを謀ろう謀ろうとして 玄徳とは、水龍二つの如く、性の合ったものではありません。むし いる気振りが見える。およそこんどの婚儀も、何か底に底ある事情 「水と龍と、相結んだものを、断り離つのは難しいだろう」 「程昱はさほどまでには思いません。なぜならば、元来、孫権と

聞こう。

――その計は」

ら丞相には早速許都へお帰りあって、まず呉の使いの華欽にお会 は、周瑜です。また、重臣の雄なるは程普でしょう。……ですか い遊ばし、華欽を当分、呉へ帰さないことです」 「愚存を申しますれば、なんといっても孫権がたのみとしているの

ーそして

別に勅使を下して、これを呉の周瑜、程普に伝えます。かならず拝 る所ですから、これを呉使華欽に伝えてもおそらくお受けしますま 夏の太守とします。――江夏、南郡ともに今なお玄徳の領有してい い。ですから華欽にはさらに官職を与えてしばし朝廷にとどめおき、 「別に勅を仰いで、周瑜を南郡の太守に封じます。また程普を江

いた。 曹操は、程昱が考えたところのものを、もう結果まで読みとって

受感激いたすに違いありません」

「……むむ。そうか」

とどめておく一方、勅命を乞うて、程昱の献策どおり、勅使を呉の 国へ馳せ下した。 ながら、にわかに車駕をととのえて許昌の都へ帰って行った。 そして、呉使華欽に、大理寺少卿という官爵を与え、彼を都へ その夕、彼は、銅雀台の遊楽も半ばに、漳河の春にも心を残し

して、思いがけぬ叙封の沙汰を拝すると、たちまち病も忘れて、呉 周瑜は、その後も柴桑にいて瘡、養生をしていたが、勅使に接いのです。 しゅうゆ

侯孫権へ、次のような書簡をしたためて送った。

ります。 たり。臣、朝命に忠ならんとすれば、主家の親族にそむく科 を得べく、主家に忠ならんとすれば、朝命にもとることと相成 は一寸もありません。しかもその玄徳は今、主家のお妹君の婿 天子、一詔。を降して、いま不肖周瑜に、南郡の太守に封ずと の恩命がありましたが、南郡にはすでに玄徳あり、臣の得る地

ねがわくは、周瑜の心事を憐み給い、君公のご賢察を仰ぎ奉る

を呼んでいった。 孫権は近頃、呉の南徐 (南京附近)に都していたが、すぐ魯粛

妹婿となったのを名として、いよいよ荊州を呉へかえす肚などある 「困ったことになった。 周瑜からはこう云ってくるし、玄徳はわが

して、固い証約を取ってありますから」 「いえ、 蜀 の国を取ったら、荊州はおかえし申すと、孔明も連判

「黙れ、黙れ。そんな反故を信用して、彼が蜀の国を取るまで待

れた。

ることができなかったらどうするか」 つくらいなら、なにも心配はせん。もし玄徳が一生のうちに蜀へ入

「おそれ入ります。そこまでは」

ましてや彼には孔明という者がついている以上、素直に荊州を渡す 「それみい。其方とて、必ずそういう時期があるとは保証できまい。

わけはない」

「私の責任です。 願わくはもう一度、 荊州へ私をおつかわし下さい」

「あくまで、談じて参ります」 「きっと話をつけて来るか」

依然わるい。とうてい、このまま天下が平和に入るような兆候は、 ここ、各地の合戦は、すこし歇んでいるようだが、四囲の情勢は

何を観ても考えられない。

どを翼尾として、日夜、軍馬を調練していた。軍事そのものばかり 81-でなく、政策、経済、交通、あらゆる部門に、次の必然なるものの 荊州を中心に、今や玄徳は、孔明を師とし、関羽、張飛、趙雲な

到来に備えていた。 「 亮 軍師。 また、 魯粛が呉から使いに来たそうだが、 会ったらど

ういおう」

玄徳は、孔明に諮った。

孔明はこう教えた。

君には、声を放って、お哭きになられたがよいでしょう」 「もし魯粛が、例の問題を持出して、荊州のことを云い出したら、

「そして?」

「あとは私が、よいように、そこの所を計らいますから」

やがて魯粛はこれへ着いて、堂上に迎えられ、かつ上席に請ぜら

「恐縮です。魯粛如きに、上座をお譲り遊ばすとは」

「なぜ、ご遠慮あるか」

「以前はともあれ、今はわが主君の婿君たるあなた様をおいて、臣

下の私が上に坐るいわれはありません」

「いや、旧交を思うてのこと、左様に謙譲にせずともよい」

「でも、礼儀だけは」と、物堅い魯粛は、あくまで辞退して、横に

席を取った。

だが、答礼も終って、いよいよ用件の段階に入ると、さすがにそ

の謙虚も払って、

す。すでに呉家と劉家とは、ご婚姻によって、まったく一和同族の誼くご推察であろうが、もっぱら荊州譲渡の事を議せんためでありま「呉侯のご命をうけて、再度、それがしがこれへ参った仔細は、疾

の度はぜひそれがしの顔もたてて、お快くご返却ねがいたいと思いの度はぜひそれがしの顔もたてて、お快くご返却ねがいたいと思いにも、将来の御為にも、おもしろからぬことかと存ぜられる。こみすらある今日、なお久しく借り給うてお還しなきは、世上の聞え

くこ。彼のことばの半ばから面をおおって、よよと、声を洩らして哭き出彼のことばの半ばから面をおおって、よよと、声を洩らして哭き出ー魯粛が、厳重な語気を裡につつんで、そう切り出すと、劉玄徳は、

魯粛は愕いて、

「……これは?」と、ばかり玄徳の哭く様子を見まもっていた。

_

「粛公。あなたは、皇叔がなんで嘆き悲しむか、仔細をご存じか」孔明は、その機に、衝立の後ろから歩いてきて、魯粛へいった。

「わかりません」

して不徳を 罵るであろう。――さりとて、もし荊州を呉侯へ返せ弟も同じです。もし故なく兵を起して、蜀へ攻め入れば、世人は唾「蜀の劉゛璋は、漢朝の骨肉、いわば皇叔とは、血において、兄

ば、身を置く国もありますまい」

「わかりました」

魯粛は、座を起って、なお哭き悶えている玄徳の肩へ顔をよせ

て慰めた。

魯粛が、情にうごいた容子を見て、孔明はここぞと、共に情をこ案をめぐらしますから」 「皇叔、皇叔……。さのみ嘆き給いそ。私と孔明とで、何か良い思

めて玄徳へいった。

ように苦衷しておられる仔細を、何とぞよろしきように、お伝えひろくお持ち下さい。――また粛公には、呉侯に対して皇叔がこのましょう。万事は魯粛どのの仁侠と義心にお頼みあそばして、心を 82「わが君、そのようにご悲嘆ありましては、遂には、心身をそこね

魯粛は、急に我にかえって、大げさに手を振りながら、給われ。よも、呉侯とて、お怒りはなさるまい」

て帰ったら、今度こそ呉侯も、どうおっしゃるか分りません」「待って下さい。またしても、むなしく、そんなご返事をもたらし

に対して、表向き、きびしく約束の履行をおっしゃるでしょうが、たるお方のかくばかりな苦境をば、何とて他に見ましょうぞ。臣下「いやいや、すでにご自分の妹君を娶合せられた呉侯が、その婿

本心からご立腹なさるわけはありません」

ただ玄徳の立場に同情し、ひいては主君の意思の裏にも、一片の情温厚寛仁な魯粛は、そういわれると、とかくの議論にも及ばず、

けはある筈だと思いこんでしまった。

に船をよせて一泊したついでに、周瑜を訪ねて、この次第を話す と、周瑜は、またしても卿は孔明に一杯喰わされたのだと云い、魯 ついに今度も、空手で帰国の途につくしかなかったが、途中、柴桑

粛のあまりにも善意的な見解をなじって、 「君の性質は、全然、外交官としては零だ。ただ篤実な長者でしか

馬鹿といわないばかりに、腹を立てて云った。

らぬものだ。そして何とかかんとかいって荊州を呉へかえさない算 んの斟酌を持っているものか。すべて彼と孔明の遷延策にほかな をうかがっていた玄徳じゃないか。いわんや、蜀の劉璋などに、な 「考えても見給え。劉表に身を寄せていた頃から、常に劉表の後釜ササードルをできることを見ることである。

魯粛は、青くなった。

段をめぐらしているにきまっておるさ!」

呉侯に取次ぐ言葉がないからである。

の首はその場でなくなるにきまっている」 の前でおめおめと当り前みたいな顔して申し上げたら、おそらく卿 「もう一度、荊州へ行って来給え。そんな回答をたずさえて、呉侯

周瑜は一大秘策を授けた。

にいわれた魯粛は、それを不名誉とも思わず、あくまで自己の性格 の命ずるまま、周瑜の秘策を持ってそこから再び荊州へ引っ返した。 (君は篤実な長者とはいえるが、外交官としてはゼロだよ)と、彼

そして玄徳に会うと、こう告げた。

臣と共に、ご評議の結果、こういう一案をお立てになりました。お ありのまま、お伝えいたした所、主君も大いに同情の色を現し、群 「立ち帰って、あなたのご苦衷と、おなげきの態を、主君孫権へ、

> を通過することと、多少の軍需兵糧を補給するという確約をむすん 大軍をもって、呉が直接、蜀を取る。――だが、その節には、荊州 出した。それは、玄徳の名で蜀へ攻め入るのがまずいならば、呉の ……」と、ここに周瑜の智謀から出た退っぴきさせぬ一要求を持ち そらく、これには皇叔とても、よも異存はあるまいとの衆議からで

でもらいたいという条件であった。

玄徳は、異議なく、協力を誓った。

その前に、孔明からいわれていたので、むしろ歓びを現して、

りと申さねばなるまい」と、魯粛に恩を謝した。 りません。こう好都合に談がまとまったのも、みな足下のお骨折感 はない。ご軍勢の領内通過は、当然なことで、許すも許さないもあ 「呉の兵力をもって、蜀を攻めていただければ、これに越したこと

(このたびこそ上首尾に)

はそのあとで孔明に訊ねていた。 魯粛も心ひそかに喜悦して、早速、 柴桑へ帰って行った。

むべし、自分の策のために、周瑜の死にぎわはいよいよ近づいてき うとは、いったいどういう呉侯の肚だろうか」 「いや、呉侯の肚ではありますまい。またしても周瑜の策です。愍れ 「呉の軍勢をもって、蜀を攻め、それを取って、この玄徳に与えよ

たようです」 「なぜ、そういえるか」

って、周瑜に会い、彼の策をそのまま持って、再びこれへ来たもの 「魯粛はまだ呉の南徐まで帰ったのではありません。途中柴桑に寄

です」

「なるほど。往来の日数から数えても、ちと早過ぎるとは思ったが」

かに周瑜の考えそうな謀略で、実は荊州を取るつもりです」「蜀を攻めるを名として、荊州の通過を申し入れてきたのは、明ら

「それを知りつつ、なぜ軍師には彼の要求を容れよと、予にすすめ

たのか」

「時節到来です。お案じ遊ばすな」

も、やがて来るべきものに対し、万端の備えをしていた。 趙雲をその場に呼び、何事か策をさずけて走らす一方、孔明自身

一方

して快然と、こういった。

魯粛は、船をいそがせて、南徐に下り、呉侯に会って云々と報「今度こそ、しでやったり、初めて孔明をあざむき得たぞ!」

告した。

を励まし、また程普を大将として、彼を助けしめた。侯の共鳴もすばらしいものである。直ちに、早打ちをやって、周瑜処にもおるまい。玄徳、孔明の運命も、ここに極まったり」と、呉「さすがは周瑜、これほどな智謀の持ち主は、呉はおろか、当代何

には不自由ない程度になっていたので、彼は勇躍身を鎧って、みずこのとき周瑜は、瘡もあらかた平癒して、膿水も止まり、歩行を厉害し、また程音をプギとして、彼を買いしぬた

から戦陣に臨むべく決心した。

時の記録には、彼の心事を描いて、

笑イ楽シンデ、溯江数百里、夏口マデ来リケル。

と、ある。

おそらく彼の心境はそうだったろうと思われる。夏口へ着くと、

彼は土地の役人に訊ねた。

「たれか荊州から迎えは来ていないか」

役人は叩頭して答えた。

「劉皇叔の命をおび、糜竺と仰せられる大官が来ていらっしゃい

ます」

「ごえ臣、よいいこご告労こざしごよけ。臣人うけでこ、即置間もなく、江頭から小舟が漕いできた。糜竺であった。

用に供える金銀兵糧の用意を済まし、また、諸軍のご慰労などもど「ご遠征、まことにご苦労にぞんじます。主人もすでに、御軍需の

うしたがよいかと、心をくだいておられます」

い、船上に登って、糜竺が、こう拝伏して告げると、周瑜は尊大に構

「劉皇叔には、今どこにおらるるか」えて、

と、質し、すでに荊州の城を出て、貴軍の到着を待っていると聞

くと、周瑜は

なもてなしと礼をもって迎えられよ」ったく貴国の為に働くのであるから遠路を来たわが将士には、充分「こんどの出陣は、蜀を取って、皇叔に進上せんためであって、ま

匹

と、特にいった。

唯々諾々である。糜竺は命ぜられるまま、倉皇として帰って行いいだくだく

った。

そのあとから周瑜もすぐ上陸した。江上一帯に、兵船の備えを残

して、陸路、荊州へおもむいた。

ところが、公安まで来ても、劉玄徳の出迎えはおろか、小役人の

迎えにも会わない。

「荊州までどのくらいあるか。あとの道のりは?」

心に怪しみながら周瑜がたずねると、

「もうわずか十里しかありませぬ」と、彼の幕下たちも眉をひそめ

合っている。

「はて。いぶかしい?」と、休息しているところへ、先手の斥候が

馬をとばして来て、

州の城を望めば、まるで葬式のように、二旒の白旗がしょんぼり 「何か、様子が変です。はるか見渡すかぎり、人の影も見えず、荊

なびいているだけなんです」

周瑜は、聞くや否、

「甘寧、丁奉と来い」と、精兵千騎だけをつれて、まっしぐらに荊

州城下まで駈け通した。

「孔明も、馬鹿ではない。或いは、こっちの肚を察して、いち早く、

城を明けて逃げ出したのかも知れない_ 周瑜が八、九分まで信じていたものは、そういう見解だった。と

ころが城門へ来て、門を開けよと呼ばわると、中から

「何者だっ」と、案外、気の強い声がした。

てたちまち、それに代って炎のような、紅、の旗が高々と揚げられ、 「呉の大都督周瑜である。なぜ劉皇叔には、出迎えに出ないかっ」 大音に叱り返すと、とたんに城頭の白旗がばたんと仆れた。 そし

「周都督、何しに来たか」

と、いう者がある。

仰いで天を見ると、櫓の上に、一人の大将の姿が小さく見えた。

「オオ趙 雲ではないか。玄徳はいかがしたか」

「知らず!」と、噛んで吐き出すように、趙雲は下をのぞいていっ

し給え。それとも、城中の趙雲に御用があるか」 の計を推量し、それがしをここの番につけ置かれた。他所をさが 「わが軍師孔明には、すでに足下が――道ヲ借リテ草ヲ枯ラス――

周瑜は愕いて、馬を引っ返した。城下の町角から「令」の一字と、槍を頭上にかざして、今にも投げ落そうとする姿勢を示した。

を書いた旗を背にした一騎が近寄って来て、

攻め来り、また、黄忠は公安の山陰から現れ、魏延は孱をの横道来たところによると、関羽は江陵より攻め来り、張飛は柹帰より 五十余里まるで敵に埋ったかのような空気で――そこらの部落や下 く分りませんが、なにしろ喊の声は、遠近にひびき、さながら四方 から殺到しつつあるということです。兵数そのほか、事態はまだよ 「いよいよ、怪しいことばかりです。いま諸方の巡警からしらせて

りにしろ、周瑜をころせ――と喚き伝えているそうです」 民どもまで、口々に玄徳、孔明の叫びを真似て――呉客周瑜を生捕

「ううむっ……」

を吐いたかと思うと、そのままくたっと、馬の背から落ちてしまっ せっかく癒りかけていた金瘡ことごとくやぶれて、ぱっと、血 がばと、周瑜は、馬のたてがみに、うっ伏してしまった。

生させた。ところへまた、物見が来て、 諸将は、仰天して、周瑜の身をかかえ、 辛くも救命薬を与えて蘇

し、酒を飲んで、さながら遊山でもしているように、楽しみ興じて「孔明と玄徳は、ついこの先の山上に、 莚 をのべ、 幕 をめぐら

りしめた。 と、告げたので、周瑜はいよいよ歯がみをして、無念の拳をにぎ

いる態です」

五

とぞお心をしずめて、静かに、しばしご養生を」「怒気をお抱き遊ばすほど、破傷のご苦痛は増すばかりです。なに「惡気の侍医や近侍たちは、こもごもになだめて、安臥をすすめた。

諸人の気落ちと狼狽は無理もなかった。大軍を率いて遠く溯江し、上陸第一日にこの凶事だったから、

ところへ、呉侯孫権の弟孫瑜が援軍を引いて到着したと報じて

来た。周瑜が、

「会いたい」

というので、早速、馬をとばして迎えにやると、孫瑜はすぐ駈け

つけて、こう慰めた。

りも身の養生に努めるがいい」 呉侯に代って指揮いたすゆえ、御身はしばらく船中へ退いて、何よ「都督、余りじりじりせぬがよい。予がこれへ来たからには、万事、

ない上いて、しかし、周瑜はなお、身の苦痛など口にも出さない。火の如き憤

をもって呉侯にまみえよう」 「誓って、荊州を取り、玄徳、孔明の首を見なければ、なんの 顔

血涙をたたえて云った。

にした。 直ちに病輿を命じて彼を乗せ、ひとまず夏口の船場まで退くこと 孫瑜は、その激越を気づかってわざと相手にならない。そして

その途中である。巴丘という所まで来ると、彼方に荊州の一軍・一7

関羽の養子関平と劉封の二将が、

るとある。 「周瑜来らば――」と、虎を狩るように、厳しく陣をめぐらしてい

周瑜は聞くと、輿の中で、身をもがいて叫んだ。

「降ろせっ。輿の中よりわしを出せ。猪口才な孔明の手先、蹴ち

けれど病輿はどんどん道をかえてほかの方向へ走っていた。孫らして通る」

うじて周瑜の身を船へ移した。 縮の命令で、夏口にある船の一艘をべつな江岸へ呼び、そこから辛

するとそこへ、荊州の軍使と称する者がきて、一書を、周瑜へ渡・「男・・ディー・

して去った。――見れば孔明の手蹟である。

その文にいう。

ニ致ス。 漢ノ軍師中郎将諸 葛 亮、書ヲ大都督公瑾(周瑜)先生ノ麾下

(蜀)ヲ取ラント欲スト。

征シ転運万里、全功ヲ収メント欲シ、呉起ツトイエドモソノ規劉・璋ノ暗弱ヲ以テシテモ守ルニ足レリ。今、「師ヲ挙ゲテ遠売思エラク、不可ナリ。益州(蜀)民ハ強クシテ地ハ険。

ヲ定ムルコト能ワザラン。

抑、天下如何ナル愚人ゾ。曹操ガ赤壁ノ大敗ヲ見テ、亦、ソポ、天下如何ナル愚人ゾ。曹操ガ赤壁ノ大敗ヲ見テ、ドダ、

ルハ長計ニ非ザル也。操ガ兵一度至ラバ、江南粉滅サレ尽サン。望ム。 時呉兵ヲシテ遠伐ニ赴カシメ、自ラ守ルヲ虚シュウスノニ分ヲ占メ、ナオ、馬ヲ蒼海ニ水飼イ呉会ニ兵ヲ観ンコトヲノ愚轍ヲアエテ趁ワントスルトハ。今、天下三分シ、操ハソノグデッ

読み下してゆくうちに、周瑜は恨気胸にふさがり、手はわなな坐シテ視ルニ忍ビズ、ココニ告グ。幸イニ照覧ヲ垂レヨ。

「ううむっ……」と、太く、苦しげに、長嘆一声すると、急に、き、顔色も壁土のようになってしまった。

「筆、筆、筆。……紙を。 硯 を」

かったが、遂に書き終るや否、筆を投げて、なにか懸命に書き出した。文字はみだれ、墨は散り、文は綿々と長と、さけび、引ったくるように持つと、必死の形相をしながら、「常」(質)(注)

に、この周瑜を地上に生ませ給いながら、何故また、孔明を地に生「ああ、無念っ……無情や人生。皮肉なることよ宿命……。天すで

らかった、云い終ると、昏絶して、一たん眼を閉じたが、ふたたびくわっと

忽然、うす黒い瞼を落し、まだ三十六歳の若い寿に終りを告げた。……」「諸君。不忠、周瑜はここに終ったが、呉侯を頼む。忠節を尽して

建安十五年の冬十二月三日であったという。

鳳雛去さ

_

夜航して巴丘を出て、呉へ下って行った。

孫権は、彼の遺書を手にするまで、信じなかった。いや信じたく「なに、周瑜が死んだと?」

なかった。

周瑜の遺書には、

瑜死ニ臨ミ、泣 血頓首シテ、書ヲ主君明公ノ麾下ニ致スュ

と書き始めて、縷々といま斃れる無念をのべ、呉の将来を憂い、

その国策を誌し、そして終りには、

篤実忠良な仁者ですから、外に過れず、内に人心を獲ましょう)(自分の亡い後は、魯粛を大都督として職をお任せあれば、彼は

とも云いのこしてあった。

「周瑜のような王佐の才を亡くして、この後何を力とたのもう」孫権の悲嘆はいうまでもない。暗澹と、彼の将来を思って、

と慟哭した。

後、呉の軍事はすべて、彼の手に委ねられた。ちに励まされて、周瑜の遺言を守り、魯粛を大都督に任命した。以けれどいつまで嘆いている所ではないと、張昭そのほかの重臣た

もちろん、国葬を以て、遺骸は篤く葬られた。国中、喪に服して、

-87-

「元勲、兪公の疋を聞き、菫んで袁くよりおくやみこ来まし哀号の色もまだ拭われないうちに一船、江を下ってきて、

告げた者がある。「元勲、瑜公の死を聞き、謹んで遠くよりおくやみに来ました」と

そう関門へ告げに来た者は、すなわち趙、雲子龍であったが、正

使は諸葛孔明その人であり、玄徳の名代として従者五百余をつれて

粛が迎えて対面した。しかし故人周瑜の部下や、呉の諸将も口々に、喪を弔。 う――と称してきた者を拒むわけにもゆかなかった。 魯

「斬ってしまえ」

「これへ来たこそ幸いなれ、彼の首を、霊前に供え、故人の怨恨を

今ぞ晴らさん」

と、ひしめきあった。

けれど、孔明のそばには、たえず趙雲が油断なく眼をくばってい

るので、容易に手が下せなかった。

殺気満ち盈つ中を、歩々、水の如くすすんで、周瑜の祭壇に到しかも孔明は塵ほどな不安も、姿にとめていなかった。

M) けっぱく いにくざい。 えてきた酒、その他の種々を供え、霊前に向ってうやうやしく自えてきた酒、その他のずきぐさ るや、その前にぬかずいて、やや久しく黙拝していたが、やがて携

筆の弔文を読んだ。

公瑾周府君ノ霊前ニ致シテ曰ウ。『ウキンシュウックン』 建安十五年。 南陽、諸 葛 亮、謹ンデ祭ヲ大都督『レ、大漢ノ建安十五年。 南陽、諸 葛 亮、謹ンデ祭ヲ大都督『レ

嗚呼公瑾不幸ニシテ夭亡ス、天人倶ニ傷マザルハ非ズ…… 『ウササウ

ずにいられなかった。と切々たる名文によってつづられ、聞く者、哭くまいとしても哭かと切々たる名文によってつづられ、聞く者、哭くまいとしても哭か孔明の声は、一語一句、呉将の肺腑にしみた。弔文は長い辞句

―― 亮 ヤ不才、計ヲ問イ、「謀」ヲ求ム、皆君ガ神算ニ出ヅ。

霊アラバ我心ヲ鑑ラレヨ。此ヨリ天下再ビ知音無カラン。嗚呼公瑾今ヤ永ク別ル。何ヲ゛慮゛リ何ヲカ望マン。冥々滅々、呉ヲ扶ケ、曹ヲ討チ、劉ヲ安ンジ、首尾掎角、為ニ・完・シ、嗚

書、見なら鳥にノヽばゕリごっこうで、 セドヽトont Off こうにな読み終ると、孔明は、ふたたび地に伏して大いに哭き、哀慟の「呼痛マシイ哉。

ごとく貰い泣きして、心ひそかに、皆こう思った。真情、見るも傷ましいばかりだったので、並びいる呉の将士もこと善読み終ると「孔明は」ふたたひ地に伏して大いに哭き「哀慟の

れでは致し方もない……) 「国瑜と孔明とは、たがいに仲が悪く、周瑜はつねに孔明を亡き者 れでは致し方もない……) 「国瑜の死は、まったく孔明のためではなく、むしろ周が、……この容子ではまるで骨肉の者と別れたような嘆き方だ。察にしようとし、孔明もまた周瑜に害意をふくんでいると聞いていた(周瑜と孔明とは、たがいに仲が悪く、周瑜はつねに孔明を亡き者

その日のうちにすぐ船へ帰って行った。引き留めたが、孔明は長居は無用と、惜しまれる。袂をふり切って、

初めの殺意は、かえって、後の尊敬となって、魯粛以下、みな

とをつけて行った破衣竹冠のみすぼらしい浪人者があった。ところが、ここにただ一人、城門の陰から見え隠れに、孔明のあ

_

別れて孔明が、船へ乗ろうとした時である。竹冠の浪人魯粛は、江の岸まで孔明を送ってきた。

いきなり馳け寄りざま、臂を伸ばして、孔明の肩を引っつかんだ。

そして、大声に、

「待てっ」

を弔うと称し、呉へ来るなどは、呉人を盲にした不敵な曲者、呉 「すでに周都督を、気をもて殺しながら、口を拭いて、自らその喪

と、片手に剣を抜いて、あわや孔明を刺そうとした。

にも眼あきはいるぞ一

「何をするかっ、無礼者」と、馳けもどるなり浪人の腕をつかんで 別れて十歩ほど、そこを去りかけた魯粛も、この声に仰天して、

すると浪人は、自身ひょいと飛びのいて、

振り飛ばした。

あははは、冗談です」

と、もう剣を鞘に収めていた。

まことに人品のいやしげな男だった。 見れば、背の低い、そして鼻の平たい、 容貌といい風采といい、

孔明は、にごと笑って、

「やあ、誰かと思うたら、龐統ではないか」

と、親しげに寄って、その肩を打ち叩いた。

なんだ、貴君か」

と、魯粛も気抜けしたり、ぼっと胸をなでたりして、

「悪いお戯れをなさる。部下の血気者でも狼藉に及んだかと思って、

ぎょッとしましたよ」

の隆中に居住していた頃から、はやくも知識人たちの間には、 龐統、字は士元、襄、陽名士のひとりで、孔明がまだ襄陽郊外川ラとう、あざな しげん じょうよう 一笑して、彼はそのまま、城内へ帰って行った。

孔明ハ、臥セル龍ニ似ル。

龐統ハ、鳳凰ノ雛。

-と、その将来を囑「目されていたのだった。

荊州滅亡の後、その龐統は、呉の国に漂泊しているとは、かねて

外であった。 孔明も人のうわさに聞いていたが、ここで相見たのは、まことに意

で、孔明は、船が纜を解くまでの寸間に、一書をしたためて、

彼にこう告げて手渡した。

寛仁大度、かならず君が補佐して、君の志も、共に達することがで この書をたずさえて、いつでも荊州へやって来給え。わが主玄徳は う浪人しているつもりでもあるまいから、もし志を得んと思うなら、 きよう 「おそらく、御身の大才は、呉の国では用いられまい。君も一生そ

船影が見えなくなるまで、龐統は岸にたたずんでいたが、 孔明の船は、江をさかのぼって、遠く見えなくなった。

その後、呉では、周瑜の 柩 をさらに蕪湖(安徽省・蕪湖)へ送飄乎として、何処へか立ち去った。

どもいるし、多くの郷党もみな嘆き悲しんでいるので、名残りを篤 った。 蕪湖は周瑜の故郷であり、そこの地には故人の嫡子や女 な 😣

うさせたのであった。

り出してしまった大業に向って、まだ赤壁の一戦に大 捷を克ち獲 才を惜しんでは日夜痛嘆していたのは孫権自身であった。すでに乗 たきりである所へ、たのむ股肱を失ったのであるから、その精神的 な傷手の容易に癒えないのも無理はなかった。 けれどいくら死後の祭を盛大にしてやっても、なお恋々と故人の

厚篤実では、この時代をよく乗り切って呉の国威を完うし得るかど うかすこぶる疑わしい。――それは誰よりも魯粛自身がよく知って それに代る柱石として、魯粛を大都督に任じたものの、魯粛の温

「私は元来、取るに足らない凡庸です。周都督のご遺言といい、

にあたらせていただきとう存じます」ではありません。ぜひ、孔明にも勝るところの人物を挙げてその職君命もだし難く、一応おうけ致したものの、決して天下人なきわけ

わぬばかりに。うな人物がいるだろうかと反問した。もしおるならば推薦せよというな人物がいるだろうかと反問した。もしおるならば推薦せよとい彼の正直なことばを孫権もそのまま容れて、しかし一体、そのよ

=

「世々襄 陽の名望家で、龐統、 字 は士元、道号を鳳雛先生とも「おります。ただ一人」と、魯粛は、主君の言下に、こう推薦した。

「おお、鳳雛先生か。かねて名だけは聞いておる。周瑜と人物をく

いう者ですが」

ます。また襄陽人士のあいだでも、二人を目して、兄たり難く弟「故人の評はいえません。しかし、孔明も彼の智には深く伏していらべたら?」

「そんな偉才か」

たり難しといっています」

の才は孫子、呉子にも並ぶ者といっても過言ではないでしょう」「上天文に通じ、下地理を暁り、謀略は管仲、楽毅に劣らず、枢機

孫権は渇望の念を急にした。すぐ召し連れよとある。魯粛が数日

「まだか。まだか」のあいだ龐統を市中に探している間も

幾度も催促したほどだった。

けれどやがて魯粛がたずね当てて呉の宮中へつれて来たのを一見

すると、孫権はひどくがっかりした顔をした。

ぎへのでへぎる。 らけだし、鼻はひしげているし、髯は髯というよりも、短い不精髯らけだし、鼻はひしげているし、昏ばくいうよりも、短い不精髯の分にも、風采があがらない。面は黒疱瘡のあとでボツボツだ

でいっぱいだ。

しぎっこ (こう引い (じゅ)) と孫権は、古怪を感じながら、そ(こんなまずい男 様も少ない)と孫権は、古怪を感じながら、そ

「足下。何の芸があるか」れでも二、三の問いを試みた。

龐統は答えた。

「飯を喰い、やがて死ぬでしょう」

「才は?」と、訊くと、

「ただ機に臨んで、変に応じるのみ」と、ぶっきら棒である。

孫権はいよいよ、蔑みながら、

「まず、珠と瓦でしょうな」「足下と、周瑜とをくらべたら」

「どっちが?」

「ご判断にまかせます」

で、孫権は、ぷっと怒りを含んで奥へかくれてしまった。そして、明らかに、この黒あばたが、自ら珠を以て任じている顔つきなの

魯粛を呼び、

魯粛は、彼の感情に曇った鑑識を極力、訂正につとめた。「あんな者はすぐ追い返せ」といった。

には、かの赤壁の戦前に、周瑜に教えて、連環の計をすすめ、一「一見、狂人に似、風采もあがらない男ですが、その大才たる証拠

夜にあの大功を挙げ得た陰には、実に龐統の智略があったのです。

「いやいや、予は虫が好かんのだ」――故人の偉勲を傷つけるわけではありませんが」

「御意にかないませぬか」

「天下人なきに非ずと、そちもいったではないか。何を好んで……」

「ぜひもございません」

夜に入っていた。

魯粛は、気の毒にたえないので、自ら城門の外まで彼を送ってき

た。そして、人なき所まで来ると、声をひそめて慰めた。

「きょうの不首尾、まったく要らざる推挙をした私の罪です。 先生

もさぞ不快だったでしょう」

龐統はただ笑っている。

魯粛はことばをかさねて、

「先生はこれを機に、呉を去るお 意 でしょう」

「去るかもしれない」

「国外へ出て、もし主君をお選びになるとしたら、誰に仕えますか」

「もちろん魏の曹操さ」

もし曹操のもとへ彼に奔って行かれてはたまらないと魯粛は思っ

ていた。で、一書を一袂から取り出して、

「荊州の玄徳にお仕えなさい。かならず貴君を重用しましょう」

と極力、玄徳の徳をたたえて、紹介状を渡した。

「あははは。曹操につくといったのは戯れだよ。ちょっと君の心を量が

ってみたまでさ」

来れば、呉にとっても大慶ですから。――では、ご機嫌よう」「それで安心しました。先生が玄徳を扶けて、曹操を討つ日が早く

「おさらば」

ふたりは、相別れたが、なお幾度も振向き合った。

酔^{すいけん}

_

ここしばらく、孔明は荊・州にいなかった。新領治下の民情を視、

四郡の産物など視察して歩いていた。

彼の留守である。龐統が荊州へ来たのは。

「予に会いたいというのか」

「おそらく仕官を求めにきたものと思われますが」

「名は」

「襄 陽の龐統なりと申しました」

「さては、鳳雛先生か」

玄徳は驚いて、取次の家臣へ、すぐ鄭重に案内せよと命じた。

かねて孔明からうわさを聞いていたからである。龐統はやがて導

すこぶる無作法に佇立しているので、かれてきた。しかし堂に迎えられても、長、揖して拝すでもなく

「はて、このような男が、名声の高い鳳雛だろうか」と、玄徳は疑

いを生じた。

徳もすっかり興ざめ顔に、

のみならず、風態は卑しげだし、容は醜いときているので、玄

ことか」 「遠くご辺のこれへ来られたのは、そも、いかなる御用があっての

と、通り一遍の質問をした。

龐統はかねて孔明から貰ってある書状もあるし、魯粛の紹介状

「されば、劉皇叔が、この地に新政を布いて弘く人材を求めらを携えていたが、わざとそれを出さなかった。

るる由をはるかに承り、もしご縁あらばと来てみたわけです」 「それはあいにくなことだ。荊州はすでに治安秩序も定まり、官職

未陽県の県令の職がひとつ空いておる。もしそこでもと望むなら の椅子も今は欠員がない。――ただここから東北地方の田舎だが、

「田舎の県令ですか。それも暢気でいいかも知れませんな」

赴任して見らるるがよい

龐統は辞令を受けると、即日、任地へ立って行った。荊州東北、

約百三十里の小都会である。

も見なかった。地方時務の多くは民の訴え事であるが、訴訟などは でんでほうりだしておくため、書類は山積して塵に埋まっている。 当然、地方民の怨嗟や糾、弾の声が起った。そして中府の荊州に だが彼はそこの知事として着任しても、ほとんど役所の時務は何

耒陽県を巡視して、もし官の不法、怠慢のかどなど発見したら、「憎い腐れ儒者ではある」と、直ちに、張飛と孫乾にいいつけ、 もこの非難が聞えてきたので、温厚な玄徳も、

きびしく実状を糺して来いといった。

「心得ました」

は聞きつたえて、 二人は、数十騎の侍をつれ、吏務検察として赴いた。郡民や小吏

が、県令の顔は見あたらない。 「お待ちもうしておりました」とばかり、こぞって出迎えに立った

「役所の者はおらんのか」

張飛がどなると、一役人が、

「これに出ておりますが」

と、恐惶頓首して答えた。

「お前たちじゃない。県令はどうしたか」

「それが、……その何とも」

「明らかにいえ。お前たちを罰しに来たのじゃない」

らず、すべて、公の事には、見向いたこともありませんので」「何ぶんにも、県令龐統には、ご着任以来、今日のような場合に限

「そして、何しておるのだ。毎日……」

「たいがいは、酒ばかり飲んでいらっしゃいます」

「毎日、酒びたりか」

張飛はちょっと、。羨、ましいような顔したが、すぐ、

「怪しからん」と、云い放ちながら、その足で、県庁の官舎へ押し

かけ、

「龐統はおらんか」と、どなった。

すると奥から衣冠もととのえぬ酔どれが、赤い蟹みたいな顔して

よろよろ出てきた。そして、

「わしが龐統だが」と、昼から酒くさい息を吐いて云った。

「ふん。わしだよ」

「貴様か。県令の龐統とは」

何だ。その態は」

「まあ、掛けたまえ。耳の穴へ蜂がはいったようじゃないか。君か、

張飛とかいう男は」 龎統は驚かない。

自分の眼光に会ってこんなに驚かない男を張飛はあまり知らな

「一杯参らんか」

に来たものだ。赴任以来、汝はほとんど官務を見ていないというじ 「酒どころではない、おれは家兄玄徳の命をうけて、吏道を正し

ゃないか」

「ぼつぼつやろうと思っている」

「怪しからん怠慢だ。公事訴訟も山ほどつかえているというに」

ほどよろしいのだ。民の善性を昂め、邪性を圧える。圧えるでは「やる気になれば造作はない。政事は事務ではないよ。簡単なる

まだまずい。ほとんど、邪悪の性を忘れしめる。どうじゃ、それで

よろしいのじゃろう」

「口は達者らしいな」

「飲けるほうだ」

「酒のことではないッ」と、張飛は虎が伸びするように身を起して

呶鳴った。

ぞ に耳をかそう。しからずんば、引っくくって、汝を白洲にすえる 「では、明日中に、その実をおれの眼に見せろ。その上で汝の広言

「よろしい」

龐統は手酌で飲んでいた。

張飛と孫乾は、わざと民家に泊った。そして翌日、庁へ行ってみ

ると、訴訟役所から往来まで行列がつづいている。

「何事だ、いったい?」

白洲に聴いて、いちいち決裁を与えているのだという。 訊いてみると、きょうは未明の頃から、県令龐統が急に裁判を

多な問題を、龐統は二つの耳で訊くとすぐ、

田地の争い、商品の取引違い、喧嘩、家族騒動、盗難、

人事、雑

「こういたせ」「こう仲直り」「それは甲が悪い、笞を打って放せ」

―などと、その裁決は水のながれるようで、山と積まれた訴訟も夕 「これでは乙が不愍である、丙はいくらいくらの損害をやれ」-

方までには一件も余さず片づけてしまった。その上で、

「いかがです。張飛先生」

龐統は笑って晩餐を共にとすすめた。

張飛は、床に伏して、

「まだかつて、大兄の如き名吏を見たことがない」と、先の言を深

く謝した。

龐統は、張飛が帰るとき、一書を出して、

「主君に渡してくれ」と頼んだ。

の書簡を見て、非常にびっくりした。 魯粛から貰っていた紹介状である。玄徳は、報告を聞き、またそぷ

は分らない……」 「ああ、あやうく大賢人を失うところだった。 人は、 風貌ばかりで

そこへ四郡の巡視を終って孔明が帰ってきた。噂を聞いていたと

みえ、

「龐統はつつがなくおりますか」

玄徳は間の悪い顔をしながら、実は耒陽県の知事にやってある

というと、孔明は、

に飽いて酒ばかり飲んでおりましょう」と、いった。 「あのような大器を、そんな地方の小県になどやっておいたら、閑ま

「わたくしからも君へ推挙の一筆を渡してあるのに、それは出しま 「いや、その通りである」と、玄徳が実状を告げると、孔明は、

せんでしたか」

「見せもせぬし、語りもしなかった」

よいでしょう」「とにかく、県令には誰か代りをやって、早くお呼び戻しになるが

やがて、龐統は、荊州へ帰ってきた。

玄徳は、不明を謝し、なお、孔明と龐統のふたりに、酒を賜わっ

て、心からいった。

ねばならん。慎まねばならん」自分を扶けてくれようとは、ああ思えば玄徳は果報すぎる。 慎またことがある。……こんな不明な玄徳に、その二人までが、ともに人でも味方にすることができたら、天下の事も成ろうと予にいわれ「――むかし司馬徽徐庶先生が、もし伏 龍鳳雛ふたりのうちー

馬騰と一覧

_

龐統はその日から、副軍師中郎将に任ぜられた。

総軍の司令を兼ね、最高参謀府にあって、軍師孔明の片腕にもな

るべき重職についたわけである。

建安十六年の初夏の頃。

魏の都へ向って、早馬を飛ばした細作(諜報員)は、丞相府へ

右の新事実を報告かたがた、つけ加えてこうのべた。 「決してばかにできないのは荊州の勃興勢力です。孔明の下に、

成ったという形です。――ゆえに近頃は、もっぱら兵員拡充と、軍え、参謀府に龍。鳳の双璧が並び、その人的陣容は、 完 くここに関羽、張飛、趙子龍の三傑があるところへ、今度は副軍師龐統を加

増産や交通、商業などの活溌なこと、実に目ざましいものがありま需の蓄積に全力をそそぎ、いまや荊州は毎日、兵馬の調練、軍需の

した。 これはやがて、曹操の耳へ届いて、少なからず彼の関心をよび起

なってきた。――荀 攸そちに何か考えはないか」「果たせる哉。月日を経るほど、玄徳は、魏にとって最大な禍いと

んせん、わが魏にはなお、赤壁の痛手の癒えきらないものがあり 「捨ててはおけず、といって、今すぐに、大軍を催すには、いか

-6

ますから、にわかに無理な出兵も考えものです」

さすがに、荀攸は、常に君側にいても、よく軍の内容を観ていた。

曹操もうなずいて、

「それを実は、予も、敵国の勃興以上に、憂えているところだ」と、

正直に云った。

もって、玄徳を討たせるのです。そしてなお大令を発し給えば、各 している匈奴の猛兵や、今日まで無傷に持たれている軍需資源を (甘 粛 省・陝西奥地一帯) の太守馬騰をお召しになり、彼の擁がんしまくしょう。 ぜんぜい 一一」 荀攸は立ちどころに献策した。 「西 涼 州「こうなさい――」 荀攸は立ちどころに献策した。 「西 涼 州

地の諸侯もこぞって参戦しましょう」

「そうだ。辺境の奥地には、まだ人力も資材も無限に埋蔵されてい

曹操はすぐ人を選んで西涼へ早馬を立て、二の使いとして、すぐ

後からまた、有力な人物を向けて、軍勢の催促を云いやった。 涼州の地は支那大陸の奥曲輪である。黄河の上流遠く、蒙疆に

る。 境する綏遠、寧夏に隣接して、未開の文化は中原のように華やか でないが、多分に蒙古族の血液をまじえ、兵は強猛で弓槍馬技に長 しかも北方の民の伝統として、常に南面南出の本能を持ってい

しかし性格は温良な人だった。 ところで、太守馬騰は、字を寿成といい身長八尺余、面鼻雄異、

もと、漢帝に仕えた伏波将軍馬援の子孫で、父の馬粛の代に、

いい次男を休といい、三男を鉄という。 官を退いて、馬騰を生んだのである。 だから馬騰の血の中には、蒙古人がまじっている。嫡子を超と

「쫢」とあれば、行かなければなるまい」

馬騰は一門の者に別れを告げて都へ上った。三人の子息は国に残

し、甥の馬岱を連れて行った。

廷に上って、天子を拝した。 許都に来て、まず曹操に会い、荊州討伐の任をうけ、次の日朝

天子の御心ではなかった。 命は、曹操から出ても、名は勅命である。曹操の意志は決して、

「このたびは老骨に、荊州討伐の大命を仰せつけられて……」と、

麒麟閣へ登って行かれた。 馬騰が拝命のお礼を伏奏すると、帝は無言のまま彼を伴って、

そして誰もいない所で、帝は初めて口を開かれ、

操こそ朕を苦しめ、漢室を晦うしている大逆である。馬騰! も、その祖先を辱めることはあるまい。――思え。玄徳は漢室 ちの兵はそのいずれを伐ちにきたのか」 の宗親である。漢朝の逆臣とは、彼にあらず、曹操こそそれだ。曹 「汝の祖先馬援は、青史にものこっている程な忠臣であった。汝

ああ、朝廷のこの式微。 恐懼して、ひれ伏したまま、馬騰は御胸のうちを痛察した。 帝の御目には、涙があふれかけていた。

廷はさながら百年の氷室のようだ。楼台は蜘蛛の巣に煤け、珠簾遊びなど、世の耳目を羨。ますほどのものは聞くが、ここ漢朝の宮 見ずや、許都の府は栄え、曹操の威は振い、かの銅雀台の春の見ずや、許都の府は栄え、曹操の威は振い、かの銅雀台の春の

は破れ、欄は朽ち、帝の御衣さえ寒げではないか。 「……馬騰。忘れはおるまいな。むかし国 舅の董 承と汝へ降し

たびそちが上洛の由を聞いて、いかに朕が心待ちしていたかを察せ た朕の衣帯の密詔を。……あの折は、未然に事やぶれたが、この

遊ばすように」 「かならず宸襟を安め奉りますれば、何とぞ、御心つよくお待ち

馬騰は泣いた眼を人に怪しまれまいと気づかいながら宮門を退出

邸に帰ると、ひそかに一族を呼んで、帝の内詔を伝え、

てという。これこそ、実に天の与えた秋ではないか」 「かくとも知らず、いま曹操はこの馬騰に兵馬をあずけて、南方を伐

と、勤王討曹の旗挙げを密議した。

それから三日目である。

曹操の門下侍郎黄奎というものが、馬騰を訪れて、

ご発向はいつに相成ろうか。それがしも行軍参謀として参加するが」 「丞相のご内意ですが、なにぶん、南伐の出兵は、急を要します。

と、催促した。

「直ちに立ちます。明後日には」

馬騰は、酒を出して、黄奎をもてなした。

すると黄奎は、大いに酔って、古詩を吟じ、時事を談じたりした

「将軍はいったい、真に伐つべきものは、天下のどこにいると思う

ておられるか」

などと云いはじめた。

黄奎は、その卑怯を叱るように、眦、をあげ唇をかんで、 馬騰は警戒していた。あぶない口車と感じたからである。すると

「自分の父の黄琬は、むかし李傕郭汜が乱をなした時、禁門を守

るのに、何だって不忠な奸雄に頤で使われて甘んじておらるるのか」 渡して果てた忠臣です。その忠臣の子がいまは、心にもなく、

替 上 しかし、将軍のごときは、西涼州の地盤と精猛な兵を多く持ってい な奸賊の権門に屈して、その禄を食んでいるとは実になさけない。 と、まるで馬騰を責めるような口ぶりになってきた。

馬騰はいよいよ空とぼけて、

「奸賊の、不忠のと、それはそも、誰のことをいわれるのか」

「もちろん曹操のことだ」

「大きな声を召さるな。丞相は足下の主君ではないか」

も逆臣の命に頤使されて」 か。そのふたりが漢朝の宗室たる劉玄徳を伐ちに向われるか。 「それがしは漢の名将の子、将軍も漢朝の忠臣馬援が後胤ではない

「いったい、足下はそのような言を本気でいうのか」

「ああ、残念。将軍はそれがしの心底をなお疑っておられるとみえ

る

黄奎は指を咬んで血をそそぎ、天も照覧あれとがした。 行軍参謀たるこの人物が同心ならば、いよいよ事は成就に近い。

な、密々、詔、まで賜わっておられたか。——ああ、時節到来」と、 馬騰はついに本心を明かした。黄奎は聞くと、膝を打って、 「ほかならぬ将軍のこと。さもあらんと思っていたが、果たせるか

狂喜した。

を合図に、曹操を刺し殺してしまおうと、すべての手筈まで諜し合 発の朝、勢揃いと称して、曹操の閲兵を乞い、急に陣鉦を鳴らす そこでまず二人は、関西の兵をうながす檄文を起草し、都下出

わせた。 黄奎は夜おそく家へ帰った。さすがに酒も発せず、すぐ寝房へ

きたらしく、彼女はほの暗い廊の蔭で男と何か立ち話をしていた。良くないので叔父の黄奎が承知してくれない。今宵もそれが遊びに李春香には自分から嫁ぎたく想っている男があったが、心がらが入った。彼には妻がなく、李春香という姪が彼の面倒を見ていた。

=

.

男は李春香の耳へささやいた。

「今夜にかぎって、黄奎の様子がどことなく変じゃないか」

「そんな事はないでしょう」

たった一人の可愛い姪だ。黄奎は何か打明けるにちがいない。そっその弟から妙なことを報らせてきた。――春香、おまえが訊けば、「いや、おれの弟が、馬騰の邸に、多年お留守居役をしているが、

と訊いてごらん一

にもわかるかい。ああ争われないものだ」「わしの様子がどことなく変だということが、おまえみたいな小娘の夜叔父の心をそれとなく訊いてみた。すると黄奎は驚いた顔して、春香はまだ世間の怖さも複雑さも知らなかった。 いわるるままそ

世間へも出ない小娘なので、心中の秘を語ってしまった。のことまで案じているせいだろうと、つい相手が身内の者ではあり、彼は嘆息して、実は大事を計画しているため、その準備やら万一

そしてなお

がいい」と、遺言めいたことまでいった。かも捨てて郷里の老人達のところへ逃げて、当分、嫁にもゆかない敗したらたちまち生きていないだろう。そうしたらおまえは、何も「このことが成功すれば、わしは一躍、諸侯の列に入るが、もし失

「たいへんです。お膝もとに恐ろしいことを計っている謀叛人がおの門を叩いた。ういなかった。彼は深夜の町を風の如く奔っている。そして丞相府室外に立ち聞きしていた男は、春香がそこから出てきたときはも

下役から部長へ、部長から中堂司へ、次々に伝申されて、深更りますっ」

ながら曹操の耳にまで入った。

曹操はがばと起きた。「すぐその者を聴問閣の下へひけ」

と昼のように眠りをさました。ひとたび眠る如く消されていた相府の閣廊廻廊の万燈は、煌々のとたび眠る如く消されていた相府の閣廊廻廊の万燈は、煌々

さして動きつつあった。馬騰は書をもって曹操に、馬騰の飛檄に依って、関西の兵や近くの軍馬は、続々、許都・

「はや発向の準備もなり、近日勢揃い仕りますれば、その節は都門さして動きつつあった。馬騰は書をもって曹操に、

曹操は、奥歯に苦笑を噛みしめながら、口のうちで罵った。一言のご激励ねがわしゅう存ずる」との旨を告げてきた。

にお馬を立てられ、親しくご閲兵の上、征途に上る将士にたいし、

「たれがそんな罠にかかるか」

そして直ちに、密車二隊を奔らせ、一手は黄奎を捕縛し、一手

相府の白洲で、黄奎の顔をちらと見ると、馬騰は、口を裂き、は馬騰の家を襲って、即座に二人を召捕ってこさせた。

で未然にやぶれ去るとは」の未然にやぶれ去るとは」のぬる哉、天も漢朝を捨て給うと見えたり。二度まで計って二度ま「この腐れ儒者め!」何とてかかる大事を口外したかっ。ああ、止牙をむいて、

曹操は、指をさして、その狂態を笑い、武士に命じて、一刃の下

にその首を刎ねた。

男である。事件後、曹操に願いを出して、李春香を妻に賜わりたいら逃げ転び悲しみまどい、阿鼻叫喚をあげて、溢れ出て来る家臣、ら逃げ転び悲しみまどい、阿鼻叫喚をあげて、溢れ出て来る家臣、たが、甥の馬岱だけは、どう遁れたか、関外へ逃走していた。ここに笑止なのは密告して褒美にありつこうとした苗、沢というの密軍兵は、捕吏とともに、馬騰の邸を四面から焼きたてて、内かの密軍兵は、捕吏とともに、馬騰の邸を四面から焼きたてて、内か重撃をある。事件後、曹操に願いを出して、李春香を妻に賜わりたいを効けて、場の馬岱だは、父を慕って本国から着いた馬騰の子二人も殺害されたが、男である。事件後、曹操に願いを出して、李春香を妻に賜わりたいきが、甥の馬岱だは、父を慕って本国から着いたのが、対している。

「汝にはべつに与えるものがある」

と乞うと、曹操はあざ笑って、

の如しと、数日、往来の見世物にしておいた。と城市の辻に立たせ、首を刎ねて、不義佞智の小、人もまたかく

不倶戴王

_

、 こうない では、いよいよ 蜀 に攻め入りそうです。目下、彼の地「荊州の玄徳は、いよいよ 蜀 に攻め入りそうです。目下、彼の地このとき丞相府には、荊 州方面から重大な情報が入っていた。

曹操はかく聞いて胸をいためた。もし玄徳が蜀に入ったら、淵では活溌な準備が公然と行われている」

強国が新たに出現することになろう。彼は数日、庁の奥にとじ籠っら彼を一僻地へ屈伏せしめることはもうできない。魏にとって重大な龍が雲を獲、江岸の魚が蒼海へ出たようなものである。ふたたび

のがあった。彼が曹操に向っていうには、ここに丞相府の治書侍御史参軍事で陳群、 字 を文 長というもて対策をねっていた。

にちがいありません」ならば、呉はたちまち玄徳へ向って、協力を求め、援けを強いるならば、呉はたちまち玄徳へ向って、協力を求め、援けを強いる相は大軍をもって、反対に呉をお攻めになるがよいでしょう。なぜような関係に結ばれています。ですから、玄徳が蜀へ進んだら、丞「玄徳と呉の孫権とは今、心から親睦でないにせよ、形は唇と歯の「玄徳と呉の孫権とは今、心から親睦でないにせよ、形は唇と歯の

いている。軽々しく呉の求めにうごいたり、軍の方向に迷うようないている。軽々しく呉の求めにうごいたり、軍の方向に迷うような難に陥るというわけか。――いやそうは参るまい。彼にも孔明がつ「ふむ。さすれば玄徳は、進むに進み得ず、 退ぐに退き得ず、両

「それこそ、わが魏にとって望むところではありませんか。もし玄

徳の援助なく、玄徳は入蜀のことに没頭して、呉を、顧、みるに、暇、 をお手に入れてしまわれては如何です。玄徳なく、ただ魏と呉との なければ、ここ絶好な機会です。さらに大軍を増派し、一挙に呉国

「げにも。げにも」

対戦なら、ご勝利は歴々です_

曹操は、眉をひらいた。

と思い過ぎて思案が過っておったよ。人間日々大小万事、ここに 「余りむずかしくばかり考えこむものじゃないな。わしはちと重大

いつも打開があるな」 即時、三十万の大軍は、

ある張一遼に告げ、 南へうごいた。機は飛んで、合淝城に

---汝、先鋒となって、呉を突くべし。

とあった。

大軍まだそこへ到らぬうち、呉の国界は大きな衝動に打たれ、急

はすぐさま呉王孫権に報じられる。

孫権は、急遽、諸員を評定に召集して、それに応ずべき策を諮が

った。その結果

の協力をお求め遊ばすのがしかるべきでしょう」と、決った。 「こういう時こそ、玄徳との好誼を活かし、お使いを派して、

彼

玄徳はそれを披見して、ひとまず使者を客館にもてなしておき、 すなわち魯粛の書簡を持って、使いは荊州へ急いでゆく。

その間に、孔明が帰るのを待っていた。

そして、玄徳から、仔細を聞き、また魯粛の書簡を見ると、 南郡地方にいた孔明は、召しをうけるや馬を飛ばして帰ってきた。

「ご返辞は」と、玄徳の面をうかがった。

ようと思って」 「まだ答えてない。御身に諮った上で、承諾とも拒絶するとも答え

「では、この返書は、 わたくしにお任せおき下さいますか」

「よきように」と。 玄徳はうなずいた。

孔明は一書をしたためた。それには、呉へ向ってこう告げてある。 魏軍三十万の来るあらば、孔明これにあり。直ちに彼を撃 攘 乞う、安んじられよ。呉国の人々は枕を高うして可なり。もし

呉の使いは、 書面を持って帰って行った。しかし玄徳は安からぬ

ここちがした。

「許都の魏兵三十万のみでなく、合淝の張遼も合して来るだろう」 一大丈夫です_ 「軍師。あのような大言を申しやってよろしいのか」

「大丈夫です」

「どういう自信があって?」

た筈です。この人へわが君から密使をおやりなさい。いま馬超を語 も禍いに遭ったようですが、本国には馬氏の嫡男馬超が残ってい 「西涼の馬騰が、つい先頃、都で殺されたそうです。その子二人

三十万の精兵も魏一国に金縛りにしてしまうことができましょう」らうことは至極たやすく、しかも馬超ひとりを動かせば、曹操以下

「吉夢だろうか。凶夢だろうか」 西涼州の馬超は、ある夜、ふしぎな夢をみた。

八旗の将とは、彼をめぐる八人の優れた旗本組のことである。 あくる日、八旗の将に、この夢のことをはなした。

侯選。程銀。李湛。張 横。梁 興。成宜。馬玩。楊 秋。こうせん ていぎん りたん ちょうおう りょうこう せいぎ ばがん ようしゅう

などの面々だった。

「さあ。わからんなあ。吉夢やら凶夢やら」

悪夢らしくも考えられた。 うとしたところで眼がさめたというのである。いい夢らしくもあり、 いるところへ、多くの猛虎が襲いかかって来て危うく咬みつかれよ みな武弁ばかりなので、彼の夢に判断を下し得る者もなかった。 馬超のみた夢というのは、千丈もある雪の中に行き暮れて仆れて ――するとこの座へ突然、

「いや、それは大悪夢だ」

人で姓名を龐徳、字は令明というものであった。 「むかしから雪中に虎に遭うの夢は不祥の兆としてある。もしや と云いながら帳を排して入ってきた一人物がある。南安狟道の

身を明け暮れ案じている八旗の将もみな浮かない顔をしてしまっ 上洛中の大殿騰将軍の君に、何か凶事でも起ったのではなかろうか」 龐徳のことばに、馬騰の嫡男たる馬超は、当然、面を曇らせた。 いや馬超ばかりでなく、この西涼に留守して、遠くにある主君の

る影もない姿となって、許都から逃げ落ちてきた従兄弟の馬岱が、 なさらぬがようござる。なんの、夢などあでになるものですか」 「しかし、逆夢ということもあれば、若大将には、一途にご心配 「叔父の将軍には、曹操の兇刃に害され給い、お子達二人も、ほ けれど、この夢は、やはり正夢であった。――その夜のこと、見 わざと酒宴をすすめて、馬超の心をまぎらわせていた。

> え、この通り身を乞食にやつしてこれまで逃げのびて来た次第。… られ、目もあてられぬ災難でした。それがしはいち早く墻を跳びこ かご一族、家中の者、老幼のはしにいたるまで八百余人、残らず一 つ邸のうちにあって火をかけられ、あらかたは殺され、或いは首斬

…語るも無念でたまりません」と、涙ながら報じた。

「えっ、父上が殺されたと」

向けたと思うと、うしろへ作れて昏絶してしまった。

馬超は、愕然とさけんだ。そして蒼白な顔を、うむと呻いて仰

もちろん典医や大勢の介抱ですぐ意識はよみがえったが、終夜、

寝房のうちから無念そうな泣き声が洩れてきた。

これを糺し、そして馬超が嘆きをなぐさめかつ激励して、 と弔い、曹操の悪逆や罪状を説くにきわめて峻烈な筆鋒をもって したのであろう。まず漢室の式微をいい、馬騰の非業の死を切々 て、馬超の手に渡されたのである。その文章はおそらく孔明が起草 こういう中に玄徳の書簡ははるばると荊州から来た密使によっ

涼州より攻め上れ、 それを討たずして武門の大義名分があろうか。ねがわくは君、 ては悪政専横の賊、漢朝にとっては国を紊し帝威を貰す姦党、 ―貴君にとっては倶に天を、戴かざる父の仇敵、四民にとっ 劉玄徳また北上せん。

と、結んであった。

次の日である。

てみると、人払いした閑室へ馬超を通して、 父馬騰と親友だった鎮西将軍韓遂からそっと迎えがきた。行っ

「実は、こんな書面が曹操からきているよ」 と、それを見せてくれた。

もし馬超を生捕って檻送してよこせば、汝を封じて、西涼侯にし

てやろう、という意味のものだった。

馬超は自ら剣を解いて

「あなたの手にかかるものなら仕方がない。いざ、都へ差立てて下

さい」

と、神妙にいった。

韓遂は、叱って、

だ」と、かえって、馬超の本心を詰問した。臂の力を添えたいと思ったからだ。いったい御身の覚悟はどうなの身に、父の讐たる曹操を討つ気があるなら、義によって、わしも一「それくらいなら何もわざわざここへ御身を呼びはしない。もし御

 \equiv

馬超はふかく礼をのべて、

彼は直ぐ曹操の使者を斬ってしまい、その首を、韓遂のところへ「そのご返辞は、後ほど邸から致します」といって帰った。

「それでこそ、君は馬騰の子だ。君がその決心ならば」

届けた。

かる。 西涼の精猛数万、殺到して、ここに、潼関(陝西省)へ攻めか

たが、西涼軍の先鋒馬岱に蹴ちらされて、早くも、長安城へ逃げて、曹操のほうへ、早馬をもって、急を告げる一方、防ぎにかかっ長安(陝西省・西安)の守将鍾 繇は、驚死せんばかりに仰天し

長安は、いま廃府となっていたが、むかし漢の皇祖が業を定めた

王城の地。さすがに、要害と地の利は得ている。

「この土地の長く栄えない原因は、二つの欠点があるからです。土

いう謀計を用いれば、難なく陥っるにちがいありません」所は山野木に乏しく、常に燃料不足なことです。……ですからこう質粗く硬く、水はしおからくて飲むにたえません。もう一つの欠

龐徳の言であった。

陣を退いた。

敵にどんな計があろうも知れない」と、軍民を戒めていた。「寄手が囲みを解いたからといって、みだりに城外へ出てはならん。守将の鍾。繇は、

みな水を汲みに行き、薪を採りに行く。その他の食糧なども、こ ーローくと、西も東も、各所の門で、城外との往来が始まった。 しかし三日たち四日経つうちに、無事に馴れて、一つの城門が開

の間にと、争って運び入れた。

「何事もありませんね_

「さよう。もしもの時は、敵を見てから城内へ逃げこんでも、結構、「敵はあんな遠くですからな」

間に合いますよ」

うららかなものだった。

「ここを開けなければ、城内の士卒人民、ことごとく焼き殺すぞ」ように城内へかくれこむ。馬超は、西門の下まで、馬を寄せて、ところへ急に、西涼軍がまた攻めてきた。軍民は夕立に出会った果ては、旅芸人や雑多な商人まで、自由に出入りし始めた。

鍾繇の弟、鍾進がここを守っていたが、からからと笑って、

と罵った。

「馬超。口先で城は陥るものじゃないよ」

と、矢倉から嘲った。

すると、日没頃、城西の山から怪しい火が燃えだした。鍾進が先

に立って消火に努めていると、夕闇の一角から

「西涼の龐徳、すでに数日前より、城内に在って、今宵を待てり」

一刀両断に斬りすてられた。 という大音が聞え、敵やら味方やら知れない混雑の中に、鍾進は

早くも、龐徳の部下は、西門を内から開いて、味方を招き入れた。

馬超、韓遂の大軍はいちどに流れこみ、夜のうちに長安全城を占領

してしまった。

鍾 繇は、東門から逃げ出し、次の潼関に拠って、急を早馬に託

「至急、大軍のご来援なくば、長くは支えきれない」

と、許都へ向って悲鳴をあげた。

曹操の驚愕は、いうまでもない。――急に、方針を変えて、

⁻ひとまず、征呉南伐の出兵は見合わせる」

と、参謀府から宣言を発し、また直ちに、曹洪と徐晃を招いて、

「すぐ潼関へ行け」と、兵一万をさずけた。

曹仁がそのとき、

「曹洪も徐晃も、若過ぎますから、血気の功に焦心って、大局を 過きま

るおそれはありませんか」

「そちは、予に従って、兵糧運輸のほうを 司 -と、注意した。そして自分も彼らとともに先駆けせんと願ったが、

と、ほかの役目を命じられてしまった。

曹操は約十日の後、充分な軍備をととのえて出発した。彼も西涼

の兵には、よほど大事を取っていることがこれを見ても分る。

兀

潼関に着いた曹洪と徐晃は、一万の新手をもって鍾 繇に代り、どうかん

堅く守って、

「われわれが参ったからには、これから先、尺地も敵に踏みこま

せることではない」

と、曹操の来着を待っていた。

現れて、大あくびをしてみせる。手洟をかむ。尻を叩く、大声た 西涼の軍勢は、力攻めをやめてしまった。毎日、壕の彼方に立ち

てて悪たれをいう。

挙句の果てには、草の上に寝ころんだり、頬杖ついて、

敵はどこかね

潼関の関中だそうだ

櫓にいたのは張しゃないのか

なあに曹洪と徐晃さ

そんなら大して変りはない

腰抜け対手の戦争は退屈だ

いまに曹操が来るだろう

昼寝でもして待つとするか

などと悪罵にふしをつけて唄っている。

乞う戦友、耳くそでも取ってくれ

「待っていろ。目にもの見せてやるから」

歯がみをした曹洪が、城門から押し出そうとするのを見て、徐晃

がいさめた。

「丞相のおことばを忘れたか。十日の間は固く守れ。手だしはすな

と仰せられた」

しかし、若い曹洪は振り切って、駈け出した。

関中の大軍は、いちどに溢れでて、鬱憤をはらした。あわてふた

めく西涼軍を追いまくって、

「思い知ったか」と、四角八面に分れ討った。

徐晃の手勢も、ぜひなく後から続いて出たが、

すると、長い堤の蔭から、突忽として鼓の声、銅鑼のひびき、「長追いすな、長追いすな」と、大声で止めてばかりいた。

天地を震わせ、

「西涼の馬岱これにあり」と、一彪の軍馬が衝いてくる。

いささかたじろいで、陣容をかため直そうとする間もなく、

「たいへんだ、敵の龐徳が、退路を断った」と、いう伝令。

「まずい! 引揚げろ」

精悍西涼兵は、芋虫のように、ぞろぞろ城壁へよじ登っているで はないか。 が出払ったあとなので、守りは手薄だし、油断のあったところだし、 か、西涼の馬超と韓遂が関門を攻めたてている。いや徐晃、曹洪 踵をめぐらしたときは機すでに遅しである。どう迂回して出た****

追いつかない。曹洪、徐晃も支え得ず、関の守りを捨てて走った。 留守の鍾 繇はもう逃げ出している始末、罵り合ってみたものの 馬超、龐徳、韓遂、馬岱、万余の大軍は関中を突破すると、潼関

を加えん」と、夜も日も、息をつかせず、後から追った。 の占領などは目もくれず、ひたすら潰走する敵を急追して、「殲滅」

得た有様である。――が、許都へさして落ちる途中まで来ると、許 曹洪も徐晃も、途中多くの味方を失い、わずかに身ひとつのがれ

都を立ってきた本軍曹操の先鋒に出会い、からくもその中に助けら

れた。

曹操は、聞くと、

「すぐ連れて来い」と、中軍へ二人を呼び、そして軍法にかけて、

敗戦の原因を糾問した。

らぜひもないが、徐晃もおりながら、何たる不覚か」 に、なぜ軽忽な動きをして、敵に乗ぜられたか。曹洪は若手だか 「十日の間は、かならず守備して、うかつに戦うなと命じておいた 叱られて、徐晃は、ついこう自己弁護してしまった。

まかせて、頑としてきかないのでした」 「おことばの如く、切にお止めしたのですが、洪将軍には、 血気に

曹操は、怒って、

「軍法を正さん」と、自身、剣を抜いて、従弟の曹洪に、剣を加

えようとした。

剣をいただきます」 「――いや、それがしも同罪ですから、罪せられるなら手前も共に ユゥュ

めに命乞いしたので、曹操もわずかに気色を直し、 「功を立てたら宥してやろう」 徐晃も、身をすすめて、神妙にそういうし、諸人も皆、曹洪のた

と、しばらく斬罪を猶予した。

渭水を挟んで

曹操の本軍と、西涼の大兵とは、次の日、潼関の東方で、堂々

よ、人間の道を説いてやろう」 を打ち鼓を鳴らして、その威風にさらに気勢を加えた。 「胡夷の子、朝威を怖れず、どこへ赴こうとするか。あらば出で 彼が馬をすすめると、右翼の夏侯淵、左翼の曹仁は、 曹軍は、三軍団にわかれ、曹操はその中央にあった。 、 共に早鉦 ^{はやがね}

「おう、馬騰の子、馬超字は孟起。親の讐をいま見るうれしさ。曹操の言が、風に送られて、彼方の陣へ届いたかと思うと、

曹操、そこをうごくなよ」

銀甲をいただき鮮紅の袍を着、細腰青面の弱冠な人が、さっと、 とどろく答えとともに、陣鼓一声、白斑な悍馬に乗って、身に

野を斜めに駈けだして来た。

馬岱。また八旗の旗本、鏘(々とくつわを並べて駈け進んでくる。 「若大将を討たすな」と案じてか、それにつづく左右の将には龐徳、 「あれか。馬超とは」

遠い北辺の胡夷勢と侮っていたが、決して、彼は未開の夷蛮では 近づかぬうちから、曹操は内心一驚を喫した様子である。文化に

「やよ。馬超

「おうっ。曹操か」

「汝は、国あって、国々のうえに、漢の天子あるを知らぬな」

「だまれ、天子あるは知るが、天子を冒して、事ごとに、朝廷をか

さに着、暴威をふるう賊あることも知る」

「中央の兵馬は、即ち、朝廷の兵馬。求めて、乱賊の名を受けたい

を不義の乱といおうぞ」 るさざる所。あまつさえ、罪もなきわが父を害す。誰か、馬超の旗 「盗人猛々しいとは、その方のこと。上を犯すの罪。天人倶にゆ

いうことも、しっかりしている。これは口先でもいかんと思った

か、曹操は馬を退いて、

「あの。童を生捕れ」と、左右の将にまかせた。

の雄敵を、あざやかにかわしながら、一転、馬の腹を高く覗かせて、 于禁と張。郃が、同時に、馬超へおどりかかった。馬超は、左右 104-

うしろへ廻った敵の李通を槍で突き落した。 そして、悠々、槍をあげて、

いた西涼の大軍が、いちどに、野を掃いて押し襲せてきた。 「おおういっ……」と一声さしまねくと、雲霞のようにじっとして

その重厚な陣、ねばり強い戦闘力、到底、 許都の軍勢の比ではな

「この手に、曹操の襟がみを、引っつかんでみせる」 たちまち駈け押されて、曹軍は散乱した。馬伐、龐徳は、

の姿を捜し求めた。 と、乱軍をくぐり、敵の中軍へ割りこみ、血まなこになって、そ

そのとき、西涼の兵が、口々に、

「紅の戦袍を着ているのが、敵の大将曹操だぞ」

ら、と、呼ばわり合っているのを聞いて、当の曹操は逃げはしりながと、呼ばわり合っているのを聞いて、当の曹操は逃げはしりなが

するとなお執拗に追いかけて来る西涼兵が、「これは目印になる」と、あわてて戦袍を脱ぎ捨ててしまった。

「髯の長いのが曹操だ。曹操の髯には特長がある」と、叫んでいた。

今日こそは――と期して、味方の馬岱、龐徳よりも先んじて曹操曹操は、自分の剣で、自分の髯を切って捨てた。

「髯り長ゝりと目からに捜してらごりでト。唐杲は髯と刃ってとげ退かじと馬を駈け廻していたが、ひとりの部下が、彼に告げて、を捜していたのはもちろん馬超で、父の讐たる彼の首を見ぬうちは

ました」と、教えた。「髯の長いのを目あでに捜してもだめです。曹操は髯を切って逃げ

ので、そのことばを小耳に挟むと、そのとき、曹操は、乱軍の中にまじって、すぐそばを駈けていた

無二、無三、鞭を打った。「これはいかん」と、あわてたものとみえ、旗を取って面を包み、

「首を包んだものが曹操だぞ」

逃げのびた。 木の肌を突いて、容易に抜けない。曹操はその間髪にからくも遠くこんだ。すると誰か、槍を伸ばして突いた者がある。運よく槍は樹また、四方で声がする。曹操はいよいよ魂をとばして林間へ駈け

_

い止めていたのは誰だ」 「きょうの乱軍に、絶えず予の後ろを守って、よく馬超の追撃を喰

曹操は、味方の内へ帰ると、すぐこう訊ねた。

夏侯淵が答えて

「曹洪です」

「そうか。たぶん彼だろうとは思ったが……。先日の罪は、今日のというと、曹操はさもありなんという顔して、うれし気に、

功をもって宥しおくぞ」

「目から幾度によい、戊昜にひだみ、いこ参々によりようによら、日の危急を思い出して、幾度か死を覚悟したことなど語りだし、やがてその曹洪は夏侯淵に伴われて恩を謝しに出た。曹操は、今

はならぬ」と戒めた。超という者は敵ながら存外見上げたものだ。決して汝らも軽んじてあるが、およそ今日のような烈しい戦いに出合ったことはない。馬「自分も幾度となく、戦場にのぞみ、また惨敗をこうむったことも

まわし、高札を立てて、敗軍をひきまとめた曹操は、河を隔てて岸一帯に逆茂木を結い

「みだりに行動する者は斬る」と、軍令した。

下に寂と陣して固く守ったまま、一戦も交えなかった。 建安の秋十六年、その八月も暮れかけていたが、曹軍は、秋風の

「胡夷の兵め。また対岸で悪口を放っているな。いまいましい奴「ホスぴサ

をもって一戦仕掛けては如何でしょう」と、進言した。技術は、彼らのよくするところでありません。ひとつ、もっぱら、弩ているので、接戦となると、剽悍無比ですが、弓、石火箭などの「いったい北夷の兵は、長槍の術に長け、また馬の良いのを持っ業を煮やした曹軍の諸将が、ある時、曹操をかこんで、らだ」

「戦うも、戦わぬも、みなその腹一つにあることで、何も敵の心にすると、曹操は苦りきって、

-10

うし、一歩も陣外へ出てはならん」と、再度の布令を出した。「下知に反くものは、軍罰に処すぞ。ただ部署について、守りを固あるわけじゃない」と、云い、そしてまた、

曹操の肚をふかく察しない部将たちは、ささやき合って、首を傾

げた。

たからといえ、今度に限って、ひどく消極戦法の一点張りじゃない「どうしたんだろう。いくら馬超に追いまくられて、お懲りになっ

お髪にもすこし白いものが見えてきたしな。……花にも人間にも、「そろそろ、お年齢のせいかも知れんよ、銅雀の大宴を境として、

盛衰はある、春秋は拒まれぬ」

果たして、曹操には、もうそのような老いが訪れだしたのだろう

凡人の客観と、英雄自身の主観とにはおのずから隔たりもあり、

信念のちがいもある。

ふとでも湧くときは、強いてそれを抑圧して、べて、多分な相違が自覚されても、おそらく、彼自身そんな気持がしい。いやその肉体や精神のつかれ方などに、若い頃の自身とくらーわれ老いたり、などとは曹操自身、まだ、夢にも思っていないら

我なお若して

牧日り後、未与り年受がこう上げた。という血色をみなぎらそうと努めているのにちがいなかった。

数日の後、味方の斥候がこう告げた。

りです」 たようです。しかも今度の新手もことごとく北の精猛な胡夷ばかたようです。しかも今度の新手もことごとく北の精猛な胡夷ばなれ「潼関の馬超軍に、またまた、新手の敵兵が、約二万も増強され

聞くと、曹操は、なぜか独り大いに笑った。

ひとりが問うと、

して、共に盃を傾けた。して、いって、大いに慶賀「まず、酒宴して、祝おうか」と、のみで、その夕べ、大いに慶賀

しかし、今度は、幕将たちのほうがくすくす笑った。

曹操は酔眼を向けて、

みな恐れて口をつぐんでしまった。曹操は追求して、「卿らは、予が、馬超を討つ。計がないのを笑うのであろう」

「ひとを笑うほどな計策のある者は、大いにここで蘊蓄を語れ。みた恐れて口をつくんでしまった。曹操に追求して

予も聞くであろう」と、いった。

_

ひとり徐晃は進んで、忌憚なく答えた。みな顔を見あわせた。

河の北から大挙して越えられれば、敵は前後を顧みるにいとまなく、もの敵も手薄でしょうから、一手は西の蒲浦を渡り、また丞相は決しますまい。それがしが考えるには、渭水の上流下流は、さし「このまま、潼関の敵と睨みあいしていたら、一年たっても勝敗は

「徐晃の説は大いに良い」

曹操は賞めて、

陣を乱して潰滅を早めるにちがいないと思いますが……」

――予も直ちに、渭水の北を渡って、呼応の機を計るであろう」けて、先に河の西を渡り、対岸の谷間にひそんで予の合図を待て。「では今、汝に四千の兵を与えるから、朱霊を大将とし、それを扶

と、即座に手筈をきめた。

106

それから間もなく、西涼の陣営馬超の手もとへ、すぐ早耳迅眼はでき

の者が、

「曹操のほうでは、船 筏を作ってしきりと渡河の準備をしていま

す」という情報をもたらした。

韓遂は手を打って、

「若将軍、敵は遂に、自ら絶好な機会を作ってきましたぞ。兵法に

いう。――兵半バヲ渉ラバ撃ツベシ――と」

「ぬかるな、諸将」

とも知らず、曹操は、大軍を三分して、渭水のながれに添い、 八方に間者を放って、曹軍が河を渡る地点を監視していた。

まず一手を上流の北から渡して、その成功を見とどけ、

「まず、首尾はよさそうだ」

と、水ぎわに床几をすえながら、 刻々と報らせて来る戦況を聞い

ていた。

構築しにかかっています」 「上陸したお味方は、すでに対岸の要所要所、陣屋を組み、土塁を

すると、第二第三とつづいてくる伝令が云った。

「今、南の方から、敵ともお味方とも分らぬ一隊が、馬 煙をあげ

て、これへ来ます」

第五番目の伝令は、

「ご油断はなりません。ご用意あれっ」と呶鳴って、

が、どこを渡ってきたか、逆襲してきます。―― 「白銀の甲、白の戦袍を着た大将を先頭にし、約二千ばかりの敵」とあがね。よろい、白の戦袍を着た大将を先頭にし、約二千ばかりの敵 いや、うしろのほ

うからです」と狼狽していう。

余人しかいなかった。 その時、大軍は河を渡りつくして、曹操のまわりには、たった百

「馬超ではないか」

愕然と、人々は騒ぎ立ったが、剛復な曹操は、がくぜん

「騒ぐな」と、のみで床几から起とうともしない。

ところへ、許褚が船を引返してきて、その態を見るやいな、

ますっ。早くお船へお移り下さい」と、呼ばわった。 「丞」相丞相。敵は早くも、味方の裏をかいて、背後に廻ってい

曹操はなお

「馬超が来たとて、何ほどのことがあろう。一戦を決するまで」

土砂を降らせて、馬超、龐徳をはじめ、西涼の八旗など、猛然、 と、自若としていたが、もうそのとき彼方の馬煙は辺り間近に、

百歩のところまで迫っていた。

け早く早くと促したが、事の急に、いきなり曹操の体を背中へ負 「すわ。一大事」と、許褚は躍り上がって、曹操のそばへ馳けつ

ってしまった。 一丈を離れていた。それを許褚は、曹操を背に負ったまま、 そして岸辺まで、一気に馳け出したが、船は漂い出して 渚 から

一おうっ」

見境なく、曹操の舟へしがみついて来るのもある。 あり、泳ぎだすもあり、そこらの小舟や、筏へすがりつき、或いは 百余人の近侍、旗本たちは、ざぶざぶと水につかって、溺れるも と叫んで、一跳びに身を躍らせ、危うくも舟の中へ乗り移った。

水勢は急で、見るまに下流へ押しながされて行く。 許褚は、それらの味方を、棹で払い退けながら、

逃げ出したが、

「たかるな。舟が傾く」

「あれこそ、 「のがすな」 曹操

に馬の鞍を持ち、片手に鎧の袖をかざして、曹操の身をかばってい 西涼の兵は、弓を揃えて、雨の如く乱箭を送った。許褚は、片手

兀

た。

所で、曹軍の損害はおびただしいものがあった。 曹操ですら九死に一生を得たほどであるから、このほか、いたる

渭水の流れがたちまち赤く変じたのでも分る。 浮きつ沈みつ流

れてくる人馬はほとんど魏の兵であった。

う者が、南山の上から牧場の牛馬を解放して、一散に山から追い 出したのである。奔牛悍馬は、止まる所を知らず、西涼軍の中へ ぜならば、曹軍の敗滅急なりと見て、ここに渭南の県令丁斐とい それでも、この損害は、まだ半分で済んでいたといってよい。な

が、根が北狄の夷兵であるから、 いや、暴れただけなら、何も戦闘力を失うほどでもなかったろう

駈けこんで暴れまわった。

のこと、 「良い馬だ。もったいない」と、奪いあい、牛を見ては、なおさら

夢中になってしまったものだった。 「あの肉はうまい」と、食慾をふるい起して、思いがけない利得に

退いてしまった。 そのために西涼軍は、せっかくの戦を半ばにして、角笛吹いて

の諸将もおいおい集まってきた。許褚は満身に矢を負うこと、簑の頃、曹操は北岸へ上がって、一息ついているというので、魏 その頃、曹操は北岸へ上がって、一息ついているというので、

を着たようであったが、人々の介抱を拒んで、

「丞相はおつつがないか」と、そればかり口走っていた。

屋の中に寝かしつけた。 「貴体には何のご異状もない」と、人々は慰めて、ようやく彼を陣

の危難を笑いばなしに語っていたが、 曹操は、部下の見舞をうけながら、甚だしく快活に、終始きょう

か」と、質した。 「今日、南山の牧を開いて、官の牛馬をみな追い出したのはおまえ 「そうそう、渭南の県令を呼んでくれ」と、丁斐を召し寄せ、

丁斐は、当然、罪をこうむるものと思って、

「私です。ご処罰を仰ぎます」 と、悪びれずにいった。

「処分してやる」

をしたためて来て、丁斐に授けた。 と、曹操は祐筆をかえりみて何かいった。祐筆はすぐ一通の文

「丁斐、披見してみろ」

丁斐が畏る畏る開いてみると、今日ヨリ汝ヲ典軍校尉ニ命ズ、と

いう辞令であった。 校尉丁斐は、感泣して、

通しています。鈍智の一策をお用い賜わらば、 のはありません」 「長くこの渭南に県令としておりましたので、いささか地理には精 光栄これに過ぎるも

と、恩に感じるのあまり、 自分の考えている一計略を進言した。

「きょうばかりは、残念だった」と、韓遂に向って、無念そうに語 一方、西涼の馬超は、

っていた。 「もう一歩で、曹操を、手捕りにできた所を、何という男か、 曹操

地がするが、敵ながらあの男の働きは、凡夫の業でない」を背なかに負って、船へ跳び移ってしまった。今でも目に見える心

韓遂は何度もうなずいて、

-それは道理です。あれは有名な魏の一将、許褚ですからね.

りが譙国の人、すなわち許褚です。強いわけですよ」 その大将に二名の壮将を置き、ひとりは陳国の人、典章と申し、 ましたが、この人はすでに戦歿して今はおりません。その残るひと よく、鉄。の重さ八十斤もある戟を使って、勇猛四隣を震わせてい を選び、これを虎衛軍と名づけて、常に親衛隊としていました。 「お味方に、八旗の旗本ある如く、曹操もその旗本の精鋭中の精鋭

「なるほど、それでは――」

虎侯ともいうそうです」 「その力は、猛る牛の尾を引いてひきもどしたという程ですからな。 ―で世間のものは、彼を綽名して、虎痴といっています。また、

そしてまた、韓遂は、 かたく馬超に忠告した。

「以後は、あの男を陣頭に見ても、 一騎討ちはなさらないほうがよ

て、西涼の背後を衝こうとする態勢にあるとあった。 斥候の報告によると、曹操の軍は、それから後しきりと河を越え

Ŧ

韓遂は重ねて云った。

延引すると、曹操が今の陣地に塁壕を構築して、不落の堅城とし 「味方にとって、ここに一つの悩みがあります。それはこの戦いが

てしまうことで、そうなると、容易に渭水を抜くことはできませ

馬超も同感だった。

「軽兵を率いて、この韓遂が、曹操の中軍へ突撃しましょう。あな 「いかにも、攻めるなら今のうちだが」

たは、北岸を防いで、敵兵が河を越えてこないように、よくこの本

陣を固めていてください」

龐徳をも連れて行かれるがよかろう」 「よし。防ぐには、自分一手で足りる。御身ひとりでは心もとない。

にかけて、曹操の陣を奇襲した。 韓遂と龐徳とは、直ちに、西涼の壮兵千余騎を選んで深夜から暁

擬兵偽旗を植えならべて、実際の本陣は、すでにほかへ移してい校尉丁斐の策を用いて、河畔の堤の蔭に沿うて仮陣屋を築かせ、つた。かねてこの事あるべしと、曹操は、渭南の県令から登用したった。かねてこの事あるべしと、曹操は、渭南の県令から登用した けれど、この計画は、まんまと曹操の思うつぼに落ちたものであ

た上から土をかぶせ、陥し穽を作っておいたのを、西涼勢はそう たのである。 のみならず、附近一帯に、塹をめぐらし、それへ棚をかけて、ま

とも知らず、 「わあっ」

と喊声をあげながら殺到したのだった。

当然、大地は一時に陥没し、 人馬の落ちた上へ、また人馬が落ち

阿鼻、叫、喚、救けを呼ぶ声、さながら桶の泥鰌を見るようだっぁ ば きょうかん

「しまった」

い出して、 た。 は、 坑口から槍の雨を降らしている敵兵十人余りを一気に 手足にからむ味方を踏みつぶして、ようやく坑から這

突き伏せ、

「韓遂っ。韓遂っ」

と、呼びながら、主将のすがたを捜していた。

そのうちに、敵の曹仁の一家曹永というものに出合った。 龐徳は、渡り合って、一刀のもとに、曹永を斬り伏せ、その馬を

奪って、さらに、敵の中へ、猛走して行った。

ちらしてくれたので、その間に、土中から躍り出し、これも拾い馬 に跳び乗って、辛くも死地をのがれることができた。 韓遂も、坑に墜ちて、すでに危なかったが、龐徳が一時敵を追い

何にしても、この奇襲は、大惨敗に終ってしまった。

敗軍を収めてから、馬超が損害を調べてみると、千余騎のうち三

分の一を失っていた。

とげたことだった。 ものは、 このは、かの旗本八旗のうちの程銀と張「横のふたりが敢ない死を数としては、少なかったともいえるが、馬超の心をひどく挫いた

しかし壮気さかんな馬超は、

「こうなれば、なおさら、曹操が野陣しているうちに撃破してしま

わねば、永久に味方の勝ち目はない」

手に進み、馬岱、龐徳をうしろに備えて、ふたたび魏の野陣を夜 と、その日のうちに、第二次襲撃を企てて、今度は身みずから先

ところが、さすがに曹操は、百錬の総帥だけあって、

「今夜、また来るぞ」と、それを予察していた。

馬超の性格と、初度の敵の損害の少なかった点から観て、早くも、

そう覚っていたから、馬超の第二次強襲も、なんの意味もなさなか った。

意に突喊してみたところ、そこは四方に立ち並ぶ旗や幟ばかりで、 六里の道を迂回して、西涼の夜襲隊が、曹操の中軍めがけて、不

幕舎のうちには、一兵もいなかったのである。

「さては」 「やや。空陣だ」

とするとき、一発の轟音を合図に、四面の伏勢がいちどに起って、 と、空を搏ってうろたえた悍馬や猛兵が、むなしく退き戻ろう

「馬超を生かして還すな」と、ひしめいた。

西涼軍の一将成宜はこのとき魏の夏侯淵に討たれ、そのほかの

ちらして善戦したが、結局、敗退のほかなかった。 将士もおびただしく傷つけられた。馬超、龐徳、馬岱など、

かくて、西涼軍と中央軍とは、渭水を挟んで一勝一敗を繰り返し、10-

勝敗は容易につかなかった。

渭水は大河だが、水は浅く、流れは無数にわかれ、河原が多く、

瀬は早い。

できる。 所によって、深い淵もあるが、浅瀬は馬でも渡れるし、徒渉も

していたが、夜襲朝討ちの不安は絶え間がない。 ここを挟んで、曹操は、北の平野に、野陣を布いて、西涼軍と対

「曹仁、早くせい」

曹操は常に急き立てていた。

水の淵に船橋を架け、二万人の人夫に石材木を運搬させ、沿岸三ヵ 半永久的な、案の構築をである。曹仁は、築造奉行となって、渭

西涼の馬超は、知っていたが、

所に仮城を建つべく、日夜、急いでいた。

「まあ、造らせておけ」

梨子か桃の実ぐらいな鞠をぽんぽんほうる。踏みつぶしても消え 船、筏も浮橋も、見事に炎上してしまった。何で製したものか、れ柴、油弾などを仮城へ投げかけ、河には油を流して火をかけた。 「それ、焼討ちにかかれ」と、河の南北からわたって、焔゚ロザ、枯 そして工事が八、九分ぐらいまでできたかと見えたところで、

さかる。

こういう厄介な武器を持つ西涼軍に対して、さすがの曹操も、 ほ

とんど頭を悩ましてしまった。

智者荀攸がいう。

「渭水の堤を利用し、土塁を高く築いて、蜿蜒、数里のあいだを、壕

と土壁との地下城としてしまうに限りましょう」

「地下城。なるほど。土の地下城では、焼討ちも計れまい」 さらに、人夫三万を加え、孜々として、地を掘らせた。

坑から上げた土は、厚い土壁とし、数条の堤となし、壇となし、

ここに蟻地獄のような土工業が約一ヵ月も続いた。

西涼軍のほうからも眺められていたにちがいない。しかし、手を下 さながら埃及のピラミッドを見るような土城が竣工しつつある。

しかねているものか、しばらく夜襲も焼討ちもなかった。 すると、渭水の水が一日増しに涸れて来た。かなり雨が降り続い

-111-

ても水が増えない。変だと思っていると、一夜、豪雨が降りそそい

だ。その翌朝である。

「津浪だっ」

「洪水だっ」

物見が絶叫した。

人馬を高い所へ移すいとまもなく、遥か上流のほうから、 真っ黒

な水煙をあげて、奔々の激浪が押してきた。 遠い上流のほうで、もう半月も前から、西涼軍が、壥を作って、

れてしまった。壕も坑も埋まって跡形もない。 河水を溜めていたものである。 なんで堪ろう。小石まじりの河原土なので、土城は一朝にして崩

九月に入った。

ない。ばっと割れると油煙が立ち、大火傷をする。そしてなお燃え

天をおおって、ここ幾日も雪ばかりなので、両軍とも、兵馬をひそ 北国のならいで、もう雪が降りだしてくる。灰色の密雲がふかく

味方はこの野陣のままでは、冬中吹雪にさらされておらねばならぬ。 「西涼の胡夷どもは、寒さに強いし、また潼関へも引き籠れるが、

めたまま睨み合っていた。

何とか、よい工夫はないか」

飄然、名を告げて、この陣営へ訪れて来たものがある。 曹操とその幕将が、その日もしきりに討議しているところへ、

「これは、終南山の隠居、道号を夢悔という。翁でござる」

容も凡ではない。

曹操が、見て、

何しに来たか」

と、問うと、夢梅は、

を申しあげに来ましたのじゃ」と、いう。 いるらしいが、なぜ火水に潰えぬ城をお造りにならぬかと、愚案 「この夏頃から、丞相には、渭水の北に城寨を築こうとなされて

なお、夢梅道人がいうには、

される心配もありますまい」 要するに、氷の城ですから、火に焼かれるおそれもなく、河水に流 して凍りつき、いちど凍った堅さは、これから春までは解けません。 に、それを構築し、築地した後へすぐ水をかけておけば、一夜に 「これから必ず北風が吹きましょう。小石まじりの河原土でも、急

告げ終ると、老翁はすぐ、飄乎として、どこかへ立ち去った。

昼から三、四万の人夫を動員しておいた。

一日、北風が吹き出した。曹操は、夢梅居士の教えを行う日と、

日が暮るるとすぐ、

「夜明けまでに、もう一度、土城を築け」と、命じた。 基礎のあった上であるから、夜明け近くにはほぼ構築された。 この夜は、将士もすべて、総がかりに、それへかかった。

数万の 縑 の 嚢 や革の嚢が用意されてあった。河水を汲んでは「水を注げ。全城へ水をかけろ」

手渡しから手渡しに運び、土門、土楼、土壁、土塁、土孔、土房、 土窓、築くに従って水をかけ、また水をかけた。

西涼の軍勢は、夜明けの光に、対岸をながめ、驚き合っていた。

「やあ、城ができている」

「いつの間に」

「たった一夜のうちだ」

「見ろ。あれは、この前の土城ではない。氷の城郭だ。氷城だ」 韓遂なども出て、大いに怪しみながら、小手をかざして

いたが、

を見届けてくれん」 「また何か、曹操の小策に違いあるまい。馳け破って、城郭の正体

「来たか、北夷の子」

曹操は馬を進めて、待っていた。

と、にわかに、鼓を打ち、

大兵を集結して、河をわたった。

馬超は、例によって、

その側に、朱面虎髯、光は百錬の鏡にも似た眼を、じっとこちら へ向けている武将が身構えていて油断もない。 「おのれっ」と、牙を咬み、一躍して、曹操を突き殺そうとしたが、

(これだな、虎痴の綽名のある例の男は?)

直感したので、馬超は、いつになく自重して、わざと試しにいっ

てみた。

を示す。聞き及ぶ、曹操は、口頭の雄で、逃げ上手だというが、 「西涼の大将たるものは、いえば必ず行い、行えば必ず徹底して実

汝そこを動かず、必ず馬超と一戦するの勇気があるか」

すると、曹操は

「知らないか、田舎漢、予の側には常に、虎痴許褚という猛将が「知らないか、いなかもの

おることを。――なんで天下の鼠をはばかろうや」

「すなわち、譙。郡の許褚とはおれのこと。汝、そこを動かず、 云いもあえず、曹操のかたわらから馬を乗り出したその虎痴が、

戦するの勇気があるのか」

と、いった。

その声は人臭いが、猛気が百獣の王に似ている。

いつぞや韓遂にいわれたことばを思い出して、馬超も、心に怕

れを生じたか、

「また、会おう」と云い捨てたまま馬をかえし、軍を退いてしまっ

これを見ていた両軍の兵は、駭然として、

(馬超すら恐れる許褚というものはいったいどれほど強いのか)

と、身の毛をよだてぬ者はなかったという。

「どうだ、きょうの虎侯、皆見たか。真にわが股肱というべしで 曹操は、氷城の陣営にかくれると諸将をあつめて、

ある」と、賞め称えた。

許褚は、大面目をほどこしたので、

「明日はかならず、馬超を生捕ってご覧に入れん」と、高言した。

すなわち、その日彼は、敵へ宛てて決戦状を送り、

「明日、出馬しなかったら、天下に嗤ってやるぞ」

と、云い送った。

馬超は怒って、

「確かに、出会わん」

と返書して、夜が白むや、 龐徳、馬岱、韓遂など、陣容物々し

く、押し寄せてきた。

おうっと、一言、馬超もきょうは敢然と出て戦った。 「待っていた」とばかり、許褚は馬を躍らせて、馬超へ呼びかけた。

中に引き分れ、ふたたび馬をかえて人まぜもせず戦い直した。 戦うこと百余合、双方とも、馬を疲らせてしまったので、各ゝ陣

Ξ

勝負は果てない。

火華をちらし、槍を砕き、 また戟をかえて、鏘々、夏々、斬

|ああ……」

り結ぶこと実に百余合。

と、両軍の陣は、 ただ手に汗を握り、うつろにひそまり返って見

ているだけだった。

た西涼の馬超を敵にまわして、これ程に戦う者も、許褚をおいては (――虎痴許褚を相手に、あれほど戦い得る馬超も馬超なり、ま

あるまい。実に、虎痴も虎痴なり)

と、ことばに出す余裕もないが、誰とて、感嘆しないものはなか

そのうちに、 許褚は、

「ああ暑い。この大汗では眼をあいて戦えぬ。馬超、待っておれ」

いと味方の陣中へ引っ込んでしまった。 斬り合っているうち、ふいに、こう吐き捨てると、 またまた、ぷ

(どうしたのか?)

怪しんでいると、 許褚は、甲の路も戦袍も脱ぎ捨てて、赤裸に

なるやいな、

「さあ、来い」

ふたたび大刀をひっさげて現れてきた。

きに狂う龍虎両雄の、 息入れていた様子。 その間に、馬超も、汗を押しぬぐい、新しい槍を持ちかえて、一 ーーたちまち、砂塵を捲いて、霹靂に似た喚 三度目の一騎討ちが始まった。

威震八荒の許褚

一おうっッ」

ながら火焔を噴くような烈槍を、りゅうりゅう眼にもとまらぬ早業 と、吠えて、馬上、相手へ迫ると、馬超もまた、壮年悍勇、さ

ふたたび振りかぶる。 刀、かつんと、槍の柄に鳴った。 ――馬超、さッと引く。許褚

で突き捲くってくる。

一やおうッ」

るや否、退く槍の柄をつかんで、ぐいと、小脇に挟んでしまった。 「くそっ」と牙を咬んで、許褚はそれを横に払い、刀を地に投げ 奪られじ。 身をかわしざま、馬超は、敵の心板を狙って、猛烈に突いた。

奪らん。

ふたりの阿呍は、雷と雷が黒雲を捲いて吠え合っているようだ 奪られたほうがすぐその槍で突かれるのだ。渡せない。

それを聞いていた夏侯淵は、

離せない。

めく。いなないて竿立ちになる。すでにまた、ふたりは槍の半分ず つを持って猛烈な激闘を交えていた。 ばきッと、槍が折れた。だだだだっと、双方の駒がうしろへよろ

「退鉦、退鉦打て」

にも関わると見たからである。 曹操はさけんでいた。大事な虎痴に万一があっては、全軍の士気

曹軍の

陣角へ、わっと強襲してかかった。 が、この微妙な戦機に、龐徳、馬岱の勢は、いちどに、

には西涼軍の士気強く、 その手の敵、夏侯淵、曹洪など、面もふらず戦ったが、全体的 ひた押しに圧され、乱軍中、許褚も肘へ

二本の矢をうけた程だった。 一守って出るな」

この日馬超も、軍を収めてから、 曹操は、氷城をとざした。氷の城郭も、こうなるとものをいう。

如きものは見ない。真に彼は虎痴だ」と、舌を巻いていた。

「自分も幼少からずいぶん手ごわい人間にも遭ったが、まだ許褚の

たりに四千騎をさずけて、渭水の西に伏せ、自身、河をわたって、 正面を衝こうとしたが、事前に、馬超のほうから軽兵数百騎をひき い、氷城の前に迫り、人もなげに、諸所を蹂っ躙して去った。 その後、曹操のほうにも、何ら、良計はなく、徐晃と朱霊のふ

この曹操の生は安んじられない」といった。 って、 「実に馬超という敵は尋常な敵ではない。彼の生きてあらん限りは 土楼の窓から、それを眺めていた曹操は、 かぶっていた盔をほう

まで御心を傷ましむるとは、何たることか。われ誓って、馬超と共 「これほどお味方に人もあるものを、ただ一人の馬超のため、それ

出た。 と、その夜、曹操が止めるもきかず、部下千騎をひきいて討って

に刺しちがえん」

兀

案のじょう、それから程なく夏侯淵の手勢、苦戦に陥つ、と報ら

せが来た。

「曹操が出てきたぞ」と伝えあうや、かえって、意気を・吐にした。 捨ててもおけず、曹操はすぐ自身救援におもむいたが、敵勢は、

のみならず、馬超は、曹操の中軍を割って、

「天下の賊。逃げるな」と、彼を追い馳け追い廻した。

力を割き、渭水の西から、大兵を渡していた。 げこんでしまった。しかし、その間に、苦戦をしのんで、一方の兵 所詮、力ずくではかなわぬと思ったか、曹操はまた氷の城塞へ逃

「出よ、曹操。――汝は蓑虫の性か、穴熊の生れ変りか」

馬超は氷城の下まで迫って、罵っていた。

ところへ、後陣の韓遂から伝令があって、

「後方に異状が見える」

と、いう急報。

によると、 ・暁早く、馬超は総勢を収めて、陣地へ帰った。その日、 情 報

陣地の構築を始めています」 「昨夜、渭水の西をわたった大軍は早くもお味方の背後へまわって、

掌から水が漏れたように、韓遂は、

「うしろへ廻ったか。 ……遂にうしろへ?」

駭然とさけんだ。

て、この冬を休戦し、春とともにべつな計をお立てなさい、という た。如かず、これまで斬り取った地を一時曹操に返し、和睦をし のである。戦機を観ること、さすが慧眼だった。 そこで韓遂は、万事は休すと思ったか、方針一転を馬超に献言し

楊秋、侯選などの幕将も、ようしゅう、こうせん

「もっともなお説」

と、みな馬超を諫めた。

の申入れである。 数日の後、楊秋は一書をたずさえて、曹操の陣へ使いした。

賈詡にこれを計った。 曹操は内心、渡りに舟と思ったが、まず使者を返して後、

ゆるし、こちらはこちらで、手を打てばよい」 「明らかに偽降です。が、突き放す策もよくありません。 賈詡はいう。 和睦を

「手を打つとは」

超の勇があってこそ、生きてきます。ふたりを相疑わせて疎隔して しまえば、西涼勢とて、枯れ葉を掃くようなものじゃありませんか」 「馬超の強さは、韓遂の戦略があればこそです。韓遂の作戦は、馬 次の日。

し、馬超はなお数日疑っていた。 馬超の手もとへ、曹操から返簡が来た。色よい返事である。 しか

げる通路を作っているが、いかにもわざとらしい。曹操の部下徐晃 「曹軍は、この二、三日、後方の支流に浮橋を架けて、都へ引き揚

謀将の

「奇、正。こう二態は、軍隊の性格で怪しむに足りません。しかと朱霊の軍は、なお渭水の西にあってうごかないじゃないか」

し要心は必要でしょう」

と、韓遂も油断せず、一陣は西に備え、一陣は曹操の正面に向け、

厳として気をゆるめなかった。

敵方の警戒ぶりを聞くと、曹操は、賈詡をかえりみて笑った。

「まず、成就だな」

武者をひきつれ、自身条約のため、場所へ出向いた。(やがて約束の日、曹操は盛装をこらして、おびただしい諸大将や)

知らない西涼の兵隊は、途々に堵列して、まだこのような豪壮絢爛な軍隊を見たこともなく、曹操の顔も

「あれは何だろ?」

「あれが曹操か」

などと、物珍しげに、指さし合う。

曹操は、駿馬にまたがり、錦袍金冠のまばゆき姿を、すこし左

右にうごかして、

眼は四つはなく、口は二つないぞ。ただ異なるのは智謀の深さだけ「やよ、西涼の兵ども、予を見て、珍しと思うか。見よ、予にも、

だ」と、戯れをいった。

みな口を結んでしまった。 戯れにはちがいないが、西涼の軍勢は、その笑い顔に震い怖れて、

新中作新

_

韓遂の幕舎へ、ふいに、曹操の使いが来た。

「はて。何か?」

使いのもたらした書面をひらいてみると曹操の直筆にちがいな

く、こうしたためてある。

長ジテハ、君ト知ッテ、史ヲ語リ、兵ヲ談ジ、天下ノ為、大イ君ト予トハ元ヨリ仇デハナク、君ノ厳父ハ、予ノ先輩デアリ、

二成スアランコトヲ、誓イアッタ友ダッタ。

ルルモ、旧情ハ一日トテ、忘レタコトハナイ。端ナクモ、過グル頃ヨリ敵味方トワカレ、矢石ノアイダニ別

乞ウ、一日、旧友韓遂トシテ来リ給エ。イマ幸イニ、和議成ッテ、予ナオ数日、渭水ノ陣ニアリ。

「ああ、彼も、忘れずにいるか」

韓遂は、旧情をうごかされて、翌日、 甲 も着ず、武者も連れず、

「やあ、ようこそ」

ぶらりと、曹操を訪れた。

いとも親しげに、平常の疎遠を詫びた。曹操はなぜか、内へ導かない。自分のほうから陣外へ出てきて、

そしてなお、いうには、

「お忘れではあるまい。あなたの厳父とは、共に孝廉に挙げられ、

学を出、共に官途へ進んでからは、 少壮の頃には、いろいろお世話になったものだ。後あなたも都の大 いつともなく疎遠に過ぎたが、

今は、お幾歳になられるか」

「それがしも、すでに四十です」

を論じ、家を出ては、白馬金鞍、花を尋ねて遊んだこともあった 「むかし、都にあって、共に、青春の少年であった時代は、よく書

が、そのあなたも、はや、中老になられたか」

「丞相も、変りましたな。少し鬢にお白いものが見える」

「ははは。いつか、ふたたび太平の時を得て、むかしの童心に返ろ

うではないか。――おう今日は、折角、此方から書面しながら失礼

ですが、幕中、折わるく諸将を会して要談中なので」

「いや、また会いましょう」

韓遂は、気軽に戻った。

安からぬ顔色をしていたが、翌る日、馬超はほかの用事にことよ この態を、見ていたものが、 すぐ馬超へ、ありのままを話した。

せて、韓遂を呼び、

「時に、貴公は昨日、渭水のほとりで、曹操と、何か親しげに、

密談をしておられた由だが……」

「密談を」――韓遂は、眼をまろくしながら、顔の前で手を振った。 「青空の下の立ち話。密談などした覚えはない。また軍事について

は、爪の垢ほども、語りはしません」

「少年時代、共に都にあった事どもを、二、三話して別れただけで 「いや、貴公が云いださなくとも、曹操のほうから何か」

「そうか。そんなに古くから、彼とは、親しい仲であられたのか」 馬超は、嫉ましげな、眸をした。が、韓遂は、まったく、何の後

ろ暗いこともないので、笑い話をして帰った。

ひそやかな、陣中の一房へ、曹操はその晩、賈詡を呼びよせて

「どう見えた。きょうの計は」

「妙趣、ご奇想天外です」

「西涼兵の眼に、映ったろうな」

りません。あれでは、まだ韓遂を、心から疑わせるまでには行きま 「もちろん、もう馬超の耳へ入っておりましょう。が、もう一つ足

すまい」 「それには、どうしたらよいか<u>」</u>

「丞相からもう一度、親書を韓遂にあててお書きなさい」

「そうそう、用もないのに、書簡をやるのもおかしかろう」

思わせぶりに、失筆で塗りつぶし、また削り改めたりなどして、一 せんから。――文字などもわざと朧にしたため、肝要らしい所は、 「かまいません。文章をもって、相手を動かすのが目的ではありま

見、おそろしく複雑で重要そうに見えさえすればよろしいのです」 「むずかしいのう」

ここまで来れば、はや計略は、成就したも同じことです」 しんで、きっとそれを、馬超の所へ見せに行くに違いありません。 ますまい。必定、受取った韓遂も、一体、何だろうと、おどろき怪 「兵馬を費うことを考えれば、そのくらいな労は、何ほどでもあり

せ、出入りを見張させていた。 その後、馬超は、腹心の男をして、ひそかに、韓遂の陣門に立た

「今夕、またも、曹操の使いらしい男が、韓遂の営内へ、書簡を届

けて立ち去りましたが?」

腹心の者から、こう報らせがあったので、馬超は、

もとらぬまに、ぷいと出て、韓遂の陣門を叩いた。 「果たして!」と、自分の猜疑を裏書きされたものの如く、夜食

「何事ですか、おひとりで」

韓遂は、驚いて迎えた。休戦中ではあるし、幾分の 寛 ぎもあっ

晩餐に向っていたところだった。

「いや、急に戦いもやんで、何やら手持ち不沙汰だから、一盞、馳

走になろうかと思って」

もしつらえて、盞を洗ってお待ち申しておりましたのに」 「それならば、前もって、お使いでも下されば、何ぞ、陣中料理で

「なに、こういうことは、不意のほうが興味がある。ひとつ貰おう

「恐縮です。このままの杯盤では」

「いやいや、構わん」と、一杯うけて、

⁻ときに、その後は、曹操から何か云ってきたかね<u>-</u>

みながら独りここへ置いて、判じ悩んでいるところです」と、卓の 「あれきり会いませんが、たった今、妙な書簡をよこしたので、飲

上にひろげてある書面へ眼を落して答えた。

馬超は、初めて、それへ気がついたような顔して、

「なんの意味やら、読解がおつきになりますまい。それがしにも分 「どれ、……」と、すぐ手を伸ばして取った。

らないのですから_

馬超は返事も忘れてただ見入っていた。

辞句も不明だし、諸所に、克明な筆で、塗りつぶしたり、書入れ

がしてある。いかにも怪しげな書簡だ。馬超は、袂へ入れて、

|借りて行くぞ

「どうぞ……」とは答えたものの韓遂は妙な顔をしていた。 |---そ

んな物を何にする気かと。

彼はすぐ出向いたが、馬超はすこし血相を変えていた。 すると翌日、使者が来た。馬超からの召出しである。もちろん、

うも不穏な文字が見える。御身は、まさかこの馬超を、曹操へ売る 「ゆうべ、立ち帰ってから、曹操の書簡を灯に透かしてみると、ど

気ではあるまいな」

「それで先頃からの、変なご様子の原因が解けました。言い訳もお 「怪しからぬお疑い」と、韓遂も、色をなしたが、

耳には入りますまい」

日、それがしが、わざと曹操の城、寨を訪ね、過日のように、陣外 「それよりは、事実をもって、君に対する信を明らかにします。明 18-

「いや、申し開きがあるならばいってみたがいい」

曹操を討ち止めて下さい。曹操の首を挙げれば、それがしのお疑い で曹操と談笑に時を過しますから、あなたは附近に隠れて、不意に、

など、おのずから釈然と氷解して下さるでしょう」

「御身はきっと、それをしてみせるか.

「ご念には及びません」

即ち、韓遂は翌る日、幕下の李湛、馬玩、楊、秋、侯選などを即ち、韓遂は翌る日、幕下の李湛、馬玩、ようしゅう、こうせん

連れて、ぶらりと、曹操の城寨を訪ねた。

く と 曹操は先頃から、例の氷城にもどっている。取次ぎのことばを聞

「曹仁。 代りに出ろ」

と、居合わせた曹仁の耳へ、何かささやいた。

まま韓遂のそばへ寄り添って、曹仁は、衆将を従えて、うやうやしく陣門を出てくると、馬上の

れる。しかし、事前に発覚しては一大事、ずいぶんご油断なく、馬「いや、昨夜は、お手紙を有難う。丞相もたいへんよろこんでおら

てしまった。 云いすてると、さっと立ち去って、何いうまもなく、陣門を閉め

超の眼にご注意を」

ったが、旗本たちに抱き止められて、悶々と一時剣をおさめた。物陰にいた馬超は激怒して、韓遂が帰るや否、彼を成敗すると猛げ

Ξ

悄然と、韓遂は自分の営へ、戻ってきた。

「われわれは将軍の二心なき忠誠を知っています。それだけに心外八旗の中の五人の侍大将たちが、早速やって来て慰めた。

すまい。いっそのこと、今のうちに、将軍も曹操に降って、安身長でたまりません。馬超は勇あれど智謀たらず、所詮は曹操に敵しま

栄の工夫をなすっては如何です」

て、曹操に降ろうぞ」にいい、曹操に降ろうぞ」に対して、生前の好誼に酬う義心一片。何で今さら、彼を捨て「慎め、卿らは何をいうか。この韓遂が起ったのは、馬超の父馬

つもりですか」
えって、あなたを邪視しているのに、そんな節義を一体たれに尽す「いやいや、それは将軍の片思いというもの。馬超のほうでは、か

五旗の侍大将は、すでに馬超を見限っているもののようであった。楊 秋、李湛、侯選など、かわるがわる離反をすすめた。かのようによった。

に立て、その晩、ひそかに曹操に款を通じた。ここに至って、遂に、韓遂も変心を生じてしまった。楊秋を密使

「成就、成就」

に極めて綿密な一計をさずけて来た。すなわち曰う。曹操は手を打ってよろこんだにちがいない。懇篤な返書ととも

ゝ。 迅兵ヲ率シテ協力シ、鼓声・喊呼ニツツンデ馬超ヲ生捕リニセッシュイ ミ、火ヲ以テマズ巨鼠ヲ窒息セシメヨ。火ヲ見ナバ曹操自ラミ、火ヲ以テマズ巨鼠ヲ窒息セシメヨ。火ヲ見ナバ曹操自ラ明タ、馬超ヲ招イテ、宴ヲナスベシ。治ドダノ四囲ニ枯柴ヲ積

ってよこした策は必ずしも万全と思えないからであった。韓遂は翌日、五旗の腹心をあつめて、協議していた。曹操からい

韓遂の心配はそこにある。

「いま招いても、馬超のほうでこれへ参るまい」

「いや、案外来るかもしれませんよ。将軍が、謝罪すると仰っしゃ 19

れば

楊秋がいうと、侯選も、

来ましょう」と、いう。「何といっても、若いところのある大将だから、口次第ではやって

李湛もまた、

「弁舌をもって、きっと、馬超を案内して来ます。その点はわれわ

れにお任せ下さい」

と自負して云った。

をした。そして韓遂を中心に、まず前祝いに一献酌み交わして、手では、時刻を待つとて、油幕を張り、枯柴を隠し、宴席の準備

筈をささやいていると、そこへ突然、

「反逆人どもっ。うごくな」と、罵りながら入ってきた者がある。

見ると、馬超ではないか。

「あっ。……これは

に飛びかかり 不意をつかれて、狼狽しているまに、馬超は剣を抜くや否、韓遂

いだ。馬超の剣は、その左手を腕のつけ根から斬り落し、なおも、 「おのれっ、昨夜から、何を密議していたか」と、斬りつけた。 「どこへ逃げる」 韓遂は、戟をとるまもなかったので、左の肘をあげて、身を防

って来た。 追い廻していると、五旗の侍大将が、左右から馬超へ打ってかか

油幕の外は火になった。馬超は血刀をひっさげて、

「韓遂は、韓遂は_

血まなこに捜している。

隊が、ものもいわず、焔の中へ駈けこんで来て、 てきた龐徳、馬岱なども、韓遂の部下を手当り次第に誅殺してい た。ところがたちまち渭水を渡ってきた一陣、二陣、三陣の騎兵部 彼の前をさまたげた馬玩は立ちどころに殺されたし、彼に従っ

「馬超を生捕れっ」

「雑兵に眼をくれず、ただ、馬超を討て」

と、励まし合った。

どの曹軍中の驍・将はことごとく出揃っている。馬超は、ぎょッその中には、虎痴許褚をはじめとして、夏侯淵、徐晃、曹洪な

たらない。 と、急に陣外へ駈け出したが、はや龐徳は見えず、馬岱も見あ「さてはすでに、手筈はととのっていたか」

> もなく、各所の陣営からは濛々と黒煙があがっていた。 日は暮れたが、焔は天を焦し、渭水のながれは真っ赤だった。 彼ですらそれ程あわてたくらいだから、西涼勢の混乱はいうまで

-120-

| 戒 めなければならないのは味方同士の猜疑である。味方の中に

知らず知らず敵を作ってしまう心なき業である。 が、その反間苦肉をほどこした曹操のほうからみれば、いまや

彼の軍は、西涼の馬超軍に対して、完全なる、

敵中作敵

の計に成功したものといえる。

自ら招いた禍いの兵におわれて、辛くも、渭水の仮橋まで逃げのび 味方割れ、同時に、和睦の決裂だ。――馬超は、自らつけた火と、

えば、わずか百騎に足らなかった。 かえりみると、龐徳、馬岱ともちりぢりになり、つき従う兵とい

て来た。

「やあ、あれに来るは、李湛ではないか」

方と信じていると、その李湛は、手勢をひいてこれへ近づくや否、 西涼を出るときは、八旗の一人とたのんでいた旗本。もちろん味

「や、あれにおる。討ち洩らすな」

と、自身も真っ先に、鎗をひねって、馬超へ撃ってかかった。

馬超は驚いて、

「貴様も謀反人の片割れか」

赫怒して、これに当ると、李湛は、その勢いに恐れて、馬をかがくと

えしかけた。

于禁は軍勢の中にもまれながら、弓をつがえて、馬超を遠くから狙 っていた。 すると、一方からまた、曹操の部下于禁の人数が、わっと迫り、

弦音とともに、馬超は馬の背に屈みこんだので、矢はぴゅんと、

それていった。

皮肉にも、そのそれ矢は、李湛の背にあたって、李湛は馬から落

ちて死んだ。

ざんに敵を蹴ちらし、渭水の橋の上に立って、ほっと大息をついて 馬超は、わき目もふらず、于禁の人数へ馳け入った。そしてさん

夜は更け、やがて夜が明けそめる。

るばかりである。かくてはと、馬超は幾度も橋上から奮迅して、敵 の大軍へ突撃を試みたが、そのたびに、五体の手傷をふやして、空 って来たのは、ことごとく敵兵の声と敵の射る箭ばかりだった。 橋畔の敵勢は、刻々と水嵩を増す大河のように、囲みを厚くす 馬超は橋上に陣取って、味方の集合を待っていたが、やがて集ま

しくまた、橋上に引っ返すほかなかった。

のみならず、左右の部下は、ふたたび橋の上に帰らず、或る者は

矢にあたって、ばたばた目の前に仆れてゆくので、

「ここで立往生を遂げるくらいなら、もう一度、最後の猛突破を試

もしそれも成らずに斃れるまでも、ここで満身に矢をうけて空しく み、首尾よく重囲を斬り破れば、一方へ拠って再挙を計ろう。また

死ぬよりまだ増しだぞ」

ように、馬超はふたたび橋上を馳け出した。 残る面々をうち励まして、わうっと、猛牛が火を負って狂い奔る

「つづけ」

「離れるな」

けれど、馬超に従う面々は、随処にその姿を没し、彼はいつか、馬、馬を踏み、曹軍の一角は、血を煙らせて、わっと分れる。

ただ一騎となっていた。

「近づいてみろ。この命のあらん限りは」

神そのものだった。
敵の弩弓を取って、撲りつけ、馬も人も、さながら朱で描いた鬼爺は折れたので、とうに投げ捨てている。敵の矛を奪って薙ぎ、

と、ふと思った。

(もう駄目)

それをふと、自分の心に出した時が、人生の難関は、いつもそこ

が最後となる。

「くそっ、まだ、息はある」

見あまる敵軍に押しもまれながら、小半刻も奮戦していた。 馬超は気づいて、自分の弱音を叱咤した。そしてまた、目にも

らず味方の馬岱、龐徳だった。曹軍の側面を衝いてたちまち遠く馳折しも西北の方から一手の軍勢がこれへ馳けてきた。思いもよ

かかえると、雲か。霞かのように、遠く落ちて行った。「それっ、いまの間に」とばかり、馬超の身を龐徳が鞍わきに抱き

よができた。そして、馬超を逸したと聞くと、 のできた。そして、馬超を逸したと聞くと、 一部中作敵の 計 が見事成功したのを望んで、

曹操は馬を前線へ

「画龍点睛を欠く」

と、つぶやいて、すぐ馬前の人々へいった。

「馬超に従いて落ちて行った兵力はどのくらいだったか」

ひとりの大将が答えていう。

「龐徳、馬岱などの、約千騎ばかりです」

を生捕ってきた者には、身分を問わず、万戸侯に封じて、いちやたずさえて来たら、その者には、千金を賞するであろう。また馬超日夜をわかたず、彼を追いかけて、殊勲を競え。もし馬超の首を「なに、千騎。――それならもう無力化したも同じものだ。汝ら、

これは大きな懸賞である。いでやとばかり、下は一卒一夫まで、く、諸侯の列に加えてやろう」

奮い立って、馬超追撃を争いあった。

い。へらされ、夜も寝ず、昼も喰わず、ひたすら西涼へさして逃げ落ちへらされ、夜も寝ず、昼も喰わず、ひたすら西涼へさして逃げ落ちに当り、踏み止まっては追手と戦い、果ては、わずか三十騎に討ちのではない。追い詰められ追い詰められ、また、取って返しては敵こういう慾望と情勢の目標にされては、いかに馬超でもたまるも

隴西地方を望んで敗走したが、それと知って、曹操は自身、魔徳と馬岱とは、途中、馬超とも別れ別れになってしまい、遠

「いま彼らを地方へ潜伏させては」

そして、長安郊外まで来ると、都から荀(彧の使いが、早馬に乗と、禍いの根を刈るつもりで、あくまでも追撃を加えていた。

って、一書をもたらして来た。

「北雲急なりと見て、南江の水しきりに堤をきらんとす。すこしも

_

早く、兵を収めて、許都に還り給わんことを」と、ある。

そこで曹操は、全軍をまとめ、

「ひとまず引揚げよう」と、軍令を一下した。

左の手を斬り落された韓遂を西涼侯に封じ、また彼と共に降参

した楊一秋、侯選なども、列侯に加えて、それには、

「渭水の口を守れ」と、命じた。

ときに元、涼州の参軍で、楊阜という者、すすんで彼にこう意

見をのべた。

日、彼を討ち洩らしてのお引揚げは、山火事を消しに行って、また 「馬超の勇は、いにしえの韓信、英布にも劣らないものです。今

「いうまでもなく、それは案じている。せめて彼の首を見、予自身

山中に火だねを残して去るようなもので、危険この上もありません」

半年もいて、戦後の経略までして還れば万全だが、何せい、都の事 情と南方の形勢は、それをゆるさぬ」

という人物があります。よく涼州の事情に通じ民心を得ていますか 「以前、それがしと共に、涼州の刺史をつとめていた者で、韋康

抑えともなり、たとい馬超が再起を計っても、やがて自滅して行く ら、この者に、冀城を守らせ、一軍を領せしめておいたら、大きな

ものと考えられますが」

協せて、ふたたび馬超が勢いの根をはびこらせぬように努めるがい 「では、その任を、其方に命じよう。汝と、その韋康と、よく心を

「それには、一部のお味方をとどめて、長安の要害だけは、充分お

守り下さるように」

将を残して行こう」 「もちろんだ。長安の堺には、充分な兵力と、誰かしかるべき良

すなわち夏侯淵に対して、命は下った。

のうごきもままになるまい。汝は、予が腹心、予になり代ってよく 「旧都長安には、韓遂をとどめておくが、彼は、左腕を失って、身

堺を守れよ

の尹にお用い下さい。張既と力を協せて、必ず、丞相をして二度と 「張既、字を徳容という者がいます。高陵の生れです。これを京 兆 いいきょうき あぎな とくよう すると、夏侯淵が、

西涼の憂をなからしめてみせます」

「よろしい。張既ものこれ」

曹操は、乞いをゆるした。

あすは都へ還るという前夜、曹操は諸大将と一夕の歓を共にし 123-

その席上で、一人の将が、曹操に訊いた。

に拠っていましたから、渭水の北は遮断された形でした」「後学のため、伺いますが。――合戦の初めに、馬超の軍勢 合戦の初めに、馬超の軍勢は、潼関

ー ム ム

いつになく、戦法に惑いがあるように見えましたが……」 いたずらに野陣の危険にさらされたり、後また北岸に陣屋を作り、 「それは、難きを攻めず、易きを衝く、兵法の当然を行ったまで 「で当然、河の東を攻めて、お進みかと思いのほか、さはなくて、

れませんでしたが」 「それなら分りますが、今度はその反対のように動いたとしか思わ

ておいてから、徐晃、朱霊などの別働隊を以て、敵兵力の薄い河のている正面に当ると見せ、敵兵力をことごとく味方の前に充実させ「その条件を、敵方に作らせるよう、初めには、わざと敵の充実し

けですな」 「なるほど、では丞相の主目的は、むしろ別働隊のほうにあったわ

西からたやすく越えさせたわけじゃ」

「まず、そんなものか」

せたまでのこと」その鋭角をにぶらすため、ことさらに、悠長と見せて彼を焦立たその鋭角をにぶらすため、ことさらに、悠長と見せて彼を焦立たらせるためと、もう一つは、西涼の兵は悍馬の如く気短だから、「いやいや、あれはわざと、味方の弱味を過大に見せ、敵を驕り誇「いやいや、あれはわざと、味方の弱味を過大に見せ、敵を驕り誇

「敵中作敵の計は、疾く前から考えのあったことですか」

に、天来の声、いわゆるカンをつかみ、いずれかが敵の常道を、覆とは敵味方とも、いずれ劣らぬ常識線で対峙する。だがそのうち入ると疾風迅雷を要してくる。また序戦では、参謀の智嚢と智嚢大事をとるから、ただ敗けない主義になりやすい。それがいざ戦に「戦機は勘だ。また天来の声だ。常道ではいえない。戦前の作戦は、「戦機は勘だ

はまた、口々に訊ねた。かれの解説は、子弟に講義しているように、懇切であった。諸坪

機は一概にはいい難い」

すのだ。ここが勝敗のわかれ目になる。すべて兵を用いるの神変妙

八旗の旗本、猛将なども多いと聞かれたとき、手を打ってお歓びに「出陣の初め、丞相には、西涼軍の兵力が刻々と増し、その中には

の届かぬ暴軍が、いちどに集まって来てくれれば、これは労せず招「西涼は、国遠く、地は険に、中央から隔てられている。その王化なりましたが、あれは如何なるお気持であったのですか」

かず猟場に出てくれた鹿や猪と同じではないか」

「ははあ、なるほど」

ほどな戦果を収めることはできなかったろう。……で思わず、西涼と兵力と年月を必要とする。おそらく一年や二年くらいでは、今度威を逞しゅうしているのを、遠征しようとするならば、莫大な軍費「もし、彼らが、西涼を出ず、王威にも服せず、ただ辺境にいて、

語り終って、曹操は、杯をあげた。諸大将もみな嘆服して、小智にとらわれず、よく大智を磨くがよい」をれに不審を抱いたことは、そち達もようやく兵を語る眼がすこし軍が大挙して来ると聞いたとき、嬉しさのあまり、歓びを発したが、日とだ単男を収めることにできただったが、

「丞相いまだ老いず」

と、心から賀した。

て朝廷に出入りするのも許される身となったのである。よと仰せられた。すなわち彼は、履のまま殿上に昇り、剣を佩いして、凱旋軍を迎え、曹操を重んじて、漢の相、国蕭何の如くせ都に還ると、献帝はいよいよ彼を怖れ給うて、自身、鸞輿に召

近年、漢中(陝 西 省・漢中)の土民のあいだを、一種の道教が風靡

していた。

五斗米教。

として、米五斗を持てゆくことが「掟」になっているからである。 仮にこう称んでおこう。その宗教へ入るには、信徒になるしるし

「わしの家はなぜか病人がたえない」とか、

「こう災難つづきなのは、何かのたたりに違いない」とか、それと

反対に

「うちの躄が立った」などというのもあるし、

「五斗米教のお札を門に貼ってから、奇妙に盗賊が押しかけて来な

ばかりであった。 つのまにか漢中におけるこの妖教の勢力とその殿堂は、国主を凌ぐ などと、迷信、浮説、嘘、ほんと、雑多な声に醸されながら、い

いてやはり道教をひろめていた張、衡という道士の子で、張魯、字いてやはり道教をひろめていた張っとうない。ままられ、野の鵠鳴山に教主は、師君と称している。その素姓を洗えば、蜀の鵠鳴山に を公棋という人物だった。

「あわれな者よ。みなわれにすがれ。汝らの苦患はみな張魯がの これが、漢中に来て、いわゆる五斗米教を案出し、

ぞいてやる_

と、愚民へ呼びかけた。

って満足に家内揃ってその日を楽しんでいるなどという家はない。 民衆の逆境は、このときほど甚だしい時代はない。どこを捜した

しかも教養なく、あしたの希望もない民衆は、

「これこそ天来の道士様」

と、たちまち五斗米をかついで礼拝に来る者が、廟門に市をないたちまち五斗米をかついで礼拝に来る者が、廟門に市をな

した。

その下に鬼卒とよぶ祭官が何百人とある。 師君の張魯をめぐって、治頭、大祭酒などという道者がひかえ、

不具、病人などが、祈祷をたのむと、

「懺悔せよ」と、暗室に入れ、七日の後、名を書いたお札を、一

けて地神に詫をするといい、もう一通は水底に沈めて、 通は山の上に埋けて、天神に奏するものだといい、一通は平地に埋

「おまえの罪業は、水神にねがって、流してもらった」と、云い聞

かせる。

れ、五斗入り袋は、十倉の棟にいっぱいになる。 ると、大祭を行う。漢中の街は、邪宗門のあくどい彩で塗りつぶさ れ、廟門には豚、鶏、織物、砂金、茶、あらゆる奉納品が山と積ま 愚民は信ずるのだった。その妄信から時々、奇蹟が生ずる。す

遠い巴蜀の地である。令を以て禁止することも、兵を向けて一掃 三十年にもなるが、いかにせん、その悪弊は聞えてきても、中央に することもできない。 こうして、邪教の猖 獗は、年ごとに甚だしくなり、今年でもう

た。彼に鎮南中郎将という官職を与え、漢寧の太守に封じて、そ そこでかえって、教主張魯に対しては、卑屈な懐柔策を取ってき

のかわりに、

「年々の貢ぎを怠るなかれ」と誓わせて来たのである。

化していた。いよいよ毒を庶民に植えつけて、今や巴蜀地方は、一種の教門国といよいよ、五斗米教は、中央政府の認めている官許の道教として、

すると、ついこの頃のこと。

くりして庁へ届けてきた。

張魯の群臣は、みな口をそろえて、

「これこそ、天が、漢寧王の位につくべし、と師君へ授け給うた

と、彼に、王位につくことをすすめた。

「なるほど今は、中央の曹操、西涼の馬超を討って、気いよいよ驕すると、閻圃という者が、思慮ありげに、こう進言した。

しかる後、彼に当るのが、正しくないかと考えられますが。――師ときに違いないが、まず我らは、蜀四十一州を内に併合統一して、り、人民としては、いわゆる天井をついた。象。 たしかに撃つべき

君のご賢慮はいかがでしょうか」

師君張魯の弟に、張 衛という大将がいる。

いま、閻圃の言を聞くと、その張衛は、

「然り、然り。閻圃の説こそ、大計というものである」

と云いながら前へ進んで、彼の献策をさらに裏書して、こう大言

誓って、この大理想を顕現してお目にかけん」
「先ごろ来、西涼の馬超が破れたことから、領内混乱に陥り、西涼誓って、この大理想を顕現してお目にかけん」
「先ごろ来、西涼の馬超が破れたことから、領内混乱に陥り、西涼誓って、この大理想を顕現してお目にかけん」
「先ごろ来、西涼の馬超が破れたことから、領内混乱に陥り、西涼誓って、この大理想を顕現してお目にかけん」

両者の言に、張魯も意をうごかされて、

「よろしかろう。疾く準備にかかれ」と、聴許した。

の蜀は今、どんな状態にあったろうか。かくて、漢中の兵馬が、ひそかに、蜀をうかがっているとき、そ

巴蜀。すなわち四川省。

豁然、目のまえに一大高原地帯が展ける。いられていよ急に、風光明媚な地底の舟行を数日続けてゆくと、碧水いよいよ急に、風光明媚な地底の舟行を数日続けてゆくと、長江千里の上流、揚子江の水も三峡の嶮にせばめられて、天遠く、

ひとつ揚子江の大動脈へ注いでくる。れる水は、岷江、金沱江、涪江、嘉陵江などにわかれては、またが支那西部に入っては岷山山脈となり、それらの諸嶺をめぐり流が支那の屋根、パミール高原に発する崑崙山系の起伏する地脈

その都府、中心地は、成都である。多くの漢民族が入って、いわゆる巴蜀文化の殷賑を招来していた。木材などの天産豊かであり、気候温暖、人種は漢代初期からすでに、四川の名は、それに起因る。河川流域の盆地は、米、麦、桐油、

ただこの地方の交通の不便は言語に絶するものがある。北方、

たる谷あいに、橋梁をかけ蔦、葛の岩根を攀じ、わずかに人馬の通山脈にさえぎられ、関中に出る四道、巴蜀へ通ずる三道も嶮峻巍峨陝 西 省へ出るには有名な剣閣の嶮路を越えねばならず、南は巴山峡をせいしょう

「蜀の桟道」と呼ばれている。れる程度なので、世にこれを、

た。 さて、こういう蜀も、遂に、時代の外の別天地ではあり得なかっ

でいたが、その家門と国の無事に馴れて、いわゆる遊惰脆弱な暗蜀の劉善璋は漢の魯恭王が後胤といわれ、父劉 焉が封を継い

君だった。

らいいか」
「漢中の張魯が攻めてくるとか。いかがすべきぞ。ああ、どうした

のである。 彼は、生れて初めて、敵というものが、すぐ隣にいたのを知った

を退けてご覧にいれる。乞う、お案じあるな」と、いった者がある。「不肖ですが、それがし、三寸の舌をうごかして、よく張魯が軍勢蜀の諸大将も、みな怯えた。するとひとり、評議の席を立って、

えぎわがてらてらしている。まけに、鼻はひしげ、歯は出ッ歯で、額は青龍刀みたいに広くて生まけに、鼻はひしげ、歯は出ッ歯で、額は青龍刀みたいに広くて生見れば、その人は、背丈五尺そこそこしかなく、短身長臂、お

かって、というでは、これでは、これでは、これでは、これでは、「やあ、張」なり、いかなる自信があって、さような大言を吐く「やあ、張いらは声だけだ。声は鐘を撞くように余韻と幅がある。

て説く。なんで、動かし得ぬことがありましょうか」と、許都に上「百万の兵も、一心に動く。一心の所有者に、それがしの一舌を以劉『璋以下、諸大将が半ば危ぶみながら問うと、

策は用いられることとなり、彼は早速、遠く都へ使いして行くこと張松の考えているその内容とはどんなものか、とにかく、彼の献蜀の大幸として見せん――と、諄゛々、腹中の大方策を披瀝した。って、曹操に会見し、将来の利害大計を述べて、この禍いを変じて、

西蜀四十一州の大鳥瞰図を、一巻の絵巻にすべく、精密に写させその旅行の準備にかかる 傍 ら、彼は自分の家に、画工を雇って、になった。

ていた。

の便、産物集散の模様まで、一巻数十尺の絵巻のうちに写されていっての便、産物集散の模様まで、一巻数十尺の絵巻のうちに写されていっていたる蜀の山川谿谷、都市村落、七道三道の通路、舟、帆、駄馬・画工は五十日ほどかかってようやくそれを描き上げた。四十一州

し。上出来」 「これを開けば、いながらにして、蜀に遊ぶようなものだ。よしよ

彼は直ちに、劉璋に謁して、出発の準備も調いましたればと、『戦張松は、画工をねぎらった。

積んで、彼に託した。もちろん曹操への礼物である。 劉璋は、かねて用意しておいた金珠錦、繍の贈物を、白馬七頭に

に粉砕し、彼の。意はいよいよ驕り、彼の臣下は益ゝ慢じ、いまや、江南の風雲は、なお測り難いものがあるが、西涼の猛威を、一撃時、曹操は銅、雀、台へ遊びに行って、都へ還ったばかりであった。千山万峡、嶮岨を越えて、使者の張松は都へ向った。

曹操一門でなければ人でないような、我が世の春を、謳歌していた。

一さすがは、花の都」

ひとまず旅館に落着き、相府に入国の届を出し、また迎使部の吏できた礼物も、曹操の前に出すには気恥ずかしいような気がした。張松も、眼を驚かされた。魏の文化の「眩'さに、白馬七頭に積ん

を通じて、拝謁簿に姓氏官職などを記録し、

「やがて丞相からお沙汰のあるまで相待つように」

という吏員のことばに従って、その日の通知を待っていた。

ところが、幾日たっても、相府からの召しがないので怪しんでい

ると旅亭の館主が

「それは、姓氏を簿に書き上すとき、賄賂を吏員に贈らなかった

からでしょう」

と、注意してくれた。

うやく五日目ごろに、沙汰があって、張松は、曹操に目通りするこそこで、客舎の主人から莫大な賄賂を相府の吏員に贈ると、よ

とができた。

曹操は、一眄をくれて、

「蜀はなぜ毎年の貢ぎ物を献じないか」

と、罪を責めた。

張松は、答えて、

「蜀道は、嶮岨な上に、途中盗賊の害多く、とうてい、貢ぎを送る術気

もありません」

と、いった。

「中国の威は、四方に遍しく、諸州の害を掃って、予は今やいなが曹操は、甚だしく、自分の威厳を損ぜられたような顔をして、

らに天下を治めておる。なんで、交通の要路に野盗乱賊が出没しよ

行った。

うか」

曹操は急に座を起って、ぷいと後閣へ入ってしまった。激怒したなお無頼の巣窟に適する地方は、どれほどあるかわからない」り、荊州に玄徳あり、江南に孫権の存在あり。加うるに、緑林山野、「いやいや。決してまだ天下は平定していません。漢中に張魯あ

容子である。張松は、ぽかんと、見送っていた。

階下に整列していた近臣も、興を醒して、張松の愚を嗤った。

らうとは、いやはや、不束千万。再度のお怒りが降らぬうち、疾「外国の使臣として、はるばる参りながら、あえて丞相の御心に逆

く、疾く蜀へ帰り給え」

でげんなである。わが蜀には、「さてさて、魏の国の人は嘘で固めているとみえる。わが蜀には、すると張松は、その低い鼻の穴から、ふふふと、嘲笑をもらした。

「だまれ。しからば、魏人は諂佞だというか」そんな媚言やへつらいをいう佞人はいない」

「おや、誰だ?」

この青年の魅力に何か心をひかれたので、黙って彼のあとに従いて楊修はそういって、張松を閣の書院へひっぱって行った。張松は、すこし君に談じつける儀があるから、僕に従ってこっちへ来給え」「外国の使臣といえ、黙って聞いておれば、怪しからんことをいう。

孟徳新書

_

う。さあ、お着席ください」「ここは奥書院、俗吏は出入りしませんから、しばし静談しましょ

ならぬご辛苦だったでしょう」「蜀、道は天下の嶮岨とうけたまわる。都まで来るには、ひとかた「楊、修は、張松へ座をすすめ、自ら茶を煮て、遠来の労を慰めた。

張松は頭を振って、

踏み、剣を渡るも、厭うことではありません」と、答えた。「君命をうけて使いするに、なんの万里も遠しとしましょう。火を

楊修はかさねて訊いた。

直接蜀の人から伺ったことがない。ねがわくは、ご本国の概要を聞「蜀の国情や地理は、老人のはなしとか、書物とかで知るのみで、

して、あなたはその蜀で、どんな役目を勤めておられますか」のなく、国富み、武を尚が、百年乱を知らずという国がらです」のなく、国富み、民栄え、家に管絃あり、社交に和楽あり、人情は少なく、国富み、民栄え、家に管絃あり、社交に和楽あり、人情は中野は剣閣の万峰に囲まれ、周囲二百八程、縦横三万余里、鶏鳴狗吠してれば、蜀はわが大陸の西部に位し、路に錦江の嶮をひかえ、「されば、蜀はわが大陸の西部に位し、路に錦江の嶮をひかえ、かせ給え」

おります。失礼ながら其許は?」「お恥かしい微賤です、劉璋の家中において、別駕の職について

「丞相府の主簿です」

らぬか」
「名門楊家は、数代簪纓の誉れ高くご父祖はみな宰相や大臣の職「名門楊家は、数代簪纓の誉れ高くご父祖はみな宰相や大臣の職

いていたが、楊修は、身を辱ずるかの如く、顔あからめたまま、しばしうつ向

は、自分にとって大きな勉強になりますからね」(はご書庫を預かって、庫中万巻の書を見る自由をゆるされているの「いや、丞相の門下にあって、軍中兵粮の実務を学び、また平時に

れわれは聞いておるが」は、覇道強権を徹底的にやりきる信念だけであると。――こうわは、覇道強権を徹底的にやりきる信念だけであると。――こうわの域にいたらず、要するに、文武のどちらも中途半端で、ただ取得丞相は、文を読んでは、孔孟の道も明らかにし得ず、武を以ては、孫八丈「ははは、曹操について学ぶことなどがありますかな。聞 説、曹

わかりになるまい」ん、君の社会観も人物観も、ちと狭い。丞相の大才は、とうていお「松 君。それは君の認識がちがう。蜀の辺隅にいるため、如何せ

しあるなら、伺いたいものだが」善がある。曹操の大才とは、一体どれ程なものか、何か端的にお示それを万能として、天下を見ている人の主観には、往々、病的な独「いやいや、僕の偏見よりは、かえって、中央の都府文化に心酔し、

「よろしい、たとえば、これをご覧なさい」

楊修は起って、書庫の棚から、一巻の書を取出し張松の手に渡し

題簽には、孟徳新書とある。

を説いたものらしい。
張松は、ざっと内容へ目を通した。全巻十三篇、すべて兵法の要諦

「これは、誰の著ですか」

「曹丞相がご自身、軍務の余暇に筆をとられて、後世兵家のために

著された書物です」

「ははあ、器用なものだな」

ましょう」 新書と題せらる。この一書を見ても丞相の蘊蓄のほどがうかがえ「古学を酌んで、近代の戦術を説き、孫子十三篇に 擬 えて、孟徳

張松はわらって、楊修の手へ、書物を返しながら、

は、人をばかにしたものだ」 屋でも読んでおる。それを孟徳新書などとは……あははは、新書と「わが蜀の国では、これくらいな内容は、三尺の童子も知り、寺小

わるるか」 「聞き捨てにならぬおことば、然らばこの書の前に類書があるとい

いやはや、とんだ新書もあるものだ」ら出たもののように、無学の子弟に自慢しているものでござろう。誰とも知れぬものゆえ、丞相はそのまま、書き写して、自分の頭か「戦国春秋の頃、すでにこれとそっくりな著書が出ておる。著者が

哄、笑また哄笑して、張松はわらいを止めなかった。

して云った。い方と、その大言に、反感をおぼえたらしく、眼に 蔑 みをあらわい方と、その大言に、反感をおぼえたらしく、眼に 蔑 みをあらわる少、張松に好意をもっていたらしい楊修も、彼の無遠慮なわら

にならんと、ただ人に片腹痛い気持を起させるだけですよ」じているなどということはありますまい。法螺もおよそにおふき「いくら何でも、まさか三尺の童子が、このような難解な書を、暗誦

「嘘だとお思いなさるのか」

暗誦してごらんなさい。できますか」「たれも真にうける者はないでしょう。試みに、御身がまず自分で

「まあまあ、事実を示してから、お説は聞くとしようではありませ「三尺の童子でもなすことを、なんでそれがしにお試しあるか」

んか」

「よろしい。お聞きなさい」

楊修はびっくりした。に、孟徳新書の初めから終りまで、一行一字もまちがいなく誦んだ。張松は、胸を正し、膝へ手をおくと、童子が書物を声読するよう

急に、席を下って、うやうやしく、張松を拝し、

曹操がいうには、とその理由をなじった。とその理由をなじった。とその理由をなじった。とその理由をなじった。とその理由をなじった。とその理由をなじった。とその理由をなじった。があなたのような人物に会ったのは初めてです、にも会いましたが、あなたのような人物に会ったのは初めてです、「まったく、お見ぞれ申しました。私もずいぶん著名な学者や賢者「まったく、お見ぞれ申しました。私もずいぶん著名な学者や賢者

長猿だ。予は歓ばん」 「一見して分るではないか。あの矯短長臂な体つきは、まるで手

ましたが、丞相は、あの人間さえ用いたではありませんか」

かんでいた能があったからだ。いったい張松などになんの能がある 「それは、禰衡には、一代の文才と、その文の力を以て、民心をつ

たった一度見ただけで、経をよむごとく、暗誦じてしまいました。 名の著書で、おそらく丞相の新著ではない。蜀の国では、三尺の童 のみならず、博覧強記、底が知れません。あの書は、戦国時代の無 にし、江を翻す弁才があります。丞相の著されたかの孟徳新書を 「どうして、どうして、決して端倪するわけにゆきません。海を 倒したいけい

ぎってしまった。 顔して最後のほうのことばを聞いていたか、気もつかずに、賞めち 楊修はやや賞めすぎた。青年だから是非もないが、曹操がどんな 子も知っているなどともいっていました」

知らんのでそんな囈言を申すとみえる。——楊修 「中国の文化にうとい遠国の使者だ。わが大国の気象も真の武威も

るから、汝は、張松を連れて、見物に来い。あれに、魏の軍隊のど んなものかを見せてやれ」 「明日、衛府の西教場で、大兵調練の閲兵をなすことになってお この日、曹操は、五万の軍隊を、衛府の練兵場に統率し、甲鎧燦爛、この日、曹操は、五万の軍隊を、衛府の練兵場に統率し、平時間はない。 畏 まって、楊修は次の日、張松をつれて、練兵場に赴いた。

龍、爪の名馬にまたがって、閲兵していた。

手、螺手、干戈隊、鉄弓隊など四団八列から鶴翼にひらき、五行虎衛軍五万、槍騎隊三千、儀仗一千、戦車、石砲、弩弓手、鼓にないぐん。 に列し、また分散して鳥雲の陣にあらたまるなど、雄大壮絶な調練

があった後、曹操は、桟敷の下へ馬を返してきた。

見つけて呼びかけた。 そして、少し汗ばんだ面には紅を呈し、さも得意そうに、

「どうだな、蜀。客。蜀にはこういう軍隊があるか」

でのところ、兵革の必要はなかったのです。貴国の如くには」 「ありません。――が蜀はよく文治と道義によって治まり、今日ま 張松はさっきから眼を斜めにして見物していたが、にこと笑って、

んでいた。 またしても、曹操の心を損じはしないかと、楊修はそばで気をも

と、答えた。

西蜀四十一州図

覇者は己れを凌ぐ者を忌む。

冷笑している風がある。曹操たる者、怒気を発せずにはいられなか 張松の眼つきも態度も、曹操は初めから虫が好かない。 しかも、彼の誇る、虎衛軍五万の教練を陪観するに、いかにも

は要らんとか申したが、もし曹操が西蜀を望み、この士馬精鋭をも って押しよせたときは如何。蜀人みな鼠の如く、逃げ潜む術でも自 「張松とやら。いま汝は、蜀は仁政を以て治めるゆえ、兵馬の強大

慢するか」

「はははは。何を仰せられる」

渭水潼関の合戦に、髯を切り、戦袍を捨てて辛くも逃げのがれ給いすいどうかんからいます。ひたたれ、華容に関羽に遭って泣訴して命を助かり、なおなお、近くはれ、華珍は 山川風光の美もまだ見給わずば、いつでもお遊びにおいでください。 ことごとく屠るに、なんの手間暇が要りましょうや。丞相もし蜀の 百万、挙げて西蜀に攻め来ろうとも、蜀の天嶮、蜀兵の勇、これを あそばれ、宛城に張る繍と戦うて敗走し、また赤壁に周瑜を恐あるばれ、宛ばは、からいなり いしとか。さるご名誉を持つ幕下の将士とあれば、たとい百万、二 「聞「説。魏の丞相曹操は、むかし濮陽に呂布を攻めて呂布にもて張くならく」。

おそらくふたたび銅 雀 台にお還りの日はないでしょう」

会ったが、曹操のまえでこれほど思いきったことをいった男はかつ て一人もない。 どっちが威圧されているのか分らない。ずいぶん他国の使臣には

「言語道断な曲者。その首を、塩桶に詰めて、蜀へ送り返せ」と、当然、曹操は赫怒した。楊修に向って、

身をふるわせて罵った。

り知れない。どうか寛大なご処置を垂れてください。私の身に代え てもと嘆願した。 楊修は極力弁護した。不遜な言は吐くが、張松の奇才は実に測

「いかん。断じてならん」

すことは、やがて天下に聞えると、必ず丞相の不徳を鳴らす素因の 一つに数えられましょう。殺すことだけはお止めになったほうがよっタト 曹操はきかない。しかし、荀・彧まで出て、かかる奇能の才を殺

ろしい。そういってともども諫めた。 「しからば、百棒を加えて、場外へ叩き出せ」

こんどは、兵に命じた。

ずり出された。そして鉄拳を浴び、足蹴をうけ、半死半生にされ て突き出された。 張松はたちまち大勢の兵に囲まれて遮二無二、練兵場の外に引き

一無念」

自分が魏に来た心の底には、蜀はとうてい、いまの暗愚な劉・璋 併させるか、属国となすか、いずれにせよ、蜀は曹操に取らしても の使命を幸いに、もし曹操の人物さえよかったら、魏の国に蜀を合 では治まらない。いずれ漢中に侵略される運命にある。で、こんど 張松はすぐに本国へ帰ろうと思った。しかし、つらつら思うに、

よい考えでいたのである。

んな辱を土産にしては帰れない」 も、国を出るとき、諸人の前で大言を放って来たてまえ、空しくこ 「よしっ。この報復には、きっと彼に後悔をさせてみせるぞ。自分

も断わらず、従者を連れて許都を去ってしまった。 彼は、腫れあがった顔に、療治を加えると、すぐ翌る日、相府に

いた。

「蜀の小男が、よけい小さくなって、蜀へ帰って行った」

て、荊州のほうへ急いでいたのだった。そして、郢州の近くま 都の者は、笑っていたが、なんぞ知らん、彼は途中から道をかえ

「そこへ参られたは、蜀の別駕張、松どのではなきや」で来ると、彼方から一隊の軍馬が、整然と来て、

の武将はひらりと馬を降りて、礼をほどこし、 と、先なるひとりの大将がいう。張松が、然り、と答えると、そ

れでしょう。いざあれにてご休息を」 までお出迎えに参りました。遠路、難所を越えられ、さだめしお疲 「それがしは、荊州の臣、趙 雲子龍。主人玄徳の命をうけ、これ

導いた一亭には、酒を整え、茶を煮、洗浴の設けまでしてあっ

た。

たらしい。 が、かくばかり鄭重な出迎えをうけようとは、張松も、意外であっ 魏に使いして、使いを果たさず、失意と辱を抱いて落ちてきた客

のか」 「どうして、劉皇叔には、このように張松を篤くお迎え下さる

訊くと、趙雲は、

が主君は客を愛すお方ですから」と、答えた。 「いや、ご辺のみに、こうなされるのではありません。総じて、わ

そこからは趙雲の案内で、途中の不自由も不安もなく進んだ。 日をかさねて、荊州の境に入る。そして黄昏れごろ、駅館へ着

張松のすがたを見ると、一斉に鼓を打ち鉦を鳴らして歓迎したの すると、門外に、百余人の兵が、二行にわかれて整列していた。

で、張松が、びっくりして立ち止まると、たちまち、長 髯長躯の

大将が、彼の馬前に来て

「賓客、ようこそご無事で」 と、にこやかに、出迎えの礼をなし、自身、馬の口輪をとって導

張松はあわてて馬を降り、

いた。

「あなたは、関羽将軍ではありませんか」と、たずねた。

「さよう。此方は羽です。どうぞお見知りおきを」

「恐縮恐縮。知らぬこととは申せ、つい馬上にて受礼。おゆるし下

さい」

接待は懇切を極めた。 せん。国賓たるご辺に、さようなご遠慮を抱かせては此方の役目不 つつかに相成る。どうか、何なりと御用あれば仰せ下さるように」 「なんの、此方はあなたの出迎えを命ぜられた皇叔の一臣に過ぎま 館中に入ると、関羽は、客のために、夜もすがらもてなし、その

るがえして、一簇の人馬がすすんで来る。 は塵もとめず掃き清められ、たちまち、彼方から錦幡五色旗をひ 次の日はいよいよ荊州城市へ入った。見ると、城市の門まで、道

これなん劉玄徳。左右なるは、伏龍孔明、鳳雛龐統の二重臣と思 鳴きのようできずいである。

いまっ先にくる鞍上の人を見れば、

張松は驚いて、馬を降り、あわてて路上に拝跪の礼をとろうと

すると、すでに玄徳も馬を降りて、その手を取り、 「かねて、大夫のご高名は、雷のごとく承っていましたが、雲山は

るかに隔てて、教えを仰ぐこともできなかった。しかるに今日、お 国へ還りたもうと聞き、慈母を待つごとく、お待ちしていました。

しばしなと、渇仰の情をのべさせて下さい。私の城へ来て」 「垢じみたこの貧客に、ご家中まで遣わされ、かつ今日は、過分

なお出迎え。張松ただただ恐縮のほかございません」

は 曹操のまえでは、あのように不遜を極めた張松も、玄徳のまえに 実に、謙虚な人だった。

慢を映し、謙遜は謙遜を映す。人の無礼に怒るのは、自分の反映へ 人と人との応接は、要するに鏡のようなものである。驕慢は驕

温か味を抱かせた。 城中の歓迎は、豪奢ではないが、雲山万里の旅客にとっては、 怒っているようなものといえよう。

の事情などは少しも訊ねなかった。 その際玄徳は、世上一般の四方山ばなしに興じているだけで、蜀

かえって、張松のほうから、話題に飽いて、こんな質問をし出し

か 「いま、皇叔の領せられる土地は、荊州を中心に、何十州あります

- 州都もすべて借り物です。われわれはご主君に、これを奪って領 孔明がそばから答えた。

せん 主君は物堅く、呉の孫権の妹君を夫人にしておられる関係に義を立 有することが、何の不義でもないことを力説していますが、わがご てて、いまなお真にご自身の国というものをお持ちになっておりま

龐統も、口をそろえて、

その漢朝にあって、位人臣を極め、専政をほしいままにしている しも自分というものを強く主張しようとなさらんのです。……今、 「わが主玄徳は、人みな知るとおり、漢朝の宗親でありながら、少

者のごときは、もともと、匹夫下郎にもひとしいのですが」 と、いかにも歯がゆそうに云って、張松へ杯をさした。

ら、共鳴を誇張した。 「そうです。そうです」と何度もうなずいて、張松は杯を受けなが

ますから、一荊州を領し給うにとどまらず、正統を受け継いで、帝 諸民の安心楽土もそこにしかない。不肖思うに劉皇叔は、漢室 位につかれたところで、誰も非難することはできないでしょう」 の宗親。仁徳すでに備わり、おのずから四民もその高風を知ってい 「ただ徳ある人に依ってのみ、天下はよく保たれる。すなわちまた、

穏やかに顔を横に振っていた。そして、 玄徳は、耳なきごとく、あるごとく、ただ、手を交叉したまま

「先生のご過賞は、ちと当りません。なんで玄徳にそのような天資

と徳望がありましょう」

とのみいって笑った。

逗 留三日、張松はこの城中にもてなされて、しかも一日でも一

刻でも、不愉快なことは覚えなかった。

み、十里亭まで、自身送ってきた。四日目、張松は別れを告げて、蜀へ立った。玄徳は名残りを惜し

ここに少憩してささやかな別宴をひらき、共に杯を挙げて、前途

「先生と交わりをむすぶこと、わずか三日、またいつの日か、お教の無事を祈りながら、玄徳は眼に涙をふくんで、

「一、「一、」とは、「こう」とは、「こう」とは、「こう」とは、「こう」でしょうが、折にふれ、荊州に玄徳ありと思い出して下さい。鴻雁、えを仰ぐことができましょう。人生多事、蜀へ帰られてはお忙しい「先生と交れりをむすふこと」 れずか三日 「またしての日カー お教

西へ行くときには、仰いで玄徳も、西蜀に先生あることを胸に呼び

かえしているでしょう」

と、いった。

張松はこのとき胸に誓った。蜀に迎えて、蜀の新天地を創造する

「いや、この度は、三日の間、朝暮ご恩に甘え、何らのお報いもな人は、正にこの人以外にはないと。

さず、今お別れに際して慚愧にたえません。ただ、皇叔のために、

する領土でありますまい。南に孫権があって、常に鯨呑の気を示ここで一言申しのこすならば、荊州の地は決してあなたの永住に適

し、北に曹操があって、虎踞の 象 を現しています」し、北に曹操があって、虎踞の 象 を現しています」する領土でありますまい。 幸に務権かあって、常に鱘呑の気を

に身を安んずる所がないのです」「先生。玄徳もそれを知らぬのではありませんが、如何にせん、他

んこと目前にありといえましょう」は富む。いまもし荊州の兵をひきい、ここを占むれば、大事を興さといえ、ひとたび峡、水をこゆれば、沃野千里、民は辛抱づよく国「乞う。眼を転じて、西蜀の地を望み給え。そこは、四方みな嶮岨

れもまた、漢室のながれを汲む家。血すじにおいて、わが同族。な「いうをやめよ先生。それも知らないではないが、蜀の劉璋は、こ

んでその国家を犯してよいものぞ」

そうした決意があったのです。いわば蜀の国をわざわざ彼に献じにいで、蜀の民を守らんにはと――このたび張松が上洛の心中には、ありません。――如かず、魏の曹操に蜀を取らせ、張魯の侵略を防漢中の張魯に侵されて五斗米の邪教軍に蹂っ躙されてしまうしかばならん。元来、劉璋は暗弱の太守、無能の善人、いかにこの時代ばなられ。元来、劉璋は暗弱の太守、無能の善人、いかにこの時代にいやいや。そのお考えは、小義を知って大義に晦いものと申さね

¬

出向いたものなのでした」

「しかるにです。ひとたび、許都の府に足を入れるや、私は眉をひらなました。そこの都市文化はあまりに、反感をそそられるばかりません。媚るのでもありません。どうかご自重、また大志を抱き、かつ天下万民のため、小義にとらわれないで下さい」のであるにです。ひとたび、許都の府に足を入れるや、私は眉をひてしかるにです。ひとたび、許都の府に足を入れるや、私は眉をひていかの天下万民のため、小義にとらわれないで下さい」

張松は従者を呼んだ。

つときから携え歩いていた「西蜀四十一州図」の一巻だった。都市部落、一望のうちに観ることができる。すなわち、彼が蜀を立蓋を開いて、これを展じれば、千山万水、峨々たる山道、沃野そして馬の背の荷物のうちから一箇の宮を取寄せた。

「ごらんなさい。蜀の図です」

サムクタラ「ああ。これは精密なもの。行程の遠近、地形の高低、山川の険要、「ああ。これは精密なもの。行程の遠近、地形の高低、山川の険要、

る 府庫、銭粮、戸数にいたるまで……まるでいながら観るようであ

玄徳は、眸を離さなかった。

に彼の意をふるい促した。 「皇叔。速やかに思し召をここに立て給え」と張松はそばから熱心

もう一名は孟達、字を子慶といいます。他日、そのふたりが訪ね て参ったときは、諸事わたくし同様に、ご相談あっても、たしかな 人物ですから、どうかご記憶にとめておいて下さい」 「――私に深く交わる心友がふたりいます。法正、字は孝直。

るかも知れない」 「青山老イズ緑水長ク存ス。いつか先生の芳志に報うことができ

うに――」 日のお礼として、お手許に献上します。どうかお納めおき下さるよ 「この西蜀四十一州図の一巻は、他日、入蜀の道しるべ。また、今

かくて、彼は、先へ立った。

玄徳は十里亭から戻ったが、 関羽、趙雲などは、なお数十里先ま

で張松を送って行った。

は巴蜀とひろく呼ばれていた。 益州。それは巴蜀地方の総称である。漢代から蜀は益州、或い続きにゅう。

X

実に遠い旅行だった。張松は日を経て、ようやく故国益州へ帰っ

てきた。

すでに首都の成都(四川省・成都)へ近づいてきた頃、道のか

たわらから、

「やあ、ようこそ」

「ご無事で何よりだった」

と、二人の友が早くも迎えに出ていて、その姿を見るなり近づい

てきた。

「おお、孟達か。法正も来てくれたのか」

張松は馬を降りて、こもごも、手を握り合った。

に、小さい炉をおいて、二人で茶を煮て待っていた。すこし休息し 「久しく、蜀の茶の味に渇いていたろう。そう思って、彼方の松下

て行き給え」

けったが、そのうちに、張松は、 ているだろうが、もしそうとしたら、この蜀に、 「君たちも、現状のままでは、必然、蜀が亡ぶしかないことは知っ 友は彼をさそって、松の下へ来た。茶を喫し、道中の話などにふ たれを起死回生の -136-

法正は、怪訝な顔して、主君と仰ぎたいかね」と、ふたりに訊ねた。

いか。曹操との交渉に、何かまずいことでもあったのかね 「そのために君は、遠く使いして、魏の曹操に会ってきたのじゃな

るが、おれは途中から気持が変った。蜀へ曹操などを入れたら、蜀 の破滅を意味するだけで、蜀の民の幸福にはならん」 「まずい。甚だまずい結果になった。で、実は、君達だけに打明け

「では、誰を迎えるのか」

いところをいってくれ給え」 「だから今、君たちに、そっと意中を訊いてみたわけさ。忌憚な

「それはほんとか」

「たれが君らを歎こう」

とむすびたいと思うが」 「ふーむ……」と、法正はうめいて、「わしならば、荊州の劉玄徳

孟達の顔を見ると、孟達も、ひとみをかがやかして、

はるかにいい。本来、初めから玄徳へ使いすべきであったよ」「そうだ、曹操へ蜀を献じるくらいなら、玄徳を主と仰いだほうが

ち寄った事情やら、玄徳とある黙契をむすんで来た事実を打明けした。そして二人の顔へ、顔を寄せて、許都を去ってから荊州へ立聞くと、張松は、莞爾として「実は……」と、あたりを見まわ

なれば大いに張合いもある。張兄、抜かるな」「そうか。では偶然、三人の考えが、一致したわけだ。よし、そう

「万事は胸にある。もし、この儀について、劉・璋から君たちに

召出しがあったら、君らこそ抜からずに頼むぞ」

よいとも」

三人は、血盟して別れた。

に憂う こ。 次の日張松は、成都に入り、劉璋に謁して、使いの結果をつぶさ

に復命した。

すら見えたと告げた。りか、かえって張魯の先を越して、蜀へ攻め入ってくるような気配蜀を奪う下心があったので、こちらの交渉など耳にもかけないばかもちろん、曹操のことは、極力悪ざまにいった。彼には早くから

生に

劉璋は面に狼狽のいろを隠せなかった。

曹操も蜀をうかがう虎。いったいどうしたらいいのじゃ」「曹操にそんな野心があってはどうもならん。張魯も蜀を狙う狼。

気が弱い、策がない。劉璋はただ不安に駆られるばかりな眼をして打ってする。

「お案じには及びませぬ」て云った。

張松は語を強めた。そしていうには、

同族。のみならず、こんどの旅行中、諸州のうわさを聞いても、彼「この上は、荊州の玄徳をおたのみなさい。ご当家とは漢朝の同流

「だが、その劉玄徳とは、今日までなんの交渉も持っていない。彼は仁慈、寛厚、まれに見る長者であると、一世の人望を得ています」

「ですから、この際、鄭重なる書簡をいたせば、玄徳としても、欣も漢の景帝の流れを汲む同族とはかねて聞いていたが」

「では、その使いには、誰をつかわしたらよいと思う」然友交国の誼みを結ぶにちがいありません」

「孟達、法正。この二人に超えるものはないでしょう」

この国四十一州は他人の物になりますぞ」「ご主君っ、耳に蓋し給え。張松の申すことなどに引かされたら、するとこの時、 帳 の外から大声して呼ばわった者がある。

-13

劉璋は眉をしかめて、

「なぜ、そんなことを云う。たしなめ」

と、一喝した。

黄権は屈せず、面を冒してなお云った。

仁よく人を馴ずけ、左右に鳳『龍二軍師あり、幕下に関羽、張飛、「君、知り給わずや。当時玄徳といえば、曹操だも恐るる人物。寛

でしょう。――それに張松は魏に使いしながら、帰途は荊州をまわにあらんも知らず。国に二人の主なし。累卵の危機を招くは必然趙雲の輩。あり、もしこれを蜀に迎え入れたら、人心たちまち彼(じょ)を馬でに、だれに属 前二軍官まり、墓門に関す、弘邦

うのことではない、分さすでこそのも幾こある間である。」つく美中こうなると、張松も黙っていられない。国家の危機とは、これかって来たという取沙汰もある。旁〻、、ご賢慮をめぐらし給え」

か。ただ強がるばかりが愛国ではないぞ、ほかに良策があるならこの張魯と魏の曹操が結んで今にも国内へ進撃してきたらどうするらのことではない、今やすでにその危機にある蜀である。もし漢中

と、ふたたび帳外から、

こで聞かせよ、と詰問り寄った。

「無用無用。わが君。張松の弁舌にうごかされ給うな」

云いつつ大歩して君前にまかり出てきた人物がある。従事官王累

であった。

王累は、頓首して、

大患です。不治の病を求めるも同じことです。断じて、その儀は、膚病)の疾にすぎぬ。けれど玄徳を引き入れるのは、これ心腹の「たとえ漢中の張魯が、わが国に仇をなすとも、それは疥癬(皮

お見合わせあるように」

もいるのか、おそろしく感情を損ねて叱りだした。 だし、王累や黄権は、国外の実情にうとい。そう単純に区別してで して、先入主になっている。張松は実地に諸州の情勢を見てきた者 -だが、劉璋の頭には、もう先に聞いた張松のことばが、頑と

曹操すら一目も二目もおく者と聞けばこそ、予も頼もしく思うて彼 求めて提携する必要もないではないか。わが家とは血縁もあり、旁〻 「うるさくいうな。人望もなく実力もないような玄徳なら、なにも

どこまでも主義を同じくしているので、劉璋の書簡を持つと、道をた。使いを命じられた法正は、前日の諜し合わせもあり、張松とはかくて遂に、張松のすすめは劉璋の容れるところとなってしまっの力を借るのじゃ。汝らこそ二度と要らざる舌をうごかすまい」

早めて荊州へ赴いた。

「なに、蜀の法正とな?」

想いうかべた。 玄徳は、使者の名を聞いて、すぐ張松と別れた日のことばを胸に 138-

) 疾弟劉暲、再拝。 一書ヲ | 道ちに、法正を見、かつ書簡をうけて、その場でひらいた。

書面の冒頭にはこう書き出してあった。宗兄タル将軍ノ麾下ニ致ス

野院 Strong で、一室に考えこんでいた。その夜、玄徳は独りで、一室に考えこんでいた。

龐統が来ていった。

「孔明はどうしましたか」

「蜀の使者法正を、客館まで送って行ってまだ戻らぬ」

りましたか」 「そうですか。して、君より法正へは、すでにご返辞をお与えにな

「なお考え中である」

とは」 「張松が去るとき、あれほど申しのこして行ったのに、まだお疑い

「疑いはせぬが」

か」 「では、なにをそのように、無用にお心を 煩 うておられるのです

「思うてもみい。いま予と水火の争いをなす者は誰か」

「曹操こそ最大の敵です」

が暴を行えば、我は仁を行い、彼が、許りをなせば、我は誠を以て我が方略としていた。彼が急を以てすれば、われは緩を以てし、彼「その曹操を敵として戦うに、これまではすべて彼の反対をとって

して来た。それを自ら破るのがつらい」

「はて。意を得ませぬが」

らいというのだ」で守ってきた仁義はなくなる。小利のため、大義を天下に失うはつで守ってきた仁義はなくなる。小利のため、大義を天下に失うはつ玄徳、同族の者をあざむいて蜀を取れりといわれては、予が今日ま当然、劉璋は亡び去ろう。彼は、いつもいうように、わが族弟。「張松、法正、孟達たちのすすめにまかせて、蜀に伐り入らんか、

龐統は一笑に附していう。

す。蜀の状態はいまやそれに当っている。天に代って事を定め、事取って順に従わす、これ兵家の任です。また民の安息を守るものでいわば火事場です。晦きを攻め、弱きを併せ、乱るるは鎮め、逆はあなたのおことばは天理人倫にかなっていますが、世はいま乱国、「火事場の中で、日頃の礼法をしていたら、寸歩もあるけますまい。

信義に背くことにはなりますまい。むしろそうした小義にとらわれは今申したとおり、ほかに方法を以て、仁愛を示されれば、あえて――。族弟の縁をたいへん気にかけておられるようですが、劉璋に君が蜀に入るを避けても、明日は他人が奪っているかも知れません定まった上、報ゆるに義を以てしてもよいでしょう。今日もしわが

な行動のまえに大切なことにはちがいない。 諄 々として、彼は説いた。道をあきらかにする、これは大き

ておらるるこそ、兵家の卑屈と申さねばなりません」

玄徳もようやくうなずいた。蜀へ入りたいのは彼とて山々のとこ

る天意というものであろう」松たちが、かくまで手を尽して、予を迎えようとするのも、いわゆ「よう分った。先生の啓示は、まさに金玉の教えと思う。それに張

「では、ご決心なさいますか」

けった。 程なくその孔明も姿をあらわした。三名は鳩゛首して、軍議にふ「孔明が帰って見えたら、早速それについて評議いたそう」

いよ入蜀軍の勢揃いをした。 翌日、法正にも、この旨をつたえ、同時に陣触れを発して、いよ

玄徳はもちろんその中軍にある。

延とは、一を先鋒に、一を後備に分け、遠征軍の総数は精鋭五万と龐統を軍中の相談役とし、関平劉一封も中軍にとどめ、黄忠と魏

-139

かぞえられた。

なくてはならない。――また征旅に上る玄徳にしても、その安心が 留守の間隙をうかがうなど不測な事態が生じたとき、万全な備えが 遠征軍がやぶれた時、あるいは、南に孫権がうごくか、北の曹操が なくては、腰をすえて蜀へ入れない。 しかし、何より大事なのは、荊州の守りである。万一にも、この

で、荊州には、孔明が残ることになった。

その配備は。

一陽の堺に関羽。

江辺四郡には張飛。 江陵城に趙雲子龍。

荊州に留守し、四境鉄壁の固めかたであった。

といったように、名だたる者を要所要所にすえ、孔明がその中央

鴻門の会に非ず

建安十六年冬十二月。ようやくにして玄徳は蜀へ入った。

かかると、

「主人の命によって、これまでお迎えに出た者です」

と、道のかたわらに四千余騎が出迎えていた。将の名を問えば、

「孟達です」

と、ことば短かにいう。

玄徳はにことして孟達の眼を見た。孟達も、眼をもって意中の会 140-

釈をした。

聞き、大守劉章は無性に歓んでいたらしく、道々の地頭や守護 さきに法正がもたらした返辞によって、玄徳が来援を承諾したと

で出迎えると、車馬、武具、幔幕など、ここを晴と準備していた。 人に布令て、あらゆる歓待をさせた。 そのうえ彼自身、成都を出て、涪城(四川省・重慶の東方)ま

るなどとは」

黄権がまた諫めた。 侍側にいた張松は、劉璋が口をあかないうちに、

を離間しようとするのか」 「黄権。足下は何をもって、みだりに盟国の兵を疑い、主君の宗族

「危険です。見ず知らずな国から来た五万の軍中へ、自らお出であ

と、詰問った。

劉璋もともに、

んと来てくれたのだ。ばか、ばかを申せっ」「そうだとも。玄徳はわが宗族だ。故にはるばる、蜀の国難を扶け

黄権はかなしんで、

「平常、恩禄を喰みながら、今日君のご恩に報いることができない

とは何事か」

と、頭を地にぶつけ、面に血をながして、なお諫言した。

「うるさいっ」

いたので、前歯が二本へし折れた。 劉璋は、 袂 を振り払った。 黄権は離さじと、主人の袂を噛んで

た家臣がある。李恢という者で、泣かんばかり訴えた。城門から出ようとすると、また声をあげて、彼の車にとりすがっ

身を滅ぼすようなものですっ」いま黄権の諫めをお用いなく、玄徳を国にお入れあるは、求めて御忠僕三人あれば、その主無道なりとも家失われずとか聞き及びます。に諫める善臣五人あれば、国みだるるも国失われず、大夫に諫める「むかしから、天子を諫める良臣七人あれば、天下失われず、諸侯

劉璋は耳をふさいだ。

「車を進めい。車の輪を離さぬならば、轢き殺してゆけ」

いうのを聞けば、そこへまた、一人の下僕が、狂わしげに訴えてきた。泣き喚いて

吊り下がりました。お願いです。どうか助けて下さいっ」と、自分の身を縄でくくり、楡橋門の上から身をさかさまにして「わたくの主人王累が、どうかしてわが君のお心をひるがえそう

張松は、車を護る前後の人々にむかい、

「なにを猶予あるか、はやはや進まれよ」

と叱咤し、また車の側へ行って、劉璋にささやいた。

も安逸を偸んでいたい輩なんです。妻子愛妾の私情にもひかれてらんでいますが、要するに本心は、漢中との戦端を避けて、一日で「彼らはみな、忠義ぶったり、狂態を見せて、君を脅かさんなど企

いるに違いありません」

ヽニニニルダニ゚。トークトニルダニークがヽよヽ。間がひとり宙にぶら下がっている。さきに下僕が泣き狂って訴えてそのうち楡橋門へかかった。仰ぐと、驚くべき決意を示した人

いた王累だ。その王累にちがいない。

て、両足を天にし、首を地に垂れて、睨んでいた。 右手に剣を持ち左の手には諫めの文をつかんでいる。縄に吊られ

驚いて、車が停まると、王累はくわっと口を開いていった。

「わが君、お待ち下さい」

縄を切り、地に頭を砕いて死なんと怒鳴った。く読みだした。もしお聞き入れなければ、この剣を以て、自らこのそして、諫言の文を、哭くが如く、訴うるが如く、また怒るが如

劉璋は、さっき張松から、卑怯な家臣がみな自分を脅迫するのだ

と聞いていたので、

「だまれっ。汝らのさしずはうけん」

「惜しい哉、蜀や!」と、一喝すると、王累は、

の前に脳骨を打砕いてしまった。と一声叫んで、右手の剣を宙に振り、自ら縄を切って、地上の車

__

ること三百六十里、涪城まで迎えに出た。 扈従の人数三万、金銀兵糧を積んだ車千余輛、ついに成都を距

すでに百里の近くまで来ていた。 一方の玄徳は、みちみち沿道の官民のさかんな歓迎をうけながら、

が来た。法正はそれをそっと龐統に見せて、 と。その案内に立っている法正のところへ、張松から早馬で密書

「この時をはずすなと、張松のほうから云ってよこしました。お抜

かりないように」

と、諜しあわせた。

龐統も、大事を成すは、今にありと云って、

「その機に臨むまで、足下も部下のものに気取られるな」と注意し

両者の会見は、和気藹々たるものであった。 かくて、涪城城内、劉章と玄徳との対面の日は来た。

巡り会って、今日をよろこぶことができる。 力を協せて、 ふたたび 「世は遷り変るとも、おたがい宗族の血はこうして世に存し、また

漢朝の栄えを見ることに兄弟ひとつになろうではありませんか」

た五万の軍勢は、城外の涪江江畔においてあるからである。歓宴歓語、数刻に移って、玄徳はあっさり帰った。彼のつれて来 「これで蜀も外から侵される心配はない」と、かぎりなく歓んだ。 情を叙べるに玄徳は涙し、劉璋も力を得て、彼の手を押し戴き、

は、人を見る明がなく、世の毀誉褒貶を信じて予を諫め、自ら死 んだからいいようなものの、生きていたら予にあわせる顔もあるま 「どうだ。聞きしにも優る立派な人物ではないか。王累、 黄権など

玄徳が帰ると、劉璋は左右のものへすぐ云った。

張任、冷苞などこもごもに出てはそれとなく、いかいです。 蜀中の文武の大将は、これを聞いて、なおさら案じた。鄧賢、

を促したが、劉・璋は笑って、は内剛なり。万一の変あるときは取返しがつきません」と、用心「人は見かけに依らぬというたとえもあること。まして外 柔なの

その代りに、 いたら、少くも家産はつぶし、人にものべつ欺されていたろうが、 「そういちいち人を疑っていたら、人の中には住めまいが」 彼は自身いうが如き好人物であった。もし庶民のあいだに生れて

(彼はよい男だよ)と、愛されもしたろう。 けれど、蜀の主権者であり万民に臨む太守としては、ほとんど、

その資格なきものといっていい。

「どうでした。劉璋とお会いになってみた感じは」 玄徳が帰るとすぐ龐統がたずねた。玄徳は一言、

といった。しかし、龐統はそのことばの裏を読んで、

「真実のある人だ」

「愚誠の人物ともいえましょう」と、答えた。 玄徳はだまって眼をしばたたいた。劉璋に対して愍然たるもの

を抱いているような眸である。

「ああ。お気の弱い」――龐統は彼の胸をすぐ看破した。そして、

「君。何のために、この山川の嶮しきをこえ、万里の遠くへ、将士

をつれて来ました」 と、直言し、さらに、

です。 「明日、答礼の酒宴にことよせて劉璋をお招きなさい。決断が大事 小さい情にとらわれているときではありません」と、切々説

そこへ法正も来て、

か、魏の曹操に奪られるものです。なにを今さら、お迷いになるこなたが蜀をお取りにならなければ、結局、この蜀は、漢中の張魯ず、事を計れと、内応の諜しあわせを云いよこしています。……あ「成都に留守している張松も、疾く書簡をよこして、この期を失わ

と、口を極めて励ました。

とがありましょうぞ」

招待することにきめた。すなわち建安十七年の春正月、こんどは彼が主人になって、劉璋をたわけではない。彼はただ自己の心の中の情念と闘っているだけだ。もとより入蜀の目的はそれにある。玄徳とてここに来て思い止っ

Ξ

と卓とによって行われる。
「長夜の宴」とか「酒国長春」とかいうことばは、みな支那のもの「長夜の宴」とか「酒国長春」とかいうことばは、みな支那のもの

徳が席をもうけて太守劉璋を招待した宴会は、けだし西蜀開、闢以ことし壬(辰の初春、さきに招かれた答礼として、こんどは玄

来といってもよい盛大なものだった。

臨席した劉璋以下、蜀の将軍文官たちに、心からなるもてなしを尽の珍膳をととのえ、旗幡林立の中に、会場をいろどって、やがてはるばる、荊州から携えてきた南壺の酒、襄陽の美肴に、蜀中

やがて宴もたけなわに入った頃、龐統はちらと法正に眼くばせ

して外へ出た。

「うまく運んだ。大事はすでに、掌)にありだ。面倒な手段はいら人なきところへ行って、ふたりは声をひそめ合っていた。

ん。ただ席上に於て一気に斬殺せばいい」

「かねてのおさしずは、魏延どのにとくと申し含めてあります。

きっとうまくやるでしょう」

い。その方も手抜かりないようにたのむ」「場内に血を見ると同時に、劉璋の兵が、外で騒ぎだすにちがいな

「心得ております」

のぼっていた。
宴席は歓語笑声にみち、主賓劉璋の面にも満足そうな酔が赤くふたりはさり気ない顔して、元の席へ返っていた。

酔歩蹌踉と、宴の中ほどへ進み出で、ときに、荊州の大将たちの席から、突如、魏延が立ち上がって、ふ

剣の舞をなして、太守の一笑に供え奉る。――」もてなしに、恨むらくは音楽の饗応を欠いておる。依ってそれがし、「せっかくの台臨を仰ぎながら、われわれ長途の軍旅にて、今日の

いうかと思えば、はや腰なる長剣を抜いて、舞いだしていた。

「あ、あぶない」

みな顔色を変えたが、咎める術もなかった。こはただ事の馳走に非ずと、劉璋の左右にあった文武の大将は、

すると、従事官張、任という蜀の一将、やにわにまた、

剣を抜い

て、魏延のまえに躍り出で、

流者ながら、君にならって、お相手をいたさん」と、魏延の舞に縺「古来、剣を舞わすには、かならず相手が立つと承る。武骨、不風

れて、共に舞い始めた。

閃々、たがいに白虹を描き、鏘(々、共に鍔を 震 き鳴らす。 ―そして魏延の足が劉璋へ近づこうとすれば張任の眼と剣は、き

(剣の舞の相手よ。 汝がもしわが主人に危害を加えるならば、

っと、玄徳へ向って、殺気をはしらせた。

は直ちに汝の主人玄徳を刺すぞ)

魔統は、それを眺めて、「ちいっ」と、この測らざる邪魔者に舌無言のうちに張任は舞いつつ魏延を牽制していた。

打ち鳴らしながら、かたわらにいた劉封へきっと眼くばせした。

心得たりと、劉封もすぐ身を起し、剣を抜いて、ふたりの間へ。

「あら、おもしろや」と、舞うて入る。

鄧賢などという幕将たち、手に手に剣を抜きつれて、 せた。どれざわと、劉璋の周囲が一斉に立った。冷苞、劉・・、とたんに、ざわざわと、劉璋の周囲が一斉に立った。冷苞、劉・・、

いざ、舞わんか」

それ舞わんか」

舞わんか、舞わんか」

いざ来れ」

玄徳は愕いて、自分も、 と、満座ことごとく剣に満つるかと思われた。

の会同に、なんたる殺伐を演ずるか。退がれっ、退がれっ」と叱 無礼なり、魏延、劉封、ここは鴻門の会ではない。われら宗親

剣を抜いて、高く掲げ、

用な猜疑をなすは、汝らこそ、兄弟の仲を裂くものであると、た 家臣の非礼を叱って、玄徳と自分とは、 同宗の骨肉、

しかし、この夜の宴は、失敗に似て、かえって成功だった。劉璋

しなめた。

はいよいよ玄徳に信頼の念を深めた。

-144-

「玄徳に二心はないかもしれません。しかし玄徳の幕下は皆、この その後も、蜀の文武官は、劉璋に諫めること度々であった。

蜀に虎視眈々です。何とか口実を設けて今のうちに荊州軍を引き

揚げさせるご工夫をなされては如何ですか」

劉璋は依然、うなずかない。

「さのみ疑うことはない。強ってのことばは、宗族の間に、強い

て波瀾を起こさせようとする気か_

て、荊州軍のうごきに警戒の眼を払っているだけだった。 そういわれてはもう衆臣も二の句がない。唯ひたすら家臣結束し

かかるうちに国境の葭萌関から飛報が来た。

「漢中の張魯が、ついに大兵をあげて攻めよせて来た!」とある。

「それみよ、禍いはそこだ」

劉璋はむしろ得意を感じたらしい。早速にこの由を玄徳へ伝え、

協力を乞うと、玄徳はすこしも辞すところなく、直ちに、兵を率い

て国境へ馳せ向った。

蜀の諸将はほっとした。

「いざ、この間に、蜀は自国の守りを鉄壁になし給え。内外、万全

のご用意を」

と、劉璋へ再三再四、献言した。

い、即ち、蜀の名将白水之都督楊懐、高沛のふたりに涪水関の劉璋も、あまりに諸臣が憂えるので、さらばと彼らの意にしたが

守備を命じて、自分は成都へ立ちかえった。

蜀境の戦乱は、まもなく、長江千里の南、呉へ聞えてきた。

「玄徳の野心は、ついに鋒鉦をあらわした。汝ら何と思うか」

孫権は、呉の重臣を一堂に集めて、こう穏やかでない顔して云っ

顧雍が答えていう。

荊州の留守を突かば、一鼓して、彼の地盤はくつがえりましょう」 て、強いて国境の嶮岨に拠らしめ、今や漢中の張魯と、血みどろを二分して、その一をもって蜀に入り、長途のつかれを持つ兵をし がいありません。情報なおつまびらかでありませんが、荊州の兵力 の戦をなしていると聞えまする。思うに、呉の無事なる兵をもって、45 「予もそう考えていたところだ。諸卿よろしく出師の準備にかか 「彼はついに、火中の栗を拾いに出たものです。自ら手を焼くにち

れ すると、議堂の屏風の蔭から、誰かひとり進み出て、甲高い声

していった。

「誰じゃ、わが女に、危害を加えようとするものは

おどろいて、その人を見れば、これは孫権の母公、呉夫人であっ

母公は猛りたって、

うのじゃ。荊州には、可愛い娘を嫁がせてある。玄徳はこの老母が婿 恩に、今日を豊かに送りながら、なお荊州を望んで、どうするとい 「そちたちは、江東八十一州の遺領を、いながらにうけて、父祖の

ではないか」

孫権は沈黙して、 ただ老母のまえに、叱りをうけているだけだっ

たために、評議は、 一決せずに終ってしまった。

は爪をかみながら、一室に沈吟していた。 ――今、荊州を収めなければまたいつの日機会があろうと、孫権

張昭が、そっと来て彼の前にささやいた。

「べつに「計」をおたてになればよいでしょう。母公のお叱りは、

ただただ、遠国におわすあなたの妹君をいじらしき者、可愛いもの

と、情にひかれておいでになるだけのことですから」

「では、どうして母をなだめるか」

玄徳の御内方たる妹君へ、そっと密書を送って、母公の病篤し、命 「一人の大将に五百騎ほどをさずけ、急遽、荊州へさし向けられ、

旦夕にあり、すぐかえり給えとうながすのです」

ら、あとはもう此方のものです。それを人質に、荊州を返せと迫 「その折、玄徳の一子、阿斗をも連れて、呉へ下ってこられたな

「その策は実に妙計だ。して誰をやろうか」

大将で、しかも忠烈ならびなき大将です」 「周善なれば、仕損じますまい。彼は、 力 鼎をあげ、胆斗の如き

「すぐ、ここへ呼べ」

孫権ははや、筆墨をよせて、妹に送る密書をしたため出した。

その日、孫権に召された周善は、張昭にも会って、審さに密計を

五百の兵はみな商。人に仕立て、上流へ交易に行く商船に偽装し、授けられ、勇躍して、夜のうちに揚子江を出帆した。

船底には武具をかくしていた。

やがて目的地の荊州に着く。

して多くの賄賂をつかい、ようやく玄徳の夫人に会うことができ 周善は伝手を求めて、首尾よく荊州城の大奥へ入りこんだ。そ

夫人は、寝耳に水の愕きに打たれ、

「えっ。母公には、明日も知れぬご危篤ですって?」

顔も象牙彫のように血の色を失ってしまった。 兄孫権の手紙を読むうちに、もう紅涙潸々、手もわななかせ、

と目なと、お姿を見たいと、御母公におかせられては、苦しき御息「一刻もお早く、呉へお下りください。せめて息のあるうちに、ひ のひまにも、夜となく昼となく、うわ言にまで御名を呼んでおられ

まする」

周善のことばを聞くと、玄徳夫人は、いよいよ身をもんで、

「会いたい、行きたい、周善、どうしようぞ……」と、泣き沈んだ。

ここぞと、周善は

用意あって、それへお召し遊ばさねば、ついにご臨終には間にあい ますまい」 せん長江の水速しといえども、船旅では幾日もかかります。すぐご 「翼ある御身なれば、すぐにもご対面はかないましょうが、いかに

「……というて、いまは良人玄徳は蜀へ入って、この城においで遊

親への大孝。よもお叱りはありますまい」 「それは御兄上の孫将軍から後にお詫をして貰えばよいでしょう。

「でも、孔明が何というかしれない。留守の出入りは孔明がきびし

く守っているのですから」

「あの人に告げたら、断じて、呉へ下ることなど、許すはずはあり

ません。自身の責任のみ大事に思いましょうから」

「飛んでも行きたい思いがする……。周善、よい智慧をかして賜も」

ずにより帆足速き一艘を江岸へ着けておきました。ご決意だにあ 「されば、いずれこのことは尋常ではかなわじと考え、張昭のさし

らば、すぐご案内いたしましょう」

なにものも要らない気になった。ついに彼女は身支度した。周善

は諸方の口を見張りながら、その間に早口に告げた。 「そうそう、和子様もお連れ遊ばせよ。御母公には、日頃から劉

皇叔の家には、愛らしい一子ありとお聞きになって、一目見たいと

口癖に仰っしゃっておられました。和子様は懐にでもお抱きになっ

て――ようございますか和子様も」

していわれるままにうごいていた。嬋娟にして男まさりな呉妹君 といわれ、その窈窕たる武技も有名な夫人であったが、国外遠く 彼女の心はもう呉の空へ飛んでいる。なにをいわれても唯々と

嫁いで、母の危篤と聞いては、やはり弱い女に過ぎなかった。 黄昏れごろ。

ことし五歳の阿斗をふところに、夫人は、車にかくれて、城中か

ら忍び出た。

に佩き、弓をたずさえて夜道をいそいだ。 呉以来、側近くかしずいている三十余人の侍女は、みな小剣を腰

る。怪鳥のつばさのように帆は風をはらむ。 沙頭鎮の埠頭に、車はつく。船の燈は暗く波間にゆれていた。 ざわめく蘆荻のあいだから船は早くも離れかけた。帆車がきし

「待てっ。その船待てっ」

岸の暗がりに、馬のいななきやら剣槍のひびきが聞えた。

周善は艫に立って、

「いそげ、振り向くな」 と、水夫たちを叱咤した。

目立っているのは、常山の趙子龍、即ち江辺守備の大将であった。 江頭の人影は、刻々、多くなって、騒ぎ立っている。 中にひとり

「おういっッ。待て」

船の影を追いながら、趙雲は岸に沿って馬を飛ばした。部下の

「のがすな。あの船を」と、十里も駆けた。

兵も口々に、

一漁村へかかった。

趙雲は駒をすてて、漁夫の一舟へ飛び乗り、

「あの船へ漕ぎ寄せろ」と、先に廻っていた。

近づこうとすると、船上の周善は、長い戈を持って、

呉の船は帆うなりをあげながら下ってきた。趙雲の小舟がそれへ

「射殺せ、突き殺せ」

と、必死の下知に声をからした。

を寄せつけまいと防ぎながら、その船脚はなお颯々と大江の水を | 舷| に並んだ呉の兵は、弓を引きしぼり、戟を伸ばして、小舟

切って走ってゆく。

「やわか。通すべき」

趙雲は、槍をなげすてた。

舟のへさきが、敵船の横へ勢いよくぶつかった瞬間に、 腰なる青釭の剣は、たちまち雨と降る矢を切り払う。そして小

喚きながら、身をもって、舷へ飛びつき、無二無三、よじのぼっ「おおうッ。おのれ」

て、ついに船中へ躍りこんで来た。

りを睥睨しながら、大股に船屋形の内へ入って 呉の兵は、彼の形相に怖れて、わっと逃げかくれる。趙雲はあた

「夫人っ、何処へおいでになるのですっ」

と、鏡のような眼をいからせて咎めた。

その声に、夫人のふところに眠っていた幼君の阿斗が泣きだし

に夫人は気位が高い。 た。侍女たちは怖れてみな片隅に打ち慄えている。しかし、さすが

「無礼でしょう趙雲。なんですかその血相は」

のみか、呉船に召されて江を下るなど、あなたこそ劉皇叔のご夫人 「お留守をあずかる孔明にも何のお断りすらなく、城中を出られる

として穏やかならぬご行動ではありますまいか」

談している 暇 もなく、急いで便船に乗ったのです。わが母の危篤 「呉にいます母公が、あすも知れぬご重態との知らせに、軍師へ相

「しからば、何故、阿斗の君をおつれ遊ばすか。皇叔にとっても、

に駈けつけるのがなぜいけないか」

まいらせたこともある。 には、趙雲が、命にかけて、長、坂にむらがる敵大軍の中より救い わが国にとっても、たったお一方の大事な珠玉。かつて当陽の戦 ――さ、お返しなさい、阿斗の君を」

おだまりなさい」

夫人は、蘭花の眦をあげて、

「そちは唯これ陣中の一武士。劉家の家事に立入るなど僭越であ

ろう

君の御身は、誰がなんといおうが、国外へやるわけには参りませぬ」 って契られている間ではないか」 「いやいや、あなたが呉へお還りあるのを止めはいたさぬ。ただ幼 「国外とは何事ぞ。呉と荊州とは境こそあれ、この身と皇叔とによ

「なんと仰せあろうと、幼君はおあずけできません。お渡しなさい」

「あ。何をしますかっ」

夫人は、悲鳴をあげながら、侍女たちを振り向いて、

「この無礼者を、追い出して賜も」

と、さけんだ。

の腕に抱えてしまった。 だが、趙雲は苦もなく、夫人の膝から、阿斗を取返して、自分

れているし、夫人や侍女は、船中の兵を呼びたてながら悲鳴を浴び 148 そしてさっと、船上を走って、艫まで出たが、小舟はすでに流さ

せて、すぐ後ろへ迫っている。 かかる間も、大船の帆はいっぱいな風をうけて風の速さと速力

を競っている。

雲はそこに立往生していた。 「近づく者は、一刀両断にするぞ。生命の要らぬ者は寄ってこい」 青釭の剣を片手にふりかぶり、片手に阿斗の身を抱えたまま趙

に取囲んでいたが、そのすさまじい姿には敢て誰ひとり近づく者も 弓と槍と戈と、あらゆる武器はみな彼の身一つに向って、遠巻き

なかった。

艘の早舟の群れが扇なりに展開しながら近づいてきた。 すると、いつのまにか近づいていた田舎町の河港の口から、十数

近づくに従って、その早舟の群れからは、鼓の音や喊の声が聞え

「さては、呉の水軍」

趙雲は愕然、色を失った。

って斬って斬り死せんかと、さいごの肚をきめていた。 この上は、幼君を抱きまいらせたまま、水中に身を投ぜんか。斬

ところが、水中から声があって、

伴い参らすぞ。燕人張飛これにあり、船を止めろっ」と、龍神が吼 「呉の船待てっ。わが君の留守をうかがって、幼君阿斗をいずこへ

えるかと疑われるばかり聞えた。

「おお、張飛か」

呼びかけると、一舟の中から、

「趙雲そこにいたか」

りついた。 方は、たちまち、八方から鈎縄を飛ばして、呉船のまわりに手繰と、下からも呼び返しながら、はやその張飛をはじめ、荊州の味

かけてきた。龍車に向う蟷螂の斧にひとしい。張飛が 張飛が船上へとび上がると、出合い頭に、周善が戈をもって斬り

「くわっ」

と云ったとたんに、彼の一振した一丈八尺の蛇矛は、周善の首

を遠くへ飛ばしていた。

「虫けらどもが」

を聞いた。蝗のように船じゅうを逃げまわった。 張飛の眼にふれたらさいご、その者の命はない。呉の兵は人の跫音

一匹も生かすな

殺伐するに仮借のない張飛は、歩むところに朱をのこしながら胴

の間を濶歩した。

すると一隅に、侍女たちに囲まれたまま、立ちすくんでいた玄徳

夫人のすがたがあった。

夫人は必死な気位を持って彼を見下ろそうとした。

しかし張飛のらんらんと燃える眼は、決して、夫人の眸を避けな

かった。

やがて、彼がいう。

「夫人たる御方は、良人の留守を守るのが道であるのに、いま荊

州を去るとは何事か。それが呉の婦道か」

よいものか。それがそち達の士道か」 「……家臣たるものが、主にたいして、そのようなことばを吐いて

ければ、引っ吊るしても、荊州城の奥へほうりこみますぞ」 の夫人であろうと、それがしはあえていう。お帰んなさい。 「……君家を護るは、いうまでもなく、士道のひとつ。たとえ主君

強ってわたくしを荊州へ連れもどるというならば、長江へ身を投げ ご危篤に前後もなくお枕もとへゆくのですから。……もしそち達が、 「……ゆ、ゆるしておくれ。ゆえなく城を出たのではない。 夫人は白くわなないた。

「なに、入水する?」

て、この悲しみからのがれるばかりです」

これには張飛も脅かされた。

「おうい、趙雲、ちょっと来てくれ」

「なんだ」

「こういう次第だが、どう処置したらいいか。もし夫人が入水して

死んだら、やはりわれらは、臣道にそむくだろうか」

「もちろん、かりそめにも、主君の夫人、また皇叔のお嘆きを考え

てもむざむざ、夫人の死を見ているわけにもゆくまい」

「では、幼君だけ取りかえして、夫人はこのまま呉へやるとするか」

「そうするしかあるまい」

「よし、もう一言、いい分をいっておこう」

張飛は、夫人の前へ戻って、

る。しかし、御用がおすみになったら、早々、ふたたび良人の国へ お立ち帰りあれよ」 臣節を尊んで、あえてあなたを「辱」めず、ここでお別れ申すとす 「あなたの良人は、いやしくも大漢の皇叔。ゆえに、われわれは、

告げ終ると、

「おい、趙雲。行こうか」

と、早舟へ跳び移った。

趙雲も阿斗を抱いて、一艘のうちへ跳び下りる。

そしてその余の早舟十数艘を漕ぎ連れて、近くの油江口へ上陸

し、馬に乗って荊州へ帰った。

「よかった。——実によかった。阿斗の君の無事を得たのは、

|人の働きである_

の葭萌関にある玄徳のもとへ早馬をたてて報告しておいた。 孔明は、仔細の報告を、そのまま詳しく書簡にしたため、すぐ蜀